

奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

8月号



1963・8

昭和三十三年七月二十日印刷（昭和三十三年八月一日発行）第八号（毎月一回）（日発行）

昭和三十三年四月二十日第三種郵便物認可（昭和三十三年六月十七日国務大臣特准掛紙）

奇譚クラス

8月号

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



今月の新版分譲品

足拳開股責

略号 (あけ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

辻村隆氏の手によって高々と天井近くまで引き上げられた片足。これ以上は開けないという程まで真一文字に裂かれた両の太股。分譲品用として特に撮影したSマニヤ待望の股裂きフォト。

猪吊り

略号 (いの)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

両手と両足を一緒に一つに括りまるで四つ足の動物を釣り下げるようにぶら下った梨花嬢。全身を無防備の中に放置して、流腸、操り等々あらゆる責めの触手にさらしている吊り責の法悦境

苦悶の裸身

略号 (くせ)

大手札四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

色気の漂う肉づきのよい若妻が両手を鴨居に釣られて逃げるこ

の出来ない裸身をさらしている。張り切った肌に炸裂する激しいムチに全身を縛るねじめるように悶えさす関谷夫人、苦痛に耐えかねたその甘い表情は、悦虐にむせび泣く感極ったエクスタシーか。

バンド晒し

略号 (はと)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

アテゴムのボタンも鮮かにメンスパンドを穿かせられているが、悲しくも後手に括られていたため手で掩ってかくすことすら出来ないで、只徒らにあらわなバンドをさらしているばかり……

バンド見せ

略号 (はみ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

自らの手でズロースを脱ぎバンドを穿くことを命ぜられた娘は、羞しさに真赤になりながらも、男の目の前ではき替えた。自由のきく手でアテゴムを触りながら恥じらいを見せた月経帯のムスメ。

責め衣

略号 (せめ)

大手札三枚一組 三〇〇円

踊り子緊縛

略号 (りこ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代

キャパレーフロアードで、ほんさつきまで踊り狂っていた踊り子が控え室へ帰ってきた途端、後手高小手に縛り上げられて安楽椅子の上で開股しはりにされているその惚々とする脚線美。

イルリガートル

略号 (いるり)

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 梨花悠紀子

一〇〇〇CC入りのイルリガートル、挿入便器、オシメ、オシメカパー等にとりかこまれて、自らの手でイルリガートルの嘴管から多量の薬液を注入し、激しい便意にもたえ苦しみながらオシメを当ててカパーを着用するに至る連続場面をキャッチしました。

太い流腸器

略号 (かふ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

普通ガラス製流腸器といえは二十CC、大きくとも三十CCであるが、これは又一〇〇CCという馬鹿でかいシリンドラーを握って自らの手で流腸を施すという、流腸マニヤひかるの流腸ポーズ

エネマ挿入

略号 (えね)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

中央のゴム球を握ったり放したりすると一端の嘴管からは激しい勢で水や空気がほとばしる。他端を流腸液のコップに入れると忽ち悪魔の管と早変わりするのだ。エネマの嘴管を挿入するに至る二枚のフォトと挿入し終った一枚のフォトの組写真。

月経帯責め

略号 (つけ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

黒メリヤスの月経帯をはかせられて、あさましくも当てゴムをむき出しにされた梨花さんが、ロープでぐるぐる回ると高小手に縛り上げられ、もう無茶苦茶にゴロゴロと蒲団の上をころげまわされる。

四馬孝画

流腸責絵画

女体流腸図絵

原画原寸大複写

B4判 各一枚 二〇〇円

先般、四馬孝画伯を煩して「女体流腸嗜虐場面」(か6)を發表しましたところ、幸いにしてマニヤの方々の共感を得まして相当数のお申込みを頂きました。ここに更に趣向を変えて八枚の場面を腕を揮って頂き、華麗にして嗜虐味たっぷりの女体流腸図をお届けすることが出来ました。原画の味をそのままに迫力を以て皆様のお手元へお届けするため、原画と大じ大きさに複写しました。八枚一組全部まとめてお求めの際は、特に送料共に一五〇〇円に割引いたします。

一、女学生

略号「かき1」

セーラー服の可憐な少女、嗜虐的な養護教師二人に便秘を直すためだといって、太いガラス製流腸器で無理矢理に流腸される。上半身と足首とを縛られた少女は、今や治療という域を超えて、二人の男女の教師によって、激しい流腸責めを加えられることになるのだ。

二、看護婦

略号「かき2」

美しい見習看護婦が若き医師の実験台となって、医院の一室

で流腸を施される。部屋の柱に両手を縛られて抱えさせられ、右足は柱に、左足は挙げて壁に括られ、真白く可愛いヒッチを晒したまま、強烈な流腸液をガラス製流腸器によって、次々と注入されるのである。

三、ヒマシ油

略号「かき3」

数度にわたる流腸によって女が飲み込んだダイヤは出て来なかった。今は最後の手段だと押さえた口の中へ、ドロドロとしたヒマシ油を流腸器の先へとつけた。嘔吐を催しそうにな

四、空気ポンプ

略号「かき4」

清純な乙女が捕われの身となつて、ズベ公の手によって腸の中に空気ポンプから空気を強制注入されようとしている。自動車のタイヤに空気を入れるそのポンプは、強い力で乙女の腸内にシュッシュと激しい勢で空気を送り込む。やがて腹部は張りきるばかりに膨満することだろ

五、逆吊り流腸

略号「かき5」

両手と両足を開いて竹に括られ、両足首を吊るという逆吊りのポーズで釣り下った美しい女体。嘴管を受け入れる臀部が丁度目の高さで待っている。老人は、恐怖の流腸器を手にして負圧の腹部に対して強制的な注入を行おうとする。口を開けてこの酷い仕打ちに耐えようとすると八等身の娘。

六、大の字流腸

略号「かき6」

二本の極の棒に、両手と両足を文字通り大の字に縛り上げられて高々と空間に吊り上げられ

七、強制洗腸

略号「かき7」

これから、お前のお腹の中をすっきりきれいに洗滌してやろうと、若い女は処置台の黒いレザーの上に坐らせられ、両足首は高々と天井から下った縄に釣られた。イルリガートルから流れてくる薬液は、彼女の口から腹の中へ注ぎ込まれる。胃と腸に充満した液体は、洗面器の中へ吐き出させられ、再び注入されるのである。

八、リスリン流腸

略号「かき8」

三日間の排便を禁止せられた女の腹部は、ぶくぶくと大きくふくらみ、草のベルトで胸から脚を縛られ、片足を宙に吊られて、恥しいリスリン流腸を拒む術とてない。溜りに溜った彼女の便は、激しい勢いで体外に噴出するの、今や時間の問題となった。ああ、その目ざましい光景よ。

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選 大手札印画紙(9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ(愛川)
E 2	仕置を受ける裸身(大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌(愛川)
E 4	ムチに耐える美肌(関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり(愛川)
E 6	捨身の後手観念像(大塚)
E 7	足から眺めた裸身(水本)
E 8	全裸エビ責尻強調(関谷)
E 9	ハリツケられた娘(大塚)
E 10	強烈後手高手小手(愛川)
E 11	責め抜かれた疲労(梨花)
E 12	逆エビにもだえる(大塚)

E 13	拘禁された美囚女(大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛(愛川)
E 15	海老責に泣く足首(大塚)
E 16	両足吊りの短黒縄(愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘(大塚)
E 18	美しき全裸股間縛(大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ(関谷)
E 20	ベッドにもだえる(関谷)
E 21	身体中に強烈な縄(愛川)
E 22	放置された海老責(東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる(東浦)
E 24	ローソクで責める(大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ(絹川)
E 26	足指先に漂う媚態(関谷)
E 27	後手吊り正面裸像(関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛(東浦)
E 29	女体の全部を晒す(愛川)
E 30	激しいムチ打の果(関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ(東浦)
E 32	投げ出した脚線美(絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛(梨花)
E 34	セーラー服の哀歓(梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部(関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女(梨花)
E 37	制服の女学生縛り(梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻(関谷)

E 39	痛打にくねる裸身(関谷)
E 40	乳房に加える金具(大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔(大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む(大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身(梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶(大塚)
E 45	敷布の上にのびて(絹川)
E 46	鼻いじめのアップ(梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄(東浦)
E 48	縄にくびれる裸身(東浦)
E 49	椅子に晒された女(大塚)
E 50	脐そうじをされる(大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う(絹川)
E 52	火のついた煙草責(四方)
E 53	踏みつけられた胸(梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘(大塚)
E 55	手足猪吊りの美態(絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛(絹川)
E 57	諦めた観念全裸像(水本)
E 58	縄にもだえぬく姿(絹川)
E 59	黒髪を吊られた女(大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ(絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身(竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す(竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目(大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会(絹川)
E 65	野外の後手宙吊り(梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中(四方)
E 67	室内の後手宙吊り(梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態(梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ(大塚)

E 70	足の裏ハネ擦り責(梨花)
E 71	乳首ブライヤ挟み(竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責(梨花)
E 73	梯子責にあう美女(梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる(梨花)
E 75	娘十六縛り加減(花坂)
E 76	踏みにつられた顔(大塚)
E 77	逆エビに反る足先(大塚)
E 78	両手吊りのお仕置(絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻(梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像(大塚)
E 81	食卓上の縛り人形(大塚)
E 82	むしられる下着(大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り(梨花)
E 84	寝台上的若妻狂態(関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り(東浦)
E 86	種姿後手縛り吊り(東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒(関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図(大塚)
E 89	令嬢後手高手小手(絹川)
E 90	脐部乳房強調緊縛(東浦)
E 91	責衣にくるまれて(東浦)
E 92	全裸逆エビ責め(水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ(梨花)
E 94	全裸後手縛り晒(関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ(関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ(東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り(梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡(関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡(絹川)
E 100	強烈縛り脐いじめ(東浦)

猿ぐつわの魅力

(一)革手袋に抱かれて……………網川文代
(二)責めプレイの法悦境地……………梨花悠紀子
(三)透明の息苦しさ……………

豊満緊縛ポーズ

(一)二ツ折りの縄目……………東浦ひかる
(二)豊かさの強調……………大塚啓子
麗姿悶悦三様三態……………絹川文代
足吊りの白肌……………梨花悠紀子
重圧に泣く女……………

美の破壊(色彩)

鼻責のポーズ……………四馬孝・画
おもり責め二題……………四馬孝・画
ぶらんこ・はんもつく……………

空気ポップ(浣腸責め)

マソ画首絞めのプレイ……………四馬孝・画
鼻料理の第一歩……………滝れい子・画
切腹―女志士の自刃……………青山芳樹・案
あどけない瞳(淡彩)……………黒川不二男・画

巻頭口絵

責めの第一序曲……………梨花悠紀子
立木縛りに晒す……………桜井葉子
マソ・馬乗りになられた男……………絹川文代
夫婦のSM写真……………新宮明夫
打首の処刑……………大塚啓子

第ニ グラビヤ

数蚊責め……………

巻頭(告白と感想)

奇クの読者になるまで……………遠藤 保……………(34)
△読者の手記△鎌倉の思い出……………井内左右子……………(37)
―裸女争斗のこと―……………

(手記)愛のイメージ

〔告白通信〕魅せられた鼻責……………浦田 紀夫……………(42)
奉行所女吟味始末記……………水沢 雅美……………(48)
〔生首通信〕私の無惨絵に寄せて……………湯谷 照夫……………(50)
〔奇譚三十九夜〕物語(第二十七夜)……………本 田 由郎……………(56)
(マニヤ通信)被虐モデル志願……………蒲原 茂雄……………(58)
映画にみるアブ空想の世界……………辻村 隆……………(72)
―死の谷―……………遠藤百合子……………(78)

△読者の告白△腹を切る女

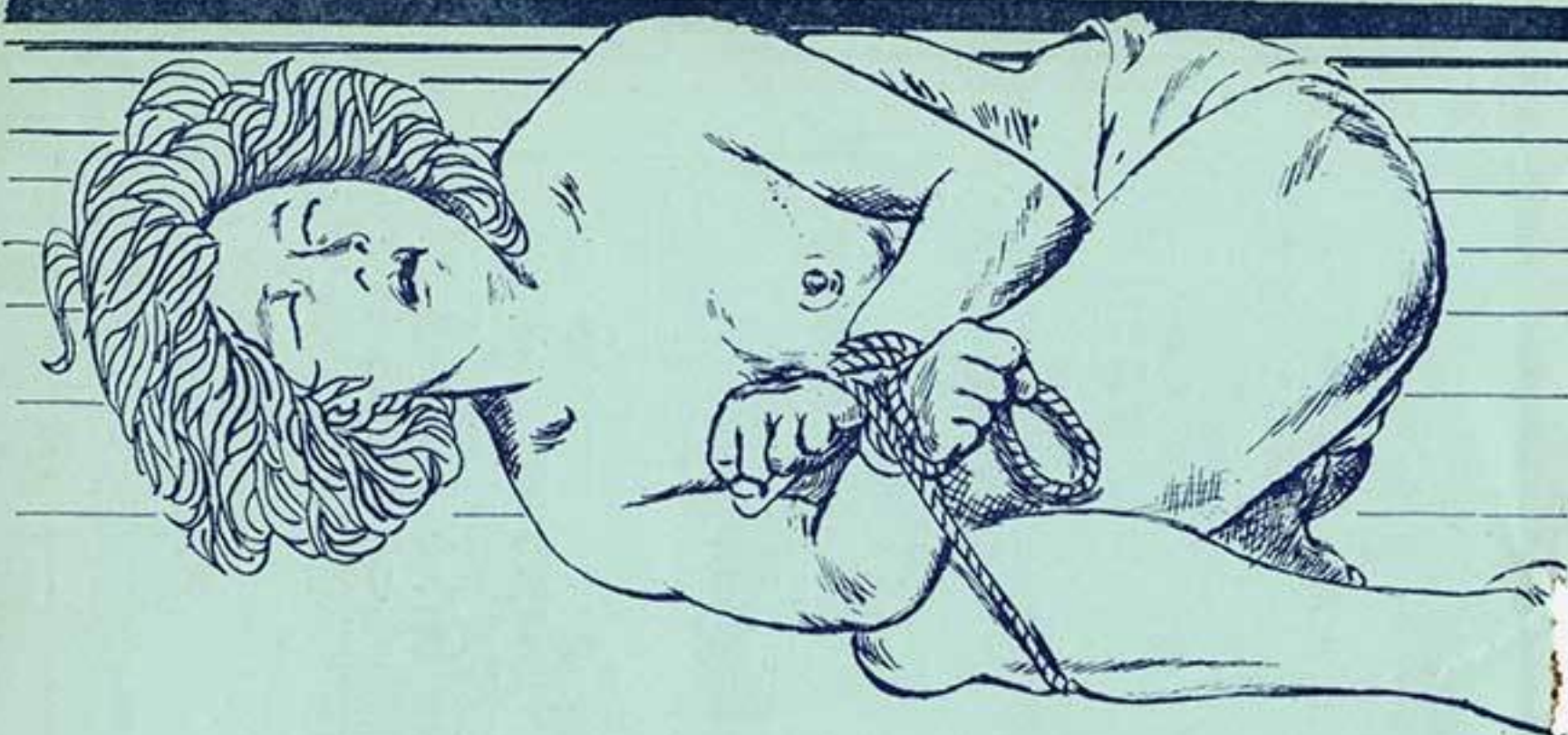
長篇SM小説 宇宙のどこかで……………中谷 均哉……………(74)
サジスチック・ストーリー・シリーズ……………藤代 悠三……………(78)
女家庭教師……………佐治 麻造……………(82)
近代史に拾う女腹切……………西条 悦美……………(96)
花と蛇(第五回)……………数寄 咲……………(98)
SM小説……………団 鬼六……………(102)

雪子夫人図絵

当代女武勇列伝……………芳野 眉美……………(112)
(伊集院典子の場合)……………諸岡 堅雄……………(124)
マソ・マゾ&マゾ……………平 伏人……………(136)

魔女伝説秘話

魔女マドレーヌ……………近藤 一……………(138)
自伝的中篇小説 妄執(もうしゅう)……………堀 夏彦……………(156)
ガン作・マニヤのノート……………芳野 眉美……………(172)
(私のバーでの会話)……………



〔新版分譲品案内〕

○女体争斗場面十二態

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円
略号「おん」

モデル 春日ルミ、愛川悦子

○おムツの股間しばり

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号「むく」

東浦ひかる

○強烈責め、被虐の果て

大手札印画紙 五枚一組 五〇〇円
略号「りお」

梨花悠紀子

○豊満乳房いじめ

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円
略号「とお」

大塚 啓子

○強制浣腸三態

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「きか」

絹川 文代

○激痛！逆エビ責め

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号「きえ」

大塚 啓子

○美貌の裸身に縄目

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「きん」

絹川 文代

○腰元、吊り責め

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円
略号「こり」

村井知可子

○腰元間諜の拷問

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号「こく」

村井知可子

○ゴムぐるみ人形

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号「こみ」

東浦ひかる

○ゴム包みの束縛

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号「こは」

東浦ひかる

○ゴムと女体のアップ

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号「こあ」

東浦ひかる

○パリスバンド前開き

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「おい」

東浦ひかる

○パリスバンドの縛り

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「おは」

東浦ひかる

○パリス携帯用白バンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「おか」

東浦ひかる

○サカエ軽便型バンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「おた」

東浦ひかる

○パリスSSバンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「おこ」

東浦ひかる

○パピアバンド（大型替ゴム）

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「おし」

東浦ひかる

○サカエバンド（百合）

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「おえ」

東浦ひかる

○珍品鼻責鼻料理

大手札印画紙 六枚一組 六〇〇円
略号「はか」

大塚 啓子

○女体格斗場面写真

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号「めと」

絹川文代、大塚啓子

○禪美と禪縛り

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「ふし」

桜井 葉子

○浣腸器嘴管挿入

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「しか」

梨花悠紀子

○浣腸後便器使用

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「まる」

梨花悠紀子

○浣腸後おしめ使用

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「しめ」

梨花悠紀子

○浣腸排便強要

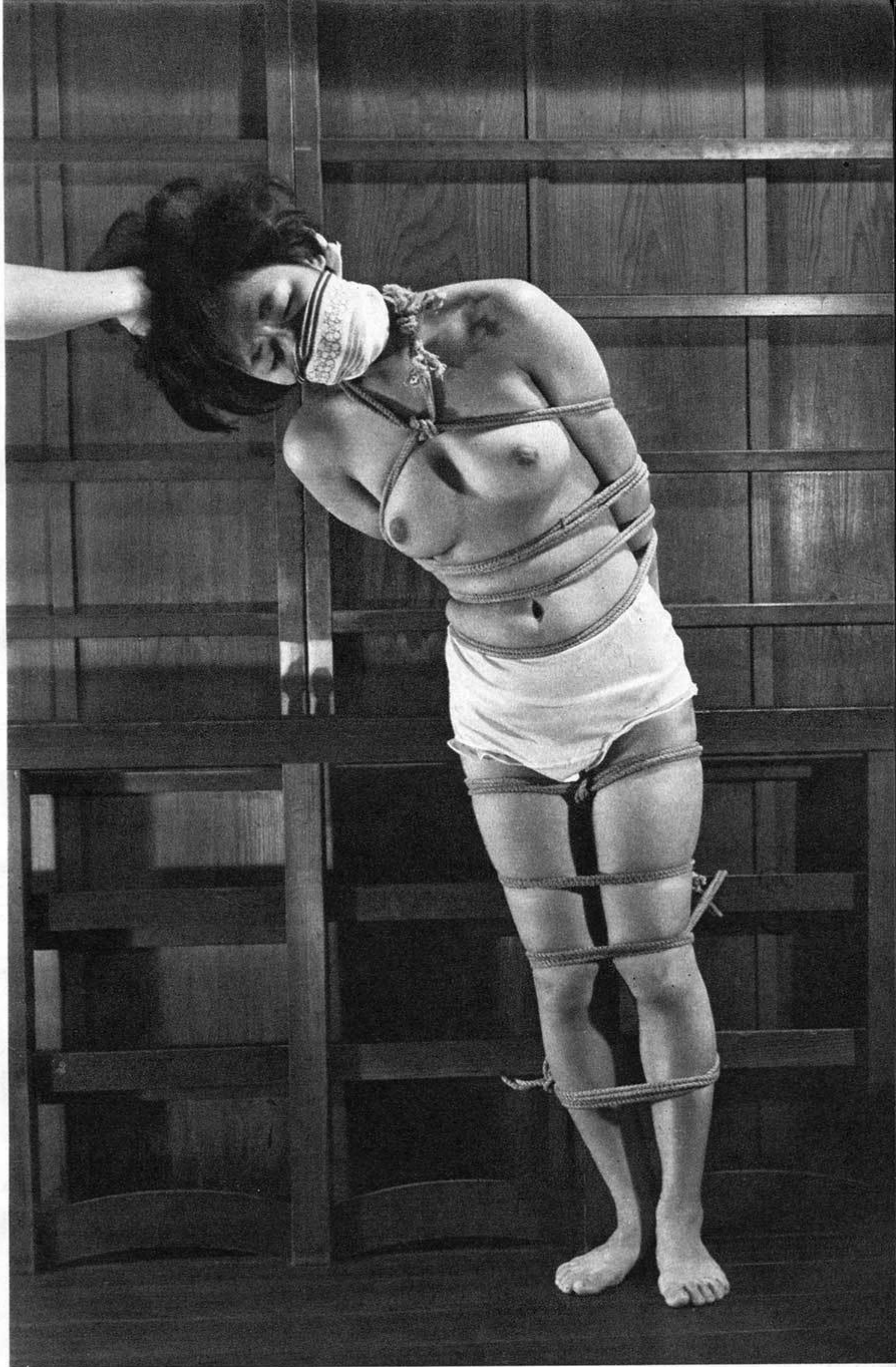
大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号「はへ」

桜井 葉子

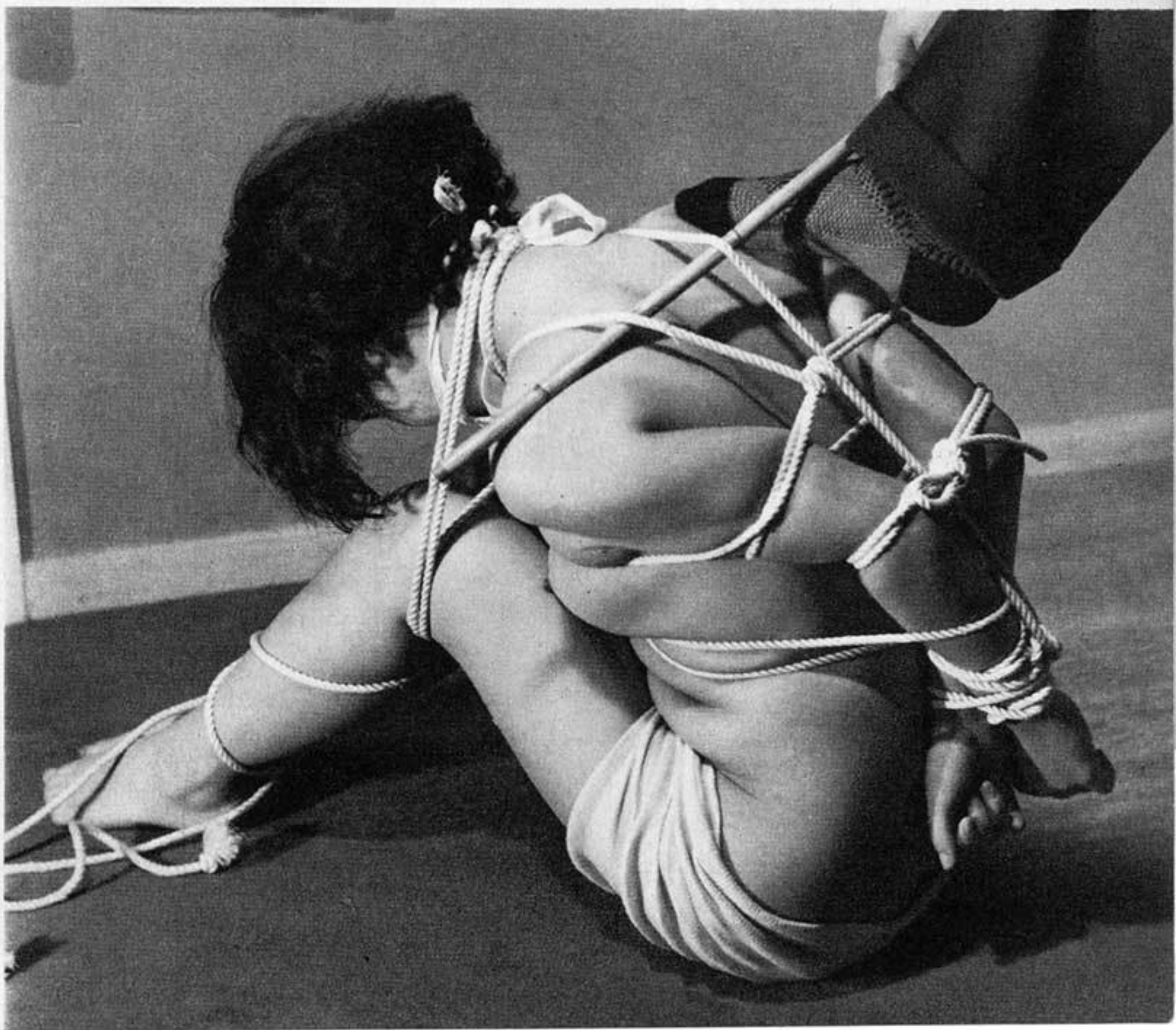


Page 10

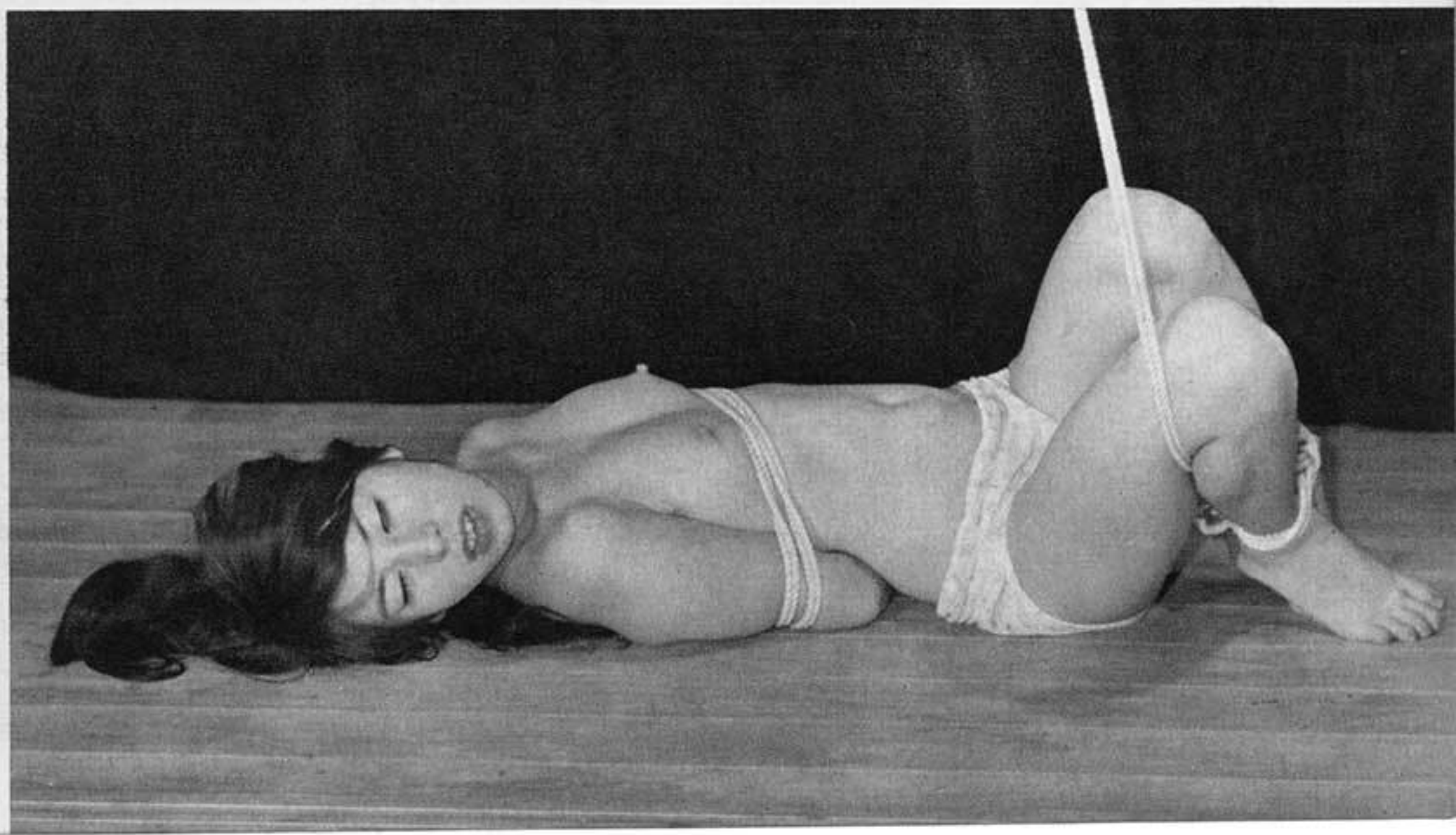
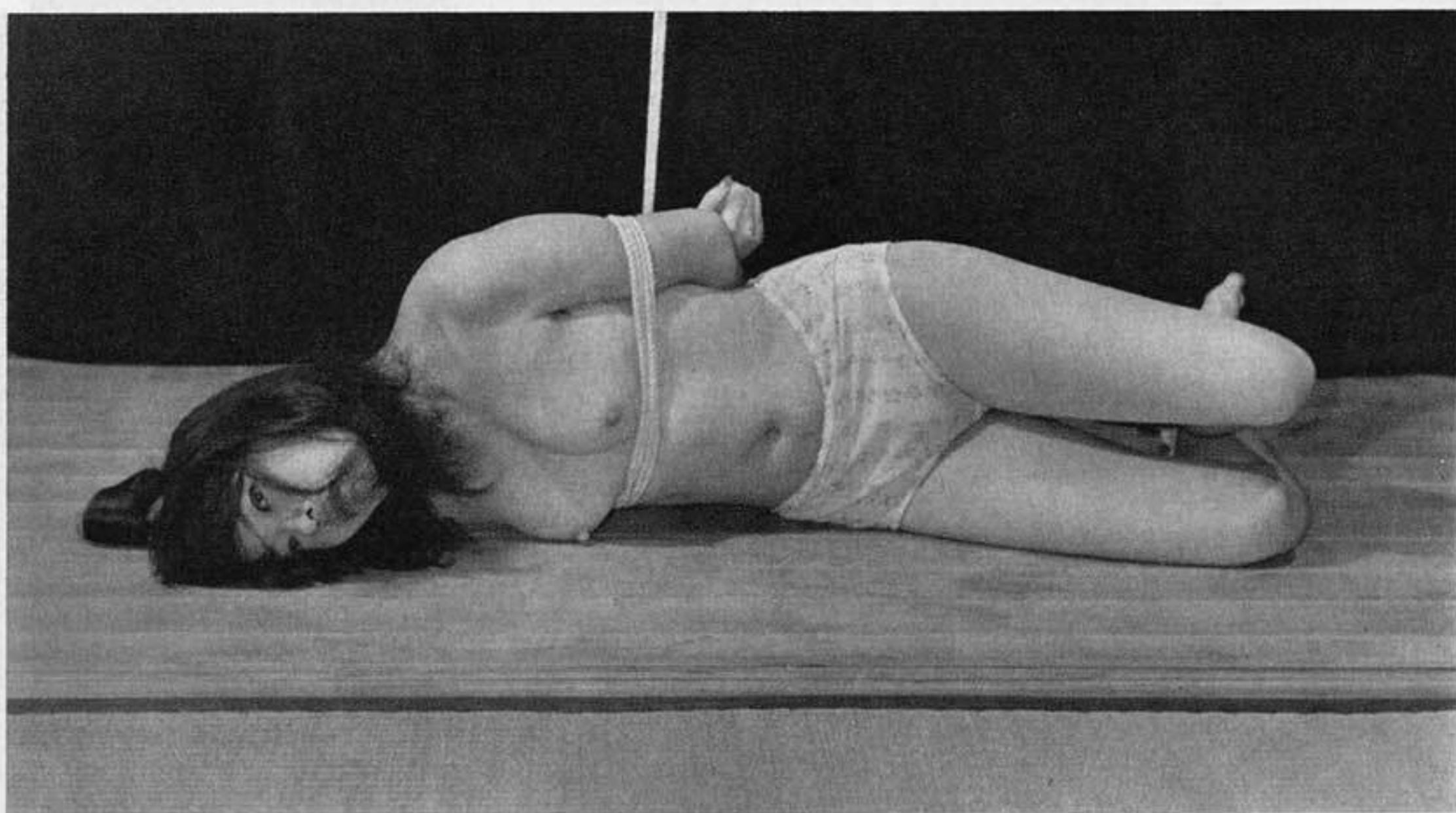
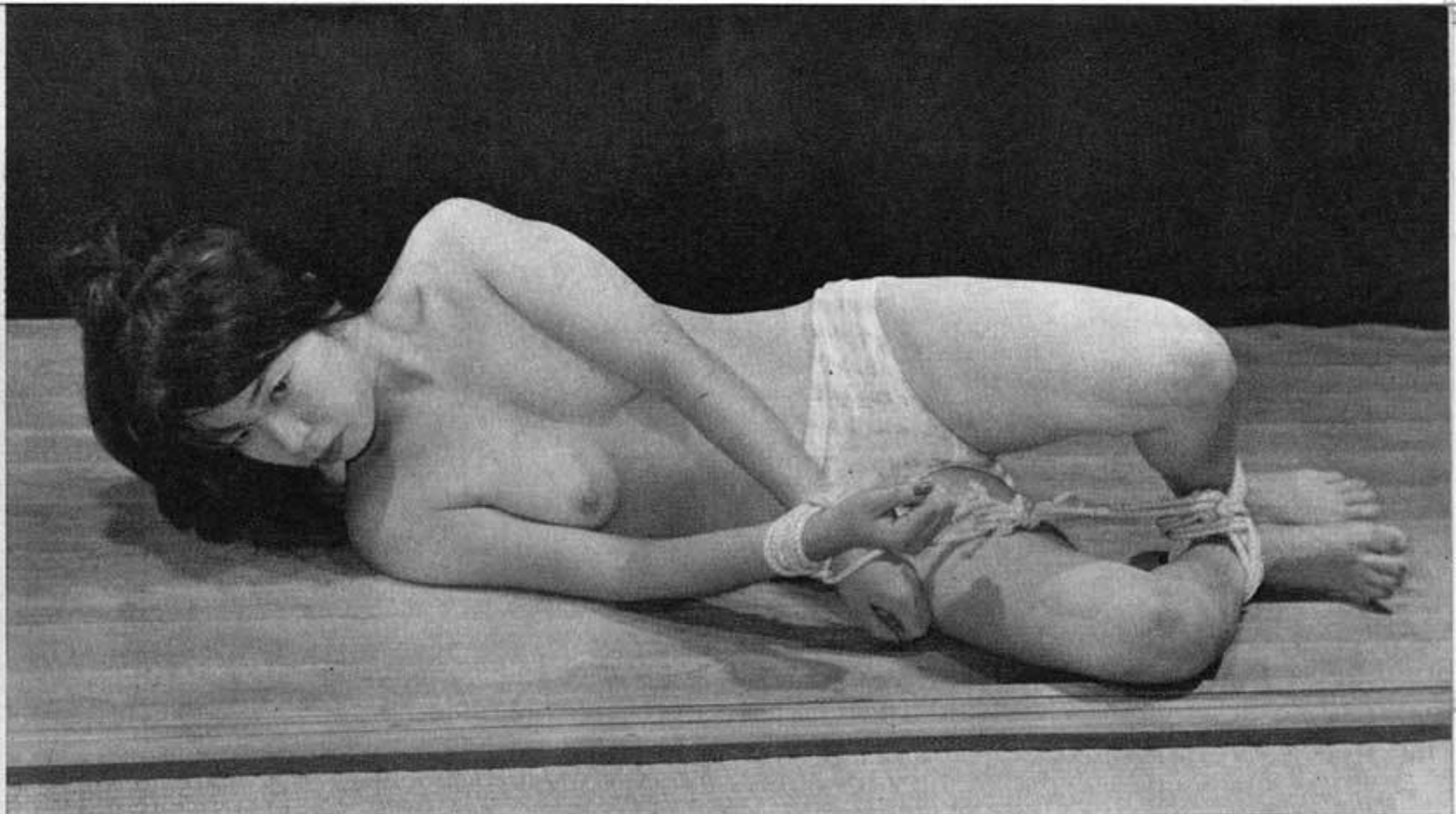
Copyright © 1998



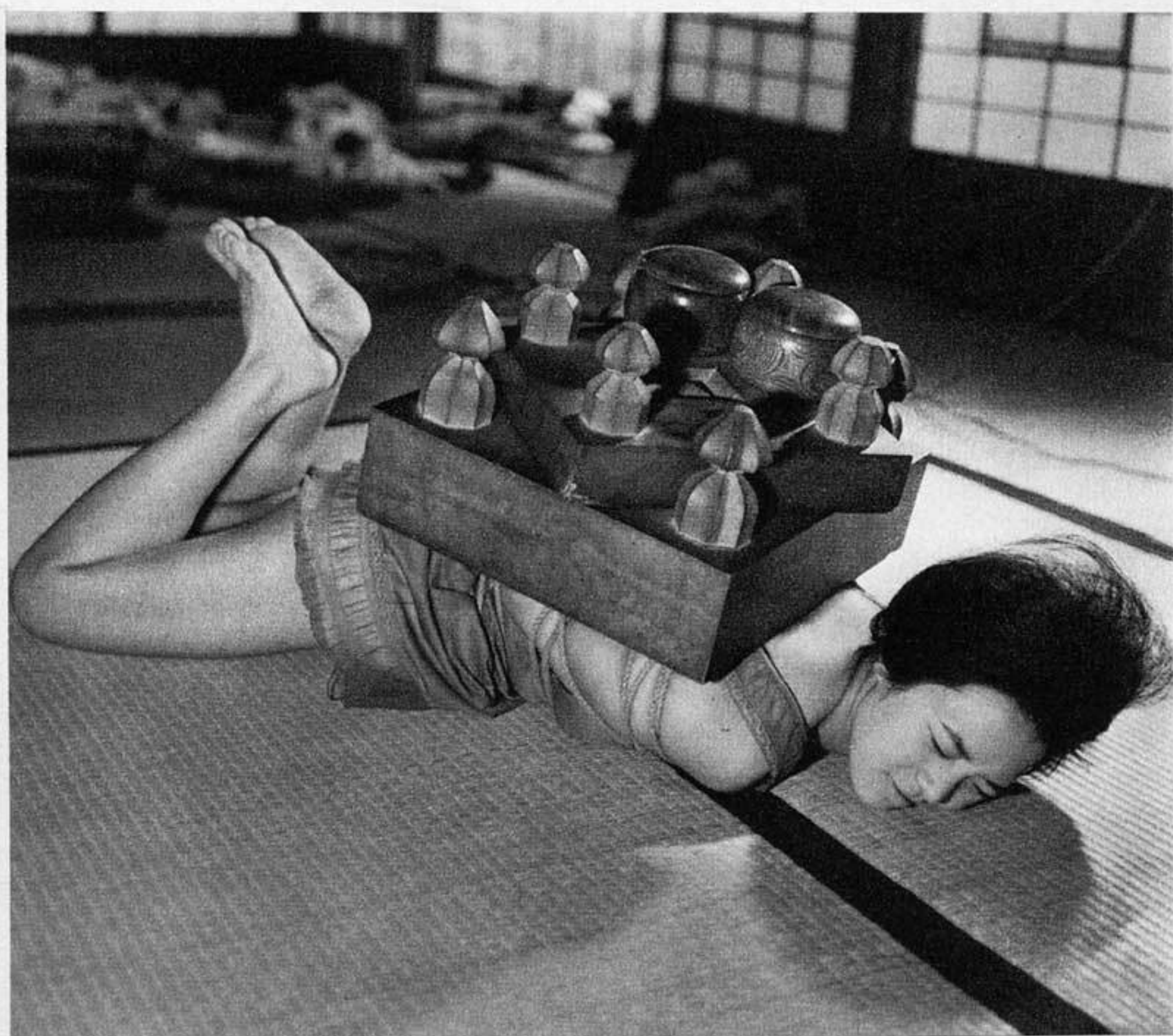
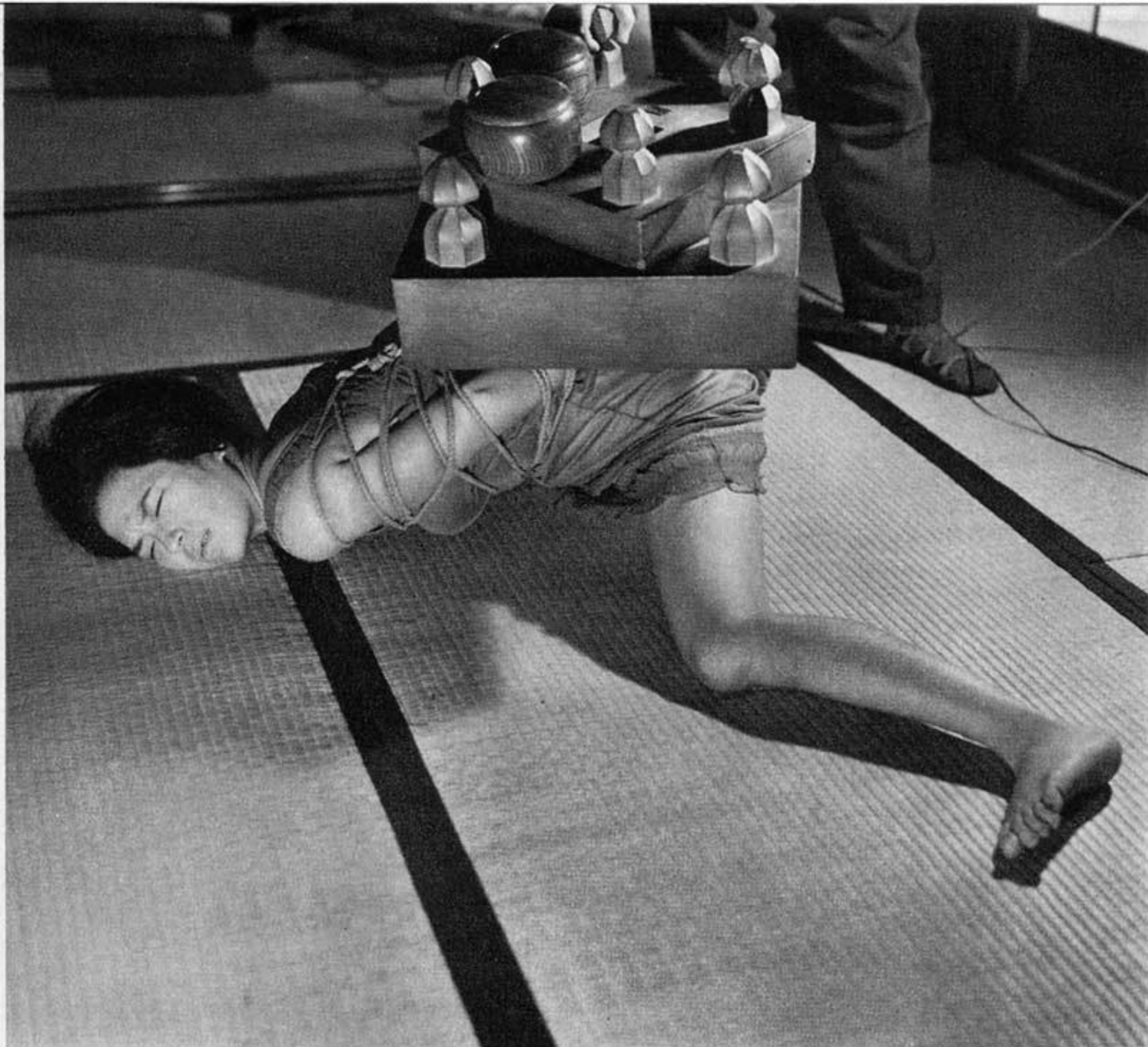














美の破壊(色彩)



おもり責め(ぶらんこ)



おもり責め（はんもっく）

空気ポンプ

四馬孝・画



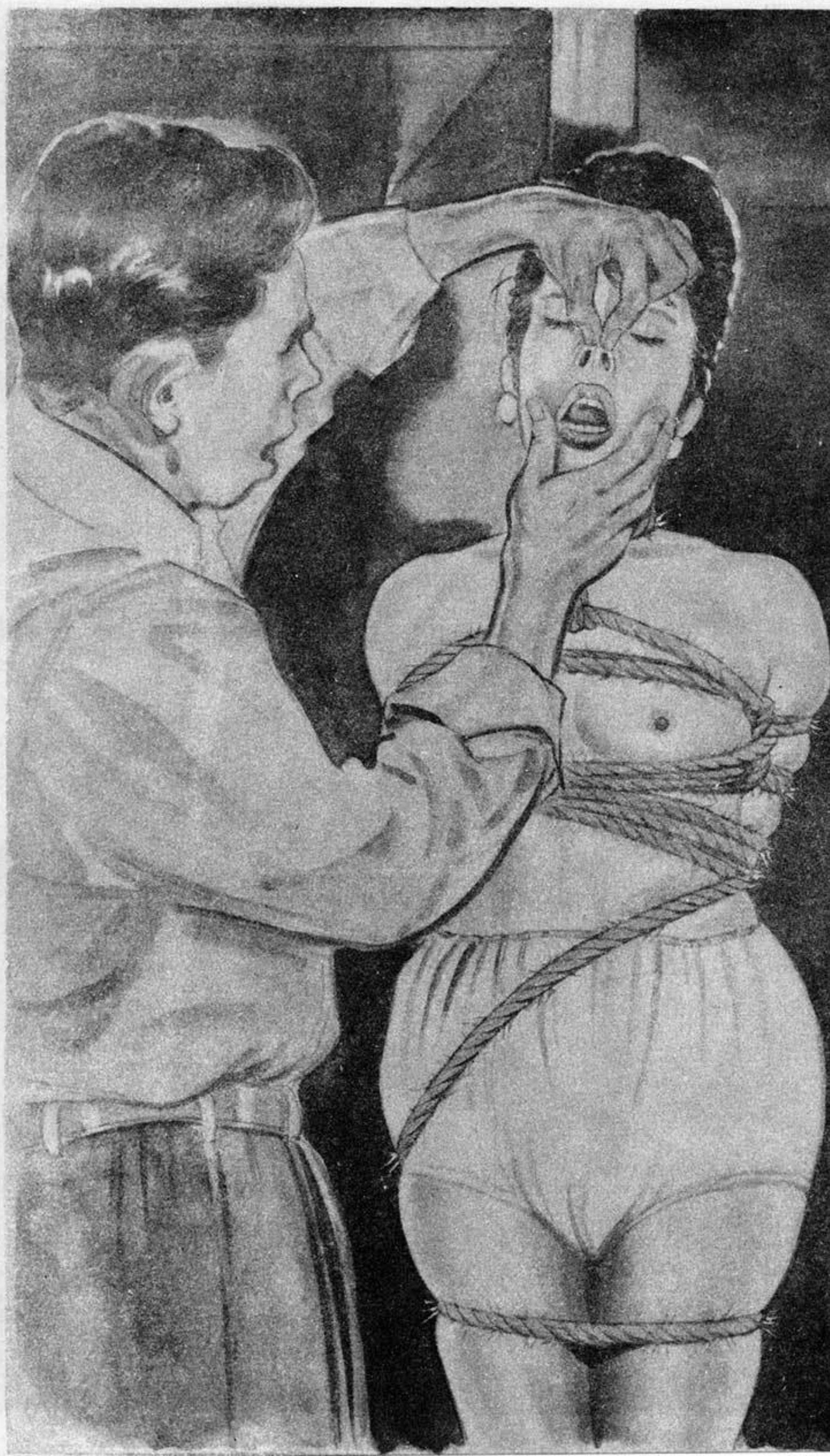
首絞めのプレイ

瀧れい子・画



鼻料理の第一歩

四馬孝・画



女志士の自刃

青山芳樹案、瀧れい子・画





あどけない瞳（淡彩）



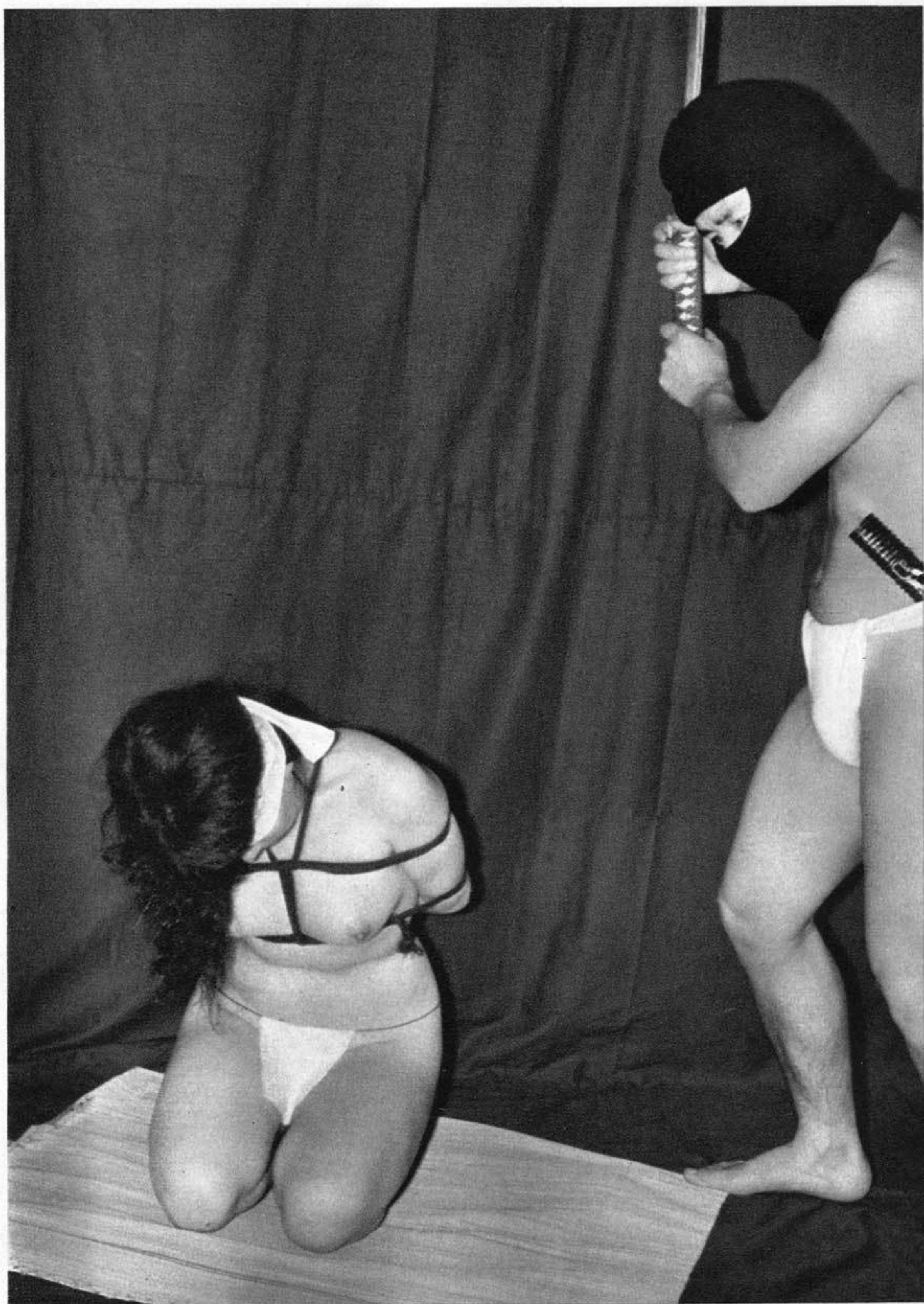


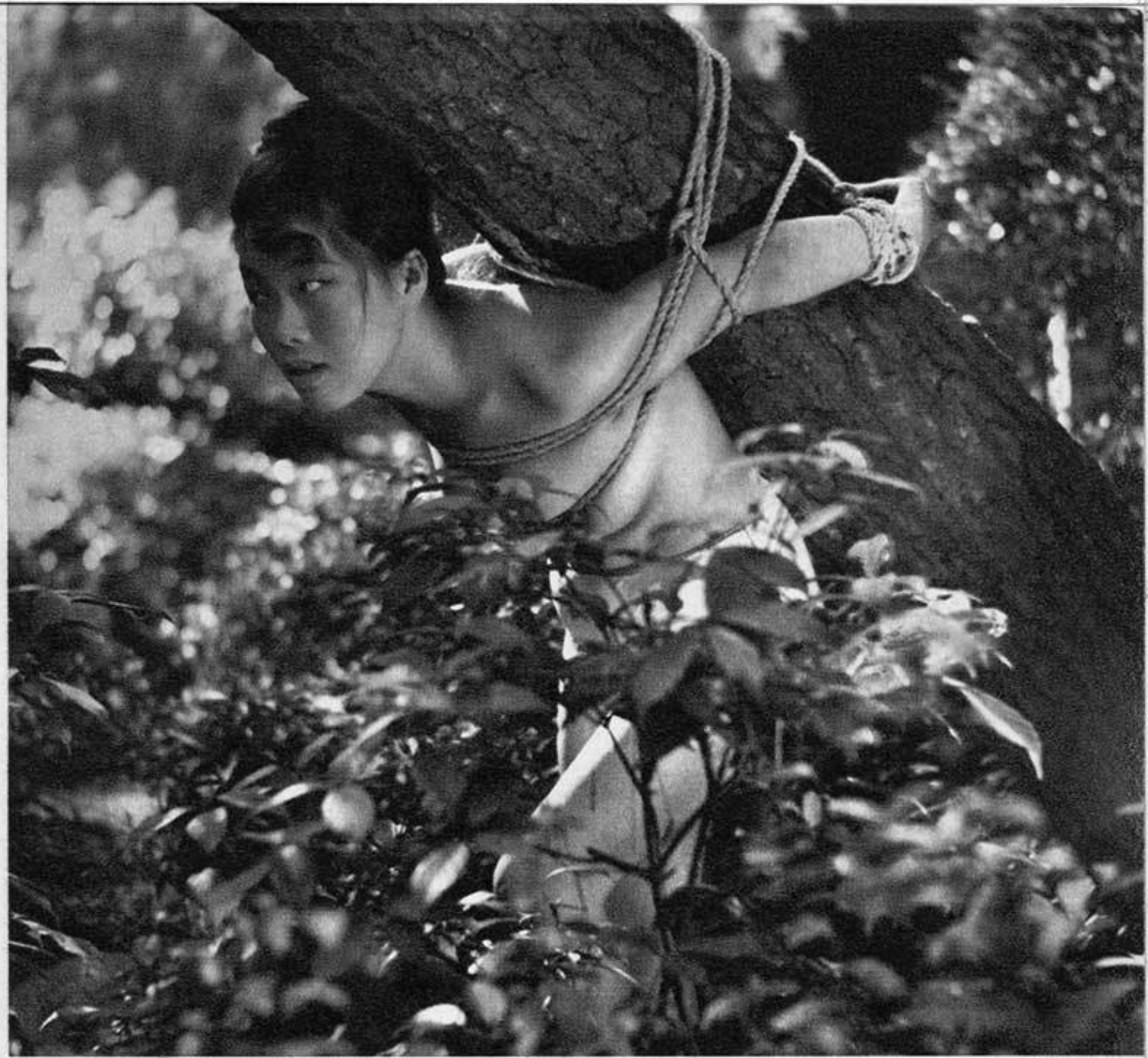










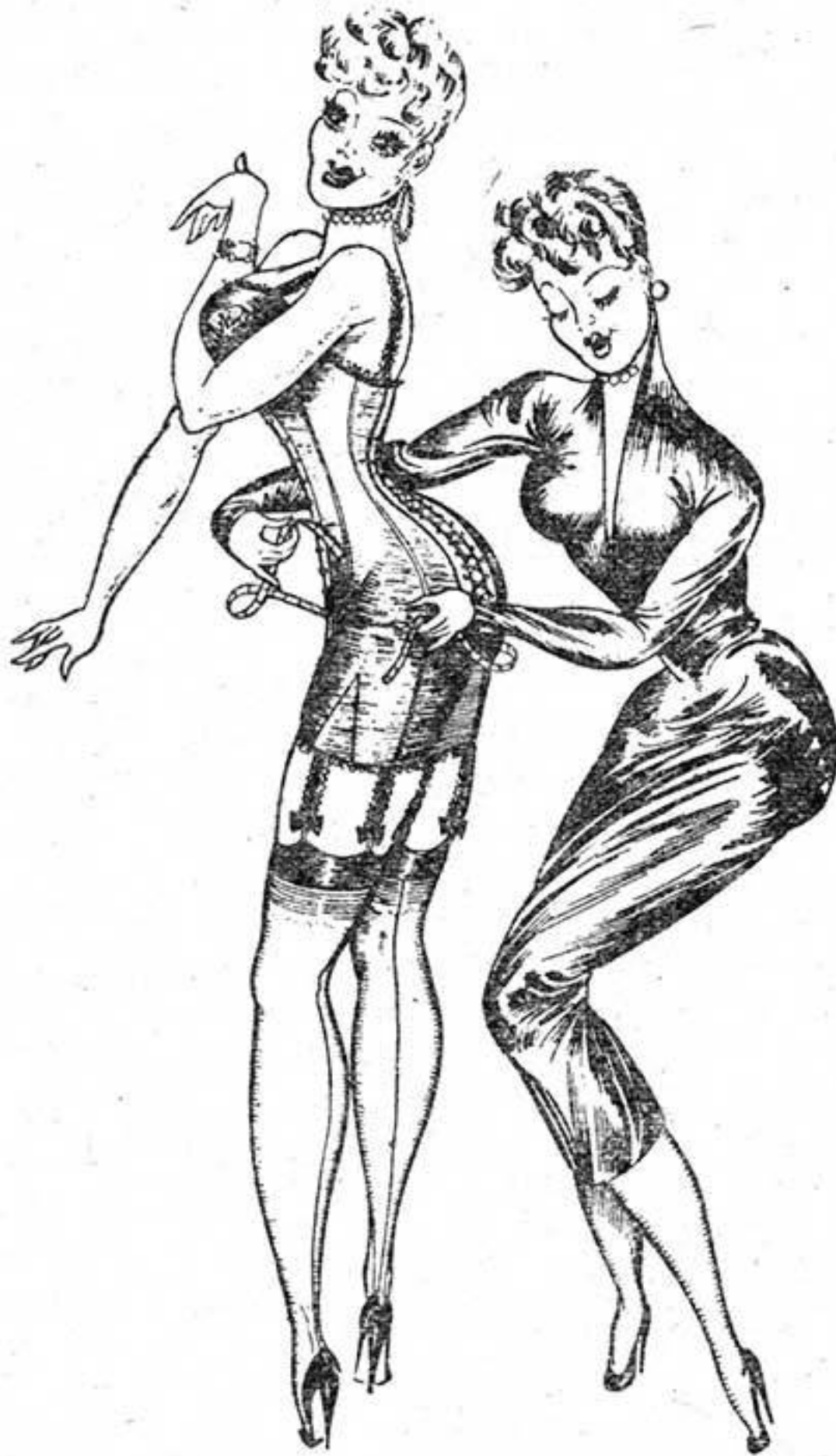


新しい風俗文献研究誌

奇譚クラブ

1963年 8月号

(第17巻 第8号 通刊 第179号)





巻頭〔告白と感想〕

奇クの読者になるまで

遠 藤 保

しばらくの間、奇クを読み続けました。そして、これからも、読者でいたいものだと思っています。

わたしは、まだ社会的経験が少いたため、奇クを定期的に購読するでだてを講じることもなく、女性をきびしくいましめ、折檻してみたいという思いを持ちながら、ただ想像するだけにとどまっています。ですかう、縛り方や責め方を知りません。

はじめて奇クに接したとき、わたしの性癖があからさまになったことを悔やみました。わたしは、悲しみのために、自分が、実にいまわしい、恥ずかしい存在だと思いました。

そのため、今後は読むまいときめながら、つい、いままで読んできました。その間中、意志の弱さを責めながら、いっぽう、わたしの生活のなかで、この性格をどう位置づけるかを考えてきました。

しかし、いまでは、生まれついたかたちそのままに、奇クを読者になることが、最もよいことだと考えています。常識のうえでは、ほとんど問題もなく避けられるべきことからあっても、本能在理性に優越する場合が、わたしに、ひそかにあってもよいだろうと考えたからです。まして、奇クに示された読者のことばのはしはしから、わたしだけのさび

しい世界ではないことがわかってきたいまでは、なおさらのことです。

わたしは、いま、仕事の上で、社会人になるよう努力しています。そのためには、この遊戯におぼれてはいけなはずです。しかしもはや、おさえつけることはできないでしょう。奇クを保存することさえ難かしい生活のなかで、社会人として認められるための努力に、すくなくとも、ひとつのみえない支えとなるように、しむけなければいけないでしょう。それには、いま以上に、日常生活を規律正しくやってゆき、すこしずつ、この世界について知っていく以外に、いまのところ考え

られません。

こう考えてくるまでに、わたしは、わたしなりに、わたしの将来や生活について、悩んできました。世間的に、わたしは真面目な人間として認められています。もし、わたしの性格の持つ特異性が周囲に知られた場合のわたしの立場を思うとき、わたしは、大きな恐れをいだかずにはいられません。だが、そんなとき、はじめて読んだ奇クの小説で、捕えられた女性が責められる場面を思い出します。腰にはわずかにパンティだけが残り、きびしい後手縛りのまま、つま先だちを強制された女性が、捕えた男の情婦にむちうたれるのです。すでに塩水を飲まされ、放っておかれ、必然の生理がうずきはじめたとき、むき出しの腹に嫉妬のむちを浴び、その痛苦と絶え間ない尿意と制止の感情とが交錯してもだえる美佐（たしか、そんな名だったと思います）と、それを含み笑いしながら見守る男とトイレへの哀願にも耳をかさず、狡猾なむちをふるう女とを思い出すのです。それを読むわたしの、このころのゆがみに気づいたとき、わたしは、わたしの精神のはたきさえも信じられなくなってくるのです。わたしの真面目さを維持するために、必要以上に働き、考

えるゆとりを省き、さまざまな計画をたててこの性格を除去しようと努めました。しかし道で、ふくよかな腕の女性をみると、たばねた長い髪をみると、その人の緊縛姿態を思うのです。くすぐったときの目はどうだろう。むちうちのときは、顔がどんなにゆがむだろう。毎日、そればかりを考え、そればかりに心をうばわれていたら、そのことで生活ができないかぎり、わたしは破滅です。ですから、このアブの世界をさぐって、わたしの生活を存続させたいのです。

わたしは、幼い頃を思い出します。終戦直後にはやった『泥棒ごっこ』などは、悪者をつかまえ、縛ることによって、子供心にも、優越感を味わったのでしょう。そんなときには、わたしは、よく女の子を捕えました。ひとりの女の子は、その両手首をしばり、そのまま手を上にあげさせて、わきの下をくすぐったりしました。またあるときは、前手に縛ってあまった縄尻を股にまわし、いやがる太股をしめつけ、すわらせて、鼻をいじくってやりました。あるいは、後手に縛った女の子を歩かせ、たちどまることを許しませんでした。ときには泣かれたこともありましたが、小さかったので、ただふざける気持からやっ

ったのだらうと思いますが、いまの自分をみつめるとき、その意識の萌芽をみて、たまたない思いをします。そんなことをたどってみると、映画でも女優の縛りや責めの場を好みますし、高校時代にふと読んだ大衆小説で、おねえさんたちが悪党から痛い目にあわされるのが面白くて、文学全集を読まなくなったこともありました。

わたしは、責められる相手を痛めつけることを好みません。むしろ、精神的に、こらえることができないくらい恥かしい思いをさせたいのです。顔を覆うことを許されない緊縛、さらけ出すための縛り、のがれようとすくねり、あえぎ、たとえようもないうめき、恥も外聞もないほどにむき出された身体をいとしむ、女性の風情を責めたいのです。

たとえば、夜、あるいは他の人に絶対見られない場所で行うことのできないわたしたちの行為は、ある意味では非常にさみしいものです。理解してくれる人が限られているうえに、いくら「夢食う虫は好きずき」といっても、あまりにもせつないものを持っています。それでも、この異常な快感は、知っている人が終生忘れることができないものとしたら、こういう人たちだけの、静かな世界があ

ってもよいはずだと思います。

そこでは、その同じさみしい人達が、手を取りあって、ある喜びにひたり、それを基にして社会に帰っていく。その営みのなかで、僅かな人達のささやかな友情を育ててゆく。そういった意味では、奇クは稀少な存在だと思います。

さきごろ、神奈川県が、奇クを、不良出版物として指定したことで、誌上で大分論議されました。そのときの、編集者のとった態度に、わたしは、すくなくから好感を持ちました。

奇クを、いきなり人にみせたら、多くの場合、非難が浴びせられるのは当然では。あるいは、判断力の乏しい人らがみた場合、単なる興味本位から、そのまま悪い方向へ解釈する危険性も大きいはず。奇クによって、なぐさめられ、心にやすらぎをおぼえている人達の切ない願いも、ほとんど理解されることはありますまい。理解する人が、たしかにどうかしているからです。悦虐ということばは、悦虐を知らない人に、どう説明すればよいでしょう。

編集部では、審議会の申し入れをうけいれ奇クを存続させるという方針のうえに自肅を

申しあわせ、その具体的なことを、読者と相談しながらやってきたことは、よかったのではなかったかと思えます。ほんとうに必要な人にだけ、同人誌のかたちにしても……という点には、編集にたずさわる人の熱意が感じられました。一般的に、芸術といって、これを表面に押し出すには、かなりの勇気がいります。いくつかの芸術的な考察を諒としながらも、わたしは、勧告の不当を鳴らした文章に対しては、わたし自身だけのことがらで、すべてを判断する独断を感じないわけにはいきませんでした。無論、わたしも、あの勧告が、わたしたちのことを何ら考えてくれないことに不満を持ちながらも、この人たちの社会的な責務をも考えにいれ、わたしたちのこの行為が、誰にも（潜在的にサド性、マゾ性を人がそなえていることを肯定しながらも）共通しないものであることを認めざるを得ないので。

わたしにある種の余裕——たとえば経済的な、あるいは仕事に制約されない時間など——ができれば、女性を責めたいし、そういう場面を見たいと思っています。それまでは、想像と幻想の世界をさまよいます。いろんな縛り方を知り、さまざまな責めをこころめ、

浣腸も思っていると、やはり、わたしは、自分を抑えきれません。

くらしのなかで、人間に魅せられてきました。すぐれた人、おとった人、よい人、悪い人、高い理想を説き怒りの感情で自らの愚をさらけ出し、それさえ気づかない人、人前をかざることだけに力をいれ自分本来の性格を表現できない人、偽善を行う人、などをみるにつけて、奇クの人らを思うのです。そしてわたしを思うのです。

わたしは、これから、何らかのかたちで、わたしの思いを引続いて書いてみたいと思っています。

こうやって、この文章をつづっているいまある喜びにふるえている人ら、ある思いにかかれている人らのあることを感じています。そして、わたしは、いついつまでも奇クの読者でいようと思い、又、そうありたいと願っております。それは決して、たのしみばかりではないことは、自分でもよくわかっていゝのです。それでいて、わたしは奇クを自分の生活のなかで活してゆきたいと考えているのです。

わたしのような気持で奇クを読んでいられる方が他にあるでしょうか。

△読者の手記▽

鎌倉の思い出

— 禪裸女争闘のこと —

井内左^さ右^う子^こ

その日は月曜日でした。

私はお友だちの好子さんと、鎌倉へ来て居りました。毎年、夏になると泳ぎに来るのですが、今年はある証券会社へ入社出来ましてこの新しい私たちの会社の厚生施設として作られている海の家へ、先週の土曜日から来ていたのです。

同じ会社の男たちも一緒だったのですが、やはり男の方たちは仕事もあり、日曜日の晩は皆帰ってしまわれましたので、月曜日までもう一日休暇をとって居た私たちだけが、こ

の広い海の家にとり残されたかつこうでした。

私は今年、都内のある高等学校を卒業したばかりであるのに対し、好子さんは前に三年程、横浜のある商事会社に勤めておられた事があり、私よりも年の上でも社会人としても先輩でした。私は学校にいた頃は一番大柄で体には自信がございましたし、色も白いのに対して、好子さんは、どちらかといえば小柄な方で色は小麦色でした。

しかし、水着に着かえた好子さんの体は、

女の私でさえも、すっかり魅せられてしまったのです。盛り上った見事な胸、そして太った腰まわりは、彼女が一寸でも動けば彼女の水着がはりさけるのではないかと思わせるばかりでした。私たちは昼間、さんざん泳いであそんで海の家へ帰ってきてみると、昨日まで男の方たちがにぎやかだった部屋も、ひっそりとして、何か一寸淋しい感じがいたしました。

日が暮れてから、晩御飯の後、テレビを見ていたのですが、丁度プロレスをやっており

力道山がミスター・Xをさんざん空手チョップで苦しめ、拳句の果フクメンをひきむしって、膝を痛めたXがまいったをしたところを見て、気をよくして部屋へ戻ってみると、好子さんは、先に帰って、窓によりかかり、トップリと暮れた海の方を眺めておりました。

私も窓から体をのり出して、涼しい風に吹かれておりますと、道一つ隔てた向うの旅館では、庭に涼み台を出して家旅づれが楽しそうに、何かきやっきやっと笑い声を立てながら、話をしているのが見えました。

「テレビ、面白いのやってた？」

好子さんは、いくらか黒くやけた顔を向けて私に聞きましたが、その顔は一寸熱っぽい様な眼をしていました。

「ええ、今プロレスやってたわ。力道山はやはり強いわねえ。ミスターX、こてんこてんにのしちやったわよ。けれど、あんな非道い事されて、レスラーなんて平気なんですか」

すると、好子さんは体を乗り出して、

「ねえ、私たち、プロレス、やってみましようか？ 私、一寸やった事あるのよ。教えたげるわ。ちゃんと、ここに用意してきてあるのよ」と言うのです。私はびっくりして、

「私たち二人が？ レスリングをやるんですって、よしてよ。恥しいわ、女同志で、こんな所で取っ組み合いをやるなんて、もし管理人のおばさんでも見られたら何て言うのよ」

しかし好子さんは黙って、私の言葉を押しこらす様な表情でおっと立ち上ってきて、自分のスーツケースから真白なさらしの帯を二巻き出して来たのです。そして私の前に立ちはだかつて言いました。

「レスリングはこんな所では出来ないわ、さあ、裸になって仕度しましょ」

私はびっくりしてしまいました。その真白なさらしは男の人たちがするフンドシだったのです。私は拒みました。

「こんな所で裸になれて、男の人みたいにふんどしを締めろって言うの？」

しかし、彼女は私の言葉にはかまわず、窓をしめてカーテンを掛け、外から見えないようにしてから、さっと着物を脱ぎ始めたのです。

「私がお手本を見せたげる」

やがて素裸になった彼女は、あっけにとられている私を尻目に、ばらばらとさらしをひろげて、あごに挟み、股間に渡して後にまわした帯を器用にぐぐぐとときつく締め直した

がら、後で結び込んでしまいました。勿論素裸の上にふんどしを締め込んだのですから、ブラジャーも何もしておらず、乳房は丸出しのままです。彼女は鏡の前まで行き、自分のふんどし姿をとっくりと眺めながら、前ぶくろのあたりをゆっくりと手で触って確めた後、軽く叩いて、私の方へ向きなおり、

「さあ、貴女の番よ。私が手伝って上げるから、裸におなりよ」

きっぱりとした彼女の言葉に押されて、私は反抗する事もできず、呆然として居ますと好子さんは、後に囲って私のゆかたの帯をときゆかたを脱がせて、下着もはぎとってしまいました。さすがに彼女の手が私のパンティまでかかった時、悲鳴をあげてしまい、

「いやよ、いやよ、貴女とレスリングをするなんていや！ ましてふんどし一つでやるなんて、私、恥しくって、それだけはやめて、許して……」

けれども、私はいやおうなしに裸にされてしまいました。

「ここをしっかり挟んでるのよ」

と、ふんどしの端を持たされて股に締めつけられたときは、プロレスの話など出さなければよかったと後悔しました。

全く生れて初めてのあさましい姿にされ、
むき出しの乳房を片手でかくしながら、恥し

私も素裸にふんどし一つ、彼女も又ふんど
し一本の裸です。肌と肌とがぴったりと密着



さにおののいて立っている私を、好子さんは
後からしっかりとだきしめました。

した時、心臓がドキンドキンと高鳴っている
のを覚えました。

「さあ、行きましよう」

「行きましようって、どこへ？」

すると好子さんは、さも当たり前だといわん
ばかりに、

「海岸よ、レスリングは家の中ではできない
わ、もっとも、この恰好では道を歩けないか
ら、ゆかただけ引っかけて行きましようね」

私たちが門をくぐって出ようとすると、管
理人のおばさんに合いました。

「おや、お出かけ？」

「ええ、一寸散歩に行ってきます」

好子さんは何気なく返事をして、すたすた
と歩き出しました。私は仕方なく彼女の後を
海岸の方へ下駄を引っかけて追いかけてゆき
ましたが、電信柱の電灯の下まで来た時、昼
間、海岸で逢った学生さんに出会いました。
好子さんは平気なのですが、私は、目の前で
何も知らず楽しそうに笑って話しているこの
二人の大学生が、私たちがゆかたの下にふん
どし一つのまっぱだかと知ったら、どんなに
びっくりするだろうと、思わず顔が赤くなっ
てくるのでした。

学生たちと別れて海岸へついてみると、月
はまだ出ていず、星だけが真暗い空でまたた
いて、ほとんど、あたりは闇である上に、波

打際では波の打ち寄せる音がはげしく、近くに近寄って大声で話さなければ、相手が何をしゃべって居るのか、分らない程です。

好子さんが「さあ、始めましょう」といって、帯を解きゆかたを砂の上に脱ぎすてた時私は本当に逃げ出したくなりましたが、彼女の手は容赦なく、私のゆかたを剥ぎとってしまいました。

私は文字通りのふんどし一つの裸で立たされてしまいました。海岸の砂はまだあたたく乾いていましたが、波打際の砂はしっとりとなめて、快くひんやりと足の裏に感じました。

私たちは四つに組みました。私はもう無我夢中でした。好子さんのふんどしをつかんでやたらに押し倒そうとしますが、中々彼女はレスリングの経験があると言うだけあって、上手で、そうはさせじと逃げ回り、私を軽くあしらうのです。しかし、何といっても私の方が体は大柄ですし、ついに好子の足を内股にかけ、砂の上にどつとばかり押し倒しました。私のむき出しの乳房が、彼女の胸に、どんとぶつかりました。

私は彼女を押し倒したのだから、勝ったと思ったのですが、これは相撲ではなくて、レスリングでしたから、実はこれは好子さんの

思う壺でした。寝業は彼女の方がはるかに勝っていました。好子さんは馬乗りになった私を見事にはねとばして、今度は私を逆に押え込みにかかりました。

好子さんは右手を私の股の間に入れるや、ふんどしのうしろの結び目をしっかりと掴んだまま離さないのです。私は両足をバタバタとさせながら股間に入れた彼女の腕をとろうとしましたが、彼女は上体を私の上に押しつけ、ふんどしの前袋で私の顔を息も出来ないばかりに押えつけてくるのです。

ふんどし一本を締めこんだだけの二人の若い女が、海岸の砂の上で、ドタンバタンと組んずほぐれつの乱斗を演じているところを御想像下さい。自分の演じている、あられもない姿を想像すると、気も顛倒せんばかりになってしまいました。

ついに彼女は私を逆えび固めにしてしまいました。逆えび固めと言うのは、うつ伏せになった相手の上に後向きにまたがり、相手の両足をそれぞれ両手にかかえたまま、一気に反り身になるのです。これをやられると、背骨が折れるように痛く、思わず絶叫してしまいました。

しかし、激しい波の音は、私の悲鳴などす

ぐかき消してしまふのです。何という恥かしめ、今、ここへ、誰かが来て、この有様を見られたら、どうしようー。

私は急に身体の自由をとり戻しました。好子さんが手を放してくれたのです。私はハァハァあえぎながら、力なく砂の上に長々とのびてしまいました。逆えび固めをやられて、私のふんどしがすっかりゆるんでしまったので、彼女は私を抱きおこし、無理矢理立たせてふんどしを締め直そうとするのです。

これには私もたまらず、両手で前袋のところを押えて思わず叫びました。「もう、許してエー」しかし、私はとうとう、彼女の手によって、ふんどしを始めから締めなおされたのです。

お月様が東の空から、うつすらと登りはじめてきました。

「さあ、もう一回戦しましょう」

命令するような彼女の言葉に、私はつかれたように、再び四つに組んでいました。

彼女の大きな乳房が私の胸にピッタリと密着していて、お互いの鼓動がよく感じられました。さかんに揉みあう間、お互いに息使いも荒く、投げ技を試みましたが、やはり大柄の私は小柄な彼女では扱い難いとみえ、慎重

なった私を何とか倒そうとあせっています。

私も今度は何とか彼女に悲鳴を挙げさせてやろうと思い、力づくで彼女をねじ伏せようとしたが、どうしたひょうしか、彼女は私の腕の下をかくぐって、背後から抱きすくめるように羽がいじめにした上、片足で私の右足をかけて倒そうとしますのです。

私はこの逆転に少しあわてましたが、そうはさせじと、腰を落してもみ合っていますと不意に彼女の右手が前に回って、前袋を横から握っていました。私がハッとして上体の崩れるすきに、私の大柄な身体はかかえ上げられて、砂上に投げとばされていました。

私がお尻をしたたかに打って、起き上ろうともがいているところへ、とび込んできて、逆十字固めでぐいぐいと締め上げられてしまいました。悲鳴をあげようとするのですが、激しい息づかいが、「フワァー、フワァー」というだけで声にならず、ドタン、バタンともがいている中に、どうやらふりほどいて、四つん這いのまま逃れようとしたその後から再び腰にだきつかれて、足をつかんで波打際まで引きづり込まれました。

二人は共に、はあはあと荒い息づかいをしており、胸といい、お尻といい、もう砂だら

けになっています。

私は小さいときから水泳は得意でしたから、水の中へ入ってしまえば、自分の勝たということに気がついて、今度は力にまかせて好子さんの右腕をとると水の中へ引き込み、力にまかして、自分の身体を押しつけました。

水に足をとられて、ふんばりのきかない好子さんは、仰向けに水中に倒れ、両足だけが水面をバタバタさせているばかりです。水中に没した顔はたまらずブクブクッと口からあわを立てながら苦んでいます。

私は、さっきの返礼はこの時とばかり、彼女の片足を引き上げておいて、片手でふんどの結び目をまさぐりました。結び目は水に濡れて解けそうにありません。それに彼女があばれるので、中々思うようになりません。お月様は大分高く登ってききましたので、波がキラキラと輝いています。誰かが、海岸で見ているなら、しぶきを上げて争う二人の裸女の姿を眺めることができたと思います。

私が彼女のふんどの結び目にこだわっている間に、お尻を海底につけて態勢を整えた彼女に両足をすくわれて、あっと声を挙げたまま、仰向けに海中へ投げだされました。しかし、彼女のふんどの端だけは、しっかり

と握っていましたので、ぐぐっと手ごたえがあつて、好子さんの腰から、ふんどしが私の手もとに残りました。

「返えして、返えしてー」

好子さんの追いかけてくる声を尻目に、私は彼女のふんどしを手にしたまま岸の方へ走り上りました。好子さんは岸へ上がることが出来ずベソをかいています。好子さんは、まさか水の中で私がこんなに強いとは思ってもしなかったのでしょうか。私はすっかりいい気持ちになってしまいました。

あれから、もう二年経ちますが、好子さんはその年の秋、結婚され、今幸福に暮しておられるそうです。

今年もやがて夏が訪れてきます。私は好子さんとの渾一つで争ったことを思い出して、あの鎌倉での一夜をなつかしくなるのです。

あの時から、六尺の晒が私の下着の一種になつていくのですもの、忘れられない筈ですわ。新緑の候になると、私は、素肌になつた晒の布地の感触をたのしむように股間にしめつけてみるのです。そして、夏中は時折、思い出したように締めてみます。

(おわり)

手記

愛のイメージ

浦田紀夫
水沢雅美

私達二人は、去年の秋、結婚したばかりです。それ以来、主として雅美のアイデアを紀夫がペンを取って、幾つかの緊縛短篇を書いて来ました。そして、二人のプライベートな生活を書いたら、ということになりました。二人は、今東京三鷹市の公団アパートの五階に住んでいます。まず、ぼく——紀夫は二〇才です。高校卒業後、中央区のある商社のアルバイトをしながら××大学に学んでいる学生です。身長は一六七センチ、体重五五キ

ロです。

ぼくのベター・ハーフ雅美は二二才、ぼくより年長です。千代田区の××銀行のビジネス・ガールで、夜間大学に（毎夜は行かず週に一、二晩は休むのですが）通って仏文学を研究しています。身長一六六センチ、体重五三キロです。

二人が知り合ったのは一昨年の夏、つまりぼくが高校の最終学年で、かの女が高校を卒業した翌年のことで、帰宅途上のかの女と言

葉を交したのがキッカケです。詳しいことは省きますが、二人は忽ち親しくなり、予定を変えて新宿へ出てしまった二人は、夜おそくまで語り合い、ぼくは北浦和のわが家へ帰るかの女を池袋まで一緒に行って別れました。それ以後は御想像に任せましょう。二人は今共稼ぎでどうにか小さいながらも幸福を求めて生きているのです。

さて、かの女は、——ぼくはかの女を、その時々のもちで「雅ちゃん」「雅美さん」

「雅美クン」「雅美」と呼び、かの女はよくを「紀ちゃん」「紀夫さん」「紀夫クン」「ねえ、キミ」「紀夫」と呼びますが、ここでは「雅美」と呼ぶことにしましょう。

——雅は、やや痩せ型の、均整のとれた長身です。髪は、一房の前髪を軽く額の右寄りにバング（鉤）し、ソフトなロングヘアを頭の後でまとめて巻き髪にするか、軽く編み加減のポニーテールにして紫のリボンを結ぶのが好きなようです。

眼はパッチリした二重瞼で、鼻はそれ程高くはありませんが、鼻すじが通った整った顔立ちで、眼もととはどっちかといえどもっぱいあどけなさがあります。

服装は、ふだんはカラーの大きな淡いピンクのスイーツにタイトスカート、白ブラウスに白手套、淡いピンクのベレーに同じ色のハイヒールといった地味なオフィスガールの姿でそういう時は、場合によるとアイライン・ルージュもつけません。イヤリングも珊瑚珠の可愛らしいのを時につける程度で、ほんのり薄化粧するだけです。肌が美しいので、かえって水々しさを感ずります。

ストッキングだけは、ゲージの細かいフルファッション靴下の淡色のを、ガーターで吊

った上に膝下で紅い靴下留でピンと留めるといった風にキチンと穿いています。それに——下着には実に気を使っています。ものにかまわれないようで、実は一番お洒落といえるかも知れません。

それと雅美が好きなのは、もっとも若々しいスタイルです。

春になると、朝など、まだ風が少し冷たいころから、もうショートスカートを穿いて出ることが多いのです。水色と紅緑のタータンチェックか、純白のブラウスの袖口を二の腕まで折って膝上までしかない黒のタイトスカートに純白のソックスと白のスポーツ・シューズ、ピンクのスカーフをほっそりした頸に巻くか、水色のネッカチーフで髪を包むのが好きです。長身の雅美は、特にそのすらりとした長い脚線に自信があるのです。

もう一つ、時にはブラウスの白い丸襟だけのぞかせた紅か水色のファスナー付きジャガットにグレイのプリーツまたは、ギャザー・スカート、白ソックスにグレイのローヒールといった少女のようなスタイルを好みます。

こうした服装からも解ると思うのですが、雅美は平生、落ちついた優しい、そして明るい女なのです。ところが、時として、こんな

変化が起ります。

「行こう、行きましょよ、ねえキミノ」

晴れた日曜日など、前夜の約束も忘れて、朝寝してるばかりに、雅美はいきなり頬をすり寄せます。そんな時、ぼくより二つも年上のかの女は何か姉弟みたいな気もするかも知れませんが、ぼくはかえって、そうしたかの女に子どもっぽい初々しさを感ずります。

跳ね起きたぼくをせき立てて雅美がとどめる服装といえ——そうした時にかぎって日頃とまるっきり違うのです。

可愛い唇を真紅にルージュし、アイラインだけでなく時としてアイシャドウをつけ、大きな銀のイヤリング、赤いネッカチーフ、赤いブラウスに白か水色のショートパンツ、すらりと長い脚を透き通るような素肌のままか、時によると、黒い網の目のストッキングをガーターで吊って穿き、両手にも網の目の長手套をつけるという派手な姿で身寄せします。そして、そんな時には、ぼくにもショートパンツにとっておきの大理石模様の毛のストッキングを穿かせてサイクリングに引張り出すのです。

こういう姿の時には、友達に誘いません。静かな林の午後の日射しの中で、雅美からか

ぼくからか、熱い息づかいが燃えるように通うのです。それから、時としては——かの女は長い髪を頬からあらわな肩にふりかけ、肩をむき出しにし膝上までの股の切れ上った黒いアフターヌーン・ドレスにストッキング、松葉のサンダルシューズで私を銀座に誘います。

こうした時のかの女は、全く平生の地味なエレガントな感じどころか、実に思いきった烈しい感じさえ与えるのです。ぼくは、そうした時、雅美に——単にかの女が年長だからだけでなく、強い力で抱きかかえられる様に感じます。ですが、かの女はやっぱり優しい地味な、むしろ、本当に子どもっぽさをもった女性なのです。

かの女は、アパートの二人の愛の巣へ夜おそく帰って来ると、「ああ疲れた」と一言、そのストッキングに包まれた美しい脚を投げ出して坐るのですが、ふだん着に着替える時は、何時も黒い女学生用の長靴下に穿きかえ

私のイメージ



私は白ブラウス ショウ
スカウトにレギンス

がれば ショートパンツに
ストッキング

るのです。フルファッションではすぐ傷んでしまうので、黒のウーリーナイロンのストッキングですが、その姿で高校生の時着ていた制服のギャザースカートとセーターか、カーディガンで用を足す雅美は、若妻というよりは可憐な女学生です。

かの女自身、この服装になつかしさを持っ

ており、何時までも若さを失いたくないのだと言います。ところで、こうした雅美の日常が、実はかの女とぼくのこれから告白する秘密と深い関係を持っているのです、あらゆることに一々気を使っている銀行の日々、そしてその中で勉学の意欲を満たそうとする中での生活との相剋、これが本来地味な理知的な一

人のサラリーガール、またサラリーマンのぼく自身を何か烈しいものへ、そして被虐意識へと追い込んでいくのでしよう。

雅美とぼくが『習慣』を知ってしまったのは、二人が結婚して間もなくでした。二人の結婚の楽しさの中にも満たされない悶々が、ふとしたことから、こうした方向へ向いてしまったのです。ぼくが言い知れぬ感情の燃え上りに、抱くというよりはねじ伏せ、両手を思わずねじ上げた時、雅美が「縛って！」と叫んだのです。

今、ぼくたち二人は、一週間に一晚、一時間くらいずつ、お互いを縛っています。縛ってぶちのめすのです。ぼくは雅美を全裸やブラジャー、コルセット、ストッキング、ハイヒールだけの半裸にしても縛りますが、同時にいろいろな服装をさせて縛しめます。さっき書いたような服装のほか、タータンチェックの裏地を袖口とカラーに折り返した淡オレングのジャンパー、ピンクのブラウスにグリーンのネクタイ、スラックス（これも雅美の好きなピクニック・スタイルです）にボタンつき白メルトンのゲートル、チョコレート短靴、登山帽で縛った時など実に痛ましい囚われの美少女ぶりでした。猿ぐつわを嵌めて

しまえば、鉄筋アパートだけに叫び声は外へ絶対洩れません。

ぼくは雅美の手足をちぎれんばかりに縄でしばり鞭うち、踏みつけました。

書くのが遅れましたが、雅美の実家はかなり大きな事業家だったのです。それが父の死でここ三、四年急に没落してしまっただけで、雅美自身は全くなのお嬢さんで育ったのです。気丈なビジネスガールとしての生活に踏み出し、また高校時代、テニスとスケートの選手をするというスポーツガールだったので、こうした拷問は生れて始めてであることは言うまでもありません。かの女は呻き、喘ぎながら必死に耐えるのですが、最後はいかにもかの女らしく大声で恥も見栄もなく、むせび悶え、泣き叫ぶのです。しかも二人はまた次の週には違ったやり方を繰り返すのです。

（紀夫記）

このへんで、私にもお話しさせてー。大分、紀夫が書いてしまいましたが、同じことを繰返すことはないのですが、かれ、紀夫自身のことが、まだ書かれていませんので……

紀夫も私も同じような体格です。かれは、

都会のインテリらしい色白の丸顔に理知的な眼とやや低いがすじの通った鼻、何時もニコニコしている美青年です。派手でないけど、何時でもキチンとした身なりをしています。

かれは、純真で誰にも人なつこいのね。本当にすがすがしいような気持になる人。だから少しシンが弱いみたいで、私のような女だと物足りないような気のする時だってあるのよ。だけど、実はすごく熱情家なのね。私なんか年上なだけど一方からいうと、ほんとに子っぱいのね。体を投げ出してすがりたいた気持になることが多いのよ。

私も紀夫を縛るのです。私は全裸にしてしまうのは何だかあまり好かないの。だから、いつもソックスかワイシャツにネクタイくらいは残すの。どっちかって言うと、青年紳士らしいスタイルをさせて縛るのが好きなの。その代り、もう呻いて身悶えして男が泣き出してしまいうまで、責めなければ承知が出来ないの。

私、二人について、こんなイメージを持つ

の。二人は多摩の山中へハイキングへ行く。そこで誘拐団にさらわれる。私は白ブラウス、ショートのスカートにレギンス、かれはショ

トパンツにストッキングの姿で、二人とも手足をギリギリ縛られて、その上猿ぐつわにお互い口もきけないのよ。そのまま、大型カーの後部のトランクがあるでしょ。あの蓋をあけて中に押し込められて、東京まで運ばれるのよ。そして、拷問の上、二人とも奴隷に売られるの。その途中で、私、口の猿ぐつわを外して、かれの両手の縄を噛み切って、二人とも逃れるの。

しまうのね。そして二人一緒に体をピッタリ寄せたまま縛られて水漬けや、吊り責めなどひどい目にあわされるの。でも結局、二人で縄を解き合って逃げるのよ。

革の拘束服を着せられたり、裸で鞭うたれたり、そこへかれが助けに来て、逆に捕ってしまうのね。そして二人共殺されようとするんだけど、一応中止して船に積み込まれ、一緒に縛られて海へ投げ込まれるんだけど、ちょうど、来合せた漁船に救われる。といううな筋書きなんです。

私が一人だけ行方不明になったのね



雅美はニセ警官に

白晝都心から

取巻もろくで縛られて誘拐された

二人が夜一緒に帰る途中でね、暗い夜道で捕えられるの。そこは地下室で若い男女——特に女学生など——がいっぱい監禁され縛られて泣いてるのね。二人は一緒に縛られてたけど、別々に引離されてしまう。

かれは、どうにか自分の縄を切るんだけど私を助け出そうとして、また捕って



誘拐団が警官に化けてね、白晝逮捕状を偽造し罪状を作り上げて銀行へ私を捕えに来るの。私は真書間に都心の職場から衆人環視の中を、両手を縛られ猿ぐつわをはめられた罪人姿でハイヤーで誘拐されるのね。

真昼間の誘拐よ、しかも東京のまん中の大銀行でね。若い女性を重罪人として職場のみんなにも、街ゆく人にも、みじ

【新版】女体緊縛コレクト・フォト集

E組八十選 大手札印画紙(9×13㎝) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円

E1	全裸の悦虐プレイ(愛川)
E2	仕置を受ける裸身(大塚)
E3	荒縄に苦悶する肌(愛川)
E4	ムチに耐える美肌(関谷)
E5	豊臀と豊胸しぼり(愛川)
E6	捨身の後手観念像(大塚)
E7	足から眺めた裸身(水本)
E8	全裸エビ責尻強調(関谷)
E9	ハリツケられた娘(大塚)

E10	強烈後手高手小手(愛川)
E11	責め抜かれた疲労(梨花)
E12	逆エビにもだえる(大塚)
E13	拘禁された美囚女(大塚)
E14	浴室に覗く股間縛(愛川)
E15	海老責に泣く足首(大塚)
E16	両足吊りの短黒禪(愛川)
E17	牢獄で泣く縛り娘(大塚)
E18	美しき全裸股間縛(大塚)
E19	全身に溢れるマゾ(関谷)
E20	ベッドにもだえる(関谷)
E21	身体中に強烈な縄(愛川)
E22	放置された海老責(東浦)
E23	ゴム衣で縛られる(東浦)
E24	ローソクで責める(大塚)
E25	寝台の排便ポーズ(絹川)
E26	足指先に漂う媚態(関谷)
E27	後手吊り正面裸像(関谷)
E28	嚴重な高手小手縛(東浦)
E29	女体の全部を晒す(愛川)
E30	激しいムチ打の果(関谷)

E31	若肌も縄にくびれ(東浦)
E32	投げ出した脚線美(絹川)
E33	臍中心の腹部緊縛(梨花)
E34	セーラー服の哀歎(梨花)
E35	赤いムチ痕の臀部(関谷)
E36	仰向けの囚衣の女(梨花)
E37	制服の女学生縛り(梨花)
E38	悦虐にむせぶ若妻(関谷)
E39	痛打にくねる裸身(関谷)
E40	乳房に加える金具(大塚)
E41	鼻責めにあえぐ顔(大塚)
E42	あぐら縛りを拒む(大塚)
E43	浣腸ポーズの裸身(梨花)
E44	激烈なエビ責苦悶(大塚)
E45	敷布の上ののびて(絹川)
E46	鼻いじめのアップ(梨花)
E47	柔肌に喰込む麻縄(東浦)
E48	縄にくびれる裸身(東浦)
E49	椅子に晒された女(大塚)
E50	臍そうじをされる(大塚)
E51	荒縄のトゲに狂う(絹川)
E52	火のついた煙草責(四方)
E53	踏みつけられた胸(梨花)
E54	裸身をゆだねた娘(大塚)
E55	手足猪吊りの美態(絹川)

E56	囚女の美しき緊縛(絹川)
E57	諦めた観念全裸像(水本)
E58	縄にもだえぬく姿(絹川)
E59	黒髪を吊られた女(大塚)
E60	女奴隷美しく悶ゆ(絹川)
E61	袋の中の緊縛裸身(竹本)
E62	ビニール袋に蒸す(竹本)
E63	亀甲型の雁字搦目(大塚)
E64	緊縛裸像の舞踏会(絹川)
E65	野外的後手宙吊り(梨花)
E66	足首に鎖錠実施中(四方)
E67	室内の後手宙吊り(梨花)
E68	雨装束の悦虐姿態(梨花)
E69	乳房いじめ踏つけ(大塚)
E70	足の裏ハネ擦り責(梨花)
E71	乳首プライヤ挟み(竹本)
E72	野外的逆さ吊り責(梨花)
E73	梯子責にあう美女(梨花)
E74	逆さ吊りに揺れる(梨花)
E75	娘十六縛り加減(花坂)
E76	踏みにじられた顔(大塚)
E77	逆エビに反る足先(大塚)
E78	両手吊りのお仕置(絹川)
E79	責折檻に呻く若妻(梨花)
E80	豊麗を誇る正面像(大塚)

めな姿をさらすのね。くやしい！ 悲しい！
 しかも、身におぼえはありませんわって、い
 う一言さえも猿ぐつわに言えないのよ。怪事
 件よ。

急をきいてかけつけたかれは、私の罪を信
 じない。事実は間もなく明かになり、捜査が
 始まるけど、手がかりは見つからないの。私
 はその間に、ひどい拷問にあわされて女奴隷

として売られるのね。しかし、かれは結局見
 つけ出して救い出してくれるの。
 そんなイメージ、これが今の私の夢よ。



(告白通信)

魅せられた鼻責

湯谷 照夫

六月号読者通信欄でお目にかかった湯谷です。

鼻責めされる夢幻境に病みついたという自覚症状が嵩じて、どうしてもこの症状から脱し切れず、放心状態のまま時日を過してしまいました。宛ら麻薬常習者の症状というのでしょうか。三月も四月も、貴誌を手に入れた時は生気を取り戻して何日間か身体の具合も良かったが、日が経つと禁断症状になって、薬を求めるように責めに取りつかれて、剃刀を手にした彼女の元に膝まづいては息吹き戻す有様でした。

今度も七月号がどんなに待遠しかったことか。それを手に入れた今日の歓喜は誰方の喜びより激しく甦ります。即ち、巻を開けば私のために編集して下さったような七月号で、湧出した元気に任せて筆をすべらせている次第です。

巻頭、絹川文代嬢の強烈な印象。「諦歎とロマンの期待」の表題ピタリ、そのポーズと眼差し、唇割って白い歯を現した甘い口元の開き具合に、フーッと溜息つかされます。乱れた黒髪とコントラストよく、惜気なく迫ってくる糸を引いたような鼻筋に護られている悩ましい鼻孔！ 妖しい息づかいが波打っている見事なその鼻孔に魅せられて、私はウツトリと無我の深淵に沈んで行くのです。

彼女は今から鼻責めを受けるのであろうと思うと、何だか、もう辛抱出来ないような気持ちになって来るのです。このポーズで鼻を弄ばれている表情を、鼻孔が良く見えるようにアップでは是非見せて下さい。懇願する共感の患者が多いことと存じます。

頁をめくれば、「凌辱料理の調理台」に梨花嬢が身体を投げ出しています。これから進められる鼻責め料理に私の心が嵩ぶって来ま

す。観念し切った横顔の陰影の中に冷たく光ったドライバーは、もう綺麗な鼻孔に迫っています。ここで打切らず続く情景をとらえて下さい。哀歎の淵で痛めつけられている鼻孔の近接写は、読者にとってグッと耐え切れないうパンチです。

四馬孝先生の鼻責マニヤは、いつ誌上に出てくるかと、久しく渴望していた責め振りで又々ダブルパンチを喰って思わず唸ってしまいました。

美貌醜弄の吐息に対照的に、責め手の左手に猿ぐつわを持たせると、続く責めが暗示されて、身体の隅々までうずきます。美鼻汚辱は私の好む容相で、加虐を受けている美鼻の先端の柔かい肉感と、手応えある鼻嶺軟骨の感触が、私の指先にピクピク響くようです。桜色の粘膜は美しく眼前に迫り、妖しく息づく鼻息が、粘膜の湿りを含んで吐き出され

ば、私の鼻孔を通して胸の中にしみ入り、熱い私の吐息は彼女の鼻孔に吸い込まれて孔の奥の薄いピンクにもえた粘膜に潤いを与えているようです。ああ全く素晴らしい境地です。このポーズで諸嬢の柔かい粘膜をアップでグラビヤとして掲げて下さるようお願い致します。

諸先生、どうか七月号の構想の続きを連続してお示し下さい。度々なさる様にコッ然と編集気分を変えたりしないで下さい。五、六、七月ムードを忘れ去らぬように懇願致します。

ます。待ち遠しい八月号を期待致します。

六月号誌上で、私は自分をマゾと申し上げましたが、更に告白致すならば、私は二重性格のようです。鼻を責められる被虐の歓喜にひたると同じく、女性の美しい鼻を責めるサド感に息をはずませるのです。相手を責めつけることを現実に認めつつ、相手の境地の中に責められている逆の立場の自分を見出し、それに又興奮するのです。責める自分と、責められる自分が、共存して、この赤と黒が自分の胸の中で、一つの自分の心と情を昂揚して

行くのです。自分でもよく判らないのですが皆さんにはこんな状態はないでしょうか。御教示下さい。

私には六月号で申上げた彼女即ち私を鼻責めする女性と、その別に私に責められているもう一人の女性からも離れられないのです。今度両女性の情態を御伝えして行くと共に、私の症状の移り変わりも記録して御知らせして行きたいと思っています。皆様もどうぞ鼻に關する経験と御意見を御発表下さい。

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集

大名刺判(9×6.5) 印画紙焼付

各組一枚一組(全部送料共)

五	四	三	二	十	五	一
十	十	十	十	十	十	十
組	組	組	組	組	組	組
五十	四十	三十	二十	十	五	一
枚	枚	枚	枚	枚	枚	枚
二	一	一	一	一	一	一
〇	七	四	〇	五	三	八
〇	五	〇	〇	〇	〇	〇
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
円	円	円	円	円	円	円

Y 6	Y 5	Y 4	Y 3	Y 2	Y 1
麗しの緊縛裸像	浴室股間縛り	見事な飾り物	観念した胡座	乱れ黒髪裸見本	全裸荷造棒しぼり
(愛川悦子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)

Y 22	Y 21	Y 20	Y 19	Y 18	Y 17	Y 16	Y 15	Y 14	Y 13	Y 12	Y 11	Y 10	Y 9	Y 8	Y 7
遅ましきヒップ	追いつめられた裸女	豊満双丘くらべ	全裸全身自慢	庭園ヌード縛り	セーラー後手縛り	全裸脚掌股間縛	ヌード股間しぼり	初々しき裸全身像	蒲団裏裸またぎ	全裸フットンむし	なまめかしき緊縛	全裸ねの縛り	逆エビ後手足吊り	裸身の捕われ人	逆十字後手縛
(愛川悦子)	(愛川悦子)	(愛川悦子)	(愛川悦子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(岩井知子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(花坂道子)	(田中芳代)	(愛川悦子)	(愛川悦子)	(愛川悦子)

Y 41	Y 40	Y 39	Y 38	Y 37	Y 36	Y 35	Y 34	Y 33	Y 32	Y 31	Y 30	Y 29	Y 28	Y 27	Y 26	Y 25	Y 24	Y 23
ハダカ縛り人形	強烈後手首縛	椅子またぎ後手	妖艶闊のしぼり	全裸椅子またぎ	亀甲股間縛正面	縛り腰巻色模様	開股一番一直線	ベッド縛りのポーズ	全裸強烈股間縛	囚女後手柱縛り	鎮座する縛り女神	全裸縛りの全身	むしろれたズロース	もうこれで許して	麗人受難の巻	胸のボリウム自慢	縛り正面正坐	大の字晒し
(絹川文代)	(田原美佐子)	(田原美佐子)	(絹川文代)	(田原美佐子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(平野笑子)	(平野笑子)	(花坂道子)	(益田房子)	(益田房子)	(愛川悦子)	(絹川文代)	(絹川文代)

Y 60	Y 59	Y 58	Y 57	Y 56	Y 55	Y 54	Y 53	Y 52	Y 51	Y 50	Y 49	Y 48	Y 47	Y 46	Y 45	Y 44	Y 43	Y 42
エビ責めの表情	聖壇のさらし者	股間縛開股の絵	前手錠全裸像	膨隆突出した臀部	緊縛女体の開陳	カメラに晒す全裸	不行儀姿態の美	柱縛り観念の図	手吊り裸身の乱舞	ワンプリース縛り	長襦袢後手しぼり	振袖令嬢後手責め	全裸寝台羞恥責め	全裸後手壁ハリツケ	後手立木縛り	全裸変形股間正面	あられもなき開股	濃艶ハダカ縛り
(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(花坂道子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(愛川悦子)	(村井知可子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(絹川文代)

奉行所女吟味始末記

本 田 由 郎

江戸時代

一
当時、江戸の町の犯罪を司どる所として、奉行所がおかれていた。

奉行所も二個所に分たれていて、寺社奉行所、町奉行所がそれぞれである。寺社奉行所は、名の示す通り、神社仏閣及び武家の間に起きた犯罪を取り調べた。

町奉行所は、それに反して武士以外の、町人同志の犯罪を調べた。町奉行所も、南の町奉行所、北の町奉行所の二個所あり、南の町奉行所は、今の有楽町、『君の名は』で東京

の新名所となった数寄屋橋の近くにあった。北の奉行所は、呉服橋の近くにあったと言われる。南北両奉行所が、ほぼ江戸の中央にあったことがわかる。

両奉行所共に、組与力、同心など二た組になっており、一組に与力は二十五人、同心は約百二十五人に分たれていた。又、奉行所全般の役目も、隔月交代にして主任をつとめ、この例を月番御番所と唱えた。

囚人を入れる牢屋が小伝馬町にあった。明治八年五月に廃止になるまで続いた。首切役人も、明治十四年七月二十四日まで、その役

にとどまったといわれる。

二

江戸時代の奉行所では、罪人の自白を強いる手段として拷問が用いられた。

奉行所で用いられる拷問は、第一に笞打、第二に石抱き、第三に海老責、第四に吊し責めの四種である。

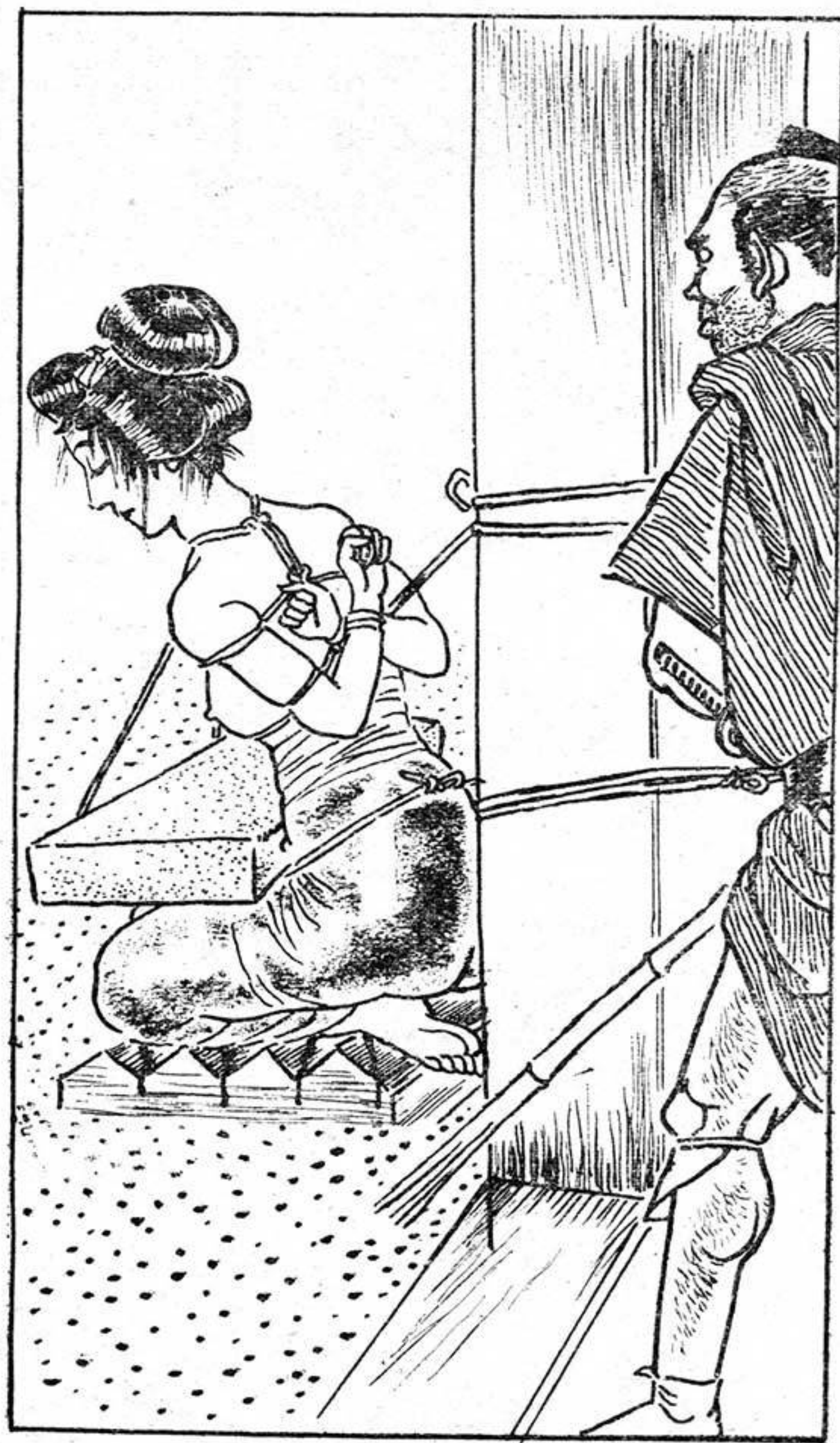
その他に水責め、水牢、火責め、木馬責めなどの拷問があるが、奉行所に於ける公の拷問ではなかった。

今、一人の妙令の女性が捕えられて自白を強要されるため拷問にかけられる有様を眺め

てみよう。

彼女は、町内でも小町娘で通った十八の春を迎えたばかりの匂うばかりの美しい乙女であつた。名は八重といった。

八重は吟味与力から、小伝馬町の牢屋に入牢を申し渡された。八重は白衣の囚衣に着せかえられて、身体には横目縄をかけられて女



牢に運ばれていった。八重はここで縄を解かれ牢役人から、囚衣を脱がされ、裸で立たせられて身体を調べられた。調べがすむと

「××町××の八重、十八才、新入りだ」

牢役人が牢の外からどなった。すると牢の中から、牢名主の声がした。

「へい、有難うさまです」

牢番が鍵をあけて、八重の弱腰をどんと足蹴にして、牢の中に蹴込んだ。八重の目が牢の暗さに慣れて周りを見まわすと、二十人近くの女囚達が新入りの八重を物珍らしそうに見つめていた。

部屋の正面に、畳をうず高く積み重ねた上に、牢名主が女だてらに、大あぐらをかいてでんとおさまっていた。

「お前の目の前にいる御人が御名主様だ、挨拶しな」

牢名主様にする挨拶、それは牢屋でツル(金)をさし出すことであつた。この金高によって牢屋中での待遇が違ってくるのだった。何にも知ら

ない八重は、一文の金も用意していなかった。そのしわよせが八重に加えられる私刑となつてあらわれた。

「さあ、早く帯をおとき、なんだい。名主様にも、ろくな挨拶も出さないで、焼を入れてやるから——」

八重は只、うつむいているばかりだった。

「さあ、早く、解けたらお解き、おぼこ顔しやがって——」

口ぎたなく罵って、八重の身体から着物をはぎとって、湯文字一枚にしてしまった。赤い湯文字に真白い肌が、雪のように美しかった。

「名主様、この八重という娘っ子を、どういたしましょう」

「そうさね、娘っ子の尻をまくって、キメ板で二、三十も喰わしてやりな」

「へい、じゃ、さっそく始めますで」

「八重、早く腰巻をまくりな」

八重の方に向きなあって、どなりつけるのだ。八重は犬みたいに、両手を前について、四つん這いになった。その八重を二人の女囚が、動けないように押さえつける。叩き役に回った女囚は、八重の湯文字を上の方にまくり上げて白い尻をむき出しにし、キメ板を強く振り下すのだ。

「ひいーい」

八重は悲鳴をあげた。牢名主は、その光景を高い所から、うす笑いをうかべて見下していた。キメ板は、十回、二十回、八重の尻を打ち叩き、三十回目に、ようやく八重はこの私刑から解放された。この時には、八重はぐ

ったりとなつて、俯伏せに伸びていた。

「水をやりな」

女囚の一人が、水を八重の顔にぎあつと浴びせた。赤い湯文字が水のしぶきに生ある者のように濡れそぼった。更に、もう一杯。八重は気をふきかえした。

「八重、今日の仕置は、この辺でやめといてやるよ。自分の座へもどりな」

八重は、小伝馬町の女牢で、眠れぬまま、牢中の一日目を過したのである。

夜が明けると、八重は、白洲へ呼び出されて吟味された。

「八重、まだ白状せぬのか」

「はい、私には何にも知らぬことでございませう」

「なにッ、まだ申しおるか、ここをどこと心得えておるか、奉行所なるぞ。知らぬ存ぜぬの一てんばりで申しひらきが出来ると思うのか、この上は、痛め吟味があるのみだぞ、拷問にかけても、口を割らして見せるが、どうだ」

「どの様に申されましようとも、身におぼえないことは、白状いたすわけにはまいりません」

「そうか、では痛め吟味、拷問にかけろが、

よいか」

「はい」

八重は観念の瞳を閉じた。

「八重を笞打ちにかけい」

八重は穿鑿所へ連れてゆかれた。

ここで八重は囚衣をぬがされ、湯文字一枚の姿にされてしまった。その八重を大綱で右左の手と、胴、腹、背など、肩まで順々に強くしめ上げるのだ。しめ上った縄尻を前後に引き分けて、二人の下人が引く。これで八重の身体は完全に身動きが出来なくなってしまう。これだけでも、娘の八重には、辛くて苦しい拷問であった。

常の女なら、これだけの責めで、白状するか、おいおい泣き出してしまうのが多い。八重はしかし、苦しみによく耐えて、泣き声一つ出さなかった。

「年若い女に似合わぬ強情なやつと見える。素直に白状するまで責めて見よ。」

八重に笞打ちが加えられた。

ピシリ、ピシリ

囚衣を脱がされた白い肌に、生竹に荒縄をまきつけた拷問杖が打ち下された。八重は苦しみ悶えた。二人の下人の手によって動きを止められた身体は、拷問杖の笞をさけること

も出来ず、痛苦の咎に身体を晒すのだった。

ピシリ、ピシリ、

咎の雨は、八重の身体に降り注いだ。

いくら気強くても、女の柔かい肌が八回、九回と打たれる咎責めに、肌が変色し、十五回、十六回と八重の肌に咎が鳴る頃には、皮は破れ肉はさけ、白い美肌を血がつたいはじめていた。下人は、血をふく。砂で血止めをすると、又、その上を責めつづけるのだ。

ピシリ、ピシリ

咎が八重の肌を打つ音が、痛ましくひびいた。しかし、八重はこの苛酷な拷問にもよく耐え忍び白状には及ばなかった。

責めはそれと一旦中止された。

二度目の拷問は、次の日の午さがりに開始された。この時も、八重は自分の肌に拷問杖の雨をあびた。白い背中が真赤に腫れあがり血がにじんだ。いや、背中ばかりか、腿、腕そして膝からも血がにじみ出していた。

八重はこの拷問にも白状しなかった。

それから三日して、三度目の拷問杖が血にまみれた八重の肌に鳴った。二十回、三十回と拷問杖は八重の肌を打った。この三度目の拷問には、さすがの八重もたえようもなく、とうとう拷問杖の咎の前に失神してしまった

のだ。

八重の身体に下人の手で水が浴せられた。

春とは名ばかりの、肌寒い日、水を浴せられた八重の素肌からは、ほのぼのと湯気が立ち上った。さあ、さあ、と二杯、三杯の水が八重の肌を洗い流した。その水の冷たさにも、八重は息をふきかえさなかった。

「手数のかかる女だ」

下人はそうつぶやくと、俯伏せにのびている八重を拷問杖であお向けに起した。脇腹を拷問杖の先でぐりぐりをこねまわした。この痛さに八重は息をふきかえた。

「八重、拷問の苦しみを十分、身にしみたであろう。素直に白状いたせ、お上に、この上手数をかけるでない」

「どのような、きびしい拷問にかけられましたとも、何にも知らない私には、白状などしようもありません」

苦しい息の下から八重は答えた。

「まだ、そのようなことを申すか、八重、白状に及ばずば、まだ、石抱、海老責、吊責などの拷問があるぞ、申さずば、石抱、海老責にかけるがよいか」

「――」

八重は無言であった。

「どうじゃ、返答せい、石抱、海老責の拷問に、そのか弱い身体をさいなみたいのか。咎打ちと異い、石を膝の上に抱いたまま、落命いたした女子もあるのだぞ。八重、どうじゃ白状いたせ、石抱の責にかかる前に白状するのが上策であろうが」

「――」

八重はそれに答える気力も失せ果てたのかぐっと口をつぐんだまま無言だった。

「えーい、しぶとい女だ。石抱の責をもって白状させろ」

「へへい」

下人たちは、石抱責の用意にかかった。下人の一人が、三角のギザギザの台、囚人たちの間でソロバンと呼ばれる拷問台を柱の前に下ろした。柱も又、泣き柱と異名のある柱である。泣き柱のそばに、数人の下人の手で拷問用の一枚三貫目の伊豆石が、一枚二枚と運ばれてきた。

「へい、用意がととのいました」

「そうか、さっそく石を抱かせろ」

「立て、ささと立って歩め」

八重は縄尻をとられて、身体をひきづられるようにして引き立てられた。

「その上に坐れ」

手にした拷問杖でソロバン台を指さした。八重がためらっていると、「坐るんだッ」と弱腰をしたたかに足蹴にした。

よろめきながら、拷問台の前に膝まづいてしまった。下人は二人がかりで慣れた手つきで八重を左右から抱きかかえて、ソロバン台の上に坐らせてしまった。この台の上に坐っただけで、三角形のギザギザが脛に喰い込み耐えきれない痛さだった。

「動くんじゃねえ」

下人は八重の身体を、泣き柱に固く括りつけて、身動き一つ出来ないようにしてしまった。その上、八重の首に首縄までかけるのだ。首縄は、石抱の拷問に苦しみもだえて八重が身をくねらせば、くねらせるほど、首に縄が喰い込むようになるのだ。

「どうじゃ八重、苦しいであろう。自分の体重だけでも、それだけ苦しいのだぞ、申さずば、石を膝の上にのせて抱かせるぞ、それ、見るがよい、一枚で十三貫ある伊豆石を、よいか、一枚で申さずば、膝の上に二枚、三枚と重ねてゆくのだぞ、三枚で白状いたさねば四枚、五枚とのせてゆくのだ、よいな」

「八重に、石を抱かせい」

下人が二人がかりで、伊豆石をよいしよと

ばかり八重の膝に一枚目をのせた。

「う、ううう——」

八重は歯を喰いしばって、苦痛と戦った。

「まだ白状いたさぬか、八重、白状いたさねば、二枚目をのせるぞ」

「私、はなにも——」

苦痛のためか、か弱い八重の声は、途中でとぎれた。

「それ、二枚目の石を抱かせい」

二枚目の石が、ずしりと八重の膝に積み重ねられた。

「うわ、ううううう」

八重の口からはけものようなうめき声が洩れた。死ぬ苦しみにもだえるのだ。

「申し上げるか」

八重は首をふった。

「えい、まだ申さぬ気か。よい、三枚目を重ねい」

三枚目の石が八重の膝の上にのった。ソロバン台に坐らされた八重の乳房と同じ位の高さになった。続いて、四枚、五枚と八重の膝の上に石がのせられていった。八重の小柄な身体は伊豆石に埋まれてしまった。石の重みで八重の脛がソロバン台に一寸近くも喰い込み、三角のくぼみに血をにじませた。

「早く白状いたせ、白状いたすがよいぞ」

しかし、八重は無言のまま、首をかすかに動かすだけだった。

「石をゆさぶって見よ」

「へ、へい」

下人は命令に従って、八重の膝の上にのせられた石に手をかけ、左右にゆさゆさ、ゆさぶり動かすのだった。

「ううん、うえんうえん」

八重の今は、苦痛はすでに通りこして、痛いとか、苦しいとかの境地を脱して、言葉や文字では表現できない世界である。

あまりの苦痛は、苦痛を感じる感覚も知性も、奪い去ってしまうのか。八重の顔は蒼白に変わり、眼から涙、口からは涎が、鼻孔からは水ばなが流れ出した。

「ええい、手ぬるい、強くゆすぶれ」

「ヨイショ、ヨイショ」

下人は力一ぱい、石を動かした。

「ううう、うわあ——」

八重は夢中でうめいた。只、自由になる首を動かした。首を動かすと首にかけられた縄がしまった。そのうち、八重の露出した肌全体が蒼白色から、蒼黒く変色してきた。

「おい、危ねえ、早く石を降さねえと、死ん

でしもうぜ」

全身が変色してきたので、あわてて、八重の膝の上から石が降された。石が降されると今まで、氣丈夫にうめいていた八重は、急に首をたれて氣を失ってしまった。死の一步手前まで責めつづけられたのだった。

氣を失ったまま、八重は下人のモッコにのせられて、牢屋の中へさげられた。

三

八重に加えられる拷問は、これで終りを告げたのではなかった。彼女の前には、まだ海老責と吊し責の二つがのこされていた。

八重がどのような痛め吟味にかけられようと、痛め吟味に悲痛な助け声を挙げようと、誰一人として、八重を助けることができなかった。奉行所の中の拷問は、所詮、町人の手ではどうしようもないのだ。士農工商の一番上の身分の武士が罰し役であり、身分の一番低い町人の娘が罪人とあっては、この厳しい運命も、八重にとっては甘んじて受けねばならないのである。

中二日おいて、八重は再び吟味に呼び出された。ここ数日の間に、めっきりやつれ果てて、入牢前のふっくらとした頬もこけて、白い肌が一層、白くすきとおっていた。

「八重、過日の拷問で、痛め吟味の苦しさを

十分味ったであろうが。素直に白状すれば、お上にも御慈悲がある。どうじゃ、八重、白状いたさぬか」

「どのように言われましても、知らぬことゆえ、白状など出来ません」

八重の返答は、前とは変っていない。

「黙れ、またしても知らぬの一点張り、そのような返答は聞きたくないわ」

「しかし、私には、こう答えるほかに、答えるようがありません」

「その方とて、過日の拷問で息がたえるほど責められて、拷問の苦しさを知っているではないか、白状してしまうのだ。白状すれば、お上にも慈悲があるぞ」

「有りがたいお言葉ですが、私には何にを白状したらよいのかわかりません」

「八重、どうしても白状しなければ、それでもよい、惨酷ではあるが、拷問によって口を割らすより手だてがない。海老責、吊し責にかけても白状させるぞ、よいな」

早くも八重は観念の目を閉じた。

「早々に八重を拷問蔵に引立て、海老責の拷問にかけい」

縄尻を下人にとられた八重は、拷問蔵へと

引立てられていった。拷問蔵は二間に二間半の小さな部屋で、海老責、吊し責のために用意されたものである。二坪が座敷になっており、残りは白洲になっている。

八重がこの蔵の中に姿を消してから、暫くすると、間もなく苦しみ悶える悲鳴が、蔵の外まで痛ましく聞えてきた。

「白状せぬか、白状しなければ、強く責めるだけだぞ」

低い男の声が八重の呻めきの中に聞える。

「どのように申されましても——」

「ええい、情は無用じゃ、容赦なく責めて責めぬけ」

「ひい——」

蔵の外に再び悲鳴が洩れた。八重は海老責の上、更に答で叩かれているのだ。

答の音と悲鳴が交互に聞えていたが、やがて悲鳴は間遠となり、遂に聞えなくなった。吟味与力が三人の下人を従えて蔵の外へ出てきた。

「旦那、八重のアマは、顔に似合わず強情な娘ですね、海老責の上、力いっぱい答で叩いても口を割らないんですからね。たいがいの娘っ子なら、とうの昔に白状してるんですがね、手を焼きやすよ」

△生首通信△

『私の無惨絵に寄せて』

蒲原茂雄

「生首シリーズ」も七月号ではまたまた開店休業かと見限っておりますところ、芹沢嬢の作品「私の無惨絵」を見出したことにより大いに慰められました。まずもって

を医していただきたく、とにかく今後の御活躍に刮目しております。

この作品の掲載に尽力された編集子に熱烈な拍手を送るものです。作品についていえば、口絵を占有する美女割腹図などは比較にならぬ程の幻想美と迫力が感じられました。実際、生首マニアとしてみれば美女の切腹も悪くはないのですが、首が落ちもせずそのままくっついていっている絵を見るたびに、丁度子供がアワヤという瞬間に蝶やトンボを取り逃して地団駄をふむといった何んともいえぬ後味の悪さが後を引くものです。その点、芹沢嬢の作品は本誌としてのみならず、全刊行物をも含めた中での唯一の美女切腹介錯図として珍重に価するものと思います。欲をいえば、もう一つ二つ、自刃の美女をついでのこと、バツサリ首にして戴きたかったとさえ存じ上げる次第。今後とも大いに投稿されて我々マニアの渴

通信欄では野口生氏の御高見に万腔の讃意を惜しまぬものです。また女斗彦氏の力説せられる如く、裸女血斗図の分譲化についても、アゲン・アンド・アゲン・アンド・アゲン、私からもその提唱を反復熱望致します。毎号ノミ取り眼で「今月の新版分譲品」なるものに目を馳せるのですが、緊縛、浣腸と変りばえのしない分譲品のみがいたずらに大好評げに幅をきかしつつあることに痛憤を禁じえないのです。ここらで一つ「部屋別総当制」相撲協会に先んじて実践をされては如何？、水野弘氏の実写による生首プレイには大いに羨望を感じた次第。なかなかそうした趣味に同調し協力を惜しまぬ奥さんは稀有のことと存じます。最近の某週刊誌ではカウンターのの上に切つて載せられた外人女性の生首が三分の一位のスペースでのせてありました。何んでも大蔵、米国プロ合作の怪談映画のスタイル

「うん、皆も少し休むがよいぞ」

「へい、ありがとうござえやす。で、あの娘の方はどうしゃしょう、旦那」

「あのまま、もう少し休ませてやれ、海老責のままでよい。八重が白状しないかぎり、次には吊し責にかけねばならぬからのう」

「じゃ、旦那、あの娘を吊し責にかけるとすかい？」

「哀れではあるが、白状しないかぎり、致し方あるまい。その方たち、早く休むがよい」
下人たちは、いくら罪人でも、こう厳しく責められては身体がもつまい、拷問で殺されてしまふ、と話し合いながら、歩き去った。

只一人、薄暗い拷問蔵の中にとり残された八重は、白洲の砂利の上に、二つ折りに縛られたままころがされていた。

四

五日後、八重は湯文字一枚にひき剥がれて拷問蔵の天井から、後手に縛られて吊し責にあっていた。青竹のムチが、ビシッビシッと背、尻、足を打っていた。

「白状せい、白状せい」

吟味与力の声に、八重は健気にも首をふりつづけている。さすがの与力も根負けして、休むことになった。八重の身体が、一寸、二

とかで、いかにもそうしたオドロオドロしいムードが強調されており、さしもの私も余り興をそられませんでした。また某エロ雑誌では『武士道残酷物語』のスチールから最も酷らしい一駒、猿ぐつわをかまされた男女の生首が二つ、地上に転っている場面に半頁大のスペースを当て、某週刊誌では歌川大雅氏描く処の緊縛裸女の生首が青龍刀の一撃で吹っこんでいる挿絵を掲載

その胴体の切口のリアルさや、生首の持つ妖異さに驚喜させられたものです。といった工合で本誌のお株が他誌によって浸されること頻々たる此頃、芹沢嬢、水野氏をはじめ潜勢力を持つ生首マニアは月を追って狼火を上げ旗色をあらわしてきている現状をとくと御考慮の上、早急適切なプランの実現を計って頂くことを熱望してやみません。

寸と地面に近くなってきた。地面に足が着くなり、八重はばたきと仰向けに倒れて動かなくなった。

下人が杓子に水をくみ、後手の縄尻をぐいと引いて、八重を起すと、

「さあ、水だ、ぐっと飲め」

八重は無言で、一息に飲み干した。

「どうだ、美味かったろう、旦那のお情のこもった水だ。なあ、お前もいいかげんに、みんな旦那の前に申し上げてしまいな、そうすれば、こんなむごい責苦に、あわずにすむんだ。この上、旦那にお手数かけぬようには」

「私に一体何にを白状せよと言うんですか、私は何にもした覚えがないのに、白状のしようがないではありませんか」

八重にとっては、せい一ぱいの反抗と怒りとであった。

「ううむ、言わしておけば、生意気にもほざいたな、二度とそのような口をきけぬよう、八重の足をくくって、逆さに吊るせ」

「旦那、この上嬢を責めちゃ、死んでしましますぜ」

下人の一人が見るに見かねて、吟味与力にとりなした。

「娘っ子、早く白状してしまいな、この上、逆さ吊の責にかかっちゃ、お前の命がなくなるぜ」

「おじさん、お言葉はありがとうございますが、どのような拷問にかけられましようとも無実の私には、嘘の白状はしまいと、始めか

ら心にきめておりました。もし、拷問中に命を落すようなことがありましても、それも、前世からの約束事だと思っております」

この八重の言葉が、吟味与力の怒りに油をそそいだようなものだ。

「問答無用、八重を逆さ吊にかけい」

八重の身体は足を天井に向けて、一寸刻みに地面をはなれていった。八重を引き上げる太い綱が天井の梁で、ギシギシと無気味にきしんだ。八重の湯文字がまくれて、白い肌が空中に浮かび上った。

八重はすでに死を覚悟しているのか、瞳は静かに閉じていた。吟味与力は、もう白状を強いることなく、逆さ吊の白い肌に苛烈な答をふるっていた。

やがて、凄惨な拷問蔵にも夜が訪れた。八重を責める答の音もやんだ。

逆さ吊の拷問のまま絶命した八重の死体が天井から、ぶらぶらと吊られたままになっていた。吟味与力の答で湯文字はなくなり、元結の切れた長い黒髪が、白洲の砂利の上に、生あるもののように、ゆれ動いていた。

暗い拷問蔵の中で逆さに吊られた八重の白い身体が、惨酷きわまる中にも、名状しがたい美しさを漂わしていた。

(終)

「奇譚三十九夜」物語

— 第二十七夜 —

辻 村 隆

山も野も深緑——清々しい五月半ばの季節すが、今年はどうしたことか長雨つずきで、今日も朝からどんよりと曇って、時折梅雨のような雨が降り出す始末です。昼間でもスモッグで、ぼんやりとした鈍い光線しか入りこまぬこの一室も、流石に夜ともなれば、赤、青、緑と、いろとりどりのネオンの灯もうるんで、何となく情緒をただよわせます。メンバーは例によって八人——。

今宵フオートを持参した、ナイロン氏と、ステッキ氏によって話の火蓋はきられました。

デスクに並んで六葉の写真を揃え終ると、ナイロン氏は、少々改まって一同をズイと見廻したのです。

第六十一話 彼女は産業スパイだった

「自動車メーカー、軽電機メーカーなどにも多い様ですが、一見華やかな女性用繊維品の世界にも、実に派手な産業スパイの活躍があるようです。果物カラーで一方が狼火をあげれば、片や対抗的に花のカラーで太刀打ちする——。世を挙げて華美な服装と、派手な下着に流れてゆく様ですが、これはその下着繊維メーカーでのお話です。谷明美は総務課のタイピストでした——が、豈はからんや、部長にとり込んで彼のペットになり、秘書課のタイピストに転属してから、彼女の刻々の情報は、彼女を秘かに派遣したB会社に、細大洩らさず流されていたのです。貞操をかけて情報を流す、それが恐るべき現代のB・Gの生き方でもあるのです。明美の生活は、両会社から入るサラリーで、豪勢そのものでした、併し、神は公平です。こうした背徳をいつ迄も許す筈もなく、その化の皮の剥がれる

日が、遂にやってきたのでした。さて――

× × ×

R 繊維工業に六年近く勤める明美を、誰一人産業スパイだと推察した者はいなかった。いや、唯一人秘書課の、彼女と机を並べる石神絹代だけが、数カ月前から、明美の素振りに、フト不審を抱いたくらいのものである。

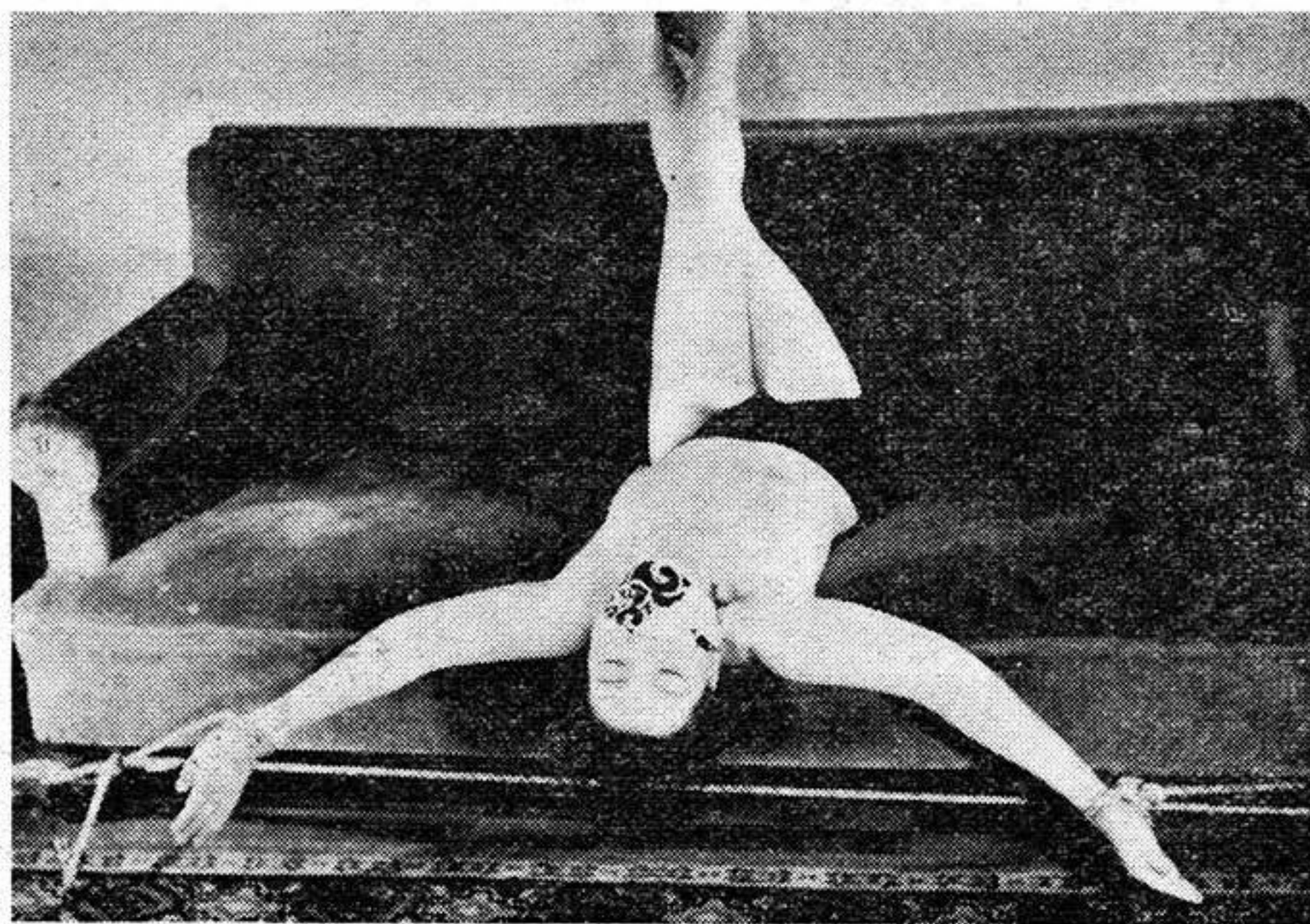
併かし、絹代の不審を確定づけたものは、昨日の明美の怪しい行動である。

谷明美は、よくタイプのミスをする。殆んど終り近くまで打ち終って、誤字をしたり、慌てるのか一行飛ばしたりした。彼女はそれを石神絹代に差じるように、そそくさと引抜くと、屑籠に投げ入れ、また新らしく大急ぎで改めて打ち出すのであった。

その鮮やかな手付に絹代は、いつも感じるのである。

△あの手付で、あの熟練ぶりでよく間違えたりミスをするのが可怪しい位だわ。あの人本当に慌て者なんかしら――、昨日のP・Rのレターなんか、実に冷静に見事に叩いていたのに、間違うのはいつも社長の私信か、部外秘だわ――アッ……

絹代はその時、ある疑問に思い当って愕然とした。無心に横で訂



(A 図)

正のタイプを叩く明美の手捌きは、誤りを犯した者とも思えないあざやかさである。同じタイプピストを勤める絹代の眼から見て、これは故意に誤って叩いたとしか受取れない、正確さと迅速さである。

△まさかと思うけど――、疑えば不審なことばかりだわ。此の間の重役会議の席上でも、社長が、我が社の新製品、ツートンカラーのパンティの秘密が、どうして他社に洩れたのか、それを気にしていたわ。あのツートンカラーの新製品に関する部外秘のタイプも、思い出すと、谷さんが打ったタイプに違いはないわ。そしてあの製造工程のプリントは、確かにミスをして屑籠に放り込んでいた筈だわ▽

石神絹代は、正に思い当った。その女性特有のカンには正に的を射ていた。何気なく立ち上ると、彼女は犬山秘書課長の部屋をノックした。

「何――それは事実かね」

「間違いないと思いますけど、念の為こ

うなさっては――」

課長に耳を寄せて絹代は一策を献じた。「フンフン」と聞く課長の顔は、極度に緊張し、憤怒で蒼ざめていた。

「よし、すぐやってみよう。君、くれぐれも気付かれぬ様にな——」

犬山課長はそそくさと立上って、秘書室とは反対の社長室へ消えた。

絹代は何気なく席に戻ると、トイレへ行く振りをして、自らの屑籠と、明美の屑籠とを手にもった。

「お手洗にゆくついでに捨ててくるわね」

明美はフト顔を挙げたが、タイプの手を休めずに、

「私の屑籠までいいわ。放っておいてよ、気の毒だから……」

何気ない口振りだが、明らかに余計なことといわんばかりである。

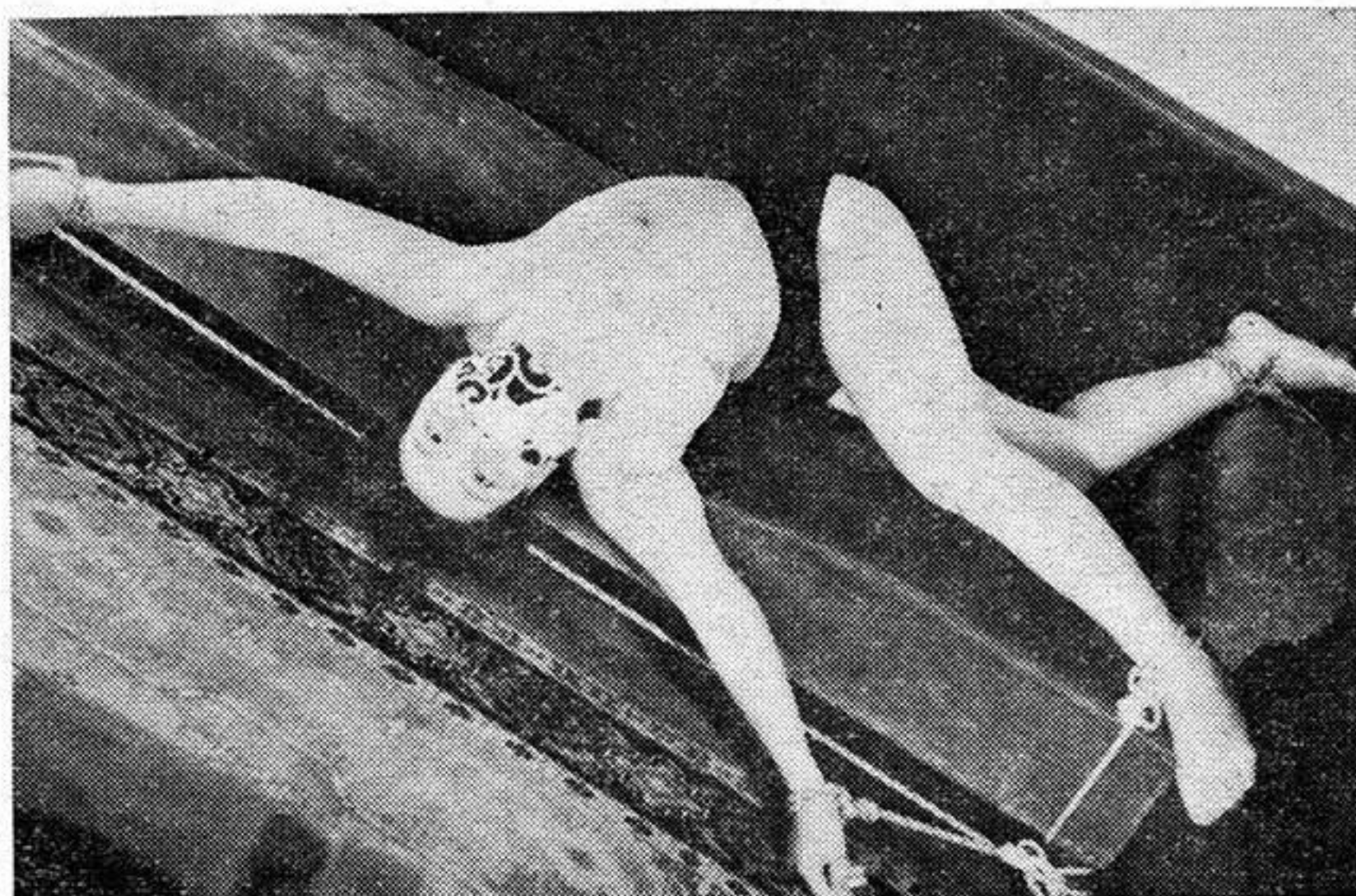
「どうせ、ついでよ。いいから」

そういつて出て行くと、ダスター箱に、部外秘の打ち損ないを、わざと上に置いて眼につく様にして捨てた。

何事もなく、普段の日と同様に数時間は過ぎた。午後二時四十分、明美は化粧直しにトイレに立上った。

絹代はぐっと緊張する。

数分後、青木代作に利腕をとられて、秘書課に二人は現われた。絹代以外三人の女性はチラリと振返っただけで、異常が起ったことに気付かない、青木は深々と明美により添っていたからだ。課長室



(B図)

に消えた時、絹代はじつとり腋に汗ばみを覚えた。

△矢っ張りそうだったのだわ——▽

「課長——予想通り、谷君は辺りを窺がってから、そっとダスター箱をあけ、何かを内ポケットの奥に忍ばせました。いやあ、三時間以上、昼飯も喰わずに、ずっと隠れて見張っていた甲斐がありましたよ。どうも太い女です」

「御苦労、御苦労、下っていいよ。あ——それから逃げぬ様、念の為手足を縛って、そのソファに転がしておいてくれ給え」

「構いませんか——」

「当然の酬いだよ。法に訴えるか、どうする社長の裁断を伺がってくる迄ね——」

犬山課長は顔を硬ばらせて社長室のドアをノックした。

△来るべき日が遂にやって来たわ。まさか殺しもしないけど、恨みが重なっているから、相当非道いリンチを受けるかも知れないわ。ああ、もうこれで何もかもお終い——▽

谷明美の下ぶくれの頬に二筋、三筋涙が尾を曳い。△どうして分ったんだらう。青木さんは見張っていたといっていた。——。石神絹代が私の屑籠を持って出た時の顔は硬わばっていた。きつと石神さんに違いないわ。それにしても部長さんが私の正体を

知ったら、どんなに怒り悲しむだろう」

明美は目的を持って安川部長に近付き、体を許したが、妻子ある部長の紳士的な、程々のあたたかみ味ある愛情に最初の動機を忘れて、真実愛情を感じていた。

△あの人に逢う度に、私は何度許しを乞うて、あの人の膝下にひれ伏して、すべてを打明けようとしたか知れない。しかしB会社の機密費五万円、部長の手当二万円、サラリー一万九千円、占めて八万九千円の金が、私にとっては矢張り魅力だったのだわ。私はすべてのマネーを今日限り失ない、愛する部長さんも失なわねばならない。そして、あとには恐ろしい罪の償いの刑が待っているのだわ▽あれこれ考えて、谷明美は、再び新たな涙を流した。

犬山課長が社長室から現われた。憎しみをこめて、明美を一瞥すると、粗々しく足の縄を解いて、後手の縄尻をとり、ソファから彼女を床に引曳り降した。

「お前の為に、僕は二十二年の歳月を棒に振って、左遷されそうだ。小娘一人の仕業で僕は、僕は……」

犬山課長は激怒に声をつまらせた。

激しい感情の起伏で、言葉も途切れた。彼は明美を、ぐいと縄尻を引いて体を起すと、

「さあ、社長室へ行くんだ。さっさと歩けー」

と背中を押した。信用していた部下に裏切られた憤懣が、このB・Gの背にも轟々と、痛いほど感じとられた。

緊急指令を受けて、常務の重役三名が、既に社長室に物々しく構えており、その中に、彼女に耽溺する安川部長の顔も交っていた。

「幸い、未だ大事に到らず憎むべき産業スパイは、一女性の鋭い感

によって発見された。しかし、この外にも、第二の、第三の、いや第五列的な産業スパイが、斯界の先導的役割を果している我が社の何処かに陰險な影をひそめているかも知れない。今後、決議事項や新製品の発表については、尚一層の部外秘を厳守して戴き度い。さて、この女に関しての処置であるが……」

社長はそこで口籠った。室内の視線は、一斉に社長の次の言葉を待って、彼の顔にむいている。

「この女が、果して何処の廻し者であるかを究明しなくては不可ない。当社に莫大な損失を与え、その背徳行為は万死に値すべきであるが、この女の一命を奪って、我々、殺人の汚名を着せられるも、ばかしい。何か諸君に適當なる処置を考案したものはいないかね」

「社長、これは愚案ですが、依頼主を白状させた上、その依頼会社以外の同業者に、この女の写真を廻覧して、二度と前者の轍を踏まぬ様警告すること——。第二に女としてたえ得べからざる汚辱を女に与えること。この社長室で、この女の体を曝さして唾すべきは如何でしょうか——」

日頃から、社内の若いB・Gのお尻を触ったり、変ないたずらをするので、女性達か総スカン喰っている、スカンクという仇名の前山営業部長が、得たりかしこしと提案した。

社長はチョット眉をひそめたが、それに諾否を与えず、

「外に何か一案はないかね——」

安川部長は沈痛な言葉で口を切った。

「罪は罪として憎むべきですが、一女性の人權は尊重すべきじやないですか。侮辱の限りをつくして、もしこの女性が、それを精神的なショックとして、万が一自殺でもしたとき、矢張り、我々はそれ

が他社に聞えた時、行過ぎとして非難されるかも知れません」

スカンクは色を変えて、つめよった。

「君、君、莫迦いっちゃいけないよ。人権尊重云々なんて、並の女という言葉ですよ。こいつは憎みても余りあるスパイですよ、間諜ですよ、女忍者ですよ——。彼等が露見した時、どんな制裁を受けるかは、女自身百も承知の筈だよ。謂わば月給泥棒であり、機密を他に洩らした背信者ですよ。よろしい、諸君がいやなら、私一人、後の責を負っても、この女をトコトンまで追求します。社長許して下さい——」

社長はゆるくうなづいた。スカンクは両手をしきりに揉んで、頬に不気味な笑みが浮んだ。

安川部長も強いてこれ以上いえなかった。彼にしてみれば、責苦の挙句、彼と明美との関係の洩れるのを何より恐れていた。全然関知しなかったこととはいえ、分れば当然問責され、重役の椅子を滑り落ちねばならない。知らぬといえ、それはそれで、迂かつさを問責されるにきまっている。どちらへ廻ってもやり切れなかった。△儂はこの女の愛している。それだけに憎しみも、人より激しい筈だ。それなのに儂は心底から、この女を憎み切れない。いっそ、女が儂との関係を白状すれば、もっと憎めるのかも知れないが——。儂の見た眼では、あの娘の愛情に、かけひきや擬装はなかった筈だ。動機は如何にもせよ、彼女も真底、儂に惜しみなく愛情を注いでいた……▽

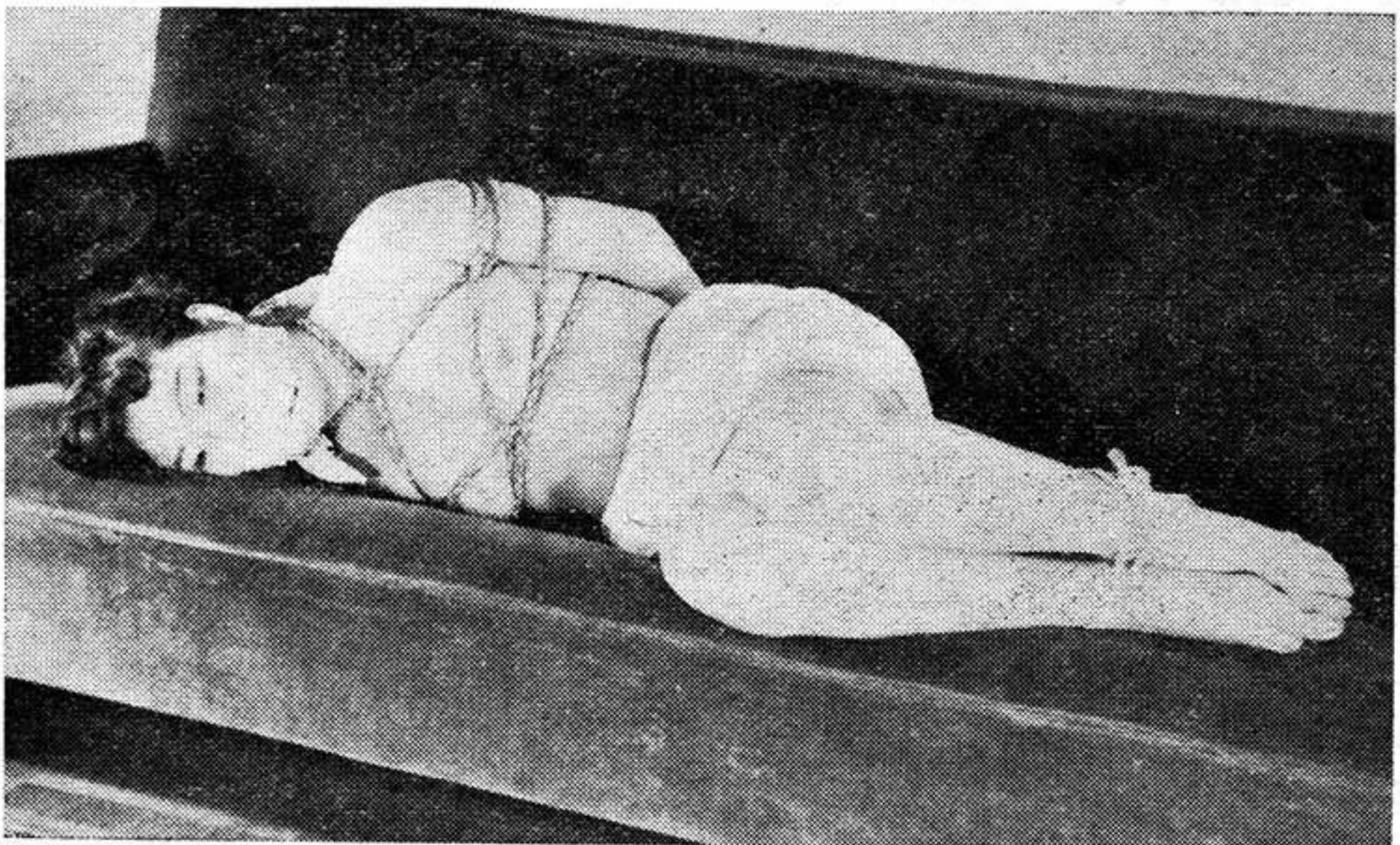
同じことを谷明美も、室内の中央に後手に縛られて引き据えられうなだれ乍ら考えていた

「部長さんが、私を憎んだら、私も洗いざらいここでスッパぬいて

やる気だったのに——。

あの人の悲しげな眼……そうだわ。今となっても、あの人は私を愛しているんだわ。あの愛情の深さに私は応えなくてはいけないんだわ。金輪際、部長さんのことは、どんな非道いリンチを受けても口を割らないから……。部長さん安心してね」

スカンクはリーダー格に自からなっていた。



「犬山君——、秘密書類が他にないか、とり敢えず女の服を全部ぬがしてここへ持ってきてくれ給え。それから女が騒ぐとうるさいから、猿轡をはめて、そのソファに頭を下にして両手足をソファの足に縛ってくれ給え——。それから社長室に会議中の札をかけ、大至急、写真部の大塚君を呼んでくれ給え、彼ならこの部外秘を洩らすことなく、いわれる儘に、この女の写真をとるだろうから……」

「はいッはいッ、委細承知致しました」
インタホーンでPR部に連絡の後犬山課長は、おエラ方の面前なので、多少はためらい乍らも、命令通り、谷明美に近づくと、背に廻り、ワンピースのファスナーをサーッと一気に引き下した。

明美は、今更暴れても、ジタバタしても無駄と、為すが儘に観念していた。後手を解き、服を剥がれ、バイオレットのシュミーズ、ブラジャーをとられ、黒のパンティ一枚になった。

写真部の大塚がノックをして入って来て、この態に驚愕の様子だったが、入口に近い部長に耳打ちされ、早速使いなれた、キャノンにフラッシュをとりつけた。

スカンクはむずむずとして、犬山課長一人には任しておけず、自分も明美の身



(D 図)

体にひかれてシャシャリ出た。

二人掛りで明美の利腕をとると、ソファの前へ連れていって、ドサリと体を投げ出させ、頭を下にして、二人は彼女の両手を開くだけ開かせて、ソファの脚に結んだ。

「あっ、いいポーズ。一枚チョイと……」

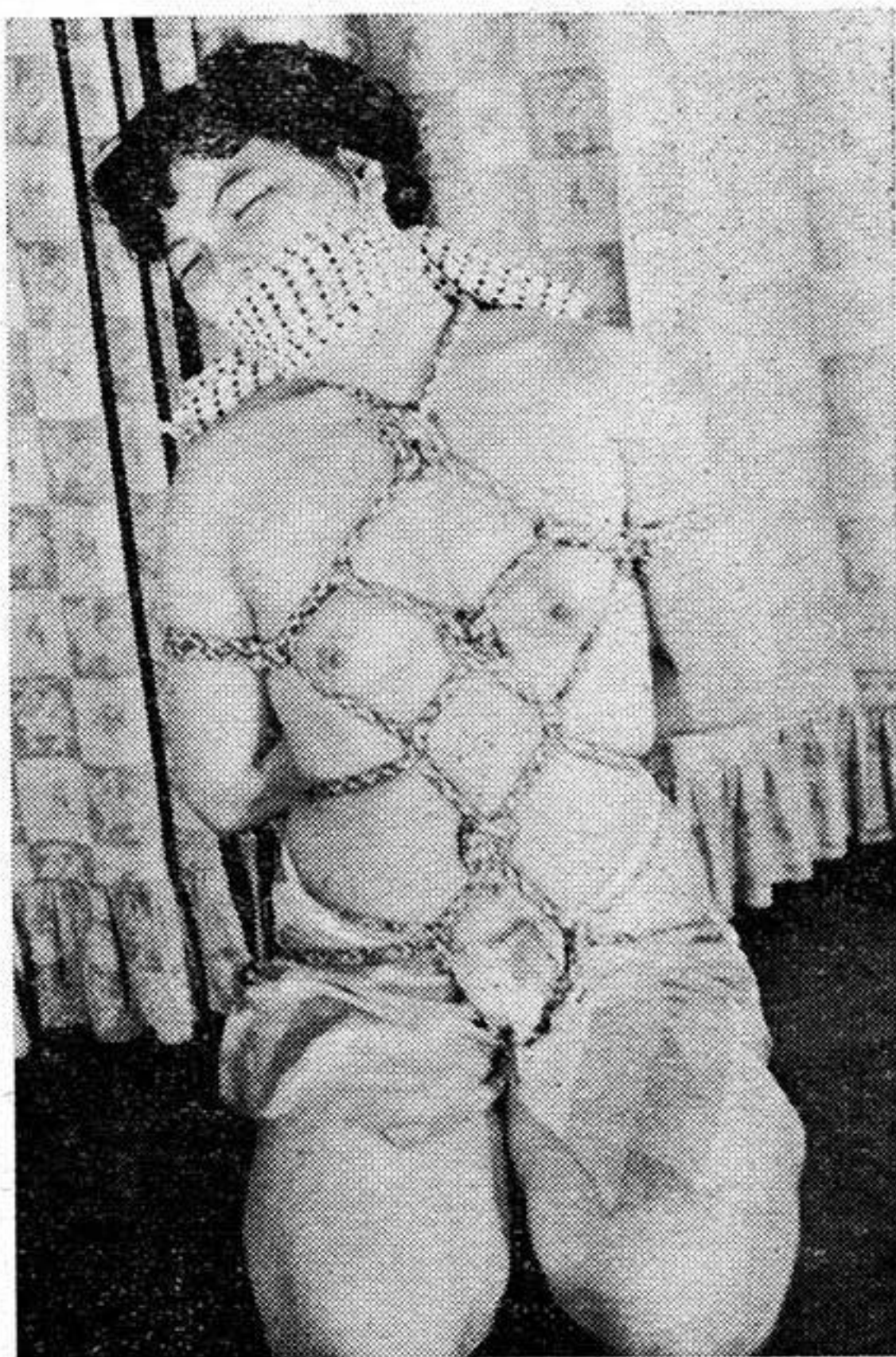
商売気を出して大塚君がカメラをかまえた。二人は両端に開く、広いゆったりしたソファの背に両足を組んだ儘、明美は眼をつむった。(A 図)

「よしよしその調子……」

スカンクは弾んだ声で、大塚君をねぎらうと、再びかけより、犬山課長を放っておいて、彼女の両脚をソファの向って右の肘掛けの前後に縛りつけた。明美の腰が、大きく振れて苦しい姿勢になった。かてて加えて、ガクリと頭がソファから下って、グングンと血が脳内に逆行してくる。充血する顔で、彼女は必死にこらえた。(B 図)

△これ位のこと、きつと序の口だわ。まだまだスカンクのことだから、恐ろしいリーチが待っているのだわ▽

彼女の眼に、逆さまに映る安川部長の悲痛な姿が飛び込んで来た。彼女は部長を凝視した。彼はたえ切れなくなって眼



(E図)

ざまだった。

「身の廻りからは証拠品は発見されませんでした。されば一度彼女の体に聞くとしましょう——。犬山君、女を改めて本縛りにし給え。その方がバラエティがあつていいから……」

ハイと応えて、犬山課長は、生れて始めて女を縛る昂奮に、ガタガタと胸震いし乍ら、何かの雑誌で見た縛りシーンを、懸命に思い出して、明美の体をソファアの上で縛り始めた。

「ついでだ。パンティも脱がし給え——」

「えーッあのおうパンティですか……」

「そうだ。その女は縛られていても、まるで平気な顔をしている。少し羞かしい目に逢わしてやらないと、縛る意味がないからね。そうそう、そうして両脚も一緒に縛るんだ」

犬山課長はいわれた通り、黒いパンティをとり、改めて両脚を縛った。

明美は全裸を衆人に曝しながら、これできるところまできたと思った。裸一つ、これ以上はぐものもない。いずれ早かれ、遅かれ、この姿にしなければ気のすまないスカンクであったに違いないからだ。

しきりにフラッシュがひらめいた。

「素直に頼まれた会社を白状するかね——」

「……………」

スカンクの妙に優しい声に、反射的に明美は首を振った。

「そうだろう。そうあさり白状されちゃ面白くない。よしよし、じわじわと白状させてやるからな。」

陰険な眼付でスカンクは近寄ると、彼はいきなりスリッパをぬい

を外らし、わざとらしく煙草に火をつけた。

「あの人もしっかりと悩んでいるだわ。私は今日の日を予想していたから後悔はしない。だけど部長さんを、今日まであざむいた罪の深さには、あの人から睡きされても、一言もいえない私なんだね。それなのに……」

長い間、スカンクは彼女の身につけていたものを丹念に調べ、果ては鼻に当てて、クンクンと犬のようにかいだりした。その間、彼女は猿轡された儘、頭を下げて、あの姿勢の儘でずっと放置されていた。

彼女の苦悶をジロジロと見る者、努めて眼を外らしている紳士、しきりに角度をかえてフラッシュを焚く大塚君——。人はみなさま

で、それで、パンパンパンと、明美の顔をはり倒した。

こうなれば、社長始め、一同は完全に傍観者である。とめもならず、言葉も挟めず、一同はスカンクのネチネチとしたリンチ振りがある者は興深げに、ある者は眉をひそめて、等しく凝視していた。

「大塚君、部屋の隣のゴルフのクラブをとってくれ給え。」

スカンクはクラブを握ると、明美の尻の辺りを、かなり力をこめて振り上げて、発止、発止となぐった。

「そろそろ吐く気になったかね」

明美の頬は蒼白く引き締まっていた。

「仕方がない。もう一度猿轡だ。呻きが洩れてもいけない——」

犬山課長が猿轡をしにかけより、大塚君はシュミーズをパラリと明美の腰にかけて纏い、早いとこ一枚とった。(C図)

スカンクは煙草に火をつけて、さもうまそうにピースの紫煙を吹き上げた。

「では、そろそろと火責めと行くかな」

呟きつつ、彼はピースを口に啣えた儘、明美の体を引き起して、ソファーに正面きって座らせた。「余計なことをする」とぶつぶついい乍ら、腰のシュミーズをばいと片隅へ投げ捨て、スパスパと煙草を吸った。半分程になった煙草をジロリと見やり明美の太腿を揃えて縛った、その白い豊かな両腿の間へピースの吸いさしを突き立てた。

「すっかり灰になる迄に、白状しないと、熱いことになるぞ、いいな……」

腿から紫煙をくゆらせて、煙はゆっくりと立ちのぼっている。

明美の腿に仄かな熱が伝わり、それが徐々に加速度を増して高ま

って来た。

一同の視線はじっと明美に集中する。鼻腔を拡張、眉をしかめて明美はそれを必死にこらえる。ピースの灰は細々と落ちもせず、既に煙は、彼女の腿の間隙から立ち昇っていた。ダラダラと脂汗が伝い始めた。

皮肉をやく、微かな匂いが部屋に立ちこめても、苦悶の形想の彼女は必死にこらえて、この苦行に忍耐していたのである。(D図)

明美の体がぐらりと揺れ、灰はポトリと腿のすき間に落ち、既に煙草は、その細い白い姿をすべて赤くして、腿にはさまれて陥没していた。身をよじって、自からの腿で、明美はその火を消し止めようと、両腿をねじっていた。

激しい動揺と、女の意志の強固さに対する感動が部屋に溢れた。

「もう、いい加減によし給えッ！」

見かねて安川部長がつきさす様に叫んだ。

「ほほう、安川さん、莫迦に女の肩を持つね」

皮肉たっぷりスカンクは安川部長を見かえった。

「いくらなんでも、これでは無茶じゃないか」

「百も承知——。責任は私が持つといった筈だよ。見るのがいやなら、出て戴くとうちうかね——」

安川部長はたまりかねて唇を、ビクビク震わしていたが、仕方なく口をつぐんだ。

△氣持だけでもうれしいわ。心配しないで……悪い女の私をかばってくれるお気持——、涙が出る程うれしいわ……▽

明美は、ともすれば気の遠くなりそうな心を鞭打って、安川部長に感謝していた。

「大塚君、亀甲型にして股縛りをして、そのジュータンをめぐって窓際のカーテンの下に引据えてくれ給え——」

飽くことなく、スカンクは次々と命じた。

諦めきった明美は、大塚のされるが儘に、犇々と亀甲縛りにされ、ワンピースを腰に巻かれてその余繩を股にうけた。

「社長、乗馬用の鞭を拝借します。」

スカンクは、明美のふっくらとした美肌を這い舐めずる様に、ジロジロと見廻し乍ら、喉をからからにさせた、上づつた声で、社長の愛用の乗馬鞭を、勝手にロッカーからとり出した。

丈夫な皮鞭は、グローブ油で、なめなめと光り、黒づんだ艶と帯びて、しなやかに撓ゆとうた。

「吐く気になったら、首を縦に振れッ。首を振るまで鞭打ちは止めないから……分ったな。行くぞ——」

風を切って、スカンクの鞭は飛び、明美の体に、痛烈な衝撃が、全身をつらぬいた。

背に数条——、忽ち桃色の鮮やかな線が当り、それは赤く色づいてふくれ上った。

静寂の空気を破って、鞭のヒュウヒュウと風をきる音が絶え間なく断続した。膝立ての姿で苦悶する明美——(E図)

その体は、右に左に揺れ、必死に痛撃にたえていた。

聴て、がっくりと首が折れ伏し、明美は気を失なった。

猿轡を外した時、明美は必死に齒を喰い縛り、口辺からタラタラと鮮血が糸を引いていた。

「正常な人間も、時に依っては、ジェキル博士をハイド氏に変貌さ

せてしまうのでしょうか——。谷明美は、スカンク前山部長の暴力の前に屈伏し、総てを吐かされたそうです。その方法は皆さんの前で語れぬ残酷そのものであった様です。

安川部長の説得も空しく、彼女はスカンクの好餌になり、彼を取巻く一連の輩に次々とたらい廻しされ、身も心もズタズタにさいなまれて、ひっそりと敗残の身を、郷里の日南の山里に隠しているそうです。牙をとく都会の恐ろしさに、二度と彼女は上阪しないこととしよう。この写真は、大塚君の無二の親友、我が社のKが、無理に請うて、その一部を私に提供してくれたのです。

明日もまた、こうした産業スパイは、夜となく昼となく、皆さんの身边でうごめいているかも知れません。兎角甘い女色には御用心御用心といった処で、私の話を打ち切りたいと思います。」

時代の先端を行く、数奇な女性の話は終わりました。人々はそこで熱い茶を喫し、今宵の二番手、ステッキ氏の話をきくことになりました。可愛い給仕が、それぞれのテーブルに茶を注ぎ終って、去るのを見すまし、ステッキ氏は数葉の男性被縛の写真をテーブルに並べたのです。

第六十二話 女貌息づく時

「K氏の夫人が、あの様な魔性を潜めた女性であったとは、私もこの日まで全然気付かなかったことでした。いつも道で出くわしても、極く控えめに頭をさげ、淑やかに行き過ぎる夫人に、私は貞淑そのもの——彼女を想像していたのです。

何分にも私の住むこの辺りは、田園都市のこととして、自然近所

つき合いも余りなく、隣り同志、何日も言葉を交さないといった状態はザラにありました。

某生命保険会社の支部長であるK氏とは、以前麻雀に誘われた頃から、親しいという程でもありませんが、挨拶程度以上の交際は、細く長く続いていたのです。

彼の子供は三人、何れも大きくなって、長女はこの春嫁いで行き二女と高校の長男との四人暮らしの、ごく表面は平凡乍ら、円満そうな家庭に見えました。

それがある日曜日の午下り――。私は、あるヒヨンなことから、K氏の秘められた家庭内での一面を覗く羽目に立ち到ったのです。

前日廻って来た、当町内の市公報の回覧が、朝寝坊の私が寢床で興もなく読んだのはもう正午間近でした。前夜宴会で遅くなり、その儘寝てしまったので、回覧が私の家で、半日近くも滞っておっていたのです。

私は庭先伝いにくぐりを開けて、K氏宅の呼鈴を押しましたが、ヒソとして人の気配もありません。

△日曜日で行楽に出掛けて留守かな。弱ったな――△

私はK氏邸の石垣伝いに右へ折れて裏口へ廻ったのです。勝手元も閉っており、己むなく戻ろうとして、フト縁側の辺りで人の気配を感じました。

△表を閉し、不在だというのにハテ面妖な――△

耳をすますと、確かにもののけを感じます。辺りには幸い人通りのないのを確かめて、私は、足場のよい石垣に足をのせると、ブロック塀にすがりつき、塀の高さすれすれに頭をやっと出して、内側を覗き込んだのでした。そこで私は異様な光景を目撃しました。覗

見する人ありとも気付かず、陽当りのよい庭先で、木の間に夫人が後姿で、大きい犬舎のコーリー種の愛犬に餌をやっているのが見えました。が、やがて夫人が身をずらせて横顔になると、愛犬のコーリー種だと思ったのが、あにはからんや、首輪をはめ、太い鎖でつながれたK氏自身の姿だったのです。私は正に石垣にかけた足を踏み外さん許りに驚きました。心臓の鼓動を鎮め、頭を低くして、木蔭の葉隠れごしに、この異様な二人を穴のあく程凝視しました。既に遊び戯れたあとなのか、首からかぶる真赤なシャツに、黄色いパンツのいで立ちのK氏は、夫人の与えた皿の水を、口ごしにペチャペチャと飲んでおりました。

彼が立上れぬのも道理、彼の左手と左足、右手と右足が、それぞれ細い棒で、しっかりと連絡してあり、首輪に結んだ二条の紐が、K氏の四ツ這いの左右の膝頭に、ピンと張って結ばれてあったのです。夫人の手にした鞭によって、鎖を外された彼は、ヨチヨチと左手足、右手足を同時に前後させて静かな庭園を歩き出しました。

私は夢にうなされでもした様に、無我夢中で家に帰りました。

△あの貞淑そうな夫人の、どこにあの様なサド性が潜んであるのだろう。そしてあのK氏の満足そうな被虐の姿は何を物語るものだろう――△

私はムラムラと激しい興味を覚え、隠しどり用の十六ミリの超小型カメラをそっと懷に忍ばせ、数十分後に再びK氏の表のベルを押しました。

いつもに変わらぬ夫人が、淑やかに玄関に立ちあらわれました。まるで白昼夢か、狐につままれた様ですが、回覧を手渡すと私は勇を鼓して夫人に訊ねました。

「K氏は御在宅ですか——。先程、回覧を渡す為ベルを押したが、静かでしたので……」

「ああ、私ヒヨツとして買物に出ていたのかも知れせんわ。主人は在宅していますが、多分御不浄にでも、おったので御座いましょう」

さりげなく応える夫人に、私は肩すかしを喰って、出て来た時の意気込みはどこへやら、鼻白んでしまいました。

「一寸、御主人に御相談がありましてね。お暇でしたらホンの少し……」

私は強引にK氏に逢おうとしました。夫人はチラッと美しい眉をよせ、困惑の表情が走ったが素振りには出さず、

「さあ、どう申しますか、伺がって参りましょう。しばらくお待ち下さいませ」

「じゃあ、応接間でも待たしてもらいましょう……」

私は日頃に似ず強引に上り込みました。普段着であるが、身躰なみのよい夫人は、フト美しい白い顔に、硬ばった笑みを浮べたが、

「どうぞ、それでは……」

と私を招じ入れると、応接間へ通してそこを出て行ったのです。随分待った様な気がします。姉弟の声もない——。恐らく若い二人は何故かへ遊びに出掛けたのでしよう。

私はこの時間に、瞬間、先制のプレイの連続を考え、と共にK氏の前であわてふためいている夫人の姿が、何の関連もなく脳裡をかすめました。

△よしッ、驚かせてやれ。不躰かも知れないが、それを敢えて公表出来ない彼等だ。構うものか——▽

私の考えは確定的になり、足音を忍ばせて、玄関口の応接間を出ると、ミシミシ廊下を踏んで、奥へと忍んで行きました。

日曜日の午不り——。堂々と庭前で、プレイする夫婦に、私は限らない興味をそられていたのかも知れせん。

奥まった座敷——、そこにガサガサと、畳をする縄の音を私はききました。

私は無礼は承知で、いきなりその部屋の扉を開きました。

「呀ッ！ いけません——し、しつれない——人の部屋に、いきなり案内もなく入るなんて……」

ギョツとした夫人は金切声を挙げ、唇はワナワナと震え、貞淑な夫人の面影はあとかたもなく、夜叉の半面をあらわに見せた。ひきつった蒼白な顔で私をにらみつけました。

夫人の眼下には、黒いテーブルの上に太いロープで雁字搦目に縛りつけられ、顔一杯の風呂敷をかぶせられたK氏が、不意のちん入者に、見えぬ顔をあげて、何事ならんと途まどっていたのです。

夫人の足許には、既にとかれた縄がちらばって、その端が、未だK氏の足首に絡まっていました。そして尚更、その部屋を妖しく雰囲気づけたのは赤い太い、ローソクが一本、覆面にした風呂敷と頭部の間に高々と、紅い炎をメラつかせて突っ立っていたのです。ともあれ、私は撫然と、夫人の難詰には動ぜず停立して、この光景をながめていました。慌てて夫人は脱ぎ捨てられてあったパンティをフワリとK氏の前にかけました。私は徐むろに十六ミリカメラを手にすると、タイマーを長くにとってこのシーンを悠々迫らずカメラに納めました（い図）

運送会社を使う、太いロープが、K氏の首から胸を、縦横無尽に



(い図)

縛り、両足は開かれて机の脚に固定されていました。この浅ましい姿を蔽いもならず、K氏は口を緘した儘、一言も喋べろうとはしませんでした。

「Kさん——私ですよ。幸か不幸かほんの先刻、貴方のお庭で、犬の運動を見る機会に恵まれてね。いや、あれはたしかに犬だったと思うが……。犬が手と足を棒でつながれて、ヨタヨタと散歩していましたよ」

K氏の肩がビクリと動き、何かいおうとして口をもぐもぐさせたが、やはり言葉はありませんでした。

「止めて下さい——。そんな遠廻しにいつて戴かなくとも、あれは主人です。ええ、飼育中だったんです。だから、私達にどうしろと

仰りたいんです。夫婦間でどんな行為があるにしろ、何人たりともプライバシーの蹂躪は許しませんわ。赤裸々な私達の行為をいきなり覗き見て、紳士らしくもないじやありませんか。まるで土足で寝室へ飛び込んだのと同じですよ……」

激しい権幕の夫人でした。K氏の最も哀れな姿を、自ら以外に見られたのが、夫人を激怒させたに違いないのです。

「失礼は承知の上です。私自体プレイの求道者です。ハイドの心が私の理性を押えて、早く行け早く行けとせき立てたのです、無論、悪意もなく、ましてや、これをタネにどうこうなど、そんなさもしい了見はありません。K氏のマゾの境地、そして夫人の嗜虐性——それを只単に探求したかったに過ぎません。御許し下さい——」

私は無礼を詫び、ありの儘の心を吐露しました。

ホッと吐息が夫人の口から洩れました。極度の緊張感と羞恥感から解放された時、女は弱くなるものです。途端に虚勢は崩れ、夫人はその場に俄破と打伏して、激しい啜り泣きが唇から洩れ始めました。

「私、嫁いだ時、本当に何も知らない、世間知らずでした……」

主人がこんなことを次第に要求し、いやいや乍ら、主人の命令で始めましたのが病みつきになって、近頃では私自身、主人をこうして扱うことに、無上の歓楽を見出す様に成り果ててしまったので御座います。外面如菩薩、内面夜叉——ええ、その通りですわ。子供が外出した時や、また夜ともなれば私達は耽溺しました。今では、これが私達二人の生活の重要な一部を占めているのです。こうしたプレイの、いい悪いは問題外ですわ。私達にとっては、これが生甲斐でもあり、円満の証左でもあつ

たのです。人様が何といおうとも、私達二人満足していれば、何ら世間様に害毒を流す筈もないわけです。今日まで誰一人、私達の秘密に気付いた人はいりませんでした。私達はその為、不自由を忍んで、お手伝さんを置くことさえ、このことある為に控えていたのです。それを……それを……」

私に見られてはもう術もないと、夫人は、嗚咽の間々に語り乍ら掻き口説くのでした。

「確かにプライバシーを侵害して悪かった様です。今日が最初の最後として、では、第三者たる私を意識せずにプレイを続行して下さい。マゾヒストは往々にして、第三者にはしくも望見されるのを喜ぶ習性のもので。御主人の性向は存じませんが、多分許されると思います——」

「でも、貴方の前でそんなこと……私、今更こんな気持ちになって、再び昂揚しませんわ。きっと主人だって……ねえ貴方……」

「いいよ、続け給え。とんだ闖入者で気分が殺がれたが、いいだろう。なあに、気にすることないよ。さあ、お前は女王で、私は飼育された奴隷だ。傍観するのは構いませんけど、口を挟んだり、気分をこわさないで下さい。さあ続けて始めよう。もう腕が痺れて、私はそれどころか、随分長く縛りつけられて、体中の骨がボキボキ折れそうに痛むよ——」

「貴方がそういうなら——」

夫人はチラリと私を見たが、私は構わない構わないと眼で合図したので後手で扉をしめ、邪魔にならぬ様、部屋の片隅に陣取った私を尻眼に、彼女は再び優しい白兎から、凄さまじい女豹に変貌して行きました。女豹の息づく時——、部屋の空気も忽ちにして肅然と

なり、女王の威厳をとり戻した彼女は、もう私を眼中になく、嗜虐に惑溺する魔女の姿になり切っておりしました。

彼女は頭上のローソクをとり出し、灯をフツと吹き消しました。手馴れた手付で、両足の縄をとくと、K氏を机上にあぐらをかせ、太い縄を巧妙に捌いて、彼を海老責めの姿に手際よく縛りました。

ウンウン呻き乍ら、K氏は太り気味の体をゆすっているのです。夫人はその夫の頭へ足をかけ、片方の手にローソクを握り、素早く火をつけ、彼の背にローソクを横にしました。ポトポトと蠟涙は縄目を伝って、点々と赤い斑点をしるして行きます。ポトポトと、蠟涙の点は線となってK氏の肌にしたたて行くのです。(ろ図)

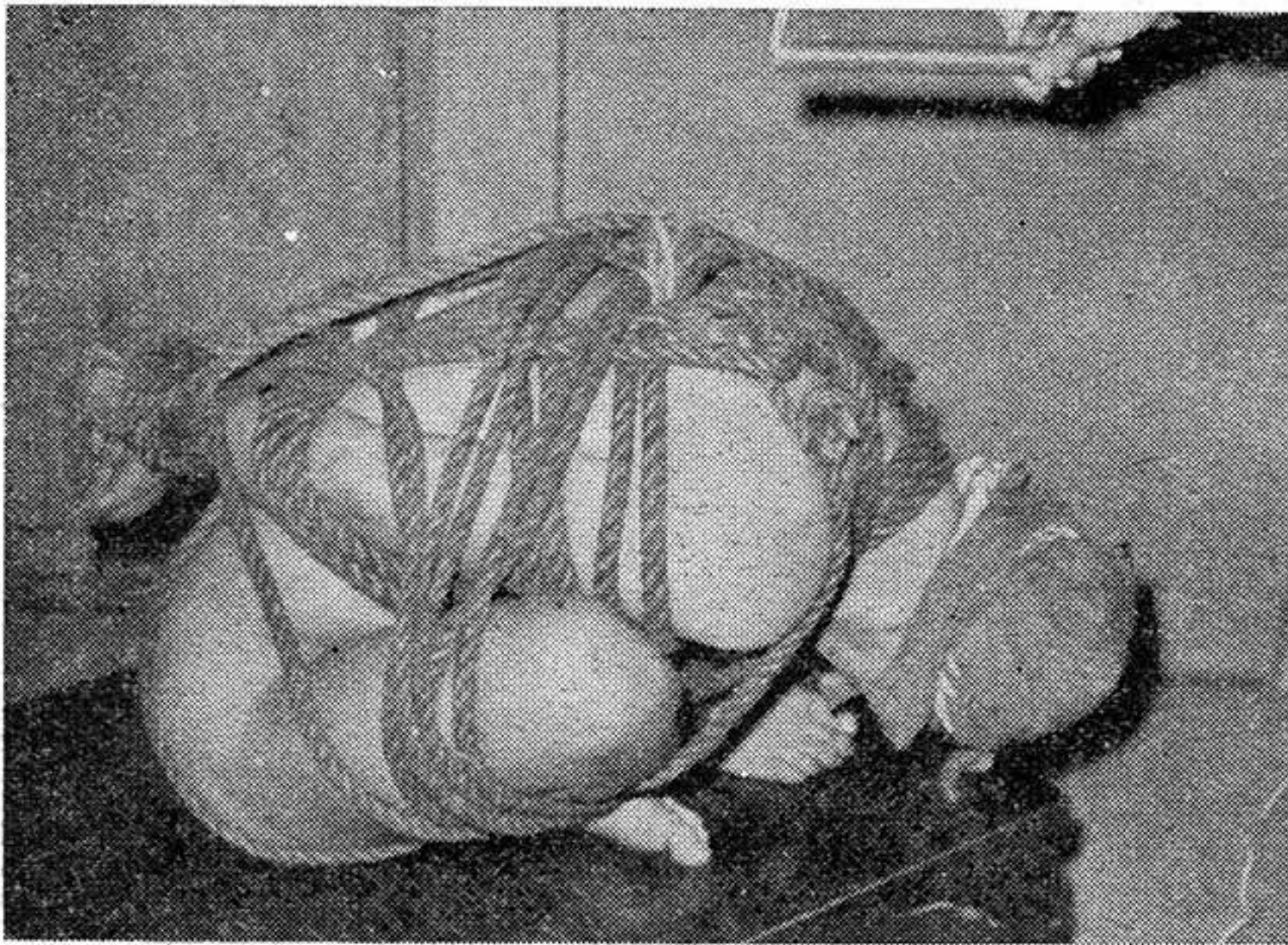
上気した夫人は、いっしか私の存在を忘れて、本能の赴く儘に、或いは太縄で彼の体を左足で力をこめて押えつけ、体の重心をとって、海老責めに屈曲する、K氏の背に両足をかけて昇り、片手で柱を押えて、体が傾むかぬ様に中心をとり乍ら、その背で足踏みを始めたのです。ミシミシと骨が鳴り、筋肉がきしきし、間断なく呻きをあげて、K氏は夫人の足下で動物めいた声を立てていました。やっと背から夫人は降りると、矢張り、机上で、K氏の背に片足をかけた儘、彼のパンツで、ビシリビシリと、剥き出しになった肩や、風呂敷で覆面した頭部を、力任せにしごき打ちしました。打つ力の激しさは、これがあの優雅な夫人かと思う許りの力強さを秘めて、いつしかパンツは縫目がほぐれ、ぼろぎれの様に変じて来たのです。

K氏は既に声もなく、ヒューヒューと辛うじて、苦しい息を吐いておりましたが、それでもやめてくれとはいわなかったのです。

しばき疲れて夫人は机を降り、やや暫らく、海老責めに喘ぐK氏を見下していました。

「少し手伝って下さいね——」

彼女は前触れもなく私に声をかけてよこしました。私が立上ると



「この机の

両脚を挙げ

て、この奴

隷を、たた

みの上へ、

転がり落す

んです。そ

ちらの脚を

しっかり持

ち上げて下

さいね」

半ば命令

的で、夫人

は私と気を

合すと、一

二の三でぐ

いと机を持

ち上げまし

た。

K氏の体

は、もんど

り打って、たたみの上に転がり、横倒しになって、ウーンとしばらくは吐く息も止まりました。

「御免なさいね。奴隷はこの贈物が何より好物なのです——。もう

これ位でおよろしいでしょう。この場を片付け終る迄、三十分許り

あちらでお待ち下さい——」

衿を合せて、夫人はいいました。まったく緩急自在、時に女豹に

変じ、手のひらを返せば、淑女に早変わりする夫人に、私は二の句も

つげず、いわれる儘に、この阿修羅場を出ました。

応接間で待つ間、私はこの時間をあれこれと、空想に過しまし

た。

二人にとって、MSプレイが必需的な前戯とすれば——、あの二

人達は、世にも愉しい、申し分のない夫婦であつたかも知れませ

ん。夫は求め、妻はそれを充たしてやる。ここには何ら興味を抱い

て介入する第三者の出る幕はなかったかも知れません。

さんさんとした日光を背に浴びて、私は立上りました。世にも幸

せなK氏夫妻に祝福あれかしと祈って……。

とあれ、露光不足の、しかも小型カメラでとったフィルムのうち

比較的ピントのかたいもの二枚を選んで、皆さんの御覧に供したの

です。軟調ですが、嘘でない証拠に、余りうまくないシロモノです

が、敢て持参した次第です——」

ステッキ氏は、話のさなか、人々の手から手へと廻って、再び机

上に戻った、数葉の名刺型の写真を懐ろにしまって、冷えた紅茶で

喉をうるほした。

× × ×
いつしか窓の外は乳色の濃い霧に蔽われ、しきりに車のクラクシ

ヨンが交錯していました。しっとりと湿気を含んだ夜の気配が、じわじわと窓から忍び込んでくる様です。人々はポツポツと立上りました。退屈のけしとんだ人々は、巡りくる次の例会には、また胸一杯の退屈の虫を噛みしめて集ってくることでしよう。

気の合った者同志が、平常のかたくりしいかみしもを脱ぎ去って、胸襟をひらいて語り合うということは、どんなに楽しいことで

しようか。殊に八人の退屈男たちのように、気も心も分ちあった者にとつては、奇譚三十九夜の集いこそ、本当に命の洗濯の場でもあるです。飲み残しのビールのコップをぐっと一息に干したスバル氏が、いささか酔のまわった足どりで、ステッキ氏と肩を組みながら、廊下を千鳥足で行きます。語りあう言葉と言葉、交しあう眼と眼にも一様に親愛の情と慰わりの念とがこめられているのでした。



「マニヤ通信」

被虐モデル志願

遠藤百合子

私は今年の三月号から御誌のファンとなりました。それからは、もう魅せられたように古い号も探し求めて買い漁りました。先ず第一番目に見るのはグラビヤです。

頁をめくると、自分でもよくわかるくらい、胸がドキドキして本を持つ手がふるえるのです。そしてモデルの方のポーズを眺めたときにジーンとくる迫力、一瞬、電気に打たれ

たようにしびれるというのでしょうか、ファンキー、ああいった強烈な個性が、ひしひしと身をひきしめるのです。

感激、余り感激して、私は……。梨花さんって、なんて素敵なんでしょう。私の気持を巧みに演じてみせるのですもの。いつもながら、あのファイト。身も心もトウスイの境地に浸ってゆける可憐な人。辻村先生、もっともっと、いじめてあげて、いじめられる事によって、あの人の求めてやまない気持が満足させられるのです。そして私も、あの方の気持に入ってゆけます。

梨花さんはしあわせな人、奇クのファンであきたりぬマゾに憧れている私……。

梨花さんが羨ましい、私だって、いささか自信のある身体でありながら、スタイルだって、のつもりでいまして、しよせん梨花さんの足許にも及びません。あのファ

イトが積極さが私にはありません。でも、ああ一度でいい、誰かに縛られたい。荷物のようにがんじがらめに血行も止まるほどに。この私の秘かな願い、切ない欲求をみたして下さるのは誰？。

たまらなく人恋しくなり、大阪の南郊をさまよい歩いたのも、一度や二度ではなかったのでした。新緑の陽気のせいが、私をそんな行動にかりたてたのでしょうか。辻村先生にお逢いしたい、と思いつつも、とてもそんな勇氣はありません。家を出るまでは、辻村さんをお訪ねして、

「私、遠藤百合子、被縛モデル志願、二十三才、独身……」

そして、そして、やはり駄目。ああ、私をマゾの真の極地に導いて下さるのは誰、手を引いて下さるのは何処の人。空しいあがきで家に帰り、スーツケースの鍵を開けて、グラビヤを部屋いっぱいにひろげて、絹サテンで作った細引でヒシヒシと自分で自分の身体を緊縛するのです。そして、三面鏡の前で色々なポーズを映すのです。でも、しよせんは一人では物足りなくなってしまうのが、いつものこ

と髪の毛をかきむしり、責めて下さる人を願いつつ、悲しみに枕を濡らすのです。

梨花さんが羨ましい、梨花さんのようにしてほしい百合子、そして、グラビヤを眺めているうちに、いつの間にか自分が梨花さんになっていて、はっとすることがあります。

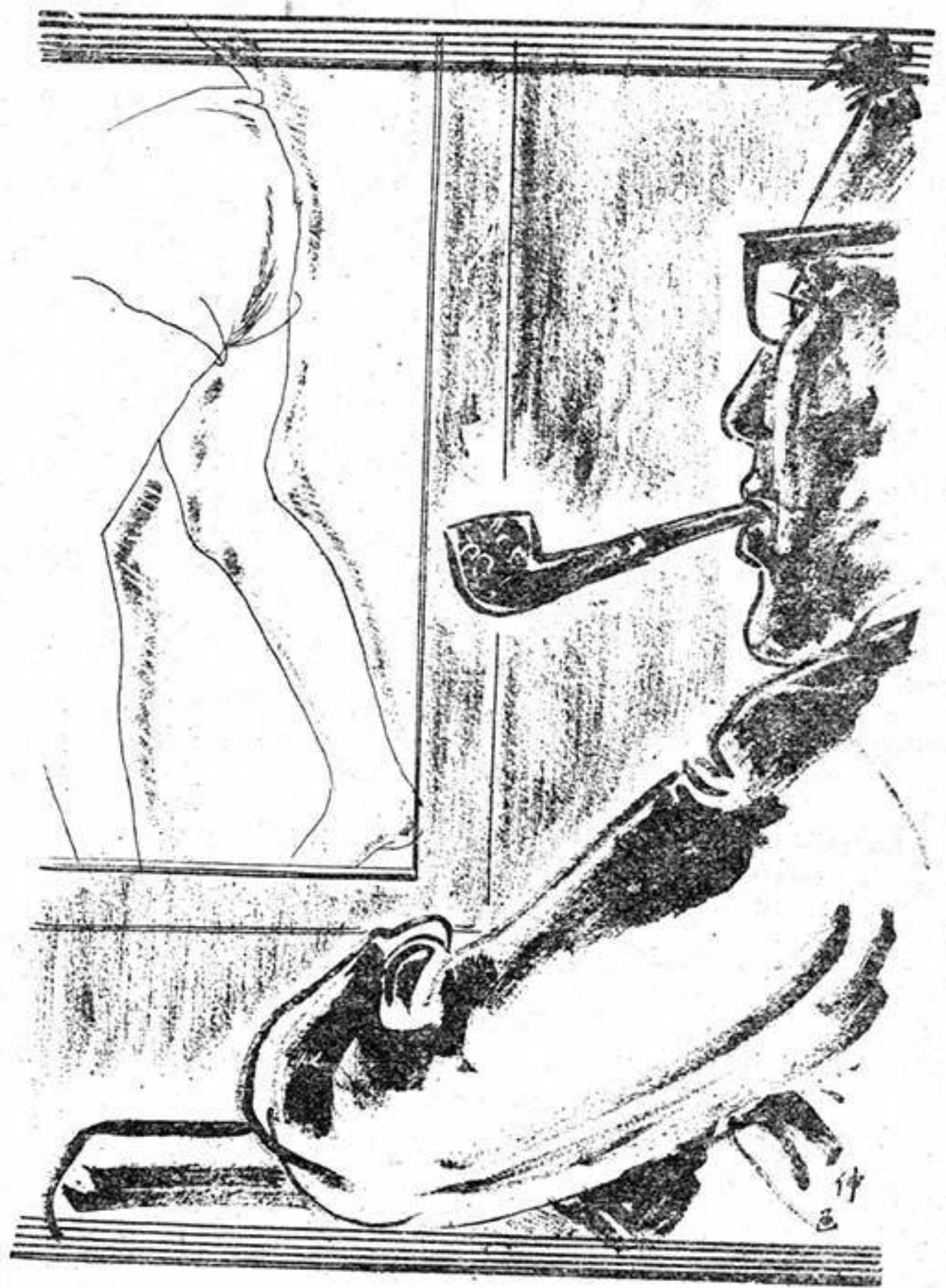
私は梨花さんが大好き、自分の身体つきが梨花さんによく似ているから、写真を見ていて梨花さんのかわりに自分に置きかえ易いからかしら。なんとなく、にじみ出るような被虐感が私の胸に迫ってくるのです。

でも、他のモデルの方、絹川さん、奇クのヒロインとして、秀れたプレイを数多く演じておられる美しいポーズには、ただただ頭が下ります。しかし、余りにもベテランぶりで私のような者には、何か高嶺の花のような憧れだけ。古い号で見た花本京子さん、この人はまだ固い感じ、これから先のことで、し、桜井葉子さん、この人も好きなモデルさんの一人です。この方は、あの立派な乳房責めが見事です。猿ぐつわもこの人は、鼻を出さないで美しさが出ません。オデコが有馬稲子さんのように目立つので工夫がほしいと思います。

大塚さんは、号を追う毎に洩い芸とあいまって、その美しい肌の豊満さは、私のような同性にさえ溜息をつかせます。大塚さんは私とタイプが違いますので、自分を置きかえる気持にはなれませんが、眺めていて楽しいモデルさんの一人です。男性の方の好きになれる方じゃないかと思っています。

私はこのように、いろいろのモデルの方のポーズを眺めていると、いつも、この写真がうつされているときは、どんなだろうかと想像してしまうのです。迫力のある写真にはモデルさんも先生方も力が入るらしく、どの写真にも、本当に責めているということが肯けます。最初は写真をとるために、グラビヤにのせるために演技しているのでしょうか、力が入ってくると、責めるということが主になってしまふというところもあるでしょうね。とても、自分なんかは駄目だと思いがちながらも、一度でよいから、自分の縛られたポーズを写真にとられて、全国のマニヤの方の眼にさらしてみたいと願うのです。

若し、掲載下さるのでしたら、住所だけは伏せておいて下さいませね。



映画にみるアブ空想の世界

「死の谷」

中西均 哉

最近のリバイバルブームは単に音楽の世界のみではないらしく映画界に於いても同じ傾

向が感じ取られるようである。

先頃、盛り場を歩いていると全く懐しい映

画「死の谷」が上映されていた。もう一昔も前になるだろうか、私の青年時代の記憶に今猶はつきり焼付けられている忘れない映画の一つであったのだ。私は何か初恋の人に突然出会ったかの如き胸のときめきを感じながら直ぐさま入場したものである。

私にとって何故強烈な印象を残しているかと言えば、私の憧憬である美女決闘場面が極めてリアリチックに描き出されていたからである。読者の方の中にも御存じの向きも多いかと思われるが金髪の個性的な美人、ヴァージニヤ・メイヨーが相手のドロシー・マーロンを馬乗りに組敷いて征服するシーンである。

ヴァージニヤ・メイヨーは一七〇センチもあるう見事な肉体を西部の野性女に扮し、スカートの裾をあらわに股を拡げて岩に腰を下したり、又馬に跨り列車強盗を働いたり私達の眼を充分楽しませた上最後に恋仇のドロシー・マーロンと猛烈な格闘場面を展開する。立技で揉み合った二人はドーとばかりに同体になりに落ち下になり必死の組打ちとなるがやがてメイヨーの力が勝ったのか右脚を勇ましく拡げてムンズとばかりに馬乗りに跨ってしまう。仰向けに組敷かれた女は跳返そうと懸命に蹴くけれども両手を大の字に強く押し

つけられ、折り重なる様に全身でのしかかられどうにもならない。勝ち誇ったメイヨはその儘ズーとのしり胸のあたりにドッカと跨ると相手の両手首を咽喉の上に十字に組み合し、全体重を掛けてグイグイと締め上げる。組敷かれた方は息も出来ない苦しさで憎い恋仇に打負けた無念さに顔を醜く歪め、脚と腰を狂気のように動かして死に物狂いの力でやっと跳ね返す。又もや床をゴロゴロと転り合って何んとか相手を押さえつけ様と必死に揉み合っていたが、やはりメイヨの体力が物を言ったのか、相手を仰向けざまにシッカリと組敷いてしまったのだ。征服者のメイヨが自分の尻の下敷にした哀れな獲物を如何に征服し凌辱するかと固唾を飲んだ瞬間、まことに残念な事に仲裁者が入って、この格闘も引き離されてしまったのである。

私のような美女決闘愛好者にとっては、仲々忘れる事の出来ないシーンではあったが、映画の通例に洩れず聊か物足りない感じは拭いきれない。そこでいつもの私のファンタジーの世界が台頭してくる。以下は私の創作である。

太平洋戦争も末期の昭和二十年一月。太平洋上のR島は米軍の空陸の猛攻に次ぐ猛攻に

日本軍は玉砕した。それから二、三カ月後、今はもう小銃の音一つ聞かれない同島のキャンプからやや離れた浜辺に、米軍女性将校五人ばかりがビキニスタイルの儘馬で乗り着けていた。南海の暑い太陽を全身に受けた彼女達は子供の様にはしやぎながら海に砂に、そのグラマーな肉体を躍動させている。戦争等まるで遠い星の世界の出来事のような雰囲気である。しかし流石に護身用の短剣だけは各人一つずつ身近に置いてある。

折しも彼女達の直ぐ近くの海中を、浮きつ沈みつ近寄ってくる一団があった。彼等は米軍の猛攻撃に、撃墜された重爆撃機の乗組員の日本人である。しかも良く見ると未だ大人に成りきっていない少年飛行兵で、十五、六才の少年ばかり五人であった。嚴重に警戒されている陸地の道行は到底無理と考えた彼等は浜添いに泳ぎ、最後の突破を試みようとしたのである。突破と言っても刀折れ矢尽きた今、口に啣えた短刀だけが武器と言う状況だ。少年達は静かに陸地に近づいた。浜辺にたわむれている彼女達の目を掠めてジャングルに忍び込み、夜を待つと言う作戦だったのだ。しかし彼等は武運の神に見放されていた。女将校の人に発見されてしまったのであ

る。発見されてはそれ迄と少年達は口の短刀を握り直し「ワーツ」と喚声を挙げて米軍女将校目がけ襲いかかって行った。

驚いたのは彼女達である。折角良い気持で泳ぎを楽しんでいたところへ、地から湧いて来たような日本兵の襲撃である。彼女達は慌てて馬の居るところ迄走ろうとしたが、今からではとても間に合わない。逃れられないとなれば戦うより仕方ない。キッと相手を睨むとなんと日本兵とは名ばかり、未だ年端も行かぬ子供達であり、武器らしい武器も持っていない様である。彼女達の最初の驚きは怒りとなり闘志に変わっていった。

女達はそれぞれ側に置いてあった短刀を抜き放つと身近に迫って来た少年達を迎え討ったのだ。両方とも五人ずつだから最初は各々一騎討の恰好になるわけである。かくて命を賭けた壮烈な肉弾戦が開始された。真夏の太陽の光を受けた短刀が稲妻のようにキラリとここかしこに閃めく中、白砂を蹴たてて戦うが両軍共必死の勢い仲々勝負が決まらない。しかし戦いが長引くと最後は体力の優劣が勝負を決定するものである。

初めの内は気合の鋭かった少年達も女性とはいえ自分よりはるかに上背も体重も勝る相

手に段々押され気味になって来たのだ。やがて一人の少年の繰り出す短刀の右手はアニタ・エグバークのような逞しい女将校の手にしつかりと握られ、遂に組打ちに持ち込まれてしまった。次の瞬間には、ドッとばかりに押し倒され大きな身体の女の下敷になって腕く哀れな少年の姿があった。

上位になった女は豊満なお尻で情け容赦なく少年の薄い胸板に跨ると、尚も懸命に跳返そうと足掻く少年の上半身を動けないようシツカリと押さえつけ、右手の短刀を振り上げた。「ギャー」断末魔の悲鳴を挙げた少年の咽喉笛には鋭い短刀が深々と突き刺されていたのである。その儘一掻き、更に一掻き、遂に少年の首は胴から離されてしまった。

同じような現象が横でも起っていた。止めを刺された少年がその瞬間挙げた断末魔の悲鳴に他の少年達も一瞬本能的な視線を走らせた。そこに当然隙が出来る。その僅かな隙を見逃す彼女達ではなかった。一人の少年はエリザベス・テラーのような美人将校に胸を刺され「ムムーン」と呻き声を挙げて仰向けに倒されてしまう。すかさず太腿もあらわにのしかかった女は少年の髪の毛を引摺み仰向けざまに押さえつけると有無を言わず生首

を掻いてしまったのである。又ある少年はソフィア・ローレンのような素晴らしいグラマ―将校に組みつかれ、多少覚えのある柔道で投げ転がそうと懸命に力むけれども殆ど全裸に近い裸体の事、掴むところもなく、しかも海水浴をしたばかりであるから余計つるつるとなり、投げが掛かるどころではない。その内反対に体力負けしてジリジリと押しまくられ出す。やがてドサツとばかりに砂上に転倒した二人は二、三度上下になりあったが案の定、下に組敷かれてしまったのは少年であった。下腹に息の詰るような凄い重圧を受け折りからの真青な空を見上げつつ「ああ僕の命も掻切られる……」冷たい刃先の感触を咽喉元に予感しながら少年は観念の眼を閉じた。

一方馬乗りに跨ったグラマ―将校は少年の首級を挙げるべく鋭い短刀を右手に構え、今まさに刺し通そうとしたが、死を覚悟した少年の神妙な態度に接すると何か自分の身振りがあまりに大袈裟なもののように感じられ一瞬躊躇せざるを得なくなってしまう。しかも側を見ると自分の仲間が断然優勢とは言えはつきり勝負が決したわけではない。又既に首級を挙げた二人の仲間はもし万一味方が危くなれば直ぐさま応援に飛び出そうとの気構

えながら圧倒的な味方の優勢に安心してか、別に助太刀の要なしとばかり討取った日本少年の死体にドッカと跨っている。へそうだ。何も急ぐ事はないんだわ。こんなチビジャツプなんか殺そうと思えばいつでも殺せるんだから、それより滅多に見られないレスリングを拝見しようとV心の余裕を取り戻した彼女はゆっくり身体を乗り出し、少年の胸の上に大きなお尻を納め、その長く逞しい膝の下に同じく少年の両腕をシツカリと踏み敷いてしまったのである。こう完全な押さえ込み態勢をとられたのでは体力に数段劣る少年にはもはやどうにもこうにも手の打ちようがない。太腿の間から僅かに顔を出して悠々と跨っている征服者を空しく仰ぎ見るより仕方なかったのだ。

又ある少年はブリジッド・ベルドーのようなやや小柄ではあるが、均斉のとれた肉体の持主の女将校と組み合いの格闘を演じ、一時は上位になって相手を押さえつけたが、やはり力の相違、逆に捻じ伏せられてしまう。上にのしかかった女は少年の片腕をねじ上げ背中をグイとばかりに膝で押さえつけ、必死に足掻くのもかまわず髪の毛を引摺み砂の中に顔をグイグイと押し込む。少年は苦しいの

であろう。顔をゆがめ懸命に逃がれようと腕くけれどもどうにもならない。やがて苦悶の呻き声を残した少年はガックリ気を失ってしまふ。最後まで頑張っていた隊長格の少年とヴァージニア・メイヨーのような美人将校との決闘にも終焉が近づいていた。少年の必死の健闘も空しく肩や腕をザックリと斬られ今や疲労困憊の極に達したところをドツとばかりに突き倒され、その儘組敷かれてしまったのである。のしかかった美人将校は少年の左腕を右膝で押さえつけ、右腕を左腿で逆にとると短刀の切先をピッタリ少年の咽喉元に押し当てたのである。

「さあどうだ。他にまだ仲間がいるんだろ、其の場所を言いなさい」

白人女性弱者に対して残酷であるといわれている。彼女とてその例外ではなかった。否、むしろ血生臭い戦場を実際に幾多となく経験している彼女は其の典型的なものであったのだ。自分の尻の下で口惜しそうに跪く哀れな獲物を勝ち誇ったように見下していた彼女の瞳には残忍な光が漂って来た。この儘一気止めを刺したのでは興なしと考えた彼女は他の仲間の隠れ場所を白状さすという大義名分のもとに思いきりもてあそんで己の嗜虐

性を満足させようとしたのである。

「さあ早くいわないと、この冷い短刀が真直ぐ下におりるぞ」

男のような口調で決めつける。しかし少年はさすが日本軍人の端くれであった。体力的には大人になりきっていない悲しさ、無念にも下敷にされ、生殺与奪の権利をとられてはいるものの、幼い時より軍人精神を叩き込まれ散り際の潔しこそ武士道なりとの考え方はそう簡単に屈服するものではなかったのだ。「黙れ、敗れたとは言えボクも日本軍人だ。知っていたって白状なんかするものか、恥をかかさないうで早く首を取れ」

少年の必死の抵抗を恰も鼠を押さえた猫の如く、如何にも心地良げに見下していた彼女はそれではとばかり左手で少年の髪の毛をムンズと握り動けないように固定させると右手の短刀の切先を大きく喘ぐ少年の咽喉元にチクリと突き刺す。「ウウッ……」少年は一瞬苦痛の呻きを上げ全身を硬直させた。又チクツと突き刺す。「ウウ痛ッ……」少年は気が遠くなるような激痛に最後の足掻きをみせるが盤石の如くに跨っている彼女の重い身体はどうする事も出来ない。

「それでもまだ白状しないか。言う事を聞か

ないともっと痛い目に会わせるぞ」

一向に屈服した様子をみせない少年の態度に腹を立てた彼女は肩先を斬り、少年の口と鼻を両手に塞いで呼吸が出来ないようにしたり、又身体を上下にドシンドシンとゆすって凄惨な重圧を加え、はた又顔面騎乗を楽しんだり散々少年を痛めつけたのである。

少年はもう完全に精も根も尽き果ててグツグツと組敷かれているが、それでも猶仲間の隠れ場所を言おうとしない。少年のあまりの頑強な抵抗にさすがに根負けした美人将校は仲間を見やって美しい顔をほころばして苦笑いした。この上は本部に帰って器械の力を借りゆっくり時間を掛けて白状させるより仕方ないと考えた彼女達は、それぞれの獲物を馬のつないである場所まで引摺って行くのだ。そして首級は鞍にしっかりと結びつけられ生きている少年達は鞍を取りはずした馬の背に仰向けにグルグル巻きに縛りつけられてしまったのである。

やがて馬上の人となった彼女達の姿は砂埃の中に消えて行った。後には南海の太陽と押寄す波が何事もなかったように自然のままの交響楽を奏でているだけだった。首級のない二ツの死体を除いては……。

△読者の告白▽

腹を切る女

フジ 藤

シロ 代

ユウ 悠

ゾウ 三

一
戦争が始まったばかりの頃の私は或る貿易商の雑貨部に勤務して居りましたが、毎日通勤の途上よく顔を合す美しい娘さんがありました。

初めは時々軽く挨拶をする位でしたが、或る雨の降る日曜日のこと、映画館で偶然に隣り合せになり、それから急に親しくなり、時には私のアパートにも遊びに来る様になりました。

彼女は川端洋子といい、タイプストをして妹さんと二人で暮していることや、住居も余

りこのアパートと離れていないことがわかりました。

それは初夏のそよ風が肌に気持のよい夕方のこと、私が窓際に腰を下して新聞を読んでいると軽いノックがあり、ピンクの半袖ブラウスにスラックス姿のスラリとした洋子さんが、にっこり笑いながら入って来ました。

私の部屋は四畳半の居間と椅子やテーブルを置いてある三畳程の板の間の殺風景なものでしたが、その日も色とりどりに美しく咲いたグラジオラスを持ってきてウイスキー瓶に上手に活けて呉れました。

いつもの様に本箱や床の間に並べてある数百冊の本の中から面白そうなのを物色していましたが、床の間の本の陰から黄色い木綿袋に入った短刀を見付け出しました。

そっとそれを取上げた彼女は直ぐ袋から取出し、鞘を払ってうっとりする様な目付きでじいっと切先を見つめていました。

その時は、そのまま元の場所に置いた様でしたが、その日はいつもと違って何となく落着かずそわそわとして居りました。

やがて夕御飯時となり、彼女は帰らねばならなくなりましたが、帰り際に思い切った口

調で、先程の短刀を貸してほしいと頼むのでした。

私はその彼女の様子にちよっと興味を持ちその訳を聞きますと、洋子さんは恥しそうに笑って答えず、その儘帰ってゆきました。

私も不思議に思い乍らも近所の飯屋に食事にゆき、その足で本屋を覗いたりしながら漸く薄暗くなりかけた頃に帰って見ますと、洋子さんが私の部屋の戸に凭れて待っていました。私の顔を見ても、「あのうー」と口籠るだけで言葉が続かず、目を伏せてしまいました。

私は直ちに短刀のことが頭に浮かびましたので、さりげなく中へ入れ、だまって短刀を彼女の手握らせました。

そうすると洋子さんは決心がついたのか、問わず語りに次の様な彼女の秘密を教えて呉れました。

最近、彼女の体が成熟するにつれ自虐的なことに興味を覚える様になり、遂に自分の下腹部を傷つ

けて楽しむ様になったとのことでした。

夜、隣りの部屋に寝ている妹に気付かれぬ

様に、蒲団の上に起直り、そっと切腹の儀式を行うのを無上の悦びにしているのです。

その時に今までは、ナイフを使っていたが、一度は九寸五分の腹切刀を用いてみたかった事などを顔を赤らめながら語るのです。

私は思いがけない話に驚きながらも、若い娘の腹切姿が見たいという欲望を押えることが出来ませんでした。

そしてとうとう次の日曜日に、この部屋で切腹の儀式をするという約束を無理矢理にさしてしまいました。

二

その日は昼を少し過ぎた頃、手に風呂敷包を持った彼女が着物姿で現れました。

風呂敷包をほどくと、その中には真白い絹の長襦袢と同じ腰紐、それから三宝がありました。板の間の椅子やテーブルを片付け、畳を一枚外し、その上から白いシーツで覆い切腹の座を造りました。



彼女は切腹に関する智識を研究したのか中々詳しくいろいろと私に教えて呉れました。飽く迄本当の切腹らしくする為、二人で相談しながら、川端洋子の切腹申渡書という様なものを造り上げました。

それを私が墨で半紙に清書している間に、彼女は肌シャツだけとなり、(絹の薄いコンビネーションでピンク色が美しく胸から腹にかけて七つの小さなボタンが前をとめていました。)純白の長襦袢と着換え、九寸五分の刀身に紙を巻きつけ三宝の上に載せたりして用意していました。

漸く書き上げて彼女の方を顧みますと、もう切腹の座の上に座ってその気分になりきるためか目を閉じて静かに待って居ました。

私は彼女の座っている前に進み、厳かに切腹申渡書を読み聞かせ、裏返して彼女に見せました、彼女は細く目を明けて、それを見上げてから両手について、

「有難くお受け致します。只今から切腹致します。」

と答えました。

両手を胸の襟にかけ、その儘襟を伝って腹までぐっとしごき下して前を寛げ、右肩から左肩と襦袢をおしぬぎました。

ふくよかな乳房の脹らみや、むっちりとした下腹が絹シャツを透して感じられ、あまりに、ぴったりと身体に喰入っている様子がピンク色と共に益々私を興奮さしてしまいました。彼女は私がどの様な気持ちでいるか充分知っているらしく、二重の満足に自分も興奮してきたのか、顔が紅潮してきました。裸体に等しい、いや薄物を着ているだけに、この様な有様は多分に露出狂的性質をもっているといえるでしょう。

私が見とれている間に、腰紐を解いて下腹の前をかきただけ、シャツのボタンを腹のところ三つはずし、可愛いお臍を見せました。

切腹の準備が出来ると、左手をのばして三宝を取り一礼して右手に腹切刀を逆手に握り三宝は裏返しにして左横に伏せました。

やがて、左手で静かに自分の腹を上下左右に押揉み始め、途中でシャツが邪魔になるのか下に手を入れてもう一つボタンをはずした様で、更に充分に撫で廻しました。

私はその緊張した彼女の美しい横顔をながめていたが、彼女の息づかい等から興奮の絶頂に到したのがよくわかりました。

その姿を私にさらけ出した喜びと、今腹を

切って死に就くという錯倒した悲壮な気持ちが入り混って悦楽の極地に達した観がありました。

やがてゆっくりと左手でシャツを左脇へ掻き開け、腹切刀の切先を左の脇腹におしあてました。右手とおなかに力が入ったと思うと、どうやら少し切先がつかたてたらしく、顔にちらっと、苦痛の表情があらわれました。次の瞬間、こぶしで下腹を撫でる様にして左から右へ一文字に腹切刀を動かしました、やや赤味を帯びたふくよかな腹に白い細い線が静かに浮びました。左手の掌で切腹箇所を押え右手は腹切刀を握ぎったまま前に伸した恰好でぐったりと身体を伏せました。

女の美しい腹切姿を見せられて私も暫くはぼんやりしていましたが、彼女も倒れたまま余情を味わい、興奮の冷めるのを待っている様に見られました。

私は側によって、耳元で

「洋子さん」

と声をかけると、彼女はこちらに顔を向け

「起して」

と甘える様な声でいいました。

わくわくしながら、彼女の身体に手をかけ抱き起して下腹を見ました。

切った時には見えませんでした、彼女の雪白のおなかには一文字に真紅の絹糸の様な血が走り、ところどころはぶつぶつとまだ血がにじむ様に出ていました。

彼女は

「今日はとても興奮してきて、どうしようもなかったので思わず切ってしまったわ」

私に寄添いながら嬉しそうに呟きました。

三

手当をした後で又切腹の話や、今までの経験等をいろいろとしてくれました。

矢張り右手に腹切刀を握りしめ、左手で腹を撫でさする時が一番よく、腹に切先の入った時は少し痛いのが右へ引廻す時は、本当に気持よく痛み等は全然なく、死んでしまいたい

程の幸福感に浸れるらしいです。

それから双肌ぬぎになった瞬間も切腹の前奏として又自信のある身体をさらけ出すという別の悦びを味うそうです。

「その日の気分によって肌に着ける絹シャツも色を白にしたり、ピンクにしたりします。これは身体にぴったりしたコンビネーションを用います。一度シャツの上から切出しで切腹して見ましたが、どういうせいか力を入れて切った積りでも、上手に切れずシャツも所々切れずに残ってしまいました。私はいつも夢の様に考えていることは、昔のお小姓がしていた様に前髪に結び、何処かの広い庭園に切腹の座を設けて切腹して見たいことです。桜の花弁の散りしく下で双肌押ぬぎ、検視の

人の前で、それこそ本当に腹真一文字に掻切って吹き出す自分の血の中で苦しみ悶えながら果ててゆくのを」と私の胸に抱かれて夢見心地で、そういうのでした。

その後も切腹のプレイは続き、時には私も彼女に代って腹を切ることもありましたが、段々と彼女の喜びがわかる様になりましたが、腹を切った一週間程は風呂にゆけないのが困ったことでした。或る時、私が切腹しかけると彼女が後から寄そって柔い手で私の腹を撫でさすり、腹切刀で私の腹を切りさくこともありました。そんな時は大抵、私の苦痛を試めす様にゆっくりと刀を動かして、私の痛がるのをさも嬉しそうに横目で見ながら、それでも決して許して呉れませんでした。

その間に私も召集され九州板屋の特攻基地にゆきましたので、この遊戯も自然に途絶えてしまいました。

戦争から帰って見ると己に彼女は結婚して女の子の母親になって居りました。近所ですので時々顔を会えますが、その後言葉を交したことはありません。

〔分譲切腹写真〕

若妻の切腹

大手札 四枚一組 四〇〇円

略号 「わか」

モデル 甘本 春子

介添切腹

大手札 四枚一組 四〇〇円

略号 「あか」

モデル 甘木 春子

自刃悶絶

大手札 五枚一組 五〇〇円

略号 「せよ」

モデル 大塚 啓子

避暑地の切腹

大手札 五枚一組 五〇〇円

略号 「せひ」

モデル 絹川 文代

ダブル切腹

大手札 二枚一組 二五〇円

苦悶切腹表情

大手札 五枚一組 五〇〇円

略号 「せく」

モデル 梨花悠紀子

絞首処刑

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号 「こう」

モデル 絹川 文代

長篇SM小説

宇宙のどこかで

△太平洋戦争の話△

佐 治 麻 造

主計の上等水兵は案外気のやさしい男で、打ちしおれた彼をいろいろと慰さめてくれた。

「お前みたいなのは、運がいいのか悪いのか分らねえな。おい食べろよ」

主計兵が覗き込んで投げ入れてくれた料理屑を口で拾った彼は喘いで身もだえした。この艦に拾われてから既に五日目、後手銃の両腕は抜ける様にだるく疼いて手の指はもはや動かなかった。

「しかし毛唐の奴等はひどいことをしやがるもんだな。手首がひどくなってるぜ」

囚人を檻から出した主計兵は手首に薬を塗ってやり、ついでに用

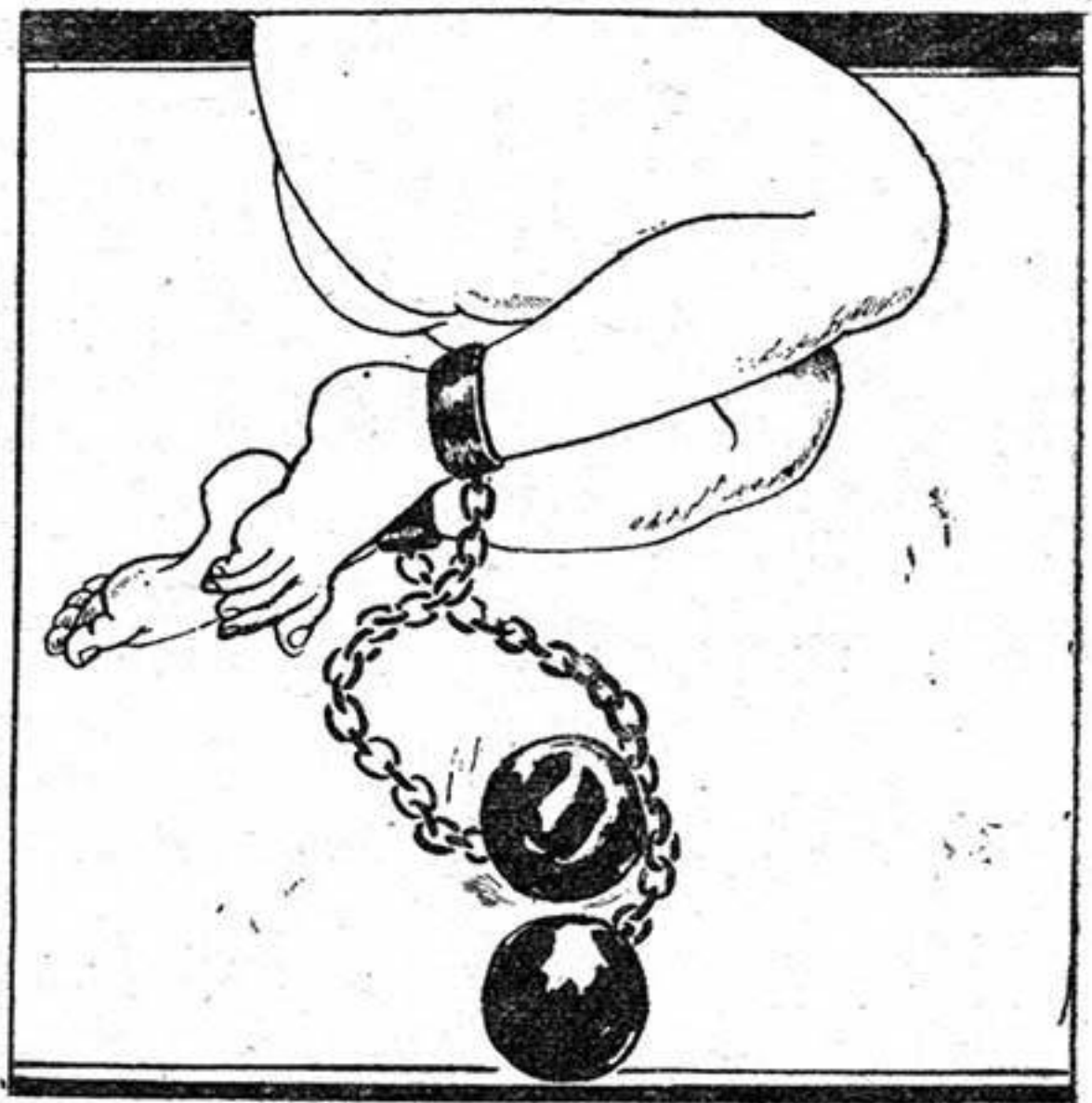
便をさせた。

「足に鎖つけたままで、うまく済ませるもんだな。済んだか？ 今日は駄目だが、明日位には又シャワーを浴びさせてやるからな。気持悪かろうが辛抱しなよ」

「ありがとうございます。お手数かけました」

「フッフ、そう言われると可哀想にならあ。大尉さんだったって言うのになあ。さあ檻に入って貰うか。俺もぼつぼつ飯の支度にかからなくちゃな」

一郎を拾い上げてから更に二隻の輸送船を撃沈して、全魚雷を射ち尽した艦は基地に帰還した。当直を残して全員が上陸した艦内の檻の中で彼は更に一昼夜飲まず食わず、排泄すら出来ずに放置され



た後、やって来た法務下士官に引き渡された。手錠を取出して檻の前で待って居た法務下士官は、曳き出された彼の姿を見ると苦笑して、白い糊の利いた上衣のポケットに手錠をしまい、今度は捕縄を取出して彼の腰鎖の後ろに結びつけて縄尻を握った。二十日振りで外気に当たった彼は眼がくらくらしてよろめいたが、胸一杯に吸う空気が堪らなく美味かった。見覚えのある港の光景に彼はギクリとした。そこは彼の所属戦隊の基地もあるラパールであった。

「しっかりしろ！ 歩かんか」

思わず足を停めた彼の尻に縄尻が激しく鳴って、彼は真昼の埠頭で呻いた。こんな姿で再びここに帰って来るとは、と彼はみじめさに身がすくんだが、往來する将兵達の視線から逃れる術もなく、知った人達に会わない様にと、唯それだけを念じ乍ら司令部の法務部に曳かれて行った。山かげに半地下式に建てられた法務部の廊下では手錠腰縄姿の兵が三人、珠数繋ぎにされて居るのに出会ったし、連れ込まれた室の中では並んだ机の一つの前で不動の姿勢を取った。輝一本の男が泣き乍ら取調べを受けて居た。一郎も直ちに調べられた。

「ふん、あらましは分った。詳しい事は明日だ。おい……」

若い法務中尉が顎をしゃくると、彼は連れ出されて前後左右から写真を取られた。

「この番号から考えると、矢張り捕虜になつて連中も相当居るのね」

若い婦人の法務部員が彼の体に刷られた番号を消し乍ら言った。

「この戒具は、ここじゃ外せないわね」

「ウン。鍛冶工場に連れて行かなきゃな、電話しといてくれよ」

かなり離れた工場に連れて行かれた彼は、鋏を乱暴にこわされて痛みに呻いた。両手首、腰、両足首の鎖錠が次々に外され、そして首の鎖も解かれた。手首や腰の周りを撫で乍ら、床にバラバラになつて落ちた枷や鎖を感慨をこめて眺めて居ると

「こら、手を出せ」

久し振りに別々になつた両手は再び手錠で繋ぎ合わされ、手錠を前で押えて腰縄が固く打たれた。

「楽になつたろう？」

「ハイ、ありがとうございました」

「来い」

連れ戻された法務部で一本の輝を与えられた。

「これを締めて。ゆるんでたり、だらしない恰好になつてると罰を喰うわよ」

その輝は、前袋の所だけが禿げちよろけの赤い布で、腰に巻く部分はもとより前袋の後方の部分も、二条の捕縄をぬい合わせたものであった。

「もっともっと、きつく締め上げるのよ」

手錠を嵌められた不自由な両手で囚人輝をつけて居る彼を眺め乍ら、婦人部員は面白そうに言うのであった。右肘に番号札が鎖でつけられた。

「鞭の味はタツプリ味わつてたらしいわね。神妙におしよ。さ、おいで」

山腹を掘って作られた独房にブチ込まれた彼は、軍規のきびしさを今更の様に感じた。捕虜の桎梏を漸く解かれたと思うと、今度は自軍の刑法に問われて圜圀の身とならねばならぬ自分の運命が悲し

くて、じめじめした房の床の上でまんじりともせず一夜を明かしたのであった。

翌日は朝早くから曳き出されて、峻烈な取調べを受けた。各法務官の机から少し離れて不動の姿勢をとった数名の囚兵達は、涙で頬を濡らし乍ら犯した罪を糾明されて居た。一番端の机の前では一名の若い婦人が婦人法務将校の調べを受けて嗚咽して居た。女性と雖も容赦なく囚人禪一本の姿にされた彼女は、婦長に反抗した看護婦らしく、両手で顔を掩って身もだえする度に白い背や尻に鞭を受けて悲鳴を挙げた。取調官達は時々休憩したり室から出て行ったりしたが、囚人達は直立不動の姿勢を崩すことは許されない。眼の玉が少し動いても、発見されれば鞭が鳴った。

「武林一郎。貴様はだ、要するに自決しようとするれば出来たのにも拘わらず、おめおめと囚虜となった上、重大な兵器を敵に渡したと言う訳だな」

「そうであります。申し訳ありません」

「敵の奴等に訊問されたり？ 何をしゃべった？」

「……」

「言えっ！」

ノイロンの効果については彼自身も、はっきりとは知らなかったし、説明した所で分って貰える由もなく彼は涙を流し乍らすべてを自供した。

「馬鹿野郎！ それでも将校だった男か。何故、舌でも噛まないのだ？」

取調べが終った者も、全員が済む迄そのまま立たされた。彼の隣りの上官暴行罪の男が午後おそく最後に終ると

「全員、廻れ右」

一人の婦人法務下士官が、囚人達の両手に厳正な態度で手錠を嵌めて回り、もう一人の婦人下士官が捕縄で芋蔓式に繋いで行った。独房の前で手錠を外された時、彼が腕を下すのが少し早過ぎたために手錠が床に落ちて金属音を立てた。

「まあ！」

下ぶくれした顔の法務官にしては小柄な婦人下士官は眉を吊上げて怒った。

「手錠はね、私達の大切な兵器なのよ」

「申訳ございません」

床から手錠を拾い上げて押頂いて詫びる彼の頬に激しいピンクが往復した。一日で取調べが終った彼は独房で軍法会議にかけられる日を待った。朝七時から夜七時迄の正坐は苦しかった。重く澱んで湿気の多い空気の中で、陽の射さぬ地中の独房の床に身動き一つ許されないで坐って居ると全身が脂汗にまみれた。用便も切なかった。半坪程の檻の中には便器一つないのだ。

「法務官殿ッ。十四号、用便をお願い申上げますッ」

堪え切れなくなつて彼が喚くと、通路の端の机に居る監視員がやって来て鉄格子の扉をあけてくれる。

「お願い申上げますッ」

両手を揃えて差出すと、

「勘忍して上げるよ。早くお済まし！」

通路の片隅の明るい電灯の真下に便壺がむき出しで置いてあるのだ。婦人監視員は顔をしかめ乍らもジロジロと鋭い眼で見守り、それが辛抱の限界迄行って居たかどうかを確認するのであった。三日

も経つと体を殆んど動かしては居ないのにも拘わらず、囚人禪の捕縄の部分が股に喰い込んで、少し身動きしてもすれて痛かった。しかしどんなに痛くとも、それはきつく締め上げておかねばならなかった。朝夕の点呼以外にも、いつ何時不意打ち検査を喰うか知れないのだ。或日、じっと正座して居てもヒリヒリと堪え難い痛みを耐え兼ねた彼が、そっと股縄をゆるめてホッと息をついた途端、

「点検ッ！」

と言う叫び声が響いた。しまったと思ったがもうおそかった。その号令がかかれば、囚人達は両手を直ちに頭上に挙げねばならないのだ。若し手をおろせば反抗と見做されて、禪をゆるめた罰とは比較にならない懲罰を加えられる。

「十四号。立って、フン、後ろ向いて股を開いて……。おやッ、ゆるめてるのねッ」

鉄格子越しに忽ち発見した婦人法務官は、彼を曳き出して鞭を振った。

「人間並みに、禪の一本でもつけさせて頂いてるのはお慈悲なんだよ。さ、締めて……。もっともっと、もっと思い切り締め上げて……」

鞭の痛さに未だ呻く彼は更に捕縄を後手に打たれて房に蹴り込まれた。首縄迄掛けられて、腰から上をひしひしと縛り上げられたままの正坐の苦しさに

「法、法務官殿ッ。お、お慈悲です。手錠にして下さいましッ。苦しい……、苦しい……、苦しい……、お願いでございます」

いくら哀願しても捕縄は翌朝迄解いては貰えなかった。

軍法会議の宣告は懲役十五年であった。

俘囚罪、機密兵器遺棄罪、機密漏洩罪と言う重い罪状にしては、考えて居たよりも幾分軽い刑ではあったが、それでも彼は打ちひしがれてしまった。生地獄の中の生地獄と言われる軍監獄での日々を思つて曳き摺る足の鎖が重かった。

「おい、武林」

建物の出口で名を低く呼ばれた彼はびっくりとして、足の鎖を鳴らして立ち止った。腰縄を握った婦人法務下士官は舌打ちをしたが、声を掛けた男の階級章を見て黙って腰縄を引き絞って立ち止った。その男を上眼使用でおずおずと見上げた彼は深く頭を垂れて全身を赤くして恥じ入った。

「司、司令。お恥しうござい……」

腰縄で押えられた前手錠の両手が切なく動いて語尾が消えた。

「よしよし。何も言うな。運が悪かったのだよ。可哀想にな」

「……」

彼、武林一郎は声もなく哭いた。

「しかしな、お前の戦歴が物言ったわい。普通なら二、三十年は食う所だそうだよ」

彼の刑を少しでも軽くしようと、蔭乍ら尽力してくれたこの直属上官の慈悲を思つて一郎は感泣した。

「決して短気を起すんじゃないぞ。潔きよく刑に服するのが、お前の御奉公の道だぞ」

「さ、もう行くのよ」

婦人下士官の縄尻が無慈悲に尻に鳴って彼は嚙り上げ乍ら鎖をジヤラつかせ初めた。慈悲の言葉は身に沁みて温かったが、やはり悲

しいのは十五年の長い月日であった。

三、四日して曳き出された彼は、後手錠を捕縄で肩に吊上げられ、罪名と刑期を書いた木札を首につけられて腰縄を打たれて連れ出された。純白のスカートに純白の上衣のボタンをキッチリと掛けて正装した婦人法務下士官は、法務部の出口の所で更に一名の女囚の腰縄を受取って、彼の腰縄と合せて握った。その大柄な女囚を横眼で見た彼は思わず声を上げて驚いた。彼と同様に囚人褌一本の姿で後手錠を捕縄で吊られて居るその女囚は、彼にとって恨み骨髓の婦人パイロット、エリザベス・テラードの変り果てた姿であった。美しい金髪は短く切り取られ、白晳の体には鞭痕が幾条も走り顔も体もやつれては居たが、その唇は未だ口紅の名残りを留めて皮肉を笑みさえ浮べて歪んで居た。

「お黙りッ。声を出すんじゃないの！」

縄尻の痛さに身をよじる彼をチラと見たエリザベスも彼に気付いたが黙って歩き出した。晴れ渡った南国の空の下、婦人下士官の白手袋に握られた二条の捕縄のそれぞれの先に腰を結ばれた二人の囚人が並んで曳かれて行くのを見て、道行く将兵は笑った。罪名を大書した木札を首につけた彼には冷たいさげすみの眼が浴びせられるだけであったが、囚人褌の股縄の痛さをこらえこらえ、尻を振ってガニ股に歩くエリザベスには好奇の視線がギラギラと注がれた。曳かれた所は飛行場の一つであった。双発の輸送機が既にプロペラを回して居た。囚人達が飛行場に踏み入った途端、あちこちでサイレンが唸り初めた。又も空襲なのだ。輸送機の扉をあけて、既に乗り込んで居た看護婦の一群が黄色い声をあげ乍らバラバラと降りて近くの壕へ飛び込んで行った。一郎とエリザベスはその壕の入口に漸

く入れて貰った時には既に爆音が遠雷の様に轟いて来た。近くの飛行場から舞い上がる戦闘機の咆哮がたのしかったが、その爆音はすぐに消えた。

「三十機も上ってないな。もっと上げなきゃ駄目だぞ」

一郎は高角砲の射撃音を聞き乍ら隙間から空を仰いで地団太を踏む思いだったが、横坐りに腰を下ろしたエリザベスは嬉しそうに青い眼で笑って居る様だった。

「この二人も私達の飛行機に乗せるの？」

爆弾の音が遠ざかってホッとした看護婦の一人が赤十字のマークのついた帽子をかぶり直し乍ら訊ねた。

「ええ、だけど荷物室に積み込むから御心配なく」

二条の腰縄の縄尻を長く伸ばして奥の方で握って居る婦人法務下士官が言った。

第二波が来、第三波が襲って漸く警報が解除されたのは正午を過ぎて居た。輸送機が無事なのを見て喜んだ看護婦達は昼食を初め、護送の婦人下士官も、どこからか食事と水を運んで来て囚人達に与えた。

「言っとくけどね、向うに着く迄用便はさせないからね。それでよかったら食べるというわ。そうね、七時間はかかるかしら？」

立木に腰縄を繋がれた囚人達の前におかれた洗面器の中には残飯の麦飯に冷めた味噌汁が少しかけてあった。犬の様にして少し食べた彼がエリザベスを振り返ると、彼女はバケツから水を少し啜っただけで頭を振った。

「そんなもの、とても咽喉を通らないわ」

四日前のラパール上空の空戦で撃墜されて捕えられたエリザベス

は、それ以来殆んど何も食べて居ないのだった。

「訊問された時に知ってることは全部しゃべったわ。そしたらハンサムな士官がチョコレートを少しくれたの。おいしかった。けど知らない事迄訊ねて鞭で打つよ。ひどいわ、全く……。早く収容所に入れられ度いのよ。そしたら本国から食物も送ってきてある筈だし……。ああ、苦しい、腕が抜けそうだわ。あら、あなた達何よ！そんなにジロジロ眺めないでよ」

囚人達を見物して居る看護婦達を青い眼で睨み上げてエリザベスは噛みついたが、彼は捕虜になるのを是認して居る国に生れたエリザベスがつくずく羨ましくなつて黙つて地面を見詰めて居た。

輸送機の荷物室に追い込まれた二人の囚人は背中合わせに坐られ、護送の婦人下士官がポケットから取出した別の手錠によって後手錠の鎖と鎖とを繋ぎ合わされた。扉が外から閉められると荷物室は真暗になった。

「未だ離陸しないのね。ちょっと横にならない？ ああ、少し楽になったわ。吊縄だけでも解けないかしら。あら、結び目が前にあるのね。あ、体をもっとねじつてよ、苦しいわ」

真暗な中でもぞもぞして居ると体が触れ合つて彼は喘いだ。

「けど、あなたは一体どうしたの？ え？ ポートダリンの収容所から船で送られる途中沈められたのね。しかしおかしいじゃないの？ 味方に救われたのに何故そんな風にされてるの？ え、何だつて！」

捕虜になるのが罪に問われるのだと聞いて彼女はたまげた様子だった。

「考えて見ると、あなたには気の毒したわね。ホラ、ドックの横の

棧橋の上で……」

あの時には全く腸が千切れる様な無念さを味わった彼は、今その彼女エリザベスとその肌に鞭痕も生々しく囚われの身となつて呻いて居るのを身近に感じたものの、少しも胸は晴れなかった。我が身はこれから十五年の苛酷な刑を受けねばならないのだ。戦争はどっち途あと二、三年で終るだろう。そしたらエリザベスは自由の身となつてむしろ讃えられて本国に迎えられるのだろうが、この身の鉄鎖は戦争が終つても解かれはしないのだ。彼が熱い涙で頬を濡らすうちに漸く輸送機はまたよたと離陸したのであった。

○

後方の大兵站基地ジャボ島のパンドンに着いた一郎とエリザベスは夕暮のアスファルト道を陸軍憲兵隊に曳かれた。

「海軍法務兵曹長中田昌子は、捕虜一名及び既決囚一名を護送してラパールより只今到着致しました。受領して下さい」

跪まずかせた囚人達の腰縄二本を左手に握り、踵が少し高い白靴のかかとをカチツと合わせて中田昌子兵曹長は白手袋の挙手の礼のまま申告した。白いスカートの中で膝と膝がピタリとくっついて居た。

「御苦労様。連絡があつてから予定時刻に着かないので心配してたのよ。今夜はゆっくりしなさいな。ホテルに部屋を取つてあるわ」
当直の憲兵中尉の婦人がそう言つて書類にざつと眼を通してサインして返した。

「はい。ありがとうございます。これっ、二人共立って……」
カチャカチャと後手錠が外され捕縄が解かれた。

「ああ、禪はそのままにさせたらどう？ どうせ汚れてるし、

洗濯させたのをお渡しするわ」

「は。済みません。何しろ禪なんかでも矢張り員数ですから」

「ま、コーヒーでも飲まない？」

コーヒーの香りに生唾を呑み込んだエリザベスに現われた婦人憲兵が手錠を嵌めて連れ去った。その白い背中を見送って居た一郎はがっしりした体格の憲兵に眼から火が出る程ビンタを取られ、右手首に片手錠を掛けられて曳き出され地下の監房にぶち込まれてしまった。その監房には既に五名の囚人が禪一本で繋がれて居た。彼等は皆、既決囚達で、監獄に送られるのを待って居るのであった。そして海軍の水兵だった男が一人混って居た。どうせ内地に送還される筈はなく、このジャボ島の軍監獄に送られるのに相違ないが、外地の軍監獄では陸海軍の区別がないしかった。一週間程経って総勢二十四名、男ばかりの囚兵達は曳き出されて監獄に送られた。両手に前手錠を固く嵌められた囚人達は憲兵隊の庭に長く延びた一本の太い鎖を跨いで一米半程の間隔に並んで立たされた。愚図愚図して居る囚人には容赦なく革鞭が飛んで、あちこちに悲鳴が尾を引いた。地上の鉄鎖が、各囚人の両脚の間をそのまま持ち上げられ、手錠の鎖の中央に南京錠で結合された。

「駄足！」

自転車に乗った二名の婦人憲兵が前後を護って囚人の群を追い立てた。最後尾の囚人の両脚の間には、未だ五米ばかり余った鎖が地上を後ろに引き摺られてガラガラ鳴った。

朝日を背に受けてアスファルトの道路を鞭で追い立てられて喘ぎ走り連鎖の囚人の群を現地人の男女が薄笑いをその褐色の顔に浮べて見送って居た。全身汗にまみれ、破れんばかりの胸を大きく

喘いで口から泡を吹き乍ら囚人達が追われて来た所は、パンドンから西に約五キロ程の海岸沿いに在って倉庫を改造した軍監獄であった。

門を潜ると長方形のコンクリート造りの倉庫群が灰色に並んで居た。連鎖だけを解かれた囚人達は重い旧式の監獄手錠を両手に大きく胸を波打たせて獄庭に立たされた。倒れそうになった囚人には氣付けの鞭が与えられた。軍曹の襟章をつけた看守長が長い革鞭をピューピュー振り乍ら、二名の看守を従えて、黒い長靴を光らせて出て来た。

「そっちの端から一匹宛ここに来て、娑婆に居た頃の官姓名と罪名、刑期を言え」

囚人達は次々に一名宛照合されて、囚人番号を額、胸、背、尻に刷られ、そして二人宛腰を連鎖されて行った。半分程が処理された頃、二名の婦人看守が小さな箱を持って出て来て、処理済の懲役囚に、囚人禪の後ろの結び目を解かせて前で高く掲げて持って立たせた。一郎がポートダルの捕虜収容所でそれを嵌められるのを免れ得たあの錠、即ち黄色頭の重捕虜達がそれを施されてのたうち回って居たあの痛ましい「錠」を嵌められるのだ。彼の番が来た。

「元海軍飛行大尉武林一郎。俘囚罪、機密兵器遺棄罪及び機密漏洩罪……」

看守長の大きな目がギロリと光って彼は膝頭が震えた。

「懲、懲役……十五年……、刑の執行をお願い申し上げます」

「ふん。よし、貴様は一二三号だ。覚え易いだろ」

体中に番号が刷られ逃亡罪で終身刑の一二四号と連鎖された。

「無駄飯を喰わねえ様にしといてやるからな」

腰の鎖は肉に沈む程きつくきつく締められて、小さいが頑丈な海老錠がカチリと鳴った。

婦人看守の前で、禪の後ろの結び目を解くのに手間取って彼と一二四号は鞭の下で悲鳴をあげた。結び目は固いし、両手には固く手錠を掛けられて居るのだ。

「お互いに相手のを解いてやればいいのよ。そう言う時には」

「戦友は助け合わなきゃいけないわね。ホホホ」

薄い手袋を嵌めた細い指が延びてカチリと錠が嵌った。覚悟はして居たものの、骨身に沁みる屈辱と悲哀とに彼はク、ク、クッと小声で啜り上げた。一二四号は身も世もなく体を戦慄させて唸る様に咽び哭き続けて居た。どんな男でも否男らしい男である程、やる方ない悲哀のどん底に突き落されて号泣する一瞬であったが、それを嵌め施して居る二人の婦人看守は、唇に冷笑さえ浮べて小面憎い程の仕草であった。

「泣いてたって仕方ないよ。男の懲役囚には嵌める事になってるんだからね。心配しなくても命にや別条ないわよ。ホホホ。さ、早く禪を締めてあっちへお行き、次のがお待ち兼ねだよ。早く嵌めて欲しいってさ。フッフ」

「もっときつく締めるんだよ。鞭をやるうか？内地の監獄じゃ禪なんか締めさせて貰えないんだよ。占領地じゃ現地人の手前もあるから特別のお慈悲なのよ」

処理完了の囚人達に混って立って頭を垂れると、腰鎖で深くくびられてふくらんだ腹が眼に入り、頑丈な監獄手錠のU字環が両手首に黒々と重々しくがっしりと喰い入って居るのが見え、そしてその下に在る禪の前袋がその一部分を錠の形に盛り上げてピッチリと喰

い込んで居るのが眼を悲しく射た。

「これで俺はもう懲役囚なのだ」

と思うと囚われの悲哀が腹の底からこみ上げて来て、重い手錠の両手を少し持ち上げ上半身を屈めて彼は眼頭を押えた。

「ああら、これ皆新入りなの？」

嬌声に顔を挙げた彼は、若い女性が少し離れてこちらを眺めて居るのに気付いた。白っぽい薄物の和服を大きく衣紋を抜いて着たその婦人は、黒い扇子をひろげて口許を掩い、眉をひそめては居るものの、男好きのする浅黒い細長な顔に好奇の笑みを浮べて居る。

「あれ誰？」

「あら知らないの？ 所長が熱を上げてる芸妓よ。パンドンに中川って料亭があるでしょ」

「ふん。そうお」

二人の婦人看守は女性の方を、ちらっと横眼で眺めてそっぽを向いた。

「あ、そうだわ。思い出したわ。ちょっと待ってよ」

芸妓が小さく叫んで引返して来て一二五号の顔を覗き込んだ。

「この囚人ですな。こら、顔を上げる」

鞭が背に飛んで一二五号は齒を喰いしばって悲鳴を耐えた。

「あ、矢張りそうだったわ。スーさんじゃないの？ 矢張り本当だったのね」

「誰だ、此奴は？」

所長の問いに答えて軍曹が書類をめくった。

「一一五号……と。あ、杉浦忠雄であります。元海軍主計大尉。官品横領で十二年です」

「ね、この人ねえ、随分羽振りがよかったのよ。急に来なくなったと思つてたら……」

女にしげしげと見詰められた一一五号は全身で恥じて再び深くうなだれ、鞭が又も鳴って悲鳴が洩れた。手錠をガチガチ鳴らして顔を掩った両手の甲に手練の鞭が飛んだ。

「手を下ろせ。馬鹿野郎！」

女と男の様子を眺めて居た背広の中尉は、眼を光らせて女に言った。

「おい。お前はどの男と……」

「あら、そんなこと、どうだっていいじゃないの。もう済んだことよ。そして今は今よ」

「ふん。そうか。おい軍曹っ」

「ハッ」

「一一五号に二昼夜ばかり窄袋を掛けとけ。それでも未だ生きてたら、仕方ないから足に鎖つけて労役させろ。あの錠は鋏で打ち込んどけ。絶対に外してやってはならんぞ」

「まあ、そんな可哀想なこと。ねえ勘忍してやってよ」

「お前が余計なことを指図しなくてもいいんだ。さ、早く行こう」
女は一一五号を振り返り振り返り、せき立てられて立ち去って行った。

「あの女のために……俺はこんな……」

一一五号は女の跡を追おうとしたのか二、三步にじり歩いたが、忽ちせき止める腰の鎖に肩をがっくり落して全身をおのかせ乍ら低く切れ切れに呟いて歯ぎしりしたのだった。

「どんな間柄だったのか知らねえが、少しは哀れんでくれたじゃな

いか。これでも喰って忘れてしまえ！」

内股を鞭打たれた一一五号は文字通り飛び上って喚き身をよじって呻いた。

「貴様に教えといてやるがな。鞭を頂いたら土下座してお礼を申し上げるんだぞ。いいな。おいこら、一一五号。一一五号と言ったら貴様のことだ。世話を焼かせるな。今教えた事をやって見な」

如何に口惜しかろうと情けなかりうと、絶対の服従があるだけであった。

「ありが……とう……ごさいます。ヒーッ……」

額を地べたにすりつけた一一五号の元大尉は軍曹の足許にひれ伏して途切れ途切れにお礼を言ったのだったが、余りのみじめな思いに、言い終った途端、哭き出してしまった。

「フッフ、ま、いいだろう。最初だからな。さあ！来い。今日は休ませてやるが明日からキリキリ働くんだぞ」

◆強烈マゾ絵画

春川ナミオ画

〃巨臀に屈伏する〃

略号「まか」

B6版感光紙焼付 四枚一組 五〇〇円

人間トイレ
洋式トイレの中、美しい女主人の御用便の下に仰向けとなつて人間トイレの使命を果すコプロマニヤの天国の図。
人間椅子
遅ましい豊満な臀部が男の顔の上で押しつぶすのにつかたて、全体にも押し潰されそう。

臀部に潰された顔
洋椅子の上に仰向けになつたMの顔の上に、びったりと大きなお尻を据えた娘のニヤニヤした誇らしげな表情
太股に埋れたM男
男の首はポリウムのある女の両脚に跨がれて、その間に埋れてしまふ今まさに窒息寸前の恍惚境にあえいでいる。

サジスチック・ストーリー・シリーズ

女家庭教師

大 中 忠

真夏の太陽は高く、雲一つない空から勢一杯に照らしつけている。小高い丘の上にある豪華な邸宅は高い塀に囲まれてひっそりと静まりかえっていた。門の前に立った由紀は一息入れて汗をふくと、ゆっくり中に入って行った。全く、真夏の家庭教師なんて楽しくない。しかし、この家、昼間は中学三年の清子と若いお手伝さんだけしか居ないし、勉強のすんだ後は、裏のプールで一泳ぎ出来る。それを考えれば汗を流して坂道を登ってくるのも差し引きされようというものだ。大学も休みだし、何もする事のない由紀にとって毎日

泳げるということは大きな魅力だった。しかも、由紀は幼い時から古式泳法を父から習ったし、高校時代は水泳部にいた位だから、水に入れば自由自在だった。

今日も清子はショーツに薄い青色のポロシャツを着ていた。いつものように極端に短いショーツだ。太もものつけ根から、時によると後のふくらみも半分位むき出しになってしまふ。肉付きの良い若々しい脚だ。近頃の少女は皆、美しい脚をしている。座る生活から解放されたせいだろう。そのむき出しの脚を見詰めているうちに由紀は、ふと意地悪い考

えを思いついた。この清子は、もともと勉強の出来ない少女ではない。どちらかといえば良く出来る部類に入るだろう。しかし、不思議と英語の書取りだけは極端に悪かった。いつも終りに五十語書かせるのだが、ひどい時には半分以上間違えるのだ。それも極端に間違えるのではなくaとoを取り違えたり、rをeにしたりするのだが、他の部門が出来るだけに余計目立った。由紀は若々しい清子の体を見ているうちに、ふと悪戯を思いついた。「セーちゃん、今日から書き取りで間違ったら、その分だけ罰を加えるわよ。そうしない

と中々憶えてくれないもの。」

「いいわ先生。どうするの?」

明るい性質の子だ。

「そうね。間違いが十迄だったら、手を後で縛るの。二十迄なら腕も縛っちまうし、三十迄だったら脚も縛るのよ。」

「縛られるの? 一寸恐いようだわ。」

「嫌だったら間違えなきゃいいのよ。」

「どれ位縛られてるの?」

「十分間よ。」

「そんなに間違うつもり……三十以上だったら、もっと苦しい縛り方をするわ。」

「どんなの?」

「海老縛りっていうの、さあ、始めましよう。」

清子はお仕置きが待っていると、一生懸命になってお河童頭を机に近付けて書き始めた。出来上った答案は、いつもより真剣さが溢れていたが、由紀は一寸目を走らせてから

「何か紐はある?」

と目を答案の上に置いたままいった。

「駄目?」

清子のはがかりしたようにいつてから席を立った。その間に由紀の赤鉛筆は忙がしく走



る。かえって緊張し過ぎた為か、いつもより間違いが多い。用紙が真赤になった頃、清子は手にロープを三本持って戻って来て、心配そうに由紀の手許をのぞき込んだ。由紀は清子の視線を意識しながら、用紙の余白に大き

く27と書いた。23の間違いだ。

「駄目よ。さあ貸して」

清子の手からロープを取った。一本が縄跳び用のロープ他の二本が赤と青の物干用のものだった。

「さあ、こっちに来て、後向いて」

由紀は清子を傍のベッドに上らせると、両手を後にとった。清子の体にふれるのはこれが初めてだ。柔らかく温い体だ。細い手首に縄跳びのロープを巻きつけて締め上げる。

「痛いわ。」

「我慢するのよ。」

手首を縛り終ると赤のロープを胸に巻きつけた。薄青のポロシャツに赤のロープが美しく喰い込み、ふくよかな二の腕にも、柔らかな凹みを作った。清子は縛られながら、うなだれているので、お河童が白い顔に乱れかかり由紀からはその表情が見えなかった。上半身を縛り終った由紀は、清子の上半身を抱いてベッドに横たえたと青いロープでむき出しの脚を縛り出した。清子の体の最も美しい場所である脚は、ロープをはじき返すように若々しかった。膝と足首をつけると、ふくらはぎの部分には全く隙間がなかった。ほど良く締ったふくらはぎ、豊かな肉付きを見せる太もも、薄い小麦色にやけた肌は全く自由を奪われてしまった。清子は、すっかり体の自由を奪われて、じっと、ベッドに横たわっていた。由紀は清子の体のむきを変え、自分の方向に向けた。

「痛い？」

「手首が一寸。」

その顔に頬笑みの浮んでいるのを見て由紀はほっとした。

「縛られたのは初めて？」

清子はうなずいた。

「先生は？」

「私はあるわ。」

「縛られた？」

「そうよ。」

「悪いことしたの？」

「そうじゃないの。練習のためよ。」

「縛られる？」

「いやだ。違うわ。水泳の練習よ。」

「縛られて泳げるの？」

「泳げるわ。」

「足も縛って？」

「勿論よ。」

「後でやってみて。」

「そうね……いいわ。セーちゃんにも教えたげる。」

両手足を縛られながらも清子はほがらかだった。太ももと可愛い胸のふくらみに喰い込む縄目が痛々しかった。無駄話をしているうちに十分は過ぎ、由紀は縄を解いたが、縄目

の跡は柔肌にくっきりと残っていた。

「痛かった？」

「一寸……しびれちゃったわ。」

清子は両手首をふりながら言った。

裏のプールは強い陽を浴びて輝いている。

隋田の変型のプールには澄んだ水が満々とたたえられている。水着姿になると、二人共美しい姿をしていた。清子の方が少し肥り気味だが、その曲線には、幼なさがあらわれていた。脚の形は清子の方が美しかったが、由紀の体にはひきしまって、きたえられた美しさがあった。二人は準備運動をすませると水に入った。さすがに由紀の泳ぎっぷりは見事だった。少しも無理のないフォームで、きたえられた体が流れて行くのは全く美しいものだった。それから見ると清子の泳ぎは固いが、それでも、相当泳ぐ方だ。軽く流した後、二人はプールサイドで一息入れた。

「ねえ先生、さっきのやってよ。」

「さっきのって？」

「縛られて泳ぐのよ。」

「あああれ、いいわよ。ロープは？」

清子はすぐに先程自分の自由を奪っていたロープを持って来た。プールのふちに腰かけて由紀は両手を後にまわした。

「さあ括ってごらん。」

後に重ねた由紀の両手首に清子の可愛い手がかかり、ロープが巻きつき始めた。縛り方等知らない、いい加減な縛り方だったが、それだけに無暗に手首に喰い込んで血行を止めた。手首を縛り終ると、別のロープを胸のふくうみの下につけ、しめながら二の腕にまわして行つた。むき出しの腕にロープが痛く、充分に締め上げられた為、胸のふくらみに深々と喰い込み、その為に水着が下にずれ豊かな白い乳房が半分程露わになってしまった。両手が全く動かなくなると、由紀は両脚を水から上げて清子の前に伸ばした。清子は水にぬれて光る由紀の両脚を揃えると、ロープを巻きつけ始めた。ロープが締められ、両方のふくらはぎが押しつけられると、由紀は喜びにも似た感情を味わった。それが、少女に縛られる喜びなのか、自分の肌に対する愛情を再確認した喜びなのかは、はっきりしなかった。両手脚の自由を全く奪われた由紀はふたたび、プールのふちに腰かけた形になると、清子に後から押してもらった。一瞬、一きわ高い水しぶきが被縛の乙女の姿をかくした。一度沈んだ由紀はすぐに浮かび上ると、不自由な体を器用に動かして泳ぎ出した。脚の屈

伸だけによる泳ぎである。しっかりと縛り合された脚が縄の抵抗をはね返すように力強く曲げられ伸ばされた。プール・サイドで見詰めていた清子はあまりの見事さに茫然としていたが、やがて水中から自分を呼ぶ声に我に返った。

「もういいでしょう。セーちゃん。上に上げて、縄が苦しくって。」

胸を縛った縄は縄跳び用のものであった。水を吸った縄は著しく縮み、柔らかな由紀の乳房を激しくしめつけた。水着はすっかりずれ乳首の薄紅が見える位になっていた。そのむき出しになったふくらみにも縄が深々と喰い込んでいた。由紀の荒い息使いに、清子は慌てて手を延ばし由紀の体をつかもうとしたがぬれた素肌はすべて指がかからないし、縄目は深く肌に喰い込んで指が入る隙間もなかった。清子はつかめないとすると水に飛び込んだ。水はさ程深くはなく、清子の背も充分立つ。清子は、不自由な由紀の体をかかえた。水中で縄を解こうとしたが、これは無理な話だ。清子は由紀の体が沈まないよう、しっかりと抱くと家に向ってお手伝さんと呼んだ。由紀は、いくら同性とはいえ、清子以外にこんな姿を見られるのが恥しかった。肌を

露わにしたまま手足を縛られているのは、理由がどうであろうと、他人の目にさらす姿ではなかった。しかし今はどうしようもない。清子に助け上げる力はないし、自分ではどうい上れそうにない。由紀はあきらめて、シーちゃんと呼ばれるお手伝いさんの来るのを待った。

「あら先生、どうなさったんですか。」

シーちゃんは由紀と同じ位の年頃である。あわてて助け上げたシーちゃんは清子と二人がかりで固く喰い込んだ由紀の縛しめを解いた。手足が自由になっても、しばらくは体が動かせずに由紀は両手を後にまわしたままじっとしていた。腕にも脚にも縄目が赤くクツキリ残っていた。

「どうなさったんですか。」

シーちゃんは横たわった由紀を心配そうに見ながら言った。

「手足を縛って泳ぐのを見せてもらったのよ。先生、大丈夫？」

清子は心配そうに由紀をのぞき込んだ。

「大丈夫よ。」

由紀は頬笑んで体を起した。

「手も足も使わないで泳げるんですか。」

「泳げるわよ。先生、上手よ。シーちゃんも

やってみない。」

「とんでもない、私なんか駄目ですよ。それに、これからお使いに行かなくっちゃ。」

シーちゃんは逃げるように家の中に入って行った。由紀は助かったような気になった。シーちゃんがしてみると言ったら、どうしようかと思ったのだ。清子と二人の楽しみを奪われるような気がした。一息つく、由紀は水着を直してから

「さあ、今度はセーちゃんよ。」

と言った。

「私出来るかしら。恐いわ。」

「大丈夫よ。私がささえていて上げるから。」

さあ、手をまわして。」

由紀はこの可憐な少女をふたたび、しかもさつきより露わな姿で縛れることに、いつしか喜びを感じていた。清子はプール・サイドに腰掛けると両手を背中にまわした。よく見ると先程の縄目の跡が柔らかな二の腕に、かすかに残っていた。由紀はビニール・ロープだけを使って、手首と胸を縛った。先程よりも少し力をこめて。清子の胸はまだ充分にふくらんではいなかったが、柔らかく、ロープは気持良く喰い込んで行った。

「脚は自由にしとくわ。初めてだから。」

少女を縛り終った由紀は先に水に飛び込んだ。清子は喜びと不安の入り混った様な表情をしていた。由紀は柔らかな少女の体をそつとささえて水に入れた。縛り合わされた両手に力を入れているのがはっきりと判った。家の方で、シーちゃんが出て行く気配がした。きつとお使いに行くのだろう。

二人の少女はプール・サイドで息を入れた。清子はまだ後手に縛られたままだ。ぬれた太ももや丸い肩に陽の光が美しい。

「普段何とも思わなくても、両手が使えないと不便でしょう。」

由紀は清子の二の腕に喰い込む縄目に手をかけて言った。

「本当に。全然体が動かないもの。」

「一寸立って歩いてごらん。」

由紀は縛り合した両手をつかんで清子を立たせた。清子は素直に立って歩き出した。自然とうつ向いた姿勢になる。

「歩みにくいし、恥しいわ。悪い事した人みたいで。」

「大丈夫よ、誰も見てないわ。」

事実、ここは何処からものぞかれる心配はなかった。

「一寸待って、もう一本あるから、これでも

っと縛ったげる。」

由紀は残った一本を手にとると、立ったままの清子の首の後に二つ折りにしたロープをかけ、前に垂らした。小さな乳房の間で二本を交叉すると、曲げられた両肘の下にかけ、後をまわして細いお腹を一周りして前にまわした。ぬれた水着がびったりと肌につき、お腹の中央に小さい窪みが見えた。さらにロープは一寸抵抗した太ももを押しわけ、後にまわしてしぼり上げられた。柔い部分に喰い込むロープに清子は一寸うめいた。

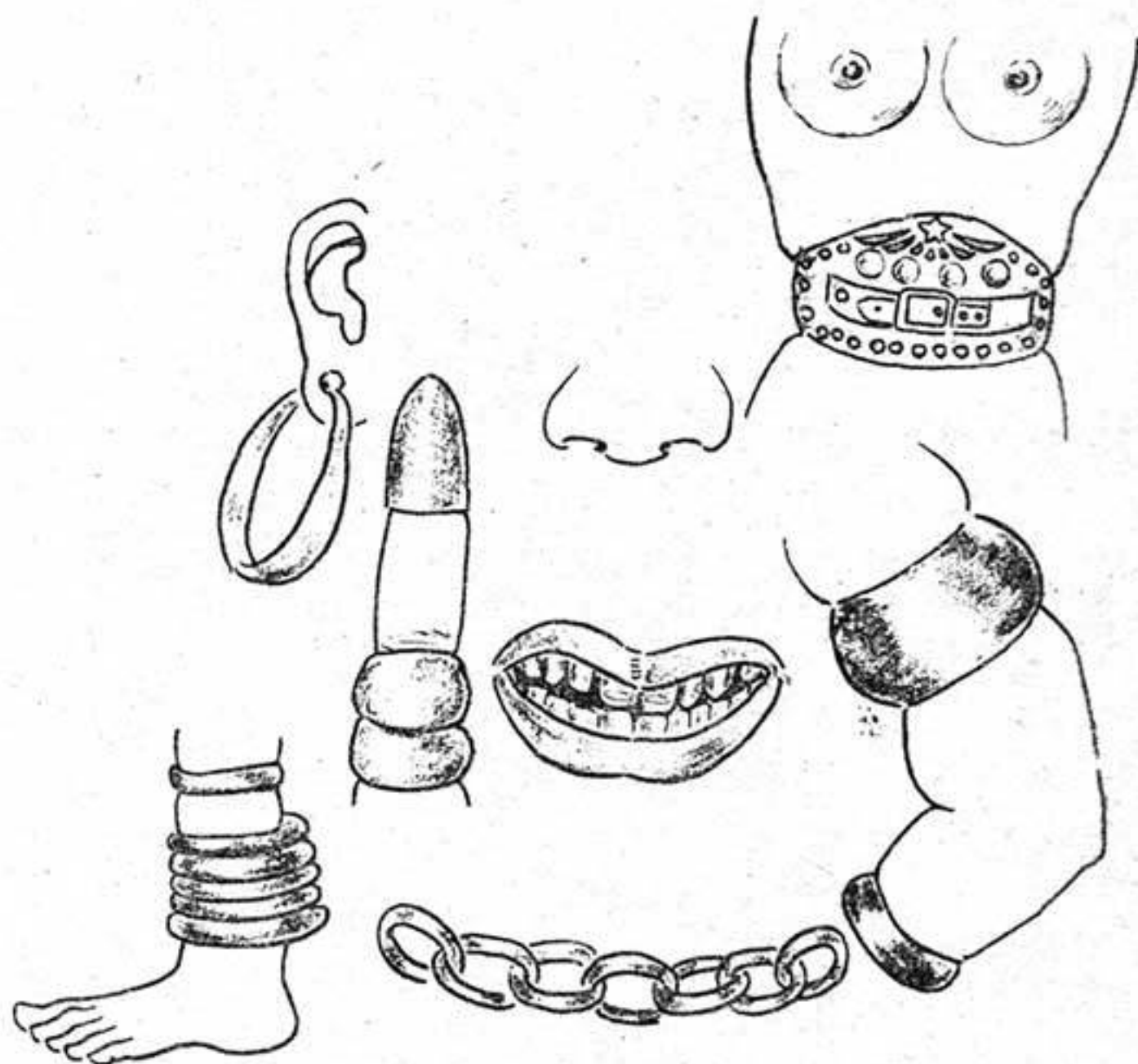
「さあ、セーちゃんは囚人よ。歩いてごらんさい。」

縄尻をとった由紀は愉快そうに言った。清子はゆっくりと歩き出した。由紀の目の前には縛り合わされて、しっかりと握りしめた両手があり、ロープのくびれ込む柔らかな体があった。由紀は前を行く少女の哀れな姿を見ているうちに、この少女を真裸にして縛り上げ、うんといじめてみたくなった。汚れをしない少女の肌を責めて彩り、思い切り抱きしめたくなった。

水着姿の二人の少女はプール・サイドから家の方に静かに歩を進めていった。健康な素肌に清潔ふくらみに夏の陽は明るかった。

＜読者の告白＞

「黄金マニア」

西
条
悦
美

私は、黄金の魅力がたまらない。あの山吹色の色彩と、あの美しい光沢、それは私の胸をふるわす程の魅力があるのです。又同時に私は、腹部に対する被虐を楽んで居るのです。これは、マゾ分野でしょうか。それも金

色の金属製のベルトでぎゅうぎゅうと締めつけられたら、尚さら私は被虐の快楽に酔う事でしょう。多くのロープの縛りや、普通のベルトでは、この半分も味えないのです。良くオートバイに乗る人の腹部の特製のベ

ルト、黒い幅の広い上下に金具とボタンのついたものでしたら一層魅力を感じます。私の今愛用して居りますのは、特に注文して作ったこのオートバイ用のものと同様の物で、それに一面に金色に着色してもらい金具を付けてその飾りとして居ります。これは常に、着用して居りますが、その緊縛感はとてもたまりません。

次に私の金に対する狂的な愛着ぶりについてのべて見ましょう。まず私は、上下共に全部、金歯を嵌めて居ります。口紅の色はパーマネント・ローズを好み又時としてはダークを用い然も極端に大きく画きます。必要以上に大きく画くのです。歯の金冠がガラガラと輝き真紅の唇との奇怪なコントラストをかもし出します。次にやや大きめの環と鎖での金色の髪かざりをし、首には太い鎖状の首飾りをつけ変型の大きな金の耳環をつけます。

次にこれは常に取った事のない金色の腕環で幅五センチのアールの大きなものを、二の腕に肉も喰こむ程強くしめて止めてあります。かなりの重さであり、始めは腕を伸縮するたびに、しびれる程でしたが、段々と肉に喰いこみ、なれるに従って、さして苦痛でもなくなりましたが、痛い事は変わりありません。

ん。何しろ14金であるので、手がだるいような重さを感じます。又そのだるさも魅力の一つなのです。時々はずして見ますと紫色にその部分だけくっきりと跡がついて居るのには驚きました。

この腕の環は、飾り彫刻などないものです。これを両方の二の腕に各々一つずつ嵌めておきます。さらに手首には幅三ミリ程の金の腕環を片方に二つ乃至三つ共嵌めます。これも両手首です。又指には人差指から小指迄1センチ以上の幅のカマボコ型指環を二つつ両手に嵌め、爪には金色マニキュアをし爪は長くしてあります。又足の爪も同様金色ベテキュアをし、又足環として腕環を代用し、これもなるべく幅の広い物ばかりを皮膚も見えぬ程に、然も肌に喰入るように嵌めます。

こうして全身をことごとく金色一色でギラギラと飾り立て、全裸で鏡に向うのです。そこには、不可思議なアラビアの姫があるので。こうして異性の方々からあらゆる責め特に腹部の加虐を受ける事が出来たらと一人悶え苦しむ姿体演じて見たり、又顔面に金粉を塗ったりして見たり、一人室をあたため大きな姿見の別の私に話しかけたりして居ります。

す。これは一人私の秘めたる只一つの遊戯に他なりません。幸か不幸か私は只一人の生活です。誰からも気づかれずに一人楽しい毎日を過して居ります。

願わくば異性のサディストの方に共に遊戯のおあいてになって下さる方があれば、どんなに嬉しい事でしょう。只私はもう完全なるマニアであるのでしようか、秘密として知られ度くないと云う気持と此の姿を見せびらかして歩いて見度い気持とが働きます。しかし今のところ自分でフォートにしたのみで実行しては居りません。

通常外出の時は金歯は固定したままですが手首の腕環一つと指環は藻指と小指に各一つを嵌めイヤリングか首飾りのどちらか一つをつける程度にし又、金色マニキュアは落して銀真珠色に光るパールかダークレッドのマニキュアにします。又時たまパーティなどの時には思い切って金の靴（舞踊靴）とゴージャス（複雑）な金色のドレスを着、金色マニキュアをしこの腕と手首に金の腕環や大きなイヤリングをつけます。此の時は金色ベルトは止めてウェストニッパをして居ります。ニッパの方はベルトとは又異った緊縛感があります。

今一つの私の性癖としてコプロ趣味的にわざと金歯の沢山入った歯を磨かずに金歯が汚くくもり金歯の上部に歯垢が沢山たまり金歯特有の臭い息にしてみたりします。これは、多く脂肪食を採り三日位歯磨を中止しますとすぐ金歯は汚れ出します。自分でも分る口の息の臭みと極度に汚れるのは、どうしても一週間の歯磨を止めてからでないと、その汚さは人に分る程になりません。

ごく親しい同性のお友達から『あなた歯どうしたの汚いわよ、それにとってもお口が臭くてよ』と注意されると内心恥かしさと又何にもたえようもない程胸がふるえる様な快感にひたれるのです。『あーこれが異性の方であつたらどんなにか楽しいことでしょう。そして嫌がる少年を抱き此の臭い口で無理に接吻したら又此の金歯を年下の少年に歯垢の掃除や金歯磨をさせたりしたらとの夢の様な事を考えて居ります。』

総合して見ますと、私はサド、マゾ、金歯のフェチ、黄金マニア、コプロラグニーとが共存する様で御座居ます。今でも、私はもっともっと黄金のアクセサリーを蒐集し、それにうずまって見度いと願って居ります、此の奇怪なマニアをお笑い下さい。



近代史に拾う女腹切

数 寄

咲

一、明治大正時代の女腹切は

案外多かった

奇クの読者通信を読んでいますと、切腹を讃美した投書が、男性にも、女性にも、なかなか沢山あるので、やっぱり日本人って、不思議な国民だと、しみじみ感じます。日本人の心の奥底に、何か自殺―切腹にひかれる民族感情が、ひそんでいるような気がいたします。日本は自殺王国です。男女約同数で、併せて約二十万人の人達が、毎年毎年、自ら生命を断って死んで行きます。

西洋のキリスト教国のような、自殺に対する罪悪感は、まあ一般の日本人には、あんなにないようです。むしろ「花は桜木、人は武士」で、美しくパツと咲いて、一夜の中にパツと散る、死にぎわの見事さを讃美するお国風ですから。それには、切腹は、自殺の方法としては、刃物一丁があればいいのだし、刃物は、どこでも、いつでも手に入るものですから、男女何時でも実行できる便宜があります。それに、切腹は、死の苦痛が思ったより少いようですから、日本人にいちばんふさわしい自殺の方法でしょう。

短刀で、左乳の下を突いた乃木大将夫人が二度、三度、満身の力をこめて突いても、刃が肋骨にひっかかって、どうしても深く入らないので、四、五度目に、自分の体重を短刀にかけて、やっと肋骨を切り破ったことは、有名な事実です。これに比べて、お腹は、広い面積に、骨は一つもありません。短刀でもさしみ庖丁でも、かみそりでも、刃さえよく切れれば、女の力でも充分に切腹はやり遂げられます。奇クに載せられた、皆川波留子さんの切腹の実験でも、山田久仁子さんの切腹の体験でも、何とやすやすと切れるか、みな

さまで承知のことと思います。最近号では、藤村陵子さんのすばらしい切腹体験記が誌上を飾っております。

明治の時代だって、大正の時代だって、今のお姉様方や、奥様方と同じように、切腹を讃美した女性が、たくさんいたわけです。したがって、女の腹切りだって、ずいぶんたくさんあったことは、充分に想像することができます。ただ、何としても、資料が今に残っておりません。女性の切腹が新聞に出たとしても、ローカル版に出るだけで、全国的には一年間に女腹切が何件あったか、とてもわかりません。昭和時代になってからでも、わからないのですから、明治大正の女腹切の件数など、とてもわかるわけがありません。

朝夕の新聞の三面記事を、気をつけて見てみると睡眠薬全盛の今時でさえ、一年間に三人や五人は、女性で腹を切って死ぬ人があるようです。近代史百年間の女腹切の数は、何百人いや千人にも二千人も上ることは、たしかだと思えます。自分のことを言って、まことは恐れ入りますが、わたくしのような交友が少なく、社会に活動する範囲がごく狭い人間でも、小さい時から今までの人生経験に女性の切腹を見たり聞いたりした数は、かな

りございます。

わたくしが五才か六才の小さい時のことです。たいへんわたくしを可愛がって下さった美貌の未亡人が、亡くなった夫の跡をしたって、切腹されたことがあります。色の白い、たいへんからだの美しい方でした。公休日に店員や女中を遊びに出したあとで、昼間切腹なさったのです。下腹を十七、八センチも一文字に切ったときに、女中が、ひょっこりと帰って来てしまったので、すぐ発見されて、外科の病院へかつぎ込まれました。発見が早くて、病院ですぐ手当てをしたためもありましょう、外科医が意外に思うくらいに、奇跡的に助かったのです。この若い未亡人は、わたくしの母の親友でした。未亡人は、わたくしが幼児なので、気を許したのでしょう、お風呂で、お腹を横に走っている、こわいような傷跡を見せてくれたことが、たびたびありました。わたくしは、小さい手で、未亡人のお腹にある皮膚の縫合の跡を、そっとなでて見たこともございます。

いまでさえ、わたくしたちは、このような女の切腹を、見たり聞いたりするのですから明治や大正の時代には、日本中では、たくさん女腹切の実例があったことでしょう。

二、江戸屋敷の女腹切

木村毅氏によりますと、明治維新の市民革命は、同時に、封建的の反人間的な女性圧迫の歴史が終って、日本人の女性観がすっかり変った、女権拡張の時と見ておられます。「封建時代の日本人は、女性を妻として、母として遇する以外には、遊女として享樂することを知っていた位なものである。」と極言しておられます。したがって、慶応四年の一年間だけでも、女性の歴史として調べて見ますと、今までの史家が手をつけていない未開の分野がたくさんあるように思われます。

ともすると、明治維新は、勤王と佐幕との闘いとのみ、大づかみに考えがちでございます。それはその通りなのですが、その勤王の中にも、佐幕の中にも、各藩―大きな藩も、小さな藩も、それぞれに、内部の分派―激論党と俗論党とのたたかいは、実に驚くほどのさまじかったもののようにです。このような動乱期には、女性も女性自身として、自分の帰趨を決しなくてはならず、女性が政治的に活動したり、男性のさむらいたちと同じような気持ちで行動したことが、今日からでもはっきりとうかがい知ることが出来ます。一口に

言えば、封建の社会で奴隷化されて来た女性が、明治維新で、人間的に、男性と同じように行動するようになったと思われます。

江戸時代末期までは、男子のさむらいが切腹するときには、介錯人には、同僚のさむらいとか、家来とかがなるのが普通です。切腹人の首を切り落として、死期の苦痛を短くしてやったわけです。それが、明治維新になりますと、夫が切腹したときに、妻が夫の首を切って介錯するというのが、相当に頻繁にあったようです。ただ今、わたくしの手許に史料がございませんので、正確なことを申し上げることができないのが残念です。慶応元年のことです。第一回の長州征伐の時、倒幕急進派の長州の三家老、福原越後、国司信濃、益田右衛門の三人が切腹して、幕軍と講和したのですが、この時三家老は、藩主からの検視の役人の来ないうちに、それぞれの自宅で切腹しました。切腹の室には、家来や親戚の者を一人も入れず、妻が一人で夫の介錯をしたそうです。夫が三宝の腹切刀を取って腹に突き立て、充分腹をかき切ったのを見とどけて、妻は夫の手から腹切刀を受け取って、夫の首を切り落しました。よっぽど気丈夫な女でなければ、できないことですね。た

らいのお湯を女中に運ばせて血だらけの夫の首をよく洗って、首桶へおさめました。やがて、検視の役人が到着した時には、衣服改めた妻が、夫の首桶を持って役人の前へ現れました。これにはさすがの長州武士も、驚嘆して夫人の勇氣に打たれたと聞いております。

明治維新の時の、各藩内の勤王佐幕の闘争は、実に惨烈を極めました。たくさん志士が、互に斬り合い、殺し合い、その上に藩論の変るたびに、たくさん男や女が切腹しました。長州も、薩摩も、土佐、ほとんど全国の各藩がそうでした。いわゆる党禍の犠牲になった男女は、非常な数にのぼりました。

土佐の武市三平太（映画の月形半平太のモデルです。）が佐幕派のために切腹を命ぜられ、腹を三文字に切って死んだのも、慶応元年五月のことでした。中康弘通氏著「切腹」は、土佐偉人録から引用して、次のように三文字切腹のようすを伝えています。

「顔色凜然、匕首を執って腹を割き、左より右に及ぶこと三回、三字状をなす。すなわち端坐のまましづかに両手をつき、首を俯す。」

慶応四年正月、鳥羽伏見の戦争の勃発によって、土佐藩の内部は、全く分裂してしま

しました。藩主山内容堂は、京都に居て、ひそかに幕軍に内通して、薩長勤王軍の背後から急襲するはずだったのですが、部下の土佐本隊は、倒幕派の谷干城（後に西南の役に熊本城を死守した人）に率いられて、薩長の勤王軍に合流して、幕軍の攻撃を始めてしまいました。藩主は、あわてて、谷干城以下を藩士の籍から放逐して、使を幕軍の本営大阪城へ急派したのですが、その時はもう大阪城の慶喜將軍は、海上へ逃げ出して、城中はもぬけのからになっていました。この報せが、急使によって江戸に知られました。いちばん困ったのは、土佐藩の江戸詰めの人達でした。封建の武士として、主君徳川家に叛き、密約を破って、あべこべに幕軍を敗走させたのですから、たいへんな不忠不義になります。

この時江戸にいた、土佐の山内の一族、遠州の山内豊福は、このような事態になった以上は、切腹して武士の本分を全うするより外に道はないと思いました。江戸城を退出して自宅へ帰った豊福は、一室に妻をよんで、自分の苦しい立場を打ち明けました。豊福の妻もさすがに維新の女でした。

「土佐の御本家が、主君徳川家に叛逆いたしましたことは、もう明らかな事実となり

ました。あなた様が、いかに江戸城内でご弁解なされても、不忠不義の逆臣としての汚名を、お申し開きなされることはできません。いずれは、この江戸へも攻めてまいりましょう。そのとき、あなた様は、幕府軍として、御本家の土佐藩とは、敵味方になって戦さをなさらなければなりません。そのようなことになりませぬ今の中に、どうかお腹を召して、清い名を後世にお残しなされませ。わたくしも、武士の妻として、女ながらも、腹切りのし方は心得ております。腹かき切って、あなた様の冥土の旅のお伴をいたします。」

と、けなげに夫を激励して、自分も切腹をする用意に取りかかりました。

土佐藩の分家で、遠江に領地を持つ、まことに小藩ではありますが、大名には違いありません。その大名の当主と、その奥方が、家臣に死を秘して、一室に籠って切腹するので、すから、徳川封建の政治はじまって以来のことだったでしょう。

鳥羽伏見の幕軍の敗報で、家臣の心は全く動揺しておりました。自分達夫妻の切腹がわかれば、血氣の家臣達は、何事を仕でかすかわかりません。夫妻は、輕拳をいしめた遺

書を、家中の者に遺しました。慶応四年正月十二日の未明のことでした。豊福が、短刀で腹を一文字にかき破って、北枕に倒れました。妻は、おくれじともろ肌押しぬいで、懐劍の鞘を払いました。薄明の夜明けの光に、じつと夫の横顔を見つめて、「わたくしも、これから、あなたのお伴をいたします。」と一言、刃をぐっと左下腹部に突き立てて、力の限り右へ引き廻しました。にぶい光で女の手元を照らしていたあんだんの障子に、パッと血しぶきがして、まっ赤なしほり染めのような模様が流れました。夫人は上体を起して、のび上って、かすかにゆらぐあんだんの火を、フツと息で消してから、いかにも満足そうに、血に染った夫のからだの上へ、がばと身を伏せて、静に末期のせまるのを待ちました。

京洛の天地に薩長土の連合軍は、幕軍の大部隊を完膚なきまでに撃破して、明治維新の希望にかがやく、革命の歓声がとどろいていました。その歓声の蔭に、江戸では、遠州山内の江戸屋敷の一室で、山内豊福とその妻が割腹して、夫妻折重なって、血に染った屍体として発見されました。

勤王軍に参加した各藩の江戸屋敷は、どこ

も土佐藩と同じように、憂愁に沈んでいました。山内豊福夫妻の切腹を聞き伝えて、二三日後には、幕府の旗本の一人で、津和野藩主亀井氏の分家某（詳しい名が伝わっていないのが残念です。）が、江戸幕府と、本国の勤王軍参加との板ばさみに、「士道の道義を全うし得ず。」との遺書を残して、夫妻切腹を遂げたことが伝えられております。

慶応四年正月の史書は、山内豊福夫妻の切腹、亀井某夫妻の切腹を伝える条に、「この時、この種悲愴なる切腹諸方にこれあり。」と記してあります。明治政府が、勤王の士の評伝は詳細に伝えながら、幕府および親幕の人達の事績を全く抹殺してしまったことは、今日から見れば、まことに残念なことだと存じます。

追記 近代史のなかから、正史にはない女性の切腹を拾い出して、ぼつぼつお送りいたします。フィクションとちがって、史料の裏付けのある事件だけを書きますので、面白い読物にはなりそうもありません。読者の方々の創造力におすがりして読んでいただきます。

花 と 蛇

(第五回)

団

鬼 六

羞恥地獄

ソバカスだらけの顔を歪めて、高笑いしながら、田代と森田は酒をくみかわしている。酒の肴は、眼の前に、おしめをかえられる時の赤ん坊のような恰好に縛りあげられている美女静子夫人であった。

浣腸による美女の排泄というすざましいシヨウがたった今、終わったばかりで、男達は、興奮がさめやらず、放心忘我状態の静子夫人を取巻いて、数え歌の合唱などを始める。「素ばらしかったわよ。奥さん」

銀子と朱美は、キャッキョウ笑いながら、夫人の尻を平手打ちしてふざけるのだった。「京ちゃん、どうしたい。ずいぶん顔色がわるいよ」

銀子は、今日、葉桜団に入団したばかりの京子が先程から部屋の片隅で、呆然として突っ立っているのを気にしていった。

「はははは、始めて、こんなところを見たんだろ。それで驚いちゃったのね」

朱美は面白そうに笑った。

京子は、うん、ちょっと驚いたわ、と何かをごまかしているように笑ったが、実際、驚くどころのさわぎじゃなかった。私立探偵の

山崎の命令で、ズベ公に化け、うまく葉桜団にもぐりこむことが出来た探偵秘書の京子であったが、遠山財閥の令夫人が日夜、このような淫虐な方法で嘲られていたとは夢にも思わなかった。

「もうそのへんで、かんべんしてやったらどう。いくら美人だって、その恰好はあんまり見られた図じゃないわ」

京子がいうと、銀子も朱美も、それもそうだね、と笑い出し、ハンケチにビールをかけて、それをしぼると、「可哀そうだから後始末をしたげるわ」

と、まるで、品物でもみがくよう静子夫人

の体をふくのだった。

ようやく縄を解かれた夫人は、すぐには上体を起せぬぐらいであったが、やがて、その場に立膝をして自由になった両手を交錯するように胸を抱き、首を垂れて、すすり泣く。

死ぬ程の辱しい姿と浅ましい状態をここに居並ぶ愚連隊とズベ公たちにはっきり目撃されてしまった口惜しさと情なさ。静子夫人は絹のように柔かい黒髪を振りながら、やがて齒ざしりして口惜し泣きをするのだったが、川田は意地悪く、そんな静子夫人の前へ、夫人のものが入っている便器をおく。

ハッと顔をそむける夫人。再び、夫人の顔は耳のつけ根まで真赤になる。

「自分のものじゃねえか。何もそう恥しがる事はねえだろう。それにしても、ずいぶんと出たもんじゃないか」

川田は、自分の浴びせる言葉を夫人はどのように辛く聞か、その効果をたしかめるかのように、夫人の顔をのぞきこむようにしていう。

「ああー」

静子夫人は、思わず両手で顔を覆って、うつ伏してしまった。艶のある雪のように白い背中を震わせて嗚咽する静子夫人に朱美もま

た川田と調子を合わせて、なぶり出す。

「おしとやかで、こんなきれいな顔をしているくせに男達の前で、堂々とこれだけのものを出してみせるのだからね。この奥さんも大した度胸だよ」

静子夫人は、一きわ激しく泣き出した。見かねたように京子が、

「姐さん達も、もういいかげんにかんにんしておやりよ。また、明日という事もあるじゃないか」

すると、川田が、ふと顔をあげて京子を見ると声をかけた。

「おや、お前、新顔だな」

「ええ、京子といえます。どうぞよろしく」

「なかなかハクイ顔してるじゃねえか。お前ならミス葉桜団でとこだぜ。年はいくつだ」

「二十二です」

「ふーん。待てよ。おめえ、どこかで見たことがあるようだ」

京子は、ドキッとした。京子は、川田が、遠山家の運転手であることに今気がついたのだ。たしか、山崎と一緒に、彼の運転する車に乗ったことがある。

「他人の空似かも知れねえな。まあいいや。一つ、葉桜団のために、しっかりやってくん

ねえ」

川田がそういったので、京子は、ほっとした。見破られたのではないかと血も凍る思いだった。

「もういいだろう。川田、奥さんに縄をかけなよ」

森田が声をかける。

へい、と川田は、縄を拾いあげると、静子夫人の背後に延って、彼女の肩に手をかけ、ひっぺ返すように上体を起させると、
「充分休んだらう。さ、両手をうしろを廻してうつ向くんだ」

静子夫人は、抵抗する気力も失ったよう、固く眼を閉じて、両手を背中に廻す。

「大分素直になったようだな。大家の令夫人らしく、往生ぎわはきれいにすることだ」

などと川田はいいながら、手に唾をして、静子夫人を、がっしりと後手に縛りあげていく。

弾力のある大きな乳房が上下を麻縄に締めあげられて、くびれて更に一段と大きなものになった。

森田と田代は、二人で何かニヤニヤ話合っていたが、森田が大きくうなずいて、川田にいう。

「今夜は、社長と俺とで、遠山夫人をたっぷり楽しませてあげることにしたよ。金を払えば、品物はこちらのものだ。おめえに異存はあるめえな」

川田は、手を振りながら、

「とんでもねえ。こっちも、そちらへお譲りしたからにや、そう何時までも、色男ぶっちゃいませんよ。煮て食うなり、焼いて食うなり旦那方のお好きなようになすって下さい」
「よし、そうときまったら、遠山夫人を社長の部屋へ運びな」

「承知しゃした。へっへへ、社長と親分が、今後とも深く交際する上に、つまり、今夜はなんとか兄弟になるってわけですね」

「はっははは、まあ、そういうわけだな」
土地ブローカの田代は、大きな太鼓腹をゆすって笑った。

ズベ公達は、ズベ公達で、酒の余興に桂子の浣腸を始めようとして、準備にかかり出している。猿轡を外された桂子は、金切声をあげて、ズベ公達の押さえつけようとする手の中で暴れるが、後手に縛りあげられている悲しさ、わっしょ、わっしょ、と担ぎあげられて、先程まで、静子夫人がされたような浅ましい姿に縛りあげられていくのだった。

「ママ、ママ！ 助けて！」

静子夫人は、ハッと顔をあげ、
「け、桂子さん！」

と悲痛な声をあげ、ズベ公達に手荒く縛りあげられていく桂子の方へ身を乗り出そうとする。

「おっと、勝手に動き出されちゃ困るぜ」

川田は静子夫人の縄尻を激しく引く。

「奥さんは、これから、社長と親分にたっぷり可愛がってもらうんだ」

川田は、夫人の縄尻をしごいて立上らせ、

「さ、歩きな」

と、夫人の盛りあがった尻を足で押す。

静子夫人は、がっくり首を落し、肩を震わして、すすりあげながら、川田に引き立てられ廊下へ出て行くのだった。そのあとへ、森田と田代はニヤニヤしながらついていく。

観念の座

田代の寝室は、二階の廊下を二つばかり曲ったつき当りにある部屋だった。

「尻をもっと振って、景気よく歩いたらどうだい。遠山夫人」

田代は、舌なめずりしながら、静子夫人の

尻を平手でぶった。そんな屈辱にあえきながら静子夫人は、縛しめの身をくの字に曲げて、消え入るように歩みつづける。恐しい田代の寝室へ運びこまれるのを、一分でも一秒でもおくらせたいという切ないあがきであった。

「さてと、ここだよ、奥さん」

田代は部屋の前へ来ると、酔って、ふらふらする足を踏みしめながら、ポケットをさぐって鍵を取り出し、森田に渡す。森田は、それでドアを開け、

「ささ、どうぞ、遠山夫人」

と、おどけたポーズで、静子夫人の肩に手をかけ、中へ突き入れるのだった。

よろよろと部屋の中へ入った静子夫人、震えながら顔をあげると、そこは、粹をこらした日本間作りになっていて、花梨の卓や屏風などが型通り置かれてあるが、奥の一間が寝室になっていて、花模様の水色の布団が敷かれている。その奥は風呂場になっていた。

田代と森田は、静子夫人を風呂場へ押しやる。白いタイル張りの大きな浴室に夫人を押しこんだ川田は、

「社長と親分に体のすみずみまで、よく洗ってもらいな」

と、美しい顔を伏せて、小さく震えつつける夫人にいうのだった。

「じゃ、親分、社長さん、どうぞ、ごゆっくり、わっしはその間に、お床の支度、それに

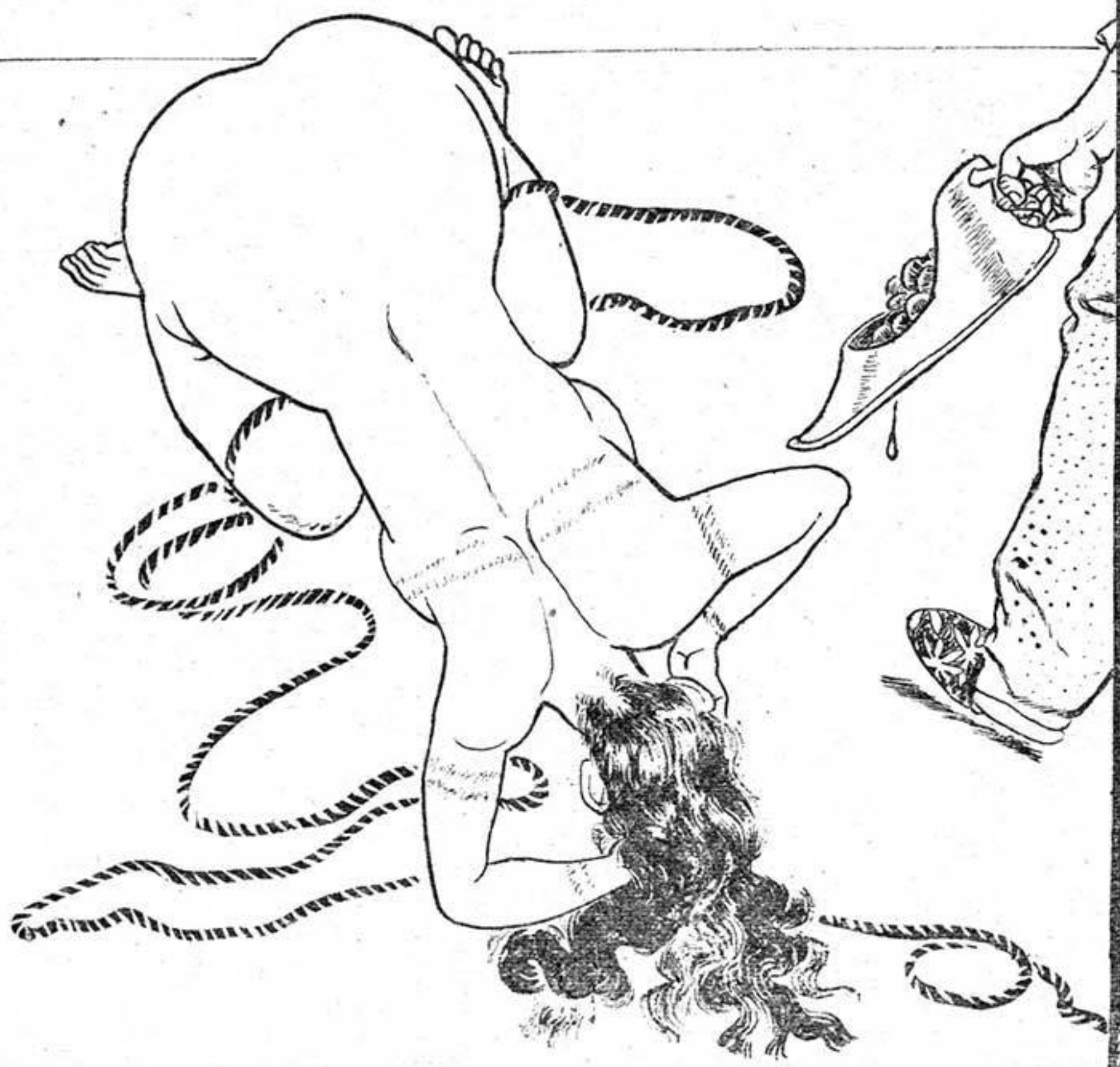
酒の支度も整えておきます」

川田は、夫人の縄尻を田代に渡して愛想笑いをする。風呂は、先程からガスに点火されていたらしく、いい湯加減にわいていて浴室一杯、もうもうと蒸気が立ちこめていた、

静子夫人は、後手に麻縄で手荒く緊縛された身を流しの隅に小さくかがめ、すすりあげている。

田代と森田は、そんな静子夫人の姿を舌なめずりをしながら、なめるように見つめていたが、やがて、二人共口笛を吹きながら脱衣場に服を脱ぎ始めるのだった。

静子夫人は、ああ、と浴槽のふちに額を押しつけて、激しく泣きじゃくる。浣腸、そして排泄という死ぬより辛い羞恥の極を野卑な男達の目にさらけ出し、そして、その次には、悪魔に等しい田代と森田に罵られ尽されるのだ。一そ、一思いに彼等の手で殺される事を夫人は心より祈ったに違いない。後日、たとえ、官憲の手で救出される事になっても、もう自分は日の当る場所には出られぬ身となっているのだ——そう思うと夫人は、遠山家に嫁いでの何日かが遠い遠い昔の出来事のような懐かしい



思いにさえなってくるのだった。

ガラリと浴室の開き戸が動いたので、夫人は、はっと我にかえり、太腿をびったり密着させて小さく身をかめる。服を脱いで裸になった田代と森田が入って来たのだ。

「へっへへ、奥さん、今日は俺達二人できれいに洗ってやるぜ」

森田は、そんな事をいって、浴槽の湯を汲みあげると、ざあと立ったまま肩からかける。湯のしぶきが隅にうずくまっている静子夫人のところまでも激しくとんでくる。田代は浴槽の中に肥満した体を沈めて、

「ああ、いい湯だ。さあ、奥さん、遠慮せずに入って来な」

静子夫人は、たまらなくなつて立上り、浴室の外へ走り出そうとしたが、

「おっと、何処へ行くんだ。あの部屋には、奥さんの恐がる川田がいるんだぜ」

森田は、静子夫人のすべすべした両肩をうしろから押さえていった。

「社長がお待ちかねだよ。さ、お風呂へ入って、社長によく洗って貰いな」

森田は、静子夫人の縄尻をひいて、浴槽の前まで押し立て、夫人を縄つきのまま、湯の中につけようとするのだ。

「何をぐずぐずしているんだ。足をあげて、風呂桶をまたがなきゃ駄目じゃないか」

森田は、浴槽の前に突つたまま、浴槽をまたごうとしない静子夫人に業を煮やして激しく夫人の尻を平手打した。静子夫人は真赤な顔をして、唇を噛みしめている。

「ははは、社長、この奥さん、社長がそう正面から眼を皿のようにしているので、恥しくて、足があげられないのですよ」

静子夫人は、森田にいわれて、一層、頬を紅潮さした。

森田は、夫人の紅潮した美しい頬をつついて、夫人が口惜し泣きするのを、心地良げに聞きながら、静子夫人の体を抱き上げようとする。

「な、なにをなさるの、やめて！」

田代も、手をかして、遂に二人は静子夫人のはかない抵抗を無視して湯槽の中へ押しこんだ。もうもう立ちのぼる湯気の中で、湯から顔を出している静子夫人と田代、そこへ、森田もジャブンと入って来る。

「へへへ、社長、遠山の奴、自分の女房がここでこんな具合に我々と一緒に風呂に入っているなんて夢にも思わぬでしょうね」

森田がいうと、田代も、顔をくずして、

「遠山には、これで充分昔の恨みがはらさたってもんだ。さっきの浣腸写真が焼きあがったら、遠山の野郎に、送ってやろうじゃないか。さぞ、びっくりする事だろうな。ハハハ」

田代は、そういうと、静子夫人の肩を両手でつかみ、自分の方へ向かせる。

「奥さん、今夜は、この森田親分と一緒に、骨身にこたえるまで楽しませてあげるぜ。どれだけ泣こうとわめこうと、この部屋の外へは聞えない。遠慮なしに悩ましい声を出しなな」

田代は、夫人の艶っぽい首筋を手拭で洗いながらいうのだった。

一切をあきらめたように顔を伏せ、田代のするがままになつて静子夫人の形のいい鼻をつまみあげ、鼻の穴掃除をやり始めた森田がさも面白そうに冷やかした。

「鼻の穴掃除が終わったら、口の中から、耳の穴の掃除もしてあげるからね。ふふふ、どうだい、遠山夫人、俺達も案外親切な男だろ」

静子夫人は耳たぶまで朱に染め、再び、嗚咽し始めた。

救援者

京子は、この場を抜け出て、山崎に電話すべきか、それとも、静子夫人と桂子を危機から救出すべきか迷った。桂子の浣腸責めに酔っている葉桜団や森田組のやくざ達——このすきに表へ飛び出せぬ事はない。山崎等に連絡をとる事もむつかしくないが、しかし、彼等がここへ救出にかけつける間、二階へ連れて行かれていた静子夫人は卑劣な男達によって、どんな目に合わされるか。生きる気力も失せるばかり、淫虐な方法で颯り抜かれることは、たしかだ。

とにかく、一旦、静子夫人を危機から救わねば、と京子は決心し、そっと、その場から離れ、ドアを開けて廊下へ出た。

二階へあがると、赤い絨氈のひかれた廊下が再びつづいて、いくつかの部屋がある。京子は、その一つ一つを開けては、部屋の中を調べて行った。この二階の部屋のどれかに静子夫人は、田代達に連れこまれ、新たな地獄図の中にのたうち廻っているのだと思うと、京子は胸がはげしく動悸する。ひょっとしてもう手おくれで、静子夫人は彼等の犠牲となってしまうのではないかと思うと気が気ではない。

奥様、どうぞ、無事でいて下さい——と京

子は祈りたいような気持で、血眼になって、部屋から部屋へと夫人の姿を探して歩く。

一番奥まった部屋のドアを開けようとした時、はっとし、体を硬くした。

川田達の笑声が聞え、静子夫人の糸をひくような、すすり泣きの声が聞えたのだ。

京子は、息をのみ、そっとドアを開けて体を入れる。忍び足で、襖のすき間から田代の寝室をのぞいた。京子は、思わず、あっと声が出るほどだった。

寝室の床の間の柱に静子夫人は光輝ある裸身を立縛りにされているのだが、無残にも、片足をロープで高々とつりあげられている。

夫人の一方の足首を縛ったロープが、なげしの釘につなぎ止められて、夫人は、無理やり足を大きくふり上げた恰好に強制され、その浅ましいばかりの緊縛図を田代と森田の寝酒の肴にされているのだった。

田代と森田の機嫌をとるために静子夫人をそんな姿に縛りあげたのは川田である。川田は、田代と森田の杯に酒を注ぎながら、卑屈にペコペコ頭を下げているのだ。

田代は、充血した眼で、身も世もあらず羞恥にのたうっている静子夫人の柔肌を凝視しつづけている。

「いい恰好だぜ、奥さん。御主人が見たら、何というかな、ふふふ」

田代は、口を歪めて笑った。社交界の花形夫人とか絶世の美女とか賞讃の的になっていた遠山夫人が、今は、畜生のような浅ましい姿を眼前にさらし、田代と森田に颯られ尽すのを待っているのだ。

「まるで、レビューガールが踊っているような恰好じゃないか。え、遠山夫人」

森田が、ビールをラッパ飲みしながら、のっそり立上り、足揚げ縛りにされている静子夫人の傍へ近づいて行く。

静子夫人は、はっと顔をあげると、つりあげられた片足を必死にゆすって、
「ち、近寄らないで！ お願い、私に近寄らないで」

森田は田代の方をニヤリと見て、
「社長、さすがに令夫人だけあって、あんなにすざましい浣腸責めに合いながら、まだ、初心なところがありません。近寄っちゃ嫌だなんて吐かしやがる。こりゃもう一度、たっぷり責め直さなきゃ、今後の商売ものに使えなくなりますよ」

田代は、なるほど、といいながら、腰をあげ、激しく泣きじゃくり出した静子夫人の美



しい頬を両手ではさんで、ぐいと正面を向かし、
「ふふふ、奥さん、浣腸責めだけじゃつまん

ないので、そんなに泣くんذار」
静子夫人は、のど元からこみあがってくる
ような口惜しさに、切長の瞳を固く閉じ、齒

をキリキリ噛みしめるのだった。

川田が、酔った足を危げに踏みしめて立上ると、静子夫人に寄り添っている森田と田代にいう。

「旦那方、あまり御婦人をじらすもんじゃありませんや。女ってものは体をまかした男にや温順になるもんです。それに、旦那方は、色の道にかけちゃお二人とも相当な腕前でしょう。二人がかりで本気で責めりや、いくら大家の令夫人でも、旦那方のいなりの女になってしまうものですよ」

川田は、静子夫人のつり上げられた片足を見上げながら、

「全く見事な肢だな。内腿の肉の盛りあがりようなんか色気たっぷりだぜ」

森田も田代も淫靡な眼をギラギラさせてそれを見ていたが、

「そろそろ味見をすることにしましょうか社長」

森田が田代の腕をつつく。

「それじゃ、ここらあたりで邪魔者は退散する事にしましょう」

川田は、意味ありげに笑って、部屋を出ようとしたが、ふと、床の間に足揚げ縛りにされている静子夫人に視線を向けて、

「いいかい。遠山夫人、今夜は、社長と親分のお相手だ。お二人に嫌われないよう充分満足をさせてあげるんだぜ」

京子は、屏風のうしろに隠れて、息を殺して、この地獄図を見守っている。

川田は、ふらふらする足どりで、京子の隠れている屏風の前を通過し、ドアを開けて、廊下へ出て行った。京子は、ほっとして、再び、眼を彼等の寝室へ向けた。敵は二人である。それに彼等はかなり酔っぱらっている。

女ながらも空手二段の腕前を持つ京子は、酒に酔った二人の男を打ち倒すぐらい、わけはなかった。足を忍ばせて、そっと京子は寝室へ入る。

無残な姿に縛りつけられている静子夫人のあちこちをくすぐったりして、夫人に悲鳴をあげさせ、田代と森田は、夫人をいたぶる事に夢中になっていて、京子がこっそり入って来たのに気がつかない。二人は、ダニのように静子夫人の柔肌に喰いついているのだ。

「な、なんだ。お前は？」

静子夫人のつりあげられた足の裏をなめたり、くすぐったりしていた森田が、京子の姿を見て驚いた。夫人の見事な乳房を鑑賞していた田代も、ギョツとして、京子を見る。

京子は、答えるより先に、畳をけって、突進し、森田に当身を喰わした。

あっと声をあげて、森田が横転する。

「何者だ、貴様は！」

田代は、京子の顔面めがけて、猛烈なパンチを振るったが、京子が身を沈めたので大きく空振りしてしまい、体がくずれた所に逆に京子の唐手打ちを肩先に受けて、ギャーと声をあげ、その場にうずくまってしまった。

「奥様、しっかりして下さい。私は山崎の秘書です」

京子は、そういうやポケットから登山ナイフを取り出し、夫人の片足をつりあげているロープを切り落す。

「あ、ありがとうございます。私、私——」

静子夫人は、救われたのだと思うと、急に胸がこみあげてきて、むせび泣いてしまう。

京子は、静子夫人の背後に廻り、夫人を後手に縛った縄をナイフで切りほぐした。

「辛かったです。奥様、もう大丈夫ですわ」

京子は、静子夫人を元気づけるようにいった。ようやく手足の自由を得た夫人は、歩こうとしてみたが、手も足もしびれて、すぐに動けず、その場にかがみこんでしまう。そ

れに、こうした奈落の底から救われると、自分がブローズ一枚の素っ裸の姿であることが救援者の前に一層恥しく思えるのだ。

片手で乳房を覆いながら静子夫人は、腰を低くかがめて何か身につけるものを探し廻るのだった。

田代と森田は、京子に打たれた箇所を手で押さえ、獣のようにうめきながら、のたうっている。風呂あがり二人とも揃いの浴衣を着ているので、京子は、そうだとばかり、二人からそれを剥ぎ取った。

「畜生、何をしやがる」

田代も森田も、浴衣を剥がれると丸裸であった。必死になって、起きあがろうとするのだが、京子の一撃がよほどこたえたらしく、のたうちつづけるだけだった。

「さ、奥様、とにかくこれでも着て、すぐここから逃げましょう」

京子に手渡された浴衣を静子夫人は急いで身につける。何日かぶり、夫人は身に布をつける事が出来たのだ。

京子は、裸の田代と森田を、つい今しがたまで静子夫人に巻きついていていた縄で、がんじがらめに縛りあげた。

「おい、かんべんしてくれ、縛らんでくれ、

俺達が悪かった」

田代と森田は、意久地なく、許しを乞うて悲鳴をあげる。

「何いつてるのさ。奥様に死ぬより辛い思いをさせておきながら、泣声をよくあげられるもんだ」

京子は、ナイフを手に持ちかえる。

田代は、ギョツとして、助けてくれ!! と

大声をあげた。刺し殺されると思ったのだ。

「あわてるな。お前みたいな蛆虫を殺したりなんかするものか。警察にひきわたす前にその気に喰わないチョビヒゲを剃り落してやるんだよ」

田代は、森田のうしろに身体を隠そうとしていざる。森田も、うろたえて、田代のうしろへ身を隠そうとするが、二人とも、後手に縛りあげられているので、思うように身が動かせない。

「お前達が奥様にした事からみりゃ、こんなもの何でもないよ。さ、覚悟しな」

京子は、田代の耳をひっぱって、彼を畳の上へ横転させると、胸の上へ馬乗りになって顔を押しえつけ、田代のチョビヒゲをとうとう剃り落してしまった。

「さ、奥様も、こいつをけるなり、なぐるな

り、少しでも恨みをはらして下さい」

京子は、傍に呆然と立ちすくんでいる静子夫人にいった。夫人の美しい顔は、田代と森田に対する憎悪で、硬化する。この二人に受けた辱しめは、この二人を殺しても、心がおさまるものではない。それに、まだ、それだけの仕打ちでは満足せず、この二人は、自分を二人ががりて犯そうとしたのだ。京子が、ここへかけつけて来なければ、自分は、この二人に、骨までしゃぶられていたかも知れないのである。そんな事を考えると、静子夫人は、口惜しさのため、火の玉のようなものが胸元にこみあがって来て、思わず、傍に落ちていた青竹をとりあげ、

「貴方達は人間じゃない。けだものだわ」

そう叫んで、いきなり、田代の腰のあたりに青竹を振りおろした。パシッと鈍い音がして、田代は、他愛もなく、悲鳴をあげる。

「助けてくれ、奥さん、俺をたたかないでくれ!頼む」

静子夫人は、美しい柳眉をキリリとあげてなおも二発三発、田代の体を青竹で撃つ。

「さあ、奥様、ここから逃げ出しましょう。ぐすぐすしてはいられません。すぐに山崎さん達に連絡し、桂子さんを救出しましょう」

京子は、静子夫人をせかして部屋を出る。

「京子さん、何とお礼をいってよいやら——貴女は私の命の恩人です」

静子夫人は、京子の手を握るようになっている。

「まだまだ安心は出来ません。ここは敵中です。私のあとについて、そっと歩いて来て下さい」

京子は、静子夫人の手をひきながら、足音を忍びせて廊下をよぎり、階段を下りる。川田をはさんだ葉桜団のズベ公と、森田組のちんぴらやくざ達のドンチャカ騒ぎが聞えてくる。ああいう連中の中で、桂子は、どんな目に合わされているのかと考えると静子夫人は気が気ではなかったが、桂子を助けるには、一旦自分達が、この地獄屋敷から逃げ出さねばならないのだ。

階段を下りると、葉桜団が騒いでいる部屋の前をそっと素通りして、縁先から庭へ、二人は降り立った。この庭を突き切れば、裏門があるのだ。

二人は顔を見合わせて、一気に走った。

「あつ、京子じゃないか」

誰か、うしろの縁先でどなる。はっとして京子は振りかえると、それは、葉桜団首領の

銀子であった。

「畜生、京子、お前、サツの廻しものだったんだね」

銀子は、眼をつりあげると、次に声をはりあげた。

「大変だ。京子が裏切ったよ。遠山夫人を連れて逃げようとしてるんだ！」

京子は、静子夫人の手をひいて、かける。夫人の足がおそいので、いらいらする。

「奥様、さ、早く、早く」

静子夫人も歯を喰いしばった表情で走ったが、何しろ、長い間の拘束、監禁生活だったので、足が思うように動かない。松の根につ

まづいて、夫人は地面に横転した。

バタバタと追手の足が迫ってくる。

「奥様、早く、早く、今度、奴等につかまったら最後です。元気を出して下さい」

京子は、夫人の体を抱き起したが、その時おそく、二人の周りを葉桜団と森田組が取り囲んだ。

「畜生、どうも、てめえは最初からくせえと思つてたんだ」

川田は、京子の顔を睨んでいった。銀子も

朱美も、怒り狂ったように、

「よくも私達をだましたわね。ここからは生きて帰さないわよ」

飛出しナイフの刃をパチンと出して身がま

える。京子は、静子夫人をうしろにかばいながら護身用のナイフを抜いてかまえた。

あと一歩というところまで漕ぎつけて、彼等に発見されてしまった口惜しさに京子は歯ざしりする。こうなったらやぶれかぶれだ。何とか血路を開いて、遠山夫人だけでも逃がさねばならないと京子は決心すると、裏門の方を固めている森田組のチンピラやくざに突進した。

「あいて！ やりあがったな」

やくざの一人が手の甲を押さえて飛び下がる。たかが女と見て、飛びつこうとしたところをいきなりナイフで払われたのだ。

「この阿女！」

川田が、つづいて飛びこんだが、脇腹を足でけりあげられて、ギャーと悲鳴をあげ、横へ素っ飛んだ。

「この阿女、唐手を使うぞ。気をつけろ」

やくざ達は途端に京子に対して、警戒対勢をとり、遠巻きに囲んで、ナイフを逆手にじわじわと迫っていく。

京子は、小刻みに震える静子夫人を背後にかばいながら、必死な眼で周囲の敵を睨みつけるのだった。

(つづく)

☆賞金☆

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千円	若干篇
佳作	一篇に付	二千円	若干篇

懸賞（告白と手記と体験）原稿募集

☆規定☆

一、真実味溢れる告白、どうしても発表してみたいという自らの手記、或は自分で体験された貴重な事実を盛り上げた体験記を広く読者の皆さまの中から求めます。文章の巧みさよりも、実際に体験されたもので

あるという真実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従つて必ず自作のものであることは勿論、未発表のものに限ります。二、枚数には制限はありません。用紙も必ずしも原稿用紙でなくとも結構です。締切日も別にやかましくきめませんから、いつでも、どしどしお寄せ下さい。入選作は最近号に掲載の上、賞金をお送りします。応募原稿は読者原稿と区別するため第一頁に「懸賞告白」とお書き下さい。

SMF小説

雪子夫人図絵

芳野眉美

○

夕暮近く、軽く雨が降って、爽やかな初夏の風が静かに項（うなじ）を撫でている。

庭の花壇で、部屋の床間にはしい花をさがしている、

「紗百合さん」

雪子夫人が、大きな花をつけた紫陽花のなかから微笑んでいた。

「あら」

「いけ花」

「ええ、投入に、すこし」

「それなら」

ちよつと首をかしげて、

「きんぼうじゅと水仙はどうかしら」

「きんぼうじゅ」

「その淡紅の花。美しい線をきかせて、ね」

そして、いたずらっ子のように、

「私、今何をしているか、知ってる？」

そう言いながら、さもなくすぐったそうに、

くくく、

くく、くく

と身をよじらせているのが、なんとなくな

まめかしく、気になったが、

「盛花のお花をさがしていらっしゃるの」

雪子夫人は無邪気な声を挙げて笑い、

「おトイレ」

ちっともしやがんでいないので、紗百合は驚いたが、

「紙、ちょうだい」

と手をだされた時には、あどけない赤ちゃんのように可愛らしかった。

生え際をすっきりと見せ、フロントの大きなウェーブがアクセントになっているだけ、全体を何気なくまとめている。若緑のような感覚の髪、湯上りか、床しい白地に納戸上りの図柄の気楽な浴衣姿の奥からは、それでも

むっとするような柔肌が盛り上ってくる熱気があった。

水仙を選んでいると、雪子夫人のかたわらに、心持ちはにかんでいる由紀彦がいるのに気がついた。

「びっくりした」

領脚が美しい。雪子夫人の話によると、十七、八頃の少年の肌は少女のより綺麗で、特に領脚が、

「たべてしまいたい」

雪子夫人は、由紀彦にたわむれていることがあった。

「いつのまにか」

紗百合はそう言いながら、由紀彦のはにかみが、なんとなく尋常でないように思った。

「お馬鹿さん」

おかしがって、雪子夫人が由紀彦の頬をこづく。

こんな微笑ましい情景を見ていると、ふとねたましくなり、二人の仲を疑ってもみたくなるのだが。

紗百合は、勘解由小路家に寄寓してから、たまに遊びに来る由紀彦が、雪子夫人の夫夏彦の異母弟にあたることを知った。同居していないのは、何か理由があるのだろう。それ

が、この頃は外泊がちな夏彦の留守を守る形になった。雪子夫人はそれを喜んでいるし、夏彦は何も言わないから、了解されたらしい。

「そろそろ、あの繁みにも小蛇が遊びに来る頃だね」

紗百合がおもわず青くなると、由紀彦は笑いながら、

「蛇、嫌い？」

「大嫌い」

「兄貴は好きだね」

武蔵野太古の密林を形成したという、カシやシイの常緑闊葉樹の巨木が並ぶ森が、うっそうとして庭を囲み、街路との視野をさえぎっているばかりでなく、芝生の切れるあたりは森の繁が繁茂して、庭に立っていても、その繁のなかは見透せなかった。

石器時代の土器や石器などの出土や貝塚の存在も知られ、また、そこに残る土塁や屋敷跡は中世の豪族の生活を眼前に彷彿させるものがある。この森も、一雨毎に化粧を直し、その装束を新にした。

「そういうば、お兄さまはまだお帰りになりませんね」

「病気だから」

ことなげに、静かに言う雪子夫人の言葉には、嫌味は感じられなかった。夏彦はほとんど家に寄りつかない。どんな理由があるにせよ、こんなお美しい方をほっておいて、と思うと夏彦の気が知れないのだ。

「あの繁みで、お姉さまは兄貴にひどい目にあつたね」

「由紀さん」

ふと眉をひそめた雪子夫人は、それでも軽く由紀彦をにらんで、無作法な義弟をたしなめると、それに答えないで、誰に言うことなく、用事を思いだした、とつぶやくと、由紀彦はあわてて庭から消えた。

そのうしろ姿を見送りながら、おかしそうに、くすつと笑って、

「紗百合さんからいただいたの、たべちゃった」

「えっ」

「だって、捨てるところないでしょう、だから」

雪子夫人は黙って微笑んでいた。紗百合はこんなに無垢な微笑というものを、いままで見たことがなかった。

「由紀さんが悪いのよ、側にいるんだもの」
そう言いながら、気がついたように、

「あ、これ残ったの、有難う」
 白い桜紙のやわらかな感触
 は、なにか妖しい罪の香を放
 っていた。

○

いつのまにか、黒塗りのク
 ライスラーが、門前にとまっ
 ている。夏彦が帰って来たら
 しい。ただひとつ、夏彦の部
 屋に明りがもれていた。

「こばめないのだ」

と紗百合は思う。夏彦の傍
 に雪子夫人がしなだれるよう
 に上体を預けている姿が、ほ
 のかな明りの輪のなかに、妖
 しいばかりなまめいて泛んで
 いた。部屋の奥に立てまわし
 てある枕屏風の開き目から、
 わずかにそのあたりまで届く
 薄暗い明りのなかへ、乱れた夜のものの派手
 な色模様の片端が、泌むるように仄かに浮き
 上ってこぼれている。

夏彦を知ってからの雪子夫人は、嫁いで来
 た頃とは、すっかり様子が違ってしまった。
 それは、薔薇の固い蕾が、夜露を吸って花を



咲かせるように、雪子夫人の生まれつきの美
 しさは、男の気を吸ってはじめて滲みだした
 ものかもしれない。

雪子夫人が夏彦にからだの隅から隅まで知
 りつくされ、愛されているという安心から、
 よけいな羞らいを捨ててしまったのか、満開

の花が思う存分太陽の強烈な光を吸い込もう
 とするように、発刺とした手放しの放胆さで
 夏彦をあますところなく吸い取ろうとしてい
 るようだった。

このような異常なことが好きなのは、雪子
 夫人のような名門の血統が持つ特殊な遺伝か

もしれない。夏彦がそれまで意識しなかったサディスティックな面さえが、雪子夫人によって掘りだされた感があった。

そんなある夜、紗百合は夢現つに水を浴びる音を聞いた。その水の音をぬって、きれぎれに忍び泣く女の声を聞いた。

「泣いている」

そう思った。

「お姉さまが泣いている」

切なく、悲しく、怨みをこめて、が、それはまた、女の妖しい喘ぎであり、男の心を蕩かしてくる甘い囁きのようにも思えた。

繁みの木に、雪子夫人が縛りつけられていた。

水に濡れた雪子夫人のなめらかな白い肌は紗百合の知らない未知の世界の罪の匂う、妖しい光を放っていた。

夏彦は繁みにはいだした小蛇を手にとっていた。その小蛇の赤い舌は雪子夫人の乳首に

ちよろ

ちよろ

と火をはいた。

「奴隷の首輪だ」

あくことのない淫蕩の血にたえられなくなったのか、夏彦は雪子夫人の首に小蛇をまき

つけると、

びしっ

びしっ

黒い鞭が激しく乱打された。

雪子夫人が美しくなればなる程、夏彦のサディズムもそれに比例して強くなったのだが雪子夫人の静かな微笑は、またそれに従って崇高なひらめきさえ見せるようになった。

「不思議な女だ」

夏彦がサディスティックな愛撫、というよりはむしろ仕置をする夜が、雪子夫人は最も愛の深度が高いように思われるらしかった。

雪子夫人は人形のように、じっとしてうごかない。放心しているのか。

緋縮緬の夜具が跳ね返えされて、みのり尽くした柘榴の実が裂けたような間から、雪子夫人のまっ白な肌がそりかえった。

「縛られている」

細引で、足から胸までぎりぎりに縛られている。爛熟して、美しい曲線がやや崩れかかった豊満な乳房をしめつける細引が食い込んでいた。

夏彦が家をあけるようになったのは、それから数日たってからである。夏彦と雪子夫人の間に一種の反目があったのだらう。夏彦に

とってみれば、雪子夫人の怒りは意外だったのかもしれないが、最も残酷な侮辱を受けた雪子夫人にとっては、夏彦の要求を拒否するのは当然の処置と思われる。

「もう二度と」

雪子夫人はそう誓ったのかもしれない。しかし、夏彦が雪子夫人の側を離れたのは、それだけの理由からだろうか。夏彦のいない夜は物狂しく、雪子夫人は古くから家に伝った浮世絵の秘画や艶本を眺めることによって、わずかにその空間を満たしていた。

そのなかに、

(張形六佳選)

というのがある。

その説明には、

(この一連の版画は、紅絵摺か筆彩色の横本の一部だらう。時代は明和、天明頃のもので春信、湖竜斎に先き立つ政信、豊信の亜流の浮世絵師の筆になるものだと思われる)

珍らしいものである。

枕屏風の上に小さな足が覗いている。

行灯風の電気スタンドのはのかな明りにゆれて、十字に縛られたそのまっ白な足は、指をこめてもだえていた。まるで浮世絵の中から抜け出た美人のように。

枕屏風のなかでは、仰向けにされた雪子夫人が、無理矢理夜具を抱かせられて、縛られていることだろう。

夏彦は硯箱より一本の筆を取りだした。

「お願い、やめて」

「くすぐり責め」

色街などでもよく使われるリンチなのだろう。腋の下とか、足の裏とか、くすぐったい場所を刺激するわけだが、初めのうちは笑ってすましていくものの、次第に笑いなどは消しとんで、死ぬ程の苦しさを味わなければならぬという。くすぐるのは手の場合もあるし、羽根などを使う場合もあるだろうが、毛筆などのデリケートな感触でやわやわと責められたなら、からだ全体が敏感なベルのような雪子夫人は、狂い死にするかもしれない。「い、いや、くすぐりたい！」

わめき、もだえ、苦しみ、必死になって夏彦の指先を逃れようとがく。

それが、息も絶えだえなすすり泣きになると、一瞬死の恐怖が紗百合をおそった。

「こわい」

そんな声を聞いたように思った。

由紀彦が雪子夫人の片足を拾い上げて、土

踏まずを掴みながら洗っていた。

「くすぐりたい」

華著な細工物のように美しい足を、由紀彦は手放し惜しんでいるように見えた。足の裏というのが少しも汚く思われなかった。

膝の上にタオルをひろげて、こわれものでもあつかうようにそっと包んで、丁寧にふいたあと、由紀彦は唇をちかづけた。小指をかんだようだった。

それが――

廊縁の雪子夫人の手が、その下の由紀彦の髪にふれた。その髪のなかに指をつっこんでかきまわした。由紀彦の頭が、そこにあるのをたしかめるかのように。

それは、紗百合にたわむれに夏彦に見せられた、日本最古の絵巻（小柴垣草子）の一駒を彷彿させた。

「あの秘画のなかに――」

皇女斉の宮が、廊縁の下にいる愛人平致光に奉仕され、心溶けている風情が――

明るい昼日のなかの、なんの躊躇もなく、まのあたりにくりひろげられているありさまに紗百合はおもわず見惚れた。

「美しい」

と思った。

雪子夫人は、伏せておいた本を手にとって静かに読み始めた。

（昨日は今日の物語）

寛永十三年頃の笑話の本である。これは夏彦のコレクションのひとつ。

雪子夫人の寝室は、間接照明がどこまで四方の藤色の壁には、それぞれ鏡がはめられていた。

ベッドのかたわらに、そこだけ小高くなっているところに、まっ白な便器が見えた。

その便器の両側に、柄のついた半円の鉄の輪がついている。

雪子夫人の白い指が、適当な角度に顔をもたげた由紀彦の首に、半円の鉄の輪をはめていた。

半円の鉄の輪は、由紀彦の首にはめられて、ひとつの首輪になった。

「すこし、きついかしら」

黒水仙だろうか、甘美な匂いのなかに、神秘的な香が、ほのかにただよう。

「いいわね」

念を押して、雪子夫人は由紀彦の口に金属製の開口器をはめた。これからどんなことがあっても、口を閉じることは許されない。

由紀彦のノオト その一

淫蕩な女が

純潔な詩集を愛読した

純潔な詩集の著者が

淫蕩なその女を愛撫した

四行詩 佐藤春夫

東京駅前のB美術館で紗百合を待つ。

人と待ち合わせるときには、なるべく美術館や画廊にしている。殊に女の人の場合は便利でいい。駅前や喫茶店などであらう待つばかりでいるさまはみっともない。美術館や画廊ならば、いくら待っても待ちすぎということはない。好きな絵の前には時間は無いからだ。

現代絵画は好きだ。B美術館に行けば、印象派以後の現代絵画を原画で一通り見ることが出来る。原画に接しているときは、まるで巨匠たちの前に立っているような錯覚におそわれる。最も、コレクションが微々たるものだから、満足するところまではいかないが、

どういふわけか、超現実派に興味を持っている。画集などではダリの「燃えるキリン」

や、「記憶の固執」、キリコの「不安なミューズ」、モンドリアン「絵画」、ミロー「太陽の前の女と鳥」、「月に吠える犬」など好きな絵に接しられるのだが、原画ではあまり親しく接することができないのは残念だ。

シュールレアリズムが好きなのも、特に、夢と童話の画家ミローの作品が好きなのは、こんなところに性質の一面がでていられるのかもしれない。京橋のK美術館で、偶然ミローを見つけたときはうれしかった。B美術館では、デッサンがあるだけで、これだけではちょっとわからない。

「由紀兄さま」

紗百合だ。

昔の男の子の着物のような感じの乱れ格子の気軽な単衣に、帯はローズ色の手軽な洋服地の細帯、髪はイタリアン・ボオイススタイルの変型が、動的な強い感じではなく、女性らしい優美さがうかがわれる。真中から分けてゆったりとしたウェーブやカールで、ロマンチックな味が匂う。

「おそくなっちゃって」

「驚いた」

「短かすぎるかしら」

しまいに髪を気にしている。背をおおうほ

どの黒髪を切ったのは、もったいない気もするが、

「暑くなるから」

かえって清涼な処女の美しさがあった。それよりも、

「まさか、着物で」

「おかしい」

「綺麗だ」

「あら」

よほど愛らしい人でなければ、細帯などタッチするものではない。細い眉、涼しい眼、甘えを含んだ唇、紗百合には、

「可愛い」

という形容がぴったりあてはまる。

「アンリ・ルソー」

「無邪気で、子供のような絵でしょう」

「ええ」

「見れば見るほど、楽しくなる」

「似てるわ」

「えっ」

「由紀兄さまに」

紗百合がこんな批評をするとは思わなかった。

館内を一通り案内してから、コスタ・リカで休む。

「いやだ」

紗百合がテーブルのガラスをたたいた。

「今日、金曜でしょう」

ガラスの下に、

(今週の珈琲の特徴)

というメモがはいついて、

(金曜日、ブラジル・サントス、中性の味で

モカの様な酸味もなく、コロンビアのコクも

ない、平坦で幾分泥くささを感じる)

「泥くさいか」

「クリーム・ソーダー」

紗百合は勝手にたのんでから

いいでしょう、という顔をして

笑った。

名曲コンサートの間時間らし

い。

堂々と幅広く流れる見事な第

一主題が、ホルンが主奏する変

ロ短調の導入に続いて、ピアノ

の和音の演奏と共に第一バイオ

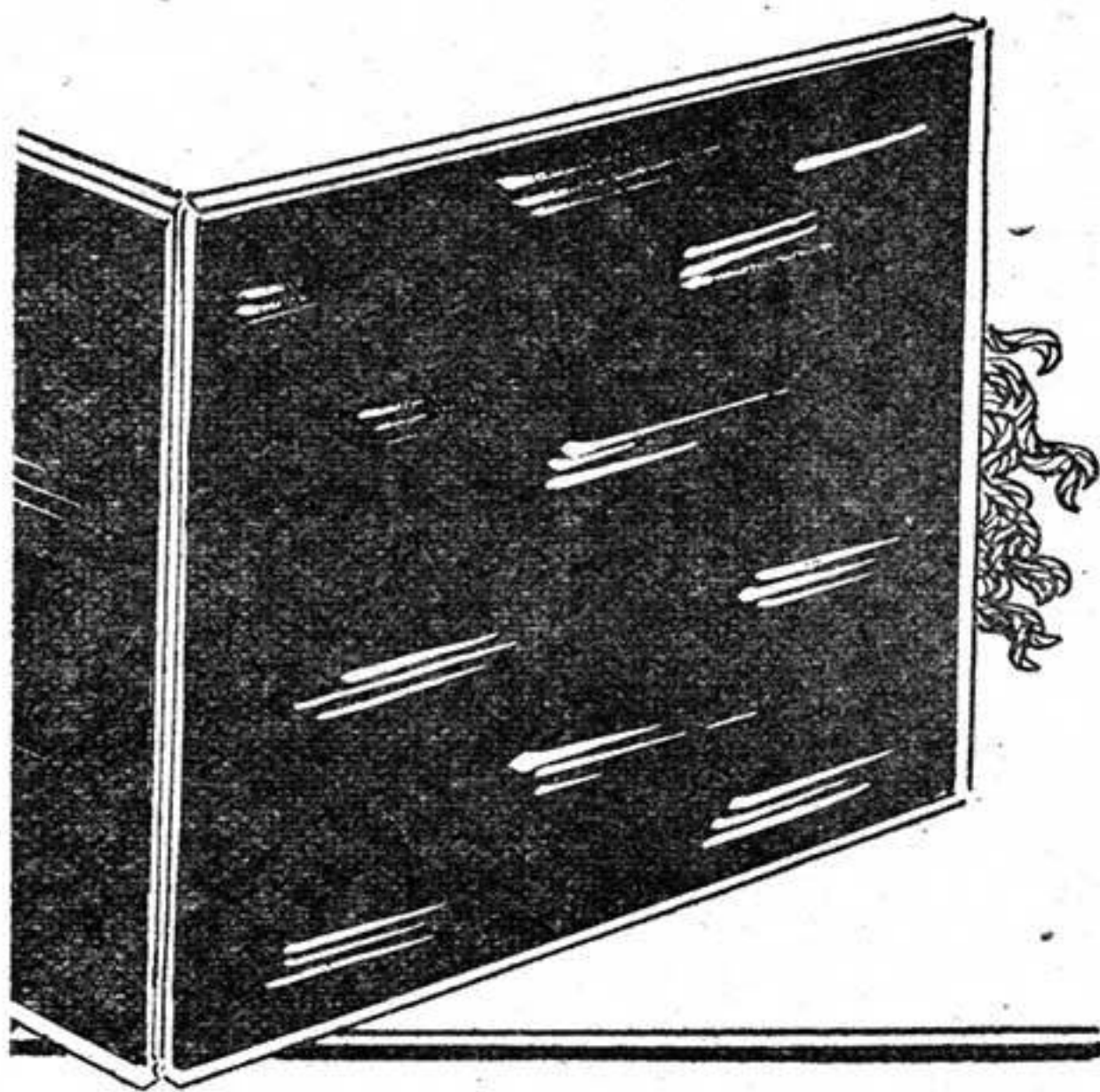
リンに現わる。

チャイコフスキのピアノ協

奏曲変ロ短調。

「いいわね」

ふと、紗百合を抱きしめたい



衝動におそわれた。その感情も、別に不自然

とは思えなかった。紗百合とは、不思議に気

軽につきあえる。どんな態度をしめしても、

自然な感情が流れるのがうれしい。こんなこ

とはなかなか有り得ることではない。

「恋をしているのか」

ただなんとなく、紗百合が好きなのだ。理

由はない。それだけ、健康的で、牧歌的で、

純粋な愛ではないだろうか。紗百合が、好き

なのだ。

「由紀兄さまは、お姉さまが好きなのでしょ

う」

紗百合に、こんなことを言われたことがあ

った。

好きには違いない。しかし、それには理由

がある。母性憧憬だ。幼くして母を失った僕

は、それだけ母への憧れが強いのだ。妾の子

だから、というのではない。母の死後、叔父

の家にひきとられた。早くから孤独に苦しみ

寂寥にもだえた僕は、御仏の慈悲ともいうべ

き、母の愛情が必要だった。すべての悩みを

一人で処理できないために、愛情を求めるの

だ。その母は美しくなければならなかった。

精神的にも肉体的にもやわらかく抱きしめて

くれる母でなければならなかった。観念とし

て母が体系づけられた。いわゆる母は、母で

あって女ではない。あくまで中性なのだ。僕

の求める母は、母であり、女でなければなら

なかった。

ある夜、甘い快い物の気配を感じて、僕は

ふと目をさました。月あかりに、しびれるよ

うな白い肌が映えている。おや、と思って顔

をあげようとすると、しなやかな腕が胸から

肩に巻きついた。甘いむせるような匂い。

「可愛い坊や、私の坊や」

雪子夫人は、ほんとうの赤ん坊にするような無邪気な接吻を、額に押しつけた。頬が触れ露きだしの肩が触れた。

そんなことがあってから、いつのまにか添寝している雪子夫人に、びっくりすることがあった。

「いい子、おねんねするのよ」

雪子夫人は立ちあがった。

「愛しているならー」

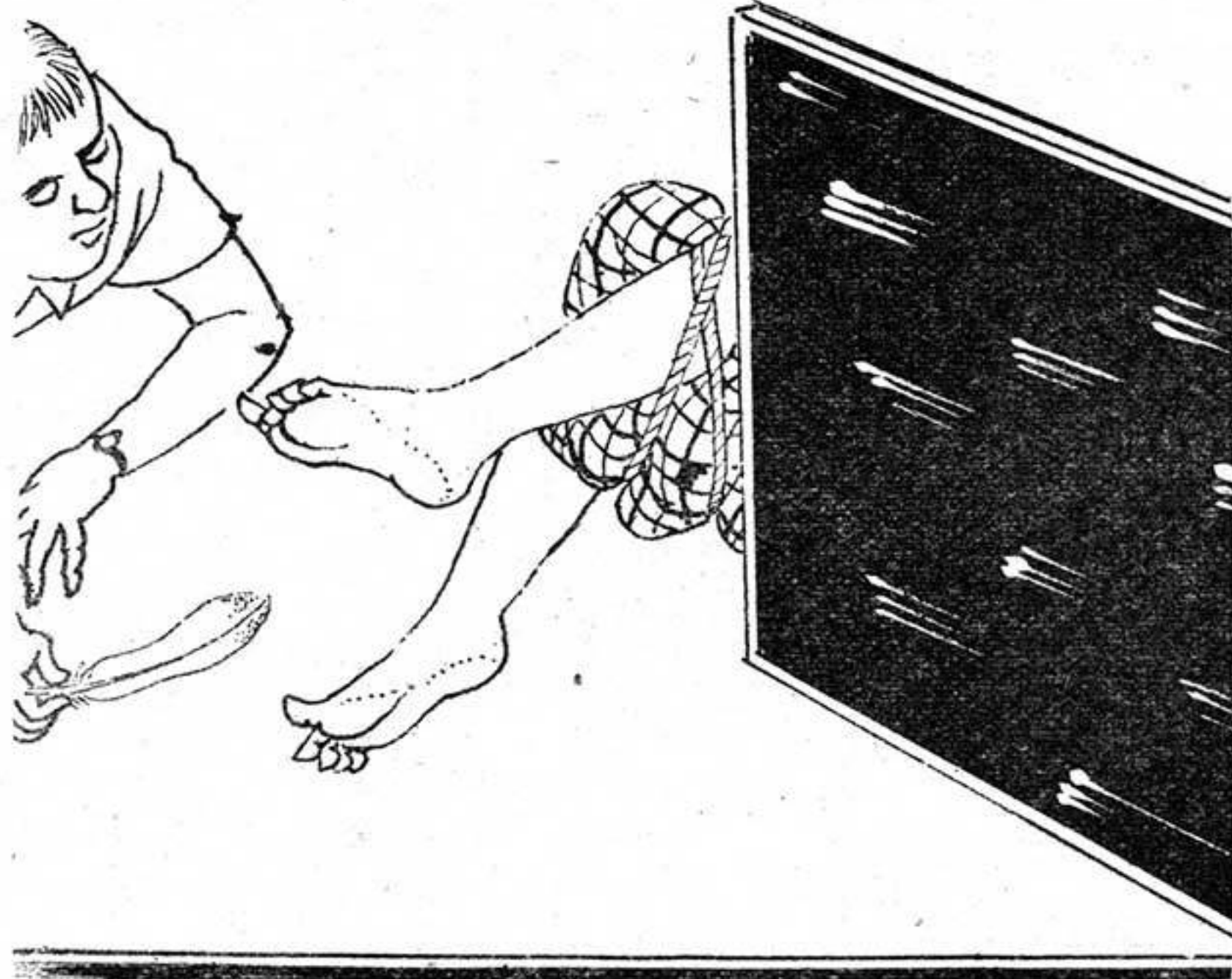
素肌がこぼれる。女体を飛切りの上等な高価なお菓子にたとえるなら、長襦袢はそのきれいな包装紙だともいえよう。あの縮緬のもの哀しいほどのしっとりした軟らかさ、手によわよわまつわりつく。

スカタロジーがマゾヒズムでも、フェティシズムでもなかった。ひとつの愛の表現だった。

「私、馬鹿ね。こうまでしななければ、由紀さ

んが私のものだと思えないなんて」

みずみずしいゆたかな肉づきが、桜色に冴えながら、白いシーツのうえで波打った。



ノオトはこれで切れている。破れた頁にこんなぐり書きがあった。

これがはたして、

純粋な愛といえるかどうか。

由紀彦のノオト その二

魔女よ

靴下をとれ

足を蹴を見せろ

「真実」の狩人終節

佐藤春夫

誰もいない。

夜ふけて、ハイヤーの音を聞いたように思ったのだが、雪子夫人の姿も、紗百合の姿も見えない。二人ででかけたのか、紗百合の声を夢現つに聞いたように思う。

よく眠ったものだ。もう昼にちかい。

爽やかな五月晴、庭の花壇で、百合やつつじ、桔梗などが、雨に濡れてひとしおあざやかにゆれている。朝のうちに一雨あったのかそれに気がつかなかったとすると、紗百合の声もあやふやだ。夢だったのかもしれない。

この頃、紗百合が頭から離れない。恋とか愛とか、めんどろくさいことは知らぬ。が、とにかく、紗百合が頭から離れないのだ。レコードを聞いていても、本を読んでいても、いつのまにか紗百合のことを考えている。つらい。考えるのがいやになった。どうにでも

なれ。

その日、湯上りのからだにタオルをまいて

「紗百合さん」

と呼んだ。

「シャントンのサマコートを持ってきて来てちょうだい」

それをいきなり素肌にはおると、

「あそびに行こう」

地下鉄はラッシュアワーだった。

フラットカラーにテラーカラー風のきざみを入れただけの、素直なデザインだが、布地が鉄色に白のはいったシャントンなので、非常に豪華な味をだしている。シックだ。

誰もがふりむく。紗百合は顔を伏せていた。雪子夫人の胸に倒れそうだ。上気している。

乗客の足は浮いている。誰もが人に寄りかかっている。あなたまかせの江戸の春。だから、駅に着く度に激しく倒れかかる。

「乱暴な運転手だ」

と言ったところではじまらない。

それでも、芸者達の一群があげる黄色い声が、乗客の気を柔らげた。無理にその側に行こうとする男もいる。

「いけすかない」

そんな声もした。笑い声が起る。

隅におしこめられた。得意、窓にもたれたまま左手に雪子夫人、右手に紗百合を抱く恰好になった。背中がいたい。

それが――、どの駅だったか、いやという程窓に押しつけられた拍子に、
「うっ」

紗百合をかばう右手の力が次第に弱まっていくのを、どうすることもできなかった。

水の音がする。しめ忘れたのか。

台所ではなかった。湯殿、そこにかすかだが、人の気配が――

「雪子夫人」

裸のまま、いましめられ、猿ぐつわをかまされて、湯舟にもたれている。

「やはり、クライスラーだった」

しめ忘れたように、シャワーの水が一本になって、それでもかなり激しく、雪子夫人の肌を打っている。

「これが責めか」

こんな光景をある温泉で見たことがある。

自然石を畳んだ浴槽に湯の滝がかかっていた。樋から進んでいる湯滝で二メートルちかく、小量はせいぜい竹竿一本の程度。そこに、二、三人の少女が仰向けに寝て、かわる

がわる打たせていた。ごく気軽で淡白な、しゃれた感覚の悦楽、無邪気な遊戯のひとつ。だが、それがすぎれば苦しくなる。なぶり殺しだ。

廊下に足音がした。反射的に庭に姿をかくす、どうしてこんな態度にでたのか、わからない。覗きの興味か。

「早くほどいて」

雪子夫人の声だ。

明るい昼日のなか、青葉が覗いている。溢れでる浴槽の湯は、青い流れとなってタイル張りの洗い湯で、日の光と戯れている。そのなかで、豊満な艶っぽい白い脂肪の肌をぬめぬめと、紗百合の背や腰に弾力あるリズムをひびかせている。

そこには、精神をも超越した美があった。肉体だけが生みだすことのできる美があった。

魔女よ

仮面をとれ

素顔を見せろ

おれは

歎かぬ

また怖れぬ

おれは

たわけた恋人で

だが「真実」の狩人だ

その夜、雪子夫人の別室のほのかな青いスタン드의明りが、二つのシルエットを妖しく

浮彫りにした。二人は、腰紐を輪にしたのを頸にかけていた。熟練した船頭が、舟を潮の上に思いのままあやつる風情。やがて、明りが消えた。

夜空には、銀河が静かに横たわる。

流れ星だ。

いつのまにまぎれこんだのか、一匹の螢が、風に吹かれ流れて、やるせない恋の火を明滅した。

○

別室の四畳半は、東と南に出窓があった。硝子障子を通して射し込む日の光は、夜よりも昼の好きな雪子夫人のあらわな肩から乳房へと、なめらかにすべっていく。小さな床間には、どうしたことか、浮世絵には見られない、古土佐派の複製木版画が懸けてあった。いつもなら歌麿、国貞といった美人画なのだが、懸け変えるのを忘れたのかもしれない。浮世絵美人とちがっ



た、すばらしい健康な肉の香り、不思議なほどのモグニティ。雪子夫人の昼寝の夢を破らぬように、紗百合はその画の下に白百合の一輪挿しを置いた。さらりと四季の草花を描いた上品は枕屏風、そのかげの三面鏡に、その一輪の大きな百合の花は、愛される幸福にゆれた。

紗百合は、おや、と思った。出窓に可愛いビニールのおむつカバーが乾されてある。そのわきに、浴衣を解いた襦袢が二、三枚。

暇をとった女中が、帰り際にそっと耳打ちしたこと、

「雪奥さま、たまにお粗相をなさるんですよ」

そのときは、

「まさか」

と笑ってすましたのだが、

「人目をさけて乾してある」

それに、夏彦の乱行を考えてみると、うなづけることだった。

こんなことがあった。

由紀彦が湯殿で洗濯をしていたので、

「紗百合が洗ってあげる」

由紀彦はあわてて汚れ物をかくすと、

「けっこう」

「男の人が洗濯するなんて、おかしいわ」

「慣れているから」

「かしてごらんない」

うしろにかくしたのを、無理にとろうとすると、

「だめだったら」

「洗濯する男なんて、嫌い」

由紀彦が驚いた拍子に、素早くとってしまった。

「あら、おむつ」

「いけない」

チャイコフスキイのバイオリン協奏曲が由紀彦の部屋から流れている。

紗百合はドアをあけた。

最強奏の展開部は、堂々たる管弦楽だけで第一主題を奏するところから始まって、幻想的なメロディを続ける。その途中、独奏バイオリンが出て更に華かな展開を見せ、もう一度管弦楽だけで豪壮に第一主題を展開し、のち独奏バイオリンの印象的な半音階の経過となる。

コスタ・リカでチャイコフスキイの夕を聞いた帰り買い求めたもの。由紀彦はこの展開部が好きで、いつもかけていた。秘めた恋をなつかしんでいるように。

第一楽章が終ると、レコードをとめて、由紀彦は微笑んだ。

ほのかに化粧の香りがただよう。

処女を捧げてこそ、純潔は保たれる。それを紗百合は知っているのか、微妙な精神と肉体のからくり。

「僕には、純粋な恋愛などできるわけがないんだ」

「うそ、紗百合、見てしまった」

「えっ？」

「由紀兄さまのノオト」

「その二」

「その一」

由紀彦は静かに言った。

「純粋な、といったけれど、それが自己に忠実に、ということと同義語だったら、僕には二つの愛が必要なんだ」

「お姉さまと私」

「そう。それが、いわゆる純粋、ということを考えて、舌人形の行為が苦しくて仕方がない。不健康に思えるのだ。何故だろう、いわゆる正常人だからだろうか。そして、紗百合にひかれていく自分が、健康に見えるのだ」

「紗百合だって、お姉さまと——」

「知っている。嫉妬も起きなかった。同性だからか、違う。あのときは、肉体の美に魅せられた。紗百合だって、お姉さまが好きなんだろう。お姉さまに安心して身をまかせたとき、純粹が保たれて、それが僕には美しく見えたのだ」

「わからない」

「僕の言っていることは矛盾かもしれない。置き換えてみれば、お姉さまと紗百合の関係は、僕が紗百合を恋するのと同じなのだ」

「そんなこと」

「その純粹さが僕にもほしい。お姉さまに対する愛に、僕は疑問を持っている。それがいけないのだ。そして、それは紗百合を知ってから感じ始めた」

「由紀兄さまは考えすぎる。自分ばかりきびしく、紗百合には甘い」

「二人とも、お姉さまに魅せられた」

「そうかもしれないの。そして、二人ともお姉さまが好きだった」

不意に、由紀彦は汚れた襦袢をだした。

「洗ってくれる」

紗百合はうなづいた。雪子夫人が夜尿症、といってもそんなにひどいものではなかったが、忘れた頃粗相をする。それもわずかに。

いたずらっぽく肩をすくめて舌をだす。

「またいじめられたの」

夏彦に責められる夢を見たときが多いらしい。見ないこともあるというが、夢など眼がさめてしまえば忘れてしまうものなので、確かかなことはわからない。雪子夫人の微妙な肉体に関係があるのかもしれない。夏彦に責められると、よく粗相をしたというから、それが高じて夜尿症になったのだと思われる。

夏彦が責めにあきると、雪子夫人は無理に襦袢をあてられて、街を歩かされた。

ビニールのパンティをはかせられたこともある。そんなときには、

「ビールを飲もう」

夏彦はさっさとビヤホールに入っていく。

「いや」

雪子夫人は、しばらく入口で躊躇するのだが、あきらめて夏彦に従ってしまう。

そのうちに、

「化粧室に行かせて」

「だめだ」

雪子夫人の消え入るような哀願は、そのままビールの量に比例する。

「もう、だめ。お願い、行かせて」

「だめだ」

「いや、いやいや。あー」

秘められた行為が、夏彦のビールのさかなになる。美しい表情。

「行こう」

そのまま歩かされる。おそろおそろ歩いて雪子夫人を、夏彦は邪慳にひっぱる。

「かんにんして」

それがまた、夜尿症を高じさせた。

「お姉さまは、お兄さまを愛していらっしゃるのね」

「そうでしょう。どんなことをされたって、忘れられないんだ。たまには拒むこともあるだろう。それは、悲しい抗議なんだ」

紗百合は、洗ったばかりの襦袢を、由紀彦に手渡した。

「幼児性かもしれない。魔性と幼児性とは同じですからね」

「別室に乾してあるのは？」

「昨夜、二度粗相をしてしまって。あててあげたの。ねぼけて、可愛いかった」

湯の音がする。雪子夫人が白日夢からさめたらしい。白い裸身が、緑の光とたわむれるのも、もうしばらくの間だろう。やがてうっとおしい梅雨がやってくる。由紀彦は、タバコに火をつけた。

当代女武勇列伝

——伊集院典子の場合——

諸岡 堅雄

馬乗は柔道女性の特権

本誌六月号の「当代女武勇列伝」に私の先輩浦里晴子さんがヒロインとして登場なさったのを機会に、後輩の私もこのシリーズに登場させていただくことに致しました。晴子さんは大学では私より三年先輩で柔道も私よりお強くていらっしゃるんですが、しかし柔道歴では小学校の五年のときからはじめたこともありまして、私の方がうんと長く、またそれだけにか弱き男どもを降服させた回数は、彼女よりはるかに、多いのではないかと思いま

す。晴子さんは投げ技がお得意でしたが、小牧原先生に教えられたこともあって私は寝技で責めることが多く、したがって晴子さんのような派手な武勇伝はあまりございませんがしかしこれまで男どもを組伏せてじっくり痛めつけてやった回数は、やはり彼女よりはるかに多いのではないかと思っております。

プレーではなく実力で堂々と男性を馬乗りに組敷くことのできるのは柔道女性の特権ではないでしょうか。好んで下になりたがる男性もこの世には随分おりますが、しかしそんな連中でも大勢人さまがごらんになっている

前で女性から馬乗型で責められると顔をまっかにして下から逃れようともがくものです。やっぱり恥しいのでしょうかね。

しかしそうなりますと妙なもので、こっちはもっとうんと恥をかかしてやれという気になるのです。お尻と両腿で相手の自由を制しているという征服感がそうさせるのでございましょうか。その辺のところはよく存じませんが、だんだん興奮して全身がしびれてまいることは事実でございます。

少女の身で寝技の名手

女が跨るということだけで心理学者や風俗評論家はいろいろの説をたてておりますが、そういった学問的分析は、このさいしないことにいたしましょう。

私の場合について申しますと、いうまでもなく子どもの頃からお転婆で、お菓子の取りっこや自転車の奪い合いなんかも弟たちを押えつけて言うことをきかすという我儘ぶりを発揮したものです。下の弟たちはこの強いお姉さまにははじめからあきらめて至極柔順でしたが、現在は某鉄鋼会社に勤務し柔道四段の上の弟は年がたった一つしか違わない上に当時腕自慢の暴れん坊でしたので、よくこのお姉さまに刃向って参りました。取組合ってもなかなかいい勝負だったのですが、最後はかならず私の方が馬乗りに組敷いてしまったものです。子どものこととて、こんなとき彼は大声挙げて泣き出したり、母に救いを求めるのですが、若い頃薙刀の使い手で今でも武張ったことの大好きな母は私を叱らず「男のくせにだらしない。ママを呼ぶなんて意久地なし」とかえって弟を叱りつけるのでした。ですから私もいい気になって、「お姉さま、お許し下さい」と詫るまではいままで馬乗りのままで痛めつけてやったもので

す。むろん彼はあらん限りの抵抗を試みるのですが、そのたびにお尻や両腿が適当に刺激されて、とても気持がよろしゅうございました。

弟は「いまに僕、柔道習って姉さんをやっつけてやるんだ」と申しまして、小学四年のとき、父が親しくしておりました小河原先生の道場へ通いはじめました。そこで私も負けとなるものとばかり両親におねだりして、弟と一緒に道場通いをするお許しをいただきました。

その頃道場には女性も十数人見えておりましたが、BGの方や大学、高等の学生ばかりで小学生はだれもおりませんでしたので、先生は「少し無理かも知れないが」と仰りながらも私を弟たちの少年組に編入なさいました。

しかし先生のご心配はまったく杞憂だったのです。何故って、私とっても強く二、三カ月もしたら六年の男の子にだって負けなくらいになっちゃったのですから。

小河原道場の柔道は講道館柔道とちがい、投げ技だけではだめで、最後は固技（かためわざ）で相手に「参った」をさせるまでつづけなければいけないのです。ですから門下生

でも大人の高段者の中には、じぶんからわざと投げられて寝技に持ち込み、相手を巧みに絞め落す方もずいぶんいらしたようでございます。

私たちは子どもですので、そんな器用な真似はできませんでしたが、それでも最後はみんな寝技に持ち込み、上から、横から、あるいは下から固技に入りました。私は天性下半身が柔軟で、それに脚力が強く一度相手の身体を挟み込んだから吸盤のように吸いついてしまいきますので、相手は逃げる事ができません。同様に倒れても私の脚はかならず相手のどこかにかかっていますので寝技ではじめからはほとんど負けたことはございませんでした。ことに馬乗りで攻めるのが大好きだったのです。

大好きな馬乗責め

おかつぱの可愛いお嬢ちゃまが、柔道着を担いで意気揚々と道場通いをするのですから人目をひき、人の噂にのぼったのも致し方のないことです。近所でどんな評判が立っていたかは子どものこととて知る由もありませんでしたが、学校では大評判で、男生徒の中には肩で風を切って歩く私を心憎く思ったも

のも随分いたらしく、そういった連中はなにかといえは私にケチをつけたり、いやがらせをいたしました。しかしそんなときは片っぱしから取って押え、みんながみている前でも容赦なく、ぎゅうぎゅう絞めつけてやりました。

そうかと思いますが、私に媚を売る男生徒も、たくさんいたのでした。邸が広いので五人十人一緒に遊びにきて母に気兼ねすることなく、どたんばたんとにぎやかに騒ぎまわることができました。ママがいつもおいしいおやつをどっさり出してくれますので、それを目当てにくる子どももいたようですが、しかし多くのものは上流家庭の美しいお嬢さまに奉仕するために、やってきたのではないでしょう。私がどんな無理なことを言ってもみんな喜んでそれに従ったのですから……。

私の好きな遊びは彼らを稽古台にして柔道の手で次々に投げ倒し、そのあと三、四人を重ね餅にしてその上から馬乗りになることでした。一番下敷きになったものは、かならず「痛い！」「苦しい！」といって悲鳴を挙げますが、私はその子の頭や顔を足のかかとで軽く蹴りながら「こら、うるさいよ」と叱りつけてやるのです。

人数の多いときは重ね餅を二列にし、その上に跨るのです。これはやってごらんになれば分りますが、はじめのうちは、なかなかうまくいきません。第一に跨ってはみたものの、両足が畳の上に着かないときがあり、そうなりますと姿勢も不安定で、もし下なる男どものうちのどれかが暴れ出そうものなら、後ろへひっくり返ってしまいます。しかし、また私のように下半身の強靱なものにとっては、この二人馬ほどスリルと快感を味わせてくれるものはございません。ただ股をひろげすぎる関係でしょうか、しきりに尿意や便意を催します。馬上の征服感をより長く味おうとしてもこれには勝てません。で仕方なくお手洗に立つのですが、あるとき起ち上がった瞬間プウッとガスが洩れ、とたんに下腹がすっきりし便意がなくなっていました。そこで強い臭いなど委細構わず再び騎座の姿勢をとりました。

おどろいたことにはだれ一人臭いというものがいないのです。みんな黙りこくったままおとなしく組敷かれています。

「あんたたち臭くないの？」私の方がたまりかねてこう申しました。するとしばらくして一人の子どもが答えました。

「典子さんだって、おならするんだね」
こんなことがあってから、少くともかれらに対して私の馬上のおならは天下御免になりました。余談ですが、先日このうちの一人の子ども——もちろん今は立派な社会人ですが——と新宿でばったり会い。お茶を飲んだとき、かれからこのときの話を持ち出されたのには思わず顔を赤らめてしまいました。私だって今はつましい女性ですもの——たといまだに馬乗癖はやまないにしても……

切れ味のよかった

一本背負い

こんな風に小学校時代は天下無敵の姫君ぶりを発揮して過しましたが、中学から高校へと進みますと、こんな工合には参りませんでした。男の子もこの頃からはだんだん強くなる年頃ですし、男子には柔道部もあり、腕自慢の連中もたくさんいたからでございます。もちろん私はちっとも悪くありませんでしたが、一番困りましたのは高校へ入ってからは、それまで毎日のように私の家へ遊びにきて私を楽しませてくれていた男の子が一人減り、二人減りしてだんだん来なくなるようになってしまったことです。学校で「ねえ、遊びに

来ない？」と誘いかけてもただ「うん」というだけで、ときどき忍ぶようにして二、三人が来るぐらいの淋しいことになってしまいました。

きけば私のところへ遊びにいくと、クラス
の山辺という男に殴られるというのです。山
辺というのは他地区のガラの悪い中学から入
ってきた男で、かねがね「女が柔道をやるな
んて生意気だ」と私を敵視しておりました。

小さい頃の私だったら、あべこべに私の方か
ら喧嘩をしかけたでしょうが、高校一年とも
なればやはり生理的にも女性としての自覚が
ございますので、いつもはやる心を抑えてお
りました。しかしある日、目の前でS君が殴
られたときには勘忍袋の緒が切れてしまいま
した。

「あんた、何するの？ Sさんはあたしの友
だちよ」

「それがどうしたってんだよう。男のくせに
女なんかにペコペコするなんて、だらしがね
えよ」

「そいで殴らなきゃいけないの？」

「そうよう」

「じゃSさんの代りにあたしを殴ったら？」

「これやおもしろえ。じゃいくぞ！」

高校一年生のくせにまるで愚連隊みたいな
口のきき方で、二、三問答しているうちにま
すます腹が立って参りました。私は晴子先輩
とちがって、どっちかというとおっとりし、
滅多にカッとなることはないのですが、この
ときだけは怒りが腹の底からこみ上がってき
たのを今でもよくおぼえております。

山辺は目を据えて「この野郎！」と叫びざ
ま私の顔面めがけて拳を突き出して参りまし
た。が私は突嗟に身を沈め、身体を回転させ
て相手のふところに入るようにし、空を切っ
たその右腕を抱えると思い切り前方へ投げつ
けました。柔道の一本背負いでございますが
ほとんど力を出さず、こんなに鮮かにきまる
とは私自身も意外でした。

見ていた級友たちも、この早業には呆氣に
とられたのでしよう、しばし声も出ません
でした。打ちどころが悪かったのか、山辺は
しばらく起き上がりません。いつもの私ならこ
こで素早く馬乗になって痛めつけるのですが
身体が大きく腕力の強いものは数度投げつけ
て体力を消耗させておいてからでないと、馬
乗めは、うまくいくものではございませ
ん。そこで山辺が起き上るまで傍で立ってい
ました。二度目は彼も警戒するでしょうから

こう巧く技がきまるものとは思えず、さてど
うしてやろうかと思ひながら……

彼が顔をしかめながら立ち上ったのは、そ
れから間もなくでした。

「来るか」と私は低い声でいい身構えながら
じりじりと迫りましたが、彼は、「もういい
よ。手を知ってる奴には敵わねえ」と言い、
すぐごとその場を立去りました。私でさえ
意外とするほど上出来すぎた一本背負いに、
すっかり気をのまれたものと存じます。柔道
では敵の力を利用するということをうるさく
いわれますが、この山辺との対決には私は完
全に彼の力を利用したのでした。苦もなく投
げたとはこのことでしょう。

柔道部副将を

馬乗型で潰す

この出来事はたちまち学校中に知れ渡り、
それからというもの、私を女三四部と讃美
するものもある反面、二年生、三年生の腕自
慢の連中は何かという露骨に挑戦的態度を
とりはじめました。「生意気だ。殴ってや
る」と、意気まぐれ連中もかなりいたようす
が、私の鮮かにきめた一本背負いが誇大に伝
えられたおかげで、面と向って殴りかかって

くるものは、だれもいませんでした。もし向って行ってあべこべに叩きつけられたら男の面目も台無しと思ったのでしょう。しかし高校生ともなりますと与太者みたいな奴がいて、刃物など振回わす不良もおりますので油断はなりません。それで私も万一に備え、母の部屋から小太刀をこっそり借用して鞆の中にしのばせたこともございました。

幸い小太刀は使わずに済みましたが、しかし二年の秋、柔道部の鴨志田（副将でした）から挑戦され、いやとはいえず受けて立つことになりました。私がうかつに、「学生柔道なんて甘いものよ」と女友だちにしゃべったことから、柔道部の連中が怒ってしまったのです。

挑戦をうけたとき、私はもちろん小河原先生にご相談いたしました。

「何事も経験です。やってごらんなさい。しかし投げ技はすてて、



寝技に持ち込むのですよ。いまの高校生にはあなたの寝技からは逃げ切れないでしょう。」

先生の奥様は「典子さんは相変らず勇しいのね。いいわ、やってごらんなさい。うちではいつも男を相手にやってるんだしコツは分ってるんだから。きっとあなたが勝つわよ」

奥様は小河原貴譽子。起倒流柔術の免許をもっていられ、お年はすでに四十五、六歳にもなっておりますでしたが、当代随一の女豪と折紙つけてもまちがいないと存じます。私はなぜこれほどの女豪がまだこのシリーズに登場しないのか、不思議でなりません。あら、余計なことを申上げてごめん遊ばせ。

さて対決の日、私は先生に教えられた通り、相手の力にさからわず、相手が引けばそれについて進み、押せばそれについて後退しました。鴨志田は力にまかせて幾度か私を振回わし、満場を沸か

せました。見物のクラスメートは「伊集院危し」と思ったかも知れませんが、これは予定の作戦。力の空回りで疲れたところを見計らい、小技（こわざ）で倒して寝技に持込むことを考えていたのです。でも、振回わされますと、どうしてもこちらの姿勢が崩れますし、姿勢が崩れますと、とたんに相手から技がかかって参ります。そのため二、三度私の身体が宙に浮き、そのたびに男学生側からわあッという歓声が挙りましたが、素早く技を返して逃れると今度は女学生の声援です。審判は柔道部の大将だった三年生の志賀でしたが、鴨志田がいままでたっても、「技あり」もとれず、それに息づかいも次第に荒くなってきたのにいらいらしていたようです。何を仕掛けてもひらりひらりと逃げられてしまうので、鴨志田はすっかり持て余した恰好です。それでも最後にかけてきた払腰で、私は尻餅をついてしまい、志賀は待ってましたばかり「技あり」を宣しました。が、そのとき鴨志田の右足が大きく一歩踏み込まれていたのを見逃す私ではございません。「とッ」と低く叫びざま横になりながら足払いをかけたのです。柔道着の裾がまくれ上り、股の付け根までが見えたのではないかと思われ

るほど、私の足は跳躍し、そして強烈に刈り倒したのでした。

寝技らしい寝技を習ったことのない学生柔道家にとってこれは意外な襲撃だったのでしよう。文字どおりステンと畳の上に仰向けに倒れてしまいました。待望の寝技に持込むチャンスがついに到来したのです。間髪を入れず私は彼の大きな身体の上に馬乗りに跨り、首を抱え込んで絞め技に入りました。

わあッという歓声です。きゃあきゃあというのはもちろん女子学生。「伊集院さん、すてき！」と嘆声をあげるのもいれば、景気よく「落しちゃえ、落しちゃえ」と声援するものもありました。

鴨志田の熱い息が柔道着を通して私の腋の下を心地よくくすぐります。彼は下から突き上げるようにし、足をばたつかせ、腰を捻って跳ね返そうとしますが、その都度私は両脚で万力のように彼の胴体を絞め上げてやりました。この馬乗責めの強烈さにさすがの彼も力尽きぐったりと伸びてしまいました。

「それまで」と宣した志賀の顔は、同僚がやられたためでしょうか、幾分青ざめていたようでした。級友たちは勝負のはじめから終りまでパチリ、パチリとカメラに収めていまし

たが、私が最後に鴨志田の身体を跨いだまま仁王立ちになり、はだけた胸の襟も合せ、ほつれ髪を手でかき上げたとき、二、三人が「イカス」と叫んでパチリ、パチリとやりました。さっそうと立ち上った美女――あら御免遊ばせ。いつも月丘夢路の若い頃みたいだなんていわれてるものですから、ついじぶんでそう思い込む悪い癖があるのでございます――の両股の下に大男がぐったり伸びており、その対照がまことにカッコいいと、この写真はいまでもみんなからほめられ、また私も内心大変得意でみなさまにお見せすることも多いのです。

馬乗になり上から はっと空手打ち

女性が大の男をとって投げたり、馬乗型で押えつけることができますのは、私の習い覚えた柔道が講道館柔道のようなスポーツとしての柔道ではなく、日本古来の武道としての柔道だからでございます。曾根六段がヘーシンクに敗れてから講道館でもさいきん寝技を重視するようになりましたが、女子部ではないまなほ、いぜんとして投げ技ばかりでございます。もっとも有段者には型として教えてお

りますが、乱取のさいはまだ禁じられているときいております。

私の恩師小河原先生は古来の柔術の研究家で、戦後のスポーツ化した柔道を変容させた上で、また女子柔道についても、女子が攻撃的であって何故悪いのか、攻撃こそ最上の防禦だと申されております。貴誉子夫人も「スポーツ柔道では身体が大きいものが勝つにきまっています。それでは護身にも役に立ちません。私のような小さな女性——と申しましても私より少し小さい位で、中年の女性としては大柄な方ですが——が男の門下生を苦もなく投げとばせるのも、これが武道であるからです」とよく仰っています。

いまでもときどきお二人の模範試合を見させていただきますが、それはとっても凄いです。一口に申しますと、柔術は柔道と空手と合気道とレスリングとを一緒にしたもので、相手を制するためにはどんな手でも使います。おとなしい貴誉子夫人も稽古着を召されれば別人のごとく、その敏捷な身のこなしは隼のようでダイナミックな美とはこのようなことをいうのでしょうか。立ったままの姿勢から両脚をひろげて躍り掛り、ご主人の頸や胴を締めつけて倒し、馬乗になるやはっしと

上から空手打ちを加えたりなさいます。が先生もさるもの、それをひっぱずとみるや、目にも止まらぬ早業で奥様の身体を横の方へすつとばしてしまふのです。その動きの早いこと。こんどは先生の方が上から押え込みにかかろうとなさいますと、奥様は下から足で相手の頸、胸元を突き上げるか、ときには両足で相手の首を挟んで横倒しになさったりします。いずれも瞬間の早業で目にも止まぬとはこのことです。むかし武家の娘たちが習った「やわら」というのもこれで、技は千変万化。相手の手元をかくぐり膝頭で睨丸を蹴り上げることもよく致します。この手を使われたら男など一発で仕止められてしまふでしょう。

女豪晴子さんを

締め落す

晴子さんが小河原先生の門下におなりになったのも、投げ技だけの講道館柔道にあきたらなかったからなのでございます。本誌六月号のこのシリーズを読みますと、晴子さんはMとの対戦で、じぶんの仕掛けた小内刈がきまらずと見るや、腕がらみに押え込もうとなすっていますが、このように立技からすぐ寝

技に入れるようになったのは小河原道場のおかげなのです。

晴子さんと初めてお会いしたのは私が大学一年のとき。晴子さんは四年生でした。たしか夏休に入ろうとしていたときで、私は何よりもその偉大なポリウムに圧倒されてしまいました。身長は私より三センチほど低くて一六〇センチぐらいでしたが、大きな胸のふくらみ、わけでもショートパンツの縫目が今にもほころびそうになっている物凄い臀部と大腿部を見て、度胆を抜かれてしまいました。体重六五キロとかおっしゃっていましたが、当時彼女のボーイフレンドだった連中はあの挽臼みたいな巨大なお尻の重圧に耐えかねてさぞ悲鳴をあげたことでしょう。（なお本誌六月号の挿画で、彼女が眼鏡をかけていますが、晴子さんの視力は完璧、また目が悪いと柔道も上達いたしません。念のため）

そのとき先生から「二人でいちどやってみなさい。伊集院さん、先輩だからといって遠慮はいりませんよ。当道場ではあなたの方が大先輩なんだから」と仰有いました。たしかに後輩の私ではありましたが、講道館柔道に負けては先生の顔に泥を塗るようなもので、すからかならず勝つという気迫で対戦しまし

た。彼女は彼女でまた、じぶんは柔道の総本山でしかも黒帯、町道場のしかも三つも年下で、身体もじぶんより小さいものなかに、負けるもんかと思っていたにちがいありません。

彼女は立ち上るや私の横襟をつかむと、力まかせに前へ崩し、腰を入れると右足でさつと私の両足を薙いできました。払腰ですが、こっちは相手の腰をひらりと飛び越えて、彼女の技を軽く空振りさせました。さきほどの鴨志田との一戦をごらんになっても分るとおり、力まかせに掛けてくる技では私に通じるはずはございません。

夏のこととて四、五分もたつと双方とも汗びっしょり。晴子さんのはだけた胸からは乳当を通して汗が滲み出、それがポタリポタリと垂れているのです。むっとする臭い。二人ともたしなみよく肌には香水をしみ込ませているのですがちっとも効果がございません。気の短い晴子さんは大分じれてきたようです。と次の瞬間、身体を沈ませ、私の股間に右手を差込むや、私を上にもたげ、強引にも肩に担いで投げつけようと致しました。肩車です。が彼女が私を肩に担いで立ち上ちうとしたところを、私は素早く右腕で相手の首を

巻き、仰向けざまに押し倒し、馬乗りになって上から攻めようと思いました。ところが身体を跨いだ瞬間、晴子さんの両手がのびて力いっぱい足を引っ張られ尻餅をついてしまいました。しかし心配はございません。次に相手私の身体を跨いだとき、こっちも同じ手を使って倒せばいいのですから。

だが晴子さんは不用意に馬乗りになろうとはせず、六五キロの巨大なボリウムを上からまともにぶっつけて参りました。むろん私は押し倒され、小山のように盛上った彼女の両の乳房の谷間に顔が埋まってしまい、息もできません。ですが、これまた心配はないのです。なぜならば私の両脚は彼女の下半身にからみ付き、その自由を完全に奪っていたからです。

こうして揉み合うことしばし……とでも申して置きましょうか。矢庭に私は攻勢に出ました。下に組敷かれながらも、右肩をやや上げ、右膝頭で相手の腿を突き上げて横倒しにすると、送襟絞めで責めました。下になりながらも私の両脚は彼女の胴に吸盤のように吸いつき、両手は襟にかかっているのです、相手はもがけばもがくほど苦しくなります。

晴子さんは身体を横に投げ出して、この責

苦から逃れようとなさいます。苦痛で全身が波打っているのが私の身体にも伝わってきます。こうなればあべこべに相手を下敷にし、上から得意の馬乗責めを試みるのは訳ないのですが、先生の目の前での試合ですので、さすがに遠慮いたしました。

「それまで」という先生のお声に、私は絞めた手をゆるめ、晴子さんを横に投げ出すようにして立ち上りました。

「あんた、そんな可愛い顔してて凄く強いじゃないの」

もう晴子さんは頭から足の先まで全身汗でびっしょりです。竹を割ったような性格です。ので、負けたからといってくよくよなんてしておらず、ともさっぱりしたものです。しかもちっとも息切れしていないところはさすがに思いました。鴨志田なんかとはえらいちがいです。

夢にまで見た

朝潮の胸毛

晴子さんの入門で小河原道場の女性軍の意気は一段と上がりました。私ひとりだけでも大いに気を吐いていたのに、もうひとり女三四郎が加わったのですからたまりません。

晴子さんは少壮男子にも劣らぬ堂々たる体格、それに腕っぷしが途法もなく強かったの
で、二段、三段の男の門下生ももて余し気味
しかもちょっとでも手をゆるめると、彼女の
切れ味のよい投げ技で投げつけてしまうので
す。でも寝技に入りますと苦もなく押えつけ
られてしまいます。そこで彼女はもっぱら私
相手に寝技に精進いたしました。

喜んだのは男の門下生です。美女の決闘と
一口に申しますが、女同士が寝技の応酬をす
るのを実際に見る機会は滅多にございますま
い。先生ご夫妻のお留守のときなどカメラに
収める門下生もありました。

「伊集院さんが馬乗りに押え込んだときの表
情がすばらしい」

「典子さんの目の輝きがとってもいい」

私も出来上った写真を眺めながら、じぶん
ながらほんとうにいいなあと思ったこともし
ばしばです。

でもどうして、私ってこんなに馬乗になる
のが好きなのでしょう。ボーイフレンドを
えらぶときだって、数度乗り心地をためして
からでないかと友だちになれないのです。その
頃のこととございます。私はよく当時売り出
し中の横綱朝潮の夢を見ました。あの胸毛の

生えた逢しい胸板が何よりもの魅力で、私が
その上にむんずと跨ると、まるでゴムまりの
ように弾んではお尻を上げるのです。その感
触のすばらしさ。次は私が五〇キロあまりの
全重量をお尻にかけて上から押えつきます。
でもまたはね上げられるのです。押えつけ
る。はね上げるといった動作が十数回もつづ
きますと私はすっかりエクサイトし、恍惚境
に誘い込まれるのでした。

これは少し病的じゃないか、と内不安にな
り晴子さんに打ち明けたこともございます。

「あんたは胆汁質なのよ」

「そのタンジュシツってなあに？」

「さあ、どういったらいいのかな。あたしは
気が短く、落着きがないけど、あんたは気長
で冷静。柔道だってあたしのはパッパッとい
くけど、あんたのはねっちりねばってチャン
スを待つという行き方ね」

「たしかにそうね」

「そのように胆汁質のものは沈着冷静にして
意志強固だけど、その反面、強慢、残忍であ
るという性格的欠陥がある」

「あら、そうなの？」

「あたしの意見ではなく『広辞苑』千三百六
十三頁にそう出ている」

「なるほど。強慢、残忍ね。思い当るわ」
「あんたならお嫁にいつでも夫君を馬乗りに
組敷いて傲慢、残忍ぶりを発揮するだろう
な」

「あら、困るわ。そんなことないわよ」

「気にしない、気にしない。こんな可愛い
魔女になら傲慢、残忍に振舞ってもらいたい
って男はわんさというわよ」

「まあ、魔女だなんて……ひどい」

「心配ない、心配ない。大いに馬乗をたのし
むのね」

このときの強慢、残忍という言葉は、いま
でも頭にこびりついて離れません。しかし強
慢、残忍と申しますが、私にへり下り馬乗に
なってもらうことを喜んだり、光栄に思っ
ている男どものいるかぎり、どうにもならない
じゃありませんか。私と晴子さんと輜当の原
因をつくった吉村敏文もそういった男どもの
一人なのでございます。

ドン・ファンに

寝技を教授

彼が小河原道場へ入門して参りましたのは
私が大学四年のときで、晴子さんはもうとっ
くに、婦人記者として活躍していられた

が、週に二、三度は道場に見え、相変らずさっそうと女三四郎ぶりを発揮していらっしました。

敏文はN大芸術科を出て、テレビのシナリオを書いたりしておりましたが、稀代のドンファンで、あらゆる型、あらゆる職業の女性

と交渉をもったという噂で、こんどは柔道女性を手なづけるため入門してさたのでした。しかし私に白羽の矢が立っているときかされたとき、私はもうかんかに怒ってしまいました。

「よし柔道女性の根生を見せてやる」

とばかり、敏文を引っ張り出しては思い切った荒技で稽古をつけ、早々に道場から追っ払ってやるつもりでした。

「あんた、ちょっと手荒すぎるわよ」と晴子さんからたしなめられたこともあるほど、それはそれは猛烈な稽古でした。しかしドンファンのくせになかなかタフで、一週間ぐらいで恐れをなして退散するかと思っていたのに、二カ月、三カ月と続くのです。

「あんた案外見どころがあるのね」

年上の男性をつかまえて随分横柄な言葉使いとお思いでしょうが、道場ではあたりまえのことです。

「ええ、僕真剣なんですよ。伊集院さんからじきじき寝技を教えていただくまで稽古に励みます」

なんてしおらしい言葉なんでしょう。思わずほろりとしちゃって

「私でよかったら教えて上げるわ」

「ほんとうですか？」

彼はとび上がらんばかりに喜び、

「有難うございます。有難うございます」を何度もくり返しました。敏文はドンファンだけに苦味去った女好きのするなななかい男です。それに私の大好きな胸毛が



柔道着のほだけた襟元からのぞいています。よし、あれに跨ってずっしり重みを掛けてやろうと例の不逞な考えが私を支配してしまいました。

でも立技の基本もできていない敏文に正式に寝技を教えるわけには参りません。そんなことをしたら先生からお小言をいただくのは必定です。事実寝技の難しさは立技から寝技へ移るその微妙な瞬間にあるのですから。

こんなわけですので「教えてやる」とはいったものの、相手が未熟すぎるのでその方法に困ってしまいました。考え抜いた末、彼を押し倒して馬乗りに跨り「さあ、私を返して（跳ね返す意味）ごらん」と言いました。これだと寝技を教えていることにはなりません。私が上に跨ることはいいもので、下なるものが未熟者の敏文であっても、だれもいぶかるものはありません。

跨っては見たものの、夢に出てきた朝潮の胸みたいにお尻をポンと跳ね上げるような弾力性はなく、ちよつとがっかりしましたが、それでもお尻の下に胸毛があるということ。悪い気はしません。敏文が私の袖や襟にかけた両手に力をこめ、身体をよじり、足をばたつかせて跳ね返そうと暴れるにつれ、だんだん

ん私の気分も高揚してまいります。もちろん彼には跳ね返す技はありませんので、その技を上から指示してやるのが私の役目ですが、「どうやったら返せるか、自分でいろいろ工夫してみるのよ。いい？」

といいながら何時までも馬乗気分陶酔しておりました。それでも彼は最後に私の両襟に手をかけ腰を上げて私を前に崩そうとしました。これは正しい方法なので、こううときはわざと前へ投げ出されてやるのが親切な教え方——と分ってはありますが、それではこちらの気分が中断されます。そこで相手の腰が浮いた瞬間両足首をその下へ挿し込み、騎坐の姿勢でぐいぐいと両膝で胴を絞め上げてやりました。苦痛に歪む彼の顔を上から見下しているうちに、しびれるような快感が私の全身をとらえはじめました。絞めはすぐゆるめてやったものの、こんどは身体をずり上げて太腿で思い切り顔を挟みつけてやりました。道場でこんなことをするなんて、私はよほどエキサイトしていたのでしょう。彼はと見ると私の股間に顔を埋めてうっとりしているのです。

「何してんの、あんた！ そんな寝技ってないわよ。止しなさい」

晴子さんの声です。

「あんた、ここは道場よ。許せないわ。こんな真似！」

語気は大へん荒く、ほんとうに怒っているのです。これは当然で、こっちは一言もございません。しかし晴子さんから「吉村さんの稽古はこれからあたしがつけるわ」といわれたときには、何か宝物を奪い取られるような気がしたのでしょう。

「寝技のお稽古を私がつけて、どこが悪いの？」

「ふん。これがお稽古？ 冗談じゃない。お馬のお稽古ならほかでやってよ」

重々こちらが悪いのですから叱られるのはあたりまえですが、それにしても何時もの彼女とはまったく違って、その睨んだ目にはありありと敵意が感じられました。「ははあ。そうだったのか」というわけは、いつぞや彼女が「あのドン・ファン、ちよつとイカすじゃないの。それにお稽古も熱心だし、気に入ったわ」と、言ったことを思い出したのでした。しかしこうなると妙なもので、敏文を晴子さんの手にだけは絶対渡すものかという気になってしまったのです。それにしても晴子さんや私を吸引する彼の魅力はすばらしいも

のです。

女豹と美獣の決斗

彼の父上は証券会社の重役とかで、そのおかげで彼も収入とは不釣合なデラックスなアパートに住み、自家用車も持っていました。それで、ドライブにはよく誘われ、箱根や富士五湖といった近いところから、泊りがけで京都、奈良、六甲（神戸）までも出かけたことがございます。

関西旅行は私の提案で、高校の卒業旅行でいったとき非常に印象がよく、もう一度試してみたいとかねがね思っていたからです。それに自動車で気儘な旅ができるのが魅力で一週間のプランをたてたのでした。もちろん彼は雀躍りして喜びました。

「そんなにうれしいの？」

「あなたと二人っきりで泊りがけの旅行ができるなんて夢みたいですよ」

「二人っきりといったって別にどうってことないじゃない？ あたしの方がうんと強いんだから、手出ししよったってだめよ」

「変な真似なんかしませんよ」

「あたりまえよ。そんなことしたら本当に絞め落してやるから……」

凄味を利かせた効果は満点で、一週間のドライブ旅行はほんとうに楽しく、ホテルや旅館で二人っきりになると、下僕のように忠実に仕える彼がいじらしくなり、かえってこっちから手を出したい衝動に駆られたことが幾度かございました。木石ではなし、これは自然ですが、しかし柔道女性がドンファンなんか負けてたままるものかという意地張りが、そうした衝動を抑えたのだといえましょう。身を投げ出すとそれを受け止め、抱擁する彼の技巧はまさに満点、異性をとろけさせてしまいますが、幸か不幸か、そのときの自信に満ちた彼の表情が、いつも私を反措させ、「こんな女蕩らしの自由になってたまるか」という気にするものでした。

帰途蒲郡で彼は私に結婚を申し込んだのです、目付きを見ていますと、その心情にウソいつわりはなさそうなので、私も真面目に応待いたしました。

「でも、あたしと結婚はできないわよ。何故って、あたしとって、強慢で残忍なところがあるんだから……」

強慢、残忍という言葉に彼はいささか戸惑った様子でしたが、矢庭に立ち上り、私の足元に跪くと

「僕は典子さんのような女性を今日まで求めつづけて来たのです。あなたのような方から一生奴隷として奉仕しても悔いはありません」

「まあ、奴隷だなんて大げさな……」私は声をたてて笑い、「同じような言葉で随分女のひとを引っ掛けてきたんでしょ？ あんたはドンファンだから」

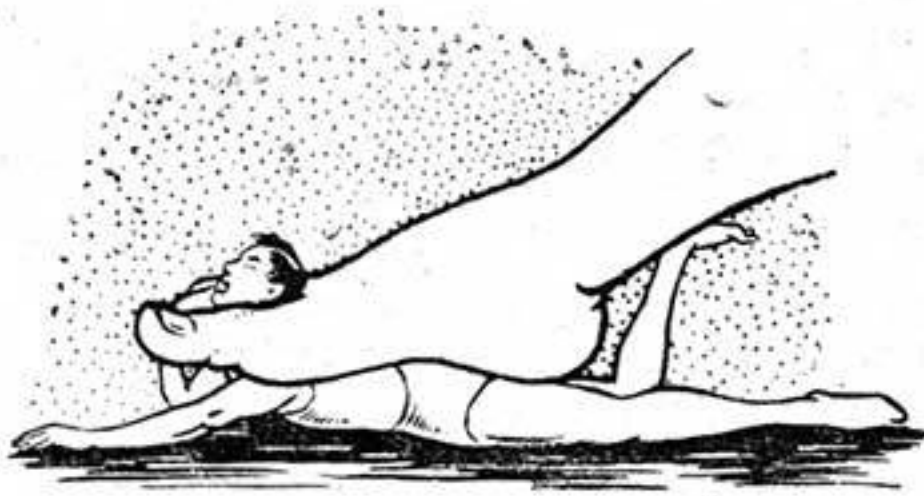
「ドンファンは止して下さい。僕はあなたにお近づきできて、ほんとうの恋というものを知ったのです」

人間の心理というものは、ほんとうにおかしなもので、いままで惹かれていたのは私の方、そして私は意地づくでも彼を晴子さんに渡すまいと思い、そのためにも関西旅行を実行したのでしたが、いま彼から求愛されて、私の方が主導権をにぎってしまいますと、相手をじらすだけじらすという気になりました。これも強慢、残忍な性格的欠陥なのでしょうか。

でも、このときから二人の間は柔道の先生と弟子という隔たりはなくなり、私は相変らず威張った言葉を使っていたが、平常のお付き合では彼の方も友だち言葉を使うようになりました。そして彼の願により寝技

マゾ、マゾ、& マゾ

平 伏 人



の教授はもっぱら彼のアパートで行うことに致しました。デラックスな部屋といっても柔道ができるような広さはございません。ですから私の教授の範囲も極く狭いものでしたが二人っきりの世界ですので大胆な技がいくらでも使えました。

もうその頃は冬にさしかかっておりましたが、暖房のきいているお部屋なので、しばらく揉み合うとすぐ汗ばんで参ります。ですからおしまいには双方パンツ一つの原始人として対決することになります。たがいの異物を蔽い隠すという近代的教養はそこにはなく、すべてをさらけ出してまともにぶつかり合う

のです。女豹と美獣の決闘とでも申しましょうか。ベッドの上で押え込む。逃げる。捕えてソファアへ押しつける。おトイレへ逃げ込む。おトイレと申しましても、風呂場兼用で広いスペースがとってあり、シャワーも用意してありますので、格闘に差支えはございません。しかも止めを刺すのには一番よい場所でもあるわけです。

彼の胸毛を足で踏んづけ、上からシャワーの水を顔一面にかけてやります。苦しがつて両足で私の足をつかみ、引き倒そうといったしましても、そんな幼稚な技で倒れる私ではございません。これでは私の大好きな馬乗を誘

うようなものです。ゆったりと首の上に跨り水気をたっぷり含んだ海綿で彼の口を蓋し、その舌で水気を吸いとらせるようにいたします。

またこうした戯れに對しいろいろの批評の加えられることもよく承知しておりますが、どなたさまにもご迷惑をかけず、また隠微の裡に互いの解放感を満喫させることに對して、これをいちがいに悪徳ときめつけることはいかがなものでございましょうか。あら、私いっぱしの理論家がぶってえらうなことを申してしまいました。この辺で失礼申上げます。ごめん遊ばせ。

(終)

マゾヒスト(特に幻想派マゾ)にとってプレイの実行により悦楽の極に達すると云う事は、勿論誰しもが、日夜忘れる事の出来ない夢であり、願望である事は論を待たないと思います。しかし乍ら、世の大多数のマゾヒスト諸君は、此の様な機会には恵まれず、かろうじてSM雑誌或は分譲写真などに依って、自ら空想の世界に運び、はかない自慰に我が身をゆだねて居る事と思ひます。

海外に旅行のチャンスのある方へ。皆様もすでに御存知と思いますが、日本と違い、欧米諸国ではサド、マゾは変態と言うよりすでに、セックスの一部として理解される日本の女性の様にマゾって何に?と、とぼける様なカマトトはほとんど居りません。いわゆるガールズ・ハウスと称せられる娼家へ行つて、勇敢に「予はマゾヒストなり、貴女の奴隷となる事を望む」と言えば十人の中八人迄は、此れに答えて、極めて自然にプレイに入つて呉れる事は、小生の経験から云つても、太鼓ばんを押して良いと思ひます。私が、五年程前に商用で、ヨーロッパに旅行した時の事です。

在欧三カ月程して、ようやく外地の生活にもなれ、そろそろ自分の性の欲求になやまされ出した私は、Y市郊外にある、ありふれた娼家に行ったのです。五人程出て来た娼婦の中から、私は、自分の好みに合った二十才位の、丸い顔立ちの一寸、太り過ぎみですが、要所のクビレた、グラマー嬢を選び、彼女の部屋へ行ったのです。前に述べた様に勇を鼓して、自分がマゾヒストであり、自分の欲求を満たして呉れる様、彼女にたのみこんだのです。彼女は、一寸、これ気味の私に対し、「あなたは、恥しがって居る様だが、決して、恥じる必要はない。自分の性向をあなたの様に、正直に話して呉れる方が、私もあなたを充分に喜ばせる事が出来るし、あなたも、自分の支払った金が、有効に生きる事になる。」と言って、改めて、色々と私に、質問するのでした。

(問) 体をしばる事、鞭打つ事等ダイレクトに、肉体に苦痛を受ける事を望むか。

(答) 私は肉体的苦痛は、あまり好まないが、恥しめの一部としては受入れられる。

(問) 恥しめを受ける事を望んで居る様だが、汝は人間として、奴隷として、私に仕える事を望むか、又は、家畜として、犬、馬としてのあつかいを受ける事を望むか。

(答) 恥辱の世界は予の樂園なり、此の限りに於ては、予は其の程度の強きを望み、決して、あなたの慈悲は望まない。

(問) 汝は、屈辱を期待して居るが、私の排泄物のみならず、私の友人達の排泄物をも口にすることを望むか。

(答) 其れは、予の最も望む所なり、概略、右の様な問答が終ると、彼女の態度は、一変致しました。

「スレーブ!!」
「ピッグ・テール」

即ち、奴隷、豚の下尾、と私をのしりと、ベッドの下から、シエパードの調教用の鞭を取り出して、私を鞭打ち、夢の世界へといざなうて呉れたのです。プレイの描写が目的ではないので、詳しくは述べませんが、私は彼女の命令で、文字通り、犬馬の労を取らされ、彼女の貴き神水を、心ゆくまで味った事は当然の事です。二回目に其の娼家に行った時は、彼女の部屋の便器に、抑向に顔を乗せ、体を縛られ、犬の首輪をつけさせられ、約一時間と言うもの放置されました。そして、彼女の友人達の娼婦の神水を、五回にわたって、自分の口に受ける光栄を得たのです。三回目の時は、彼女の鞭に追われ乍ら馬として、娼家の廊下を往復させられ、又首輪の鎖を引かれて、空いて居る部屋の便器掃除を各部屋の女主人の鞭の下で、しなければならなかったのです。

此の様な経験は、すべての娼家にあてはまるか、どうか、わかりませんが、私の受けた印象では、前述した様に、其の確率

は、極めて高いと確信して居ります。但し、代金は通常の場合の約五倍払わねばならぬ事を申し上げておきます。

あまり、海外の話ばかりでは、皆様にとって、現実性が無いと思いますので、今度は、内地の話をご紹介します。

鼻汁、唾等、女性の排泄物(尿尿を除く)を手に入れたい方へ。

此れは比較的簡単の様ですが、いざとなると中々難しい事です。勿論、しわくちゃばあさんの物でも良いと言うのなら、別ですが。やはり、自分の好みに合った女性の物を手に入れるとなると、一寸は頭を使わないと出来ない芸当です。

女性好みの映画を上映して居る映画館へ入り、先ず場内の明るい間に、此れはと思う女性に目ぼしをつけ、出来るだけ其の近くに席を取ります。

出来れば、三人位の女性に目ぼしをつけるのが良いと思います。

暗くなったら、決して、スクリーンに心をうばわれてはなりません。其の女性が、鼻をかむのを今か今かと持って居るのです。不思議なもので、女性と言うものは、街の明るい所では、決して、鼻紙を捨てると言う事はありませんが、暗い映画館の中では平気で、シートの下へ捨てて呉れるのです。

貴方は、此の貴いダイヤモンドにも似た、鼻紙を後で、ソツと手に入れば良いわけです。

魔女伝説秘話

魔女マドレーヌ

近藤

一

マドレーヌは魔女である。大勢の人々の生き血を吸い取ってしまったマドレーヌは、数百年の間にヨーロッパ各国で三十数回の死刑を受けた。最後に選んだ火焙りの刑を執行しながらも、今眼前に焚死するマドレーヌが必らず近い将来どこかの人々の前に甦えるものと信じ、そして子々孫々に伝えて一つの信仰にまで育てていたのである。

—

空は灰色に濁っていた。海は蒼黒く激しくうねりを岩にぶち当てていた。

ガーン、ガーン、カーン、カーン

強く近く、そして遠く弱く、教会の鐘の音が、餌するもののない波の上へ流れて行く。

“また今日も葬式かよ”

村人の胸は重かった。“不死身のジャンもとうとうおっちんだんだな”

“そりゃそうよ。誰だってあの病にゃ勝てやしねえ”

“それにしても、えれえ病にとっつかれたもんだ。とんでもねえこった”

ノルマンディ半島のサンマロ湾に面した此の小さな村は半漁半農で、決して裕福ではなかったが、しかし平和そのものであった。それが数日前から奇妙な恐怖に襲われたのである。水夫あがりで村一番の頑丈な体を持ったジャンという男が四人の仲間と一緒に漁に出てシケのためにビスケー湾の奥深く流されてしまった。ドーヴァーの荒波で鍛えたと自慢するだけあって、ジャンはどうか船を操っ

て村へ帰って来たのであるが仲間の一人は頻りに体の不調を訴え、歯茎から血をにじませていた。皮膚は土色になっていて、小屋へ担ぎ込まれた翌晩、血を排泄すると共に息が絶えてしまった。病み上りで出かけた男だったし、月余の漂流による疲労と、そして明らかに壊血病の症状であったけれど、この小漁村の人々には初めて見た死に様だった。それが数日前のことである。

その葬式を済ませたジャン達四人は、船の破損箇所を修理するために山へ木を伐りに行った。充分に切り目を入れてから、さて引き倒そうと縄をかけていた時、何のはずみか、四人の上に樹が倒れて来た。あつという間もなく四人は樹の下敷になっていた。ジャンの左腕が裂けて血汐がとび散った。一人は膝から向う脛、足の甲まで処々皮を削られた。親友のダントンは左腕の皮をそがれた。三人は枝の下から匍い出すと、それぞれ応急に泥を塗りつけたりして血止を施し、シャツを割いて巻きつけた。それから樹を押し上げて、もう一人の仲間を引っ張り出した。彼だけは擦り創ぐらいだった。処がほうほうの態で引き揚げる途中、その男は急に大地にぶっ倒れて苦痛の唸りを上げたのである。三人は驚いて

しゃがみこんで、いろいろと話しかけたが、彼は唯唸るばかりだった。

朱に染まった三人が、凄いいなり声を立てている男を抱えて歩いて来るのを見た時、村人は悲鳴を挙げて途をあけた。男は翌朝にはもう冷たくなっていた。頸骨骨折、頸部内出血であったが、村人には外傷もない男が頸をがくくん云わせて、呻きのたうち廻って死んだのが唯々恐ろしかった。

葬式を出した時、ジャンは体中が熱かったし体の節々が妙に痛んだ。脚を傷つけた男は葬式には来なかった。葬式が終ってジャンが見舞に行くとき脚を傷つけた男はジャンと同じ苦痛を訴えた。夜になると男の熱は下る処かますます上った。まるで、燃える様に熱かった。冷たい水でしばった手ふきの布が寝返りをうつ暇にもう温められてしまった。『うーん』一声絞り出すように呻いて眼をむいたまま男は体中を硬直させて遂に息を止めた。

続けざまの三つの死に、村人たちは恐れ戦いた。海に生きる人達は迷信を墨守する。誰云うとなく魔女の仕業ではないかと云う声が上がった。『魔女の仕業だ』『マドレーヌの仕業だ』という囁きは村中に拡ってざわざわした。年寄達はジャンの家へ集った。

「こう若え者がおっ死ぬなんて魔女の仕業に違ねえ。」

鍛冶屋のレエモン爺が云った。

「そうだともよ。三つも葬式が続くし、ジャンまでが、こんな訳の判んねえ熱で呻ってるんだからな。」

ジャンの父親ピエールが云った。

「何でもな、ダントンの話じゃ、しけを喰らった時から何かおかねえもんが、どっかからじいっと見てるような気がしてなんなかつたそうだけども、山で樹がおっ倒れた時にな、うふふふ、って女の笑う声がしたんだと。」

荷馬車引きの親爺が云った。一座は、一瞬ざわついた。ジャンが呻いた。

「ダントンは、どうしとる？」

ピエールが尋ねた。

「何だかおっかなくなってるなんねって、ひるっから寝込んでしまったよ。」

「そんじゃ、ダントンの野郎も死んじまうんかねえ。」

ジャンヌ婆が溜息をついた。

「馬鹿云うでねえ。」

ダントンの母親が云った。

「何とかして魔女を追っ払えねえもんだか」

別の婆さんが云った。

「神父さんの処へ行くだ。」

口をへの字にしていたピエールが吐き出すように云って立ち上った。皆も立上って、ぞろぞろと戸外へ出た。

二

海を見下す丘の上の教会ではダン神父が頭を痛めていた。一通り村人の話を聞いた処では、明らかに死因は判っていた。しかし村人の魔女説をむげに斥けられなかった。

「もし私が魔女を認めれば村の女が一人、命を奪われる。といって魔女などは居ないと云っても自分達で拵え上げるに違いないし、またそうしなければ、村中の不安は去らないだろう。」

四十歳そこそこのダン神父は迷信を信じない神の使徒だった。

「誰か魔女を見た者があるかね？」

皆は黙っていた。

「魔女などはいなかったんじゃないかね？
気の迷いと違うかな。」

「とんでもねえ。ダントンの奴が山で魔女の
笑う声を聞いたって云ったです。」

レエセンが云った。

「神父様、魔女は人間の形をしますだか

ね？」

ピエールがきいた。

「大概はね。」

ダン神父は頷いた。

「子供にも化けるかね？」

「それは」と云いかけて神父は黙った。

「心当りでもあるのかね？」

今度はピエールが返事をしない。何やら苦悩の様だった。

「間違えてはいけないよ、ピエール爺さん、
魔女は土地の女には決して化けやしない。必ず
よそから来るものさ。魅きつけられるように
綺麗な眼をしているし、それにこの辺の人達
には無いような鈴を振るようにいい声で唄う
ものなんだ。」

神父はふと口を噤んだ。ピエールの額に
汗がじつとりと浮いていた。暫く沈黙が続い
た。レエモンが訊ねた。

「どうしたね？ 爺さん。」

「マリーだよ。」

ピエールの声はかすれていた。

「え？ 何だって？」

レエモンが聞き返した。

「あの眼だ、あの声だ。ありゃ魔女だ。俺ん
とこのマリーは魔女だ。」

「だってありゃお前、ジャンの娘だろ？」

「そうじゃねえ。あの娘はジャンの仲間から
預ったんだ。ルアーブルで親父が死んだんで
生まれたばかりに引取ったんだ。」

「だって爺さん」馬車引きが遮った。

「ほんとにあの娘の眼は綺麗だよ。妾は、い
つもそう思ってるのさ。そういやあ、あの娘
は変った処がある娘だもの、魔女かも知れな
いよ。」

ジャンヌ婆が喋り出したので、馬車引きが
何を云ったか判らなかった。神父は一座の騒
ぎを後に礼拝堂を出た。その背中へ

「それによ、あの娘の声のいいこと。鈴を振
るようだな。俺はあの娘が海へ向って唄って
るのを聞くと何かこう水ん中へ吸い込まれる
ようだ。神父様のおっしゃるとおりあの娘は
魔女に違えねえよ。」という声が響いた。

ダン神父は寝つかれなかった。マリーとい
う娘を知らずに喋ったことが悲しかった。寝
つけぬまま礼拝堂で再び祈った。夜中の二
時頃だったろうか、背後でぎいっと扉がなっ
た。ふり向いた眼に映ったのは、黒い服を着
て黒いネッカチーフを纏った体格の良い女だ
った。

「神父様。」



女はじっと神父を見つめた。

「ジャンが、ジャンが、とうとう。」

女は礼拝堂の床に膝をついて顔を覆った。

「神父様、ジャンは『マリーを、マリーを』

って云って死んだんです。それなのにマリー

が、マリーが魔女だなんて、お願いします。私

が身代りになってもいいですから、許してや

って。あの娘が水漬けなんて、死んでしま

ます。」

「何？ 水漬け？」

「お願いします。神父様、マリーは魔女じゃ

ありません。あんなにジャンを慕っていた娘

が何でジャンを殺したりするもんですか。」

神父の胸中には一計が浮んだ。村人の迷信

のために犠牲になる生命を一つも出さない危

険極まる妙案だった。ジャンの妻ミッシェル

は夫の遺志を守るため神の御心を動かすべく

終夜の祈りに縋ることを命じられた。

三

一七三〇年、ルイ十五世の

治下であった。午前中にジャ

ンの葬式を済ませた村人達は

四人の死者の敵討とダント

ンの厄払いを兼ねて行かう魔女退

治の仕度には忙しかった。

村の漁夫達が波止場代りに

している岩端の蔭に岩を掘り

削った水溜りがある。四メー

トル四方の広さに深さは七、

八メートルもあるが。底の

方で一尺四方くらいの穴が違

いて海とつながっているから

水位は同じで、大体六メー

トル程の水深だった。勿論波は

無く、水は澄みきっていた。

五センチ程の稚魚の群が時々

腹をきらりきらりと光らせて

いる。

その溜り水の穴の周囲に柱を立て、舟具に使う滑車を穴の真上に取りつけた。それからロクロを持ち出し、十メートル程の頑丈なロープを巻きつけて滑車に渡した。準備は完了したのである。

ガーンガーン、ゴーンゴーン、

教会の鐘が鳴り出した。連日のように打ち鳴らされる不吉な鐘の音は誰にも「魔女だ」「魔女だ」と聞こえるようだった。気のせいか風も立って来たようだし、潮騒もごうごうと聞こえた。岩端に集った人達は膝や歯の根をがくがく云わせながら恐ろしい眼付をして黙りこくっていた。

「来た来た」人々はざわめいた。

マリイを中に挟んで左右には鍛冶屋と馬車引が、そしてピエール爺さんが後からついて来た。

マリイは七つだった。白い襟と飾りリボンのついた黒のワンピースのスカートは膝小僧が出ていた。輝くようなブロンズで日頃母親代りのミッシェルが編んでやったとおりの空色のリボンが結んであった。

マリイの口には何やら金具が光っていた。人々にはそれが魔女の呪文を封じるためのも

のと思われた。マリイは人の集りに足がすぐんだらしく岩場の手前で足を止めた。そしてふと後のピエール爺さんを見て何か云った。人々には「うううあ」と聞えたようだった。次の瞬間、マリイはぐっと肩をねじるようによろめいた。ピエール爺さんは真蒼になってぶるぶると肩をふるわせた。爺さんの眼はかっ

と見開かれていたが、涙が一杯で今にもそれが溢れそうだった。人々はその時になって初めて、マリイが鎖で後手にされ、その鎖の端を爺さんが取っていたのだと知った。マリイは穴のふちまで歩かせられた。

鎖を解くとジャンヌ婆さん達も手伝って、忽ちマリイを裸にした。その間にも口の金具は外されなかった。七つの女の子は手も肢も細く、ジャンにもミッシェルにも似ていなかった。村の老人達は口々に「サンタマリア」と呟きながら恐しさに声も出ない少女、いや幼女とも云える小さな身体をぎぎぎという程に縛り上げて行った。

黒いガウンをまとったダン神父が現れた。マリイは岩場の上に荷物のように置かれていた。滑車のロープが手繰り寄せられて、岩の上に横になっているマリイの足首を幾重にも巻きつけている縄に結ばれた。マリイは殆ど

動かなかった。ロクロが少し廻されロープが巻揚げられた。二人の婆さんがマリイを抱き上げて、さっと、穴の真中目がけて抛り出した。滑車がぎぎぎと鳴った。マリイの体は空中でがくんと揺れて頭を下に向け、それからぶらりぶらりと動いた。瞬間、女達の間から「ああっ」と悲鳴のような声がもれ、中には両手で顔を覆う者もいた程、惨しい光景だった。長く編んだブロンズの先の水色のリボンが水に映っていた。

ロープが一杯に巻き上げられると足首が二メートル程の高さにまで着く。そこで巻揚げの手を放せば加速度がついた体は十メートルのロープの限り、水の中へ沈むのだ。子供でも水中五メートル近くまで沈む訳であるから、ロープが伸び切るとすぐ、二人がかりで巻揚げても十五秒くらいは水中に居なければならぬ。大人の場合は体重も多いから、まず最低三十秒はかかる筈だ。これを続けざまに五回繰り返すのである。

巻揚げ役には屈強の若者が二人ついた。人々は神父の合図を待ちながらも、救いを待つ心だった。神父は膝をついて祈っていた。

神父が立上った。

「待ちなさい。」

神父はレエモンに向って云った。

「マリーをおろしてごらん。」

マリーは氣を失っていた。神父は若者に命じて桶に海水を汲ませ仰向けのマリーに浴びせた。神父は乾いた布でマリーの体を拭い、別の柔い布で一心にこすった。マリーはすぐ氣がついた。

「マリー、正直に云うんだよ。お前は魔女のマドレーヌとどんな約束をしたかね？」

「知、知りません、あたし。」

「うん、それでは、マドレーヌはどこへ行っただかね？」

「し、しりません。」

マリーの声はかすれていた。神父はピエール爺さんにマリーの着付を命じた。皆は何やら人心に還ったようだった。

「喜ぶのは早い。私達は今、もう少しで大変な誤りを犯す処だった。皆も聞いたとおりマリーは魔女ではない。魔女は他の女に乗り移ったのだ。」

途端に人々はざわついた。女達は恐しそうに顔を見合わせた。

「マリーの眼、マリーの声。少しも魔女のようすがないではないか。」

「神父様、魔女はどこにいるんだね。」

ジャンヌ婆さんが心配気に訊ねた。

「魔女か、魔女はこの方角だ。」

神父は徐ろに指さした。

「教会の礼拝堂で私の留守に祈りを捧げを女がそれだ。しかし今は誰もこのあたりの女は教会には居ないだろうな。」

「ミッシェルが」

ピエール爺さんが叫んだ。人々ははっとした。しかし今後はマリーの水漬け程心が痛まなかった。中には魔女が乗り移ったのが他人と判って安堵した者もいたのだ。女達は一種の興味を抱いて爺さんの言葉を待った。

「ミッシェルがどうしたね？」

「ミッシェルが、ジャンの葬式のあとで、教会へ行くんだちゆうて、形身なんぞ、いじつてやがったが、今ちつと前に教会へ行っただよ。マリーが水漬けされるなあ見たくねえって、泣いてたつけがよ。」

「そりゃいけない。ミッシェルは確かカレーの生まれだと云う話だが」

爺さんは頷いた。

「もう遅い。ミッシェルには魔女が乗り移ってしまった。うっかり近づいては大変な目に逢うが、そうだ、お前達二人私について来なさい。魔女の呪いを封じなければいけない。」

だがよいかな、ミッシェルの命を取ってはないぞ。ミッシェルが悪いのではなく魔女が悪いのだ。それにもしミッシェルが死ぬようなことがあれば、魔女はまた他の女に乗り移るかも知れないからな。」

神父は若者二人を伴って教会へ向った。

四

雲の切れ目が茜色に染め出され、ジャージー島の方向一帯を囲む頃、ミッシェルは先刻のマリーそのままに滑車をきしませていた。違う処はミッシェルが大人であり、腰のまわりに真白な布をすっかり巻きつけている事と人々が狂ったような眼付で穴のふちに肩を並べていることだった。

容貌も挙動も誠にボーイッシュできりっとしてゐるミッシェルの体は、顔や手は陽に焼けていたけれど、衣服の下に在るべき他の部分、殊に腰部、下腹部から大腿部にかけての白さは腰部に纏った白布にも優れていた。彼女はカレーの大きな舟元の妹娘で、しっかり者のジャンが特にミッシェルの父親に見込まれた縁談だけに、この小さな漁村には向かない品の良さがあつた。

二十三という女体は、男達には流石に眩しかった。未だ子供を享けない女の胸の隆起は

こんもりと盛り上っていて、穴の上に逆吊りにされるとおりふりふりしていた。胴は名工の刻んだ様にくびれ、腰から腿はぐっと張り出し、その先に、脚がすんなりと伸びていた。足首を吊るされ、骨のけずられるような痛みに呻きながら、ミッシェルは呼吸を整えていた。何か考えたいような気もするのだが生まれて初めて、身にしてみても知らされた我が身の重さがそれを遮った。

ミッシェルの被縛の裸身に取り縋って泣いたマリーは、ピエール爺さんと一緒に家へ帰った。ミッシェルはこの二人が居ないことが有難かった。女の歎びを覚えて来た今、突然にジャンを失った彼女は、遺志を守ってマリーを救う以外に差当ってなすべき事が考えられなかった。もし身代りにされて水漬けにされたところで、ドーヴァーの娘で育ったミッシェルは、水には自信があったのだ。

男達の手で身体を抱き上げられ、身を慄えさせたのも束の間、ふわりと宙に投げ出された次の瞬間、くるぶしがぐくと鳴ったと思われる程の激痛と共に頭が下になった。肩まですに揃えて切ったブロンズが垂れ下って揺れた。忽ち血が下って苦しくなった。

「マドレーヌよ。そなたの改心は認めるが、

しかしそなたの罪は罪だ。必らず償われねばならぬ。今、そなたのためにミッシェルの肉体を借りて罰を与える。ジャンをはじめ四人の魂のために、そしてダントンと村人の健康のために、充分の苦痛を味うのだ。」

神父が云った。云いながら神父は迷った、何故にミッシェルの肉体に加えるこの拷問がこれ程迄心を波立たせるのか。

神父は一步穴のふちへ近づくと徐ろに手を挙げた。若者はロープを捲いた。ミッシェルは眼を閉じていた。

ミッシェルの足が滑車まで届いた。神父はさっと手を振り下した。がらがらばしやぎぎぎぎ、がらがら

ミッシェルは水へ落ちた。しかし、すぐ体をくねらせ手も脚も縛られたままで水面に浮かんだ。若者は力一杯ロープを捲いた。水面でばくばくしていたミッシェルは、忽ち強く水中へ引き戻され逆さになって上って来た。

足が滑車に届くや否や若者は手を放す。がらがらばしや、滑車が鳴り、ロクロが鳴る。

三回目水面へ浮かんで来たミッシェルの顔は恐怖に満ちていた。眼は一杯に見開かれ頬はひきつっていた。まるで死神に逢ったよ

うなその顔に見物の人々は「魔女が苦しんでいるぞ」と心中快哉を叫んでいた。ミッシェルは苦しんでいた。引き上げられ、そして四回目の水漬けに落ちて行く時の彼女の呼吸は人々の耳に、笛の音のように「フイーッ、フイーッ」と聞こえた。

四回目はミッシェルの体は底へ向って真直に落ちて行った。ミッシェルの縛られた白い体が何とかして浮き上ろうと苦闘するのは誰にも判った。そして、それだけの力が既に無く、ごぼごぼと水を飲んで見えた。逆吊りのミッシェルは「ぐぐぐぐわっぐわっ」と獣のような音声を発して身を震わせ咳込んでいたが、五回目を終って引揚げられた時、彼女はロープにぶら下って、ただ揺れているだけだった。

人々はほっと吐息した。女達の残忍な興味は身憚りする程に満足させられた。魔女は、水中をのたうちまわって遂に動かなくなってしまうのだ。ミッシェルの体は岩の上に寝かされた。鼻汁が少し流れていた。唇は紫色に変わり、肌はざらざらと鳥肌立っていた。

神父はすぐにミッシェルの体の滴りを拭いた。それから懸命に水を吐かせた。神父の両手がミッシェルの胸を下から上へこすり上げ

ると軽く開いた彼女の口辺から水が溢れ落ちた。

夕陽がイギリス海峡の方に沈んで行った。

五

広場の真中に丸太の柱が一本立っていて、その周囲に人垣が造られていた。ミッシェルは腰の辺りに薄布を纏っただけだった。後手は何やらしつかりした紐で背中に固定されている。太陽はどこにも出ていないのに白い肌は眩しく輝いていた。

ミッシェルは、突然に突きとばされて倒れた。身を起して見ると手に厚い皮鞭を下げた黒衣の悪魔が立っていた。人垣がわっと笑った。今まで村の人々だと思っていたその顔は、確かに見覚えのある着物を着ていながら悪魔だった。

ばしっ、びゅう、ばしっ、びゅう

背中をひき裂かれる痛みだった。ミッシェルは悲鳴をあげ、よろめきながら人垣の輪の中を逃げ廻った。

あっはっは、わっはっは、悪魔が嘲る。

あっはっは、わっはっは、

人垣が笑う。人垣の方へよろけると、村人の悪魔はミッシェルを柱へぶつかる程につきとばした。顔見知りの男もいた。顔も知らな

い女もいた。ピエール爺さんも、マリーのよな子供達も彼女を突きとばして笑った。そして死んでしまった筈の最愛の夫ジャンまでが、笑いながら彼女を突いた。

彼女は柱に背を寄せて喘いだ。悪魔の鞭はびゅうびゅうと耳に響いたが、最早逃げられなかった。疲れきって一步踏み出せば倒れるばかりだった。彼女は逃げたくなかった。

悪魔が一人立ち上った。彼女のまわりをぐるぐると走った。続いて一人、そしてまた一人。ミッシェルは悪魔の動きと、それをはやす哄笑の渦をばんやりと感じていた。ピエール爺さんの悪魔が人垣の輪の中へ腰を下ろした時、ミッシェルは少し体を動かそうとした。動かない。ミッシェルは今度は力を入れて肩をずらすとした。動かなかった。

マリーの悪魔が立上った。ミッシェルの背後へ走り抜けた時、ミッシェルは喉を締めつけられる苦しさ襲われた。マリーが二廻りすると、ミッシェルはもう顔も動かさなかった。体中一分のすきも無く、見えないロープで締め上げられてしまったのだ。顔面の充血がはっきりと自覚された。

フィーツフィーツ、ゼーゼーゼー

涙が出た。何か叫びたい。しかし声は出な

かった。ジャンの顔が眼の前にあった。

「ああジャン、助けて、苦しい、苦しいわ。

ねえ、早く、早く助けて、ねえ、ジャン」

ジャンはにやりと笑った。ミッシェルの前にジャンがしゃがむと、ミッシェルの視界の外であった。彼女はジャンの手が腰を抱いたのを感じた。しかし次の瞬間、彼女は絶叫した。

「やめて、ジャン、馬鹿なことしないで」

ジャンはミッシェルの顔の前で腰布をひらひらさせた。人垣は口々に嘲りながら、ミッシェルには見えない彼女の下腹部を指さして哄笑した。ミッシェルは声が出なかった。只口惜し涙がぼろぼろと溢れた。

黒衣の悪魔が鞭を捨てて近づいた。そして彼女の両の乳房を両手にぐっと握りしめた。

「ううっ」痛みの中で彼女はそれがダン神父の手だなと覚った。

「許して下さい。放して下さい。お願い。やめて、苦しい、ヒーッッ」

がっくり握られた胸乳は十センチも伸びていた。

びりびりっ、ばくり

ミッシェルの胸の二つの穴から、ざあっと血汐が真紅の滝となって落ちた。

ミッシェルは、途端に目がさめた。両手は毛布を握り締めていて、額にも胸にも両腋にも冷い汗が、じっとり浮かんできていた。

汗を拭おうとして右手を動かすと、かちかちと音がして左手が引かれた。仄かな光の中に両手首の鉄輪と金鎖が見えた。

「あああ」現実のミッシェルも言葉を失っていた。マリーが言葉を奪われたと同じ方法で、ミッシェルの舌の自由は利かなかった。

奥歯ががきつと金属の棒を噛みしめた時、痛さがぴいんと、こめかみに響き、鼓膜に伝った。

ミッシェルは体を横にねじり、肘をついて、はずみをつけて、上体を起した。確かに夢の中のミッシェルと同じ姿の自分を見出したけれど、ただ腰の布は仄かな明るさでも紅色と知れるものであって、それにもう一つ違うことは両足首に五センチ程の巾の、厚い鉄輪がはめられていたのである。ジャンが月余の漂流か



ら彼女の祈りどおりに帰って来ると、ジャン達を囲んで奇妙な不幸が相ついで起り、最も恐れていたことが現実となってジャンの奇怪な死に遭遇した。その余波は尚もジャン一家を苦しめ、魔女さわぎにマリーが犠牲になった。そしてそれからミッシェルの身にふりかかった一連の事実は、それらが余りに惨たらしく、心身をめっちゃめっちゃにもみつぶす位に激しかったので、まるで果しない悪夢の中をさまよっているような心持が、未だに去らな

い。たった今、悪い夢から醒めたばかりなのに、この囚われ人のような、そして神の国の兵隊達に虐まれる悪魔のような自身の姿に、ミッシェルは、夢の続きを見るような気がした。だから疲労し混乱しきった若い未亡人には、この金属の拘束者の意志を知ることとはむつかしかった。

かなりの時間をかけた回想が、やっとそれを分らせる頃は、白々明けが戸外に迫っていた。

「私は岩の上で気がついたのだ。ダン神父の温い手が、私の肌を強くなでていた。体中がだるく、眼をあけるのも大儀で、そのまま身を任せているのが夢を見るように快かった。ぼんやりと眼をあけたが、妾には何も見えなかった。きつと本当に気がついたのではなかったかも知れない。何だか大勢の声がざわざわと鳴っていたけれど、そのうち、こんな声が聞こえて来た。

『マドレーヌは神の奴隷として祭壇に鎖で繋ぐのだ』

そんな声がすると間もなく私は何か大きな布に包み込まれたようだった。それから固い平らなものに置かれたようだった。

た。私の体がごろごろ転るので、布の上からぐるぐると縄を巻きつけている感じがした。そして、それから、かなり長い間体が小さく揺れた。どうやら私の乗っている平らなものが動いていたようだ。そのうちに私は、ひどく胸が苦しくなった。鼻の奥もじいんとして涙があふれた。頭の芯がずきん、ずきんと鳴っていた。げうっと塩辛い苦汁が喉に押し出て来た。そんな感じのうちに私は、今度は足の方から岩端の溜り水の穴へ落ち込んで濡れて行くような、そして猛烈な眠気に襲われたのだった。

そして気がついたら広場に立っていて、それが先刻の夢だった。そして、この鎖。

あつ、そうだわ、妾はミッシェルじゃなくて魔女のマドレーヌになっていたんだわ。妾は確かにミッシェルなのに、でもミッシェル



じゃなくてマドレーヌなんだわ。魔女の魂に魅入られたんだって神父さんがおっしゃったもの、私は、水漬けでは死ななかったんだわ。そしてこうして神様の奴隷にされたんだわ。私は奴隷のマドレーヌなんだわ”

これだけの事を理解すると彼女は急に叫びたくなった。本当に叫ばずにはいられなくな

って、奥歯で金具を噛みしめて心中に絶叫した。

“ジャン／私のジャン／どこにいるの？ 私はもうミッシェルじゃないのよ。あなたを殺した魔女に魅入られちゃったのよ。ねえ、ミッシェルの私はどうしたの？ どこへ行ったの？ 返事をしてよ、ジャン。もう私は貴方のものじゃないのよ。いいの？ それでも貴方は黙ってるの？”

信仰深く優しい二十三才の女は、くっくつと肩をふるわせて哭いた。

六

日曜日にはミッシェルのマドレーヌを鎖が繋いだ。人々は六日間に起った大小総てのまずい事を追い払い、忘れ去るために魔女を鞭の前に蹲らせ、のたうち廻らせた。マドレーヌの肌は一週毎にその何十分一かを代謝していた。そして、マドレーヌは決してこの荒々しい行事を拒まなかった。魔女は淑かで、日曜の朝、彼女の前に鞭を持って立つ老若男女につつましい微笑を送ったし、人々やがて帰りにマドレーヌのために貧しいながら心を籠めた品物を贈って行くようになった。

村には良い事が続いた。先ず魔女の水漬けの翌朝には、ダントンが冗談を云うようになり二、三日のうちに海へも山へも働きに出られるようになった。村のかみさん二人が九日違いに相ついでお産をし、それがどちらも玉のような男の子だった。ピエール爺さんが全く何年ぶりかで舟を出すと、驚く程の大漁だった。次第にマドレーヌのための鞭は振るわれなくなつて、二十日も壁にかかったままでいることもあった。

その秋の穫りは豊穡だった。人々は誰も彼も顔中喜びを満たしていた。貧しい村人達はそれなりの豊かさを感謝し、時には神様も大目に見て下さるだろう程に、飲んで酔つて踊り廻った。そんな或日、教会にピエール爺さんがやって来た。

ジャンの昔友達という三十二、三の男が爺さんを訪れて、そして意外なことを告げたと云うのである。

ノルマンディ公の一族で、金持家できこえたドブレー男爵の当主が、最近病を得て、一日と重るばかりである。ドブレー家には子供が無く唯一人の孫があるばかり、しかもその子は全く消息が判らない。もし跡継ぎが無いとせつかくの資産も徒らなものに終るとい

うので大枚の黄金を以て、今その子を探しているのだ。処でその子供というのは今年七つの女の子で、ドブレー男爵の次女フランソワが美男の僕アルセーヌとの間に生んだ子である。アルセーヌに棄てられたフランソワは、酒場女にまで堕ちて死んでしまった。マリイの母親がそのフランソワだとジャンが云つていたのを思い出したその男がマリイをパリのドブレー家に連れて行つて跡取りにするだと云う話である。爺さんは言葉を継いだ。

「わしゃ、何もマリイのちびが、そんな偉え金持になんぞあ、なんねえでもええちゅうたが、その男はな、『爺さん、お前はそれでよからうか知らんが、マリイの為を思つてみい。こんなちっぽけな漁師の娘で終るのと、都の立派な貴族の跡取りになんのと、どっちがええか。そりゃジャンや爺さんがどんなに可愛がつて手塩にかけたか、俺だつて知んねえ訳じゃねえ。だがよ、元々貴族の娘の腹に生まれた子だもんな、所詮お前達の可愛がりようで育つ娘じゃねえ』つてんだ。わしゃ腹を立てた。『わしゃ貧乏か知んねえが、それでも、あのチビにひもじい思いなんぞあ、させたこたあねえ』つてえとな、『そりゃ、違うぜ爺さん、お前達の可愛がりようは猫っ可

愛がりちゅうもんだ。ちつとも本人のためになつちやいねえ。第一お前達じゃ娘に学問が仕込めねえ。な、ここだよ、お前達が真実マリイを可愛けりや本当の祖父さんとこへ帰すのが道じゃねえか』とその男が云うんだ。わしゃ、決心しただ。」

爺さんはマリイを手放すことにして、その同意をミッシェルに求めに來たのだった。

ミッシェルはその話を聞くと何か不吉な予感がした。マリイを生んだのはフランソワはフランソワだが、しかしドブレーではなくフランソワ・デリエという小柄で色白な洗濯女だった。ミッシェルも娘時代に見かけたことがある女で、マリイを生む二年程前に、カレエの町へ流れ込んで來た、百姓上りの女なのだ。ミッシェルは自分の不審を話して良いものかどうか迷つて神父の顔を仰いだ。

「承知して上げなさい。マリイにとっては、この上ない幸福ではないか。お前はこの頃非常に良い女になったのだ。だんだんとミッシェルの優しさに戻っているのは私もよく識っている。まさかピエール爺さんに反対はすまい？ それともジャンやピエール爺さんに抗つてまで、また、マドレーヌに戻りたいのかね。」

ジャンという名がミッシェルの顔色を蒼白にした。「マドレーヌ」の名は心を沈ませた。

「いいえ、神父さま、マリーの幸福になることを何で抗ってよいものでしょう。マリーのために飲んでお祈り致します。」

ミッシェルは力弱く泣くように云って齒を喰いしばった。涙が眼の縁で堰かれていた。

七

翌年の春、パリから帰った爺さんはドブレ一家から、マリーの今日までの養育費として一生暮せる程の金貨を貰って担いで来た。爺さんは持ち舟をダントンに貸して、安い貸賃を貰うことにした。荷馬車引きの隣りに家を建てて、雑貨屋を始め、奇病で死んだジャンの友達を娘を二人、店番代りに引取って主人に納まってしまった。十二と九つの娘達は爺さんによくなつたから爺さんは淋しいなりに、やっぱり幸せだった。

教会に閉込められたままの境遇に満足しているミッシェルのマドレーヌは、この頃何かもの足りなかった。

娘の頃カレエの町で屢々顔合せ、時には踊ったこともありながら、男らしいジャンに対する慕情は、ジャンからの恋情を聞かされる

まで殊更にジャンに冷淡にしたり、彼を避けさせたりしたものだった。

それがやっと一緒になれて、ジャンに水夫をやめさせ、それまで意地になって育て上げた四つになる預かりっ子のマリーを土産に、ジャンの故郷へ嫁いだのが四年前だった。頑固者という話だったピエール爺さん始め村の人々は、ジャンと握手を交わし、四つの女の子を連れた二十才の花嫁をにこにこ顔で迎えたものだった。

荒天の時は、ふるふる情無くなる漁師の女房が、またそれ故に今日までずっと新婚の妻の気持だけを持たせてくれた。人の妻である事が楽しくてならなかった。あとは自分のお腹でジャンの新しい生命を造りたいだけだった。それが突然にジャンの死に遭って、而もそれは自分の肉体に巢喰うマドレーヌのせいだとは。彼女は最初の一箇月間、身を引き裂いてしまいたい、激しい慚愧と衝動に駆られた。日曜日の虐みには血の涙を絞らされた。しかし、一箇月経った時、彼女は日曜日がマドレーヌの罪の償いには此の上ないものと思ふようになった。その痛みがひどければ酷い程、そしてその苦しみが激しければ激しい程心は安らいだ。しかも、その肉体の虐みの後

の倦怠感、その虚脱状態のうちにジャン以外のものを思わず、自分がマドレーヌに堕ちてしまった悲しみで頻りにジャンを呼び求める彼女を、喜んで鞭の下に匍わせ、身を投げ出させたのである。やがて人々がマドレーヌを許し、鞭うたなくなると、やがてマドレーヌに関心が無くなった。彼女は最近ではずっと祭壇の端に繋がれることが無かった。といて初めての頃のように神父の部屋に続く奥の物置部屋に閉じ込められることもなく、口は勿論、手足すら死ど拘束されることがなかった。それでも彼女には戸外へ出ることが何となく恐ろしく、つましやかに神父の身の廻りの世話をし、教会内を清める以外はジャンの追想とミッシェルのための祈りで日を送っていた。

二十四の彼女には、なまじ傍に男がいるだけに辛い夜もあった。神父というガウンが邪魔に思われる様、近々と男を感じる時もあった。しかも神父の手はかって彼女の肌にあふれていて、彼女にはその温みが今以て心楽く思い出されるのである。

ダン神父は居間の壁に掛けられている絵を見ていた。ゲッセマネの園でユダヤ人の縛し

めにかかるイエスであった。人々のなすままに身を委ねているイエスの肩を、イスカリオテのユダが如何にも親しげに抱いて、頻摺りをしてゐる。神父の眼にはそのキリストがミッシェルとして映った。水漬けにされようとして自ら進んで衣服を脱ぎ棄てはミッシェルが、その素肌をロープの前にした時の諦めきった表情は全く同じだった。そして神に仕えながら、罪の無いミッシェルを魔女マドレーヌときめつけて、無知な人々の手に渡した自分、いつの間にかユダの姿に変わっていた。

しかし神父は自分の心の汚れを村人に知られたくなかった。その結果が明白なだけに恐ろしかったのだ。貧しい仕立屋の倅が、たとえ小さな村とはいえ、支配できるのは異例だった。確かに彼は一心に努力を続けて来たのだから、神父として尊敬されても不思議ではなかったが、しかしノルマンディの太公への貢納を纏めることは、やはり村人の支持があつて初めて彼の地位を保持していけるのだ。だから彼は村の「魔女探し」には神父として神の御名においても立上つて力を協せなければならなかったし、日曜日の祭壇にミッシェルのマドレーヌを縛いで鞭うつこともむしろ進んで村人の意に従つたのだった。彼はその

度に激しく後悔した。しかし、やがて打ち続いた村の悪い事どもは、やはりミッシェルが彼の指摘通り魔女マドレーヌだったのだという錯覚に屢々陥らせた。神父は次第にミッシェルという若い女を囚われ人としておく事が納得でき、苦にならなくなった。それと共に悪魔の囁きも大きく強くなつて来た。あの岩の上で村人の視線を遊びながらミッシェルの肌を拭い、人心地に還るまでさすり続けた触感忘れられなかった。

暖炉の上に置いてある木彫りの十字架を見ていると、掌や足の甲を釘づけられたキリストは、やがて逆吊りの水漬けに苦しむミッシェルになった。祭壇の端で鞭打たれるマドレーヌのミッシェルになった。

神父は自らの煩悩を払うために、そして、それが自らの悪魔的快楽となることを知り乍ら、ミッシェルを罪し、鞭うった。そのために、神父は毎週金曜日を用意したのだ。村の人々がマドレーヌに手を触れなくなり、彼女が祭壇に繋がれなくなると神父は思うさま罰を与えることができるようになった。マドレーヌは、つつましく、優しく、明朗でなければならなかったし、実際彼女は忽ちのうちにその通りになつてしまった。そうするとマド

レーヌを罪するための道具が必要になった。神父が、もう遙かな時の彼方に押しやっていた宗門審問所の地下室で見たような道具が幾つが作られ、用に供された。そのためにマドレーヌは二重の罰を受けるようになった。犯したと認めた罪と、そして神を偽った罪とのために。

金曜日になつて神父が「マドレーヌよ。罪の償いの日が来たぞ。」と声をかけると、すぐに自らの足に鎖を纏つたマドレーヌは自室の扉をあけて神父の部屋にはいつて来る。そして壁にかかっている鞭とロープの束を外し、神父に差出す。それから木馬の足許に跨り素肌の背を神父に向けて神の命令を待つのである。マドレーヌはこの行がいかにも楽しみであるかのようにいそいそと従うのだった。

神父にはミッシェルのマドレーヌがいとしくてならなかった。神父が椅子に身を寄せて休息をする時には、マドレーヌはぐったりと動かない。流石に教会で女性の膚と結び合うことは憚られたけれど、俯伏せに身を守る女の、微かな肩の喘ぎには眼をそらせられなかった。彼はマドレーヌの上に身をかぶせるようにして、汗で匂う肌の血の滲むあたりを唇を以て吸った。病の汚れを拭うキリストが

ふと浮かんだけれど、それはすぐ消えてそこにはマグダラのマリアが在った。

八

十年経った秋のことだった。

十年の間に村人の数は、およそ二倍半にふえ、街道に面したあたりは、かなりの家並みになった。ピエール爺さんはもう七十になろうというのにぴんぴんしていた。引取った娘達は上の方が二十三になって嫁に行った。今ではその夫婦が店をやっていて、爺さんは船着場の近くに建てた新しい店で、数年来一寸した食い物屋をやっていた。村は農作物も漁獲も豊かさの連続だったから、爺さんが二十才の娘を相手にやっているこの店が結構繁昌していた。マリーの養育費として貰った金貨は未だ三分の一程しか使われなかったし、このままで暮して行けば、もう少し手をつける必要がなかった。何事もうまく行っている平和な村だった。

ダン神父までが、純白や黒紫色のビロウドをかなりの値を出して買い取ったりした。噂に聞けばパリの都ではルイ十四世につぐ現在の王、ルイ十五世が奢侈にふけり、貴族達がこれに倣って人民は酷い搾取に逢っているとのことだった。バテティエヌをはじめどの

牢獄でも、この王の悪政に不満を持つ者が満ちていた。『何しろ家に窓を一つあけると幾らというように税金をふんだくられるんで、貧乏人はちっぽけな真暗い小屋に住んでるんだとさ。それから見りや俺達は何て幸せなんだ。こりやノルマンディ太公様のお情深い政のお蔭だ。それにダン神父様が良い方だからなあ』こんな囁きが教会にもきこえた。

奢り得る地位にありながら、直接の防波堤となつて村を守るダン神父は、今では村人の信仰にまでなつていた。幾らか額ははげ上つたが白髪は全然無いし、彫りの深い顔に優しい笑をたたえ神を説く姿は、充分に地頭の貫禄を持っていた。

ざあっと急な土砂降りが来た。人々は干物の取り込みやら、帰宅を急ぐやらで、右往左往したが、それもすぐ納まった。岩場の近くのピエール爺さんの店では爺さんを囲んで三人の男達がグラスを持ちながら話をしてた。二十才の養い娘は爺さんが腰かけている背後に立って、爺さんの肩をオルガン代りに指を走らせては首で拍子を取り、男達の話に合わせるようにハミングを楽しんでいる。

「おうピエール爺よ。」頭から合羽をひっか

ぶつたレエモン爺さんが顔を出した。

「えれえ降りじやねえかよ。」爺さんは合羽の水をきって壁にひっかけると自分で椅子を持ち出して話の輪に割込んだ。男達も娘も意気込んでいるレエモン爺さんの言葉を待った。

「今しがたな、俺んとこへ馬を引いて来た客があつてな、馬の蹄の鉄を見てくれっていうだよ。何せこの雨だから中へ入んなせえってえとな、若え男だったつけが、『僕はどうぞせぶ濡れだからいいが、それじや連れを休ませてくれ』って言つてな、表に馬を停めていた人を連れて来た。そしたらよ、驚くでねえか、その連れがなノルマンディ太公様の紋の入った上衣をひっかけてるだよ。」

「なんだとっ」皆は驚いた。

「ノルマンディ様のか？」

「そうだ。」しかし爺さんは、そこで口調を変えてにやりとしながら云った。

「だがな、『濡れたでしよう』ってその若者が云つてな、上衣を脱ったら、連れて来えなあ女だつけよ。十七、八だろうが、いい娘だつけ。ありや一体何者だろうかなあ。」

「そんじやレエモン、その若者ちゅうのがノルマンディの若様じやねえのか？」

「そうよ。そんだから尚のこと、あの娘が気

になるんだわい。」

「そりや大変だ。そこで若様はどうしただ」

「濡れついでからって、今した教会へ馬あ飛ばして行っちゃったけよ。来た時のように娘を大事そうにくるんでな。」

居合わせた一同は顔を見合った。

雨は殆ど上がっていた。

神父の部屋の中には、ミッシェルのマドレーヌとエリーナ姫がいるだけだった。保守的な田舎の老人が見たら魂消るのも尤と思うのは、姫の乗馬姿だった。当時としても、殆ど聞いたことのない女の乗馬姿でありながら、ズボンがぴたりしているのは特別詠えと思われる。上衣はレースの縁取りをした絹のブラウス様のものだった。先刻から暖爐にかざしておいた上衣が乾いたので、その着付をする間、ノルマンディの太子とダン神父は部屋を出ていた。

「村の人達の暮しは豊かかしら？」

マドレーヌに背を向けて上衣の紐を結ばせながら、姫が訊ねた。

「はい、それはもう。ここ十年の間に村はすっかり豊かになりました。」

「では、そなたはこの村の人なのですね。教

会にはもう長いこと居るのですか？」

「はい、かれこれ、十一年にもなりましょうか。」

「そなたの名は何と云うの？」

「……マドレーヌ……でございます。」

「年令は幾つ？」

「三十四才になりました。」

「まあ。」

「どうかなさいまして？」

「いいえ。私はまた二十五、六かと思いましたが。随分若いのね。それではおききますけれど、そなたと同じ年頃でミッシェルという女の人がいたのを御存じ？」

「はい。でも何故、そのようなことを？」

「少し知りたいことがあるのです。それでそのミッシェルは今どうしています？」

「……………」

着付を済ませ姫の素足を温湯で絞った布で拭いていたマドレーヌは、はっとして姫の足を握ったままその間には答えなかった。

「ミッシェルは、どうしているのです？」

もう一度訊ねた姫は不審げにマドレーヌを見た。

「おみ足のお怪我は、一体どうなさいましたので？」

「さあ、小さい時のものだから判りません。」

「お姫さま、私がミッシェルでございます。」

私はこのお怪我に覚えがございます。お姫さまがまだ私の処においでになった時に……」

「何を云うのです。私はこのような処には居たことはありません。」

「いいえ、間違いございません。私はあなた様がまだ赤ちやんの時からお育て申し上げたのですもの。これはジャンの銛を刺した傷痕です。あなたは前のお名前をマリーとおっしゃったのでしよう？」

「いいえ、違います。私は今も、生まれた時からずっとエリーナです、私はドブレー家の跡取りですよ。無礼を働くとは許しませんよ」しかし姫の声は恐れよりも悲しみに充ちていた。

「お姫さま、あなたは何故ミッシェルという名を御存知なのですか？ 何故私を知っているのです。それこそあなたがマリーだという証ではございませんか。」

姫はマドレーヌを、つきのけると扉を排して叫んだ。

「太子さま、おいでになって！」

ノルマンディ公の太子とダン神父が駆けつけると、姫は怒ったように拍車のついた乗馬

靴を、うんうん言いながら足にはめこんでいた。マドレーヌは、蒼白な顔を悲しみに歪めておどおどしていた。

「この女が私を侮辱したのです。どうしても許すことができません。私の地位を思い知らせてやって下さい。」

姫は冷然と云った。神父は慌てて壁にかかっている鞭を手にするや否や、おろおろするマドレーヌの襟首をつかんで引き据え「マドレーヌお前はまた悪い女になったのか」と言いながら、ぴしっぴしっぴしっぴと背中を打つ

た。ミッシェルが悲しそうに首を垂れて打たれるままになっているのを、姫は平然と見やっている。太子が近づいて神父の肩を軽く叩いた。

「神父、姫を侮辱した憎い女ですよ。鞭だけで済むものじゃないでしょう？ 僕にまかせて下さい。さあ、お前、覚悟をしてついておいで。」

太子は神父の居間の飾りになっている剣を手にとると、びゅうっと振ってから、裏口の方へ出て行った。ミッシェルは姫の顔を仰い

だ。姫は冷たい笑を浮かべていた。神父も蒼白だった。何か救いを求めるように姫を見た時姫が云った。

「太子さまは剣の達人です。そなたは忽ち太子の剣に舞を舞わされるでしょうよ。さ、早く行きなさい。」

屠処に引かれる羊と化したミッシェルの後から、エリーナ姫の靴の拍車がこつこつと追っていた。その後から神父が胸を激しく動悸させて歩いていった。

八

太子の剣がぴゅっと小気味よい音を立てる度にミッシェルは悲鳴をあげてよろめいた。剣の先は殆ど確実にミッシェルの身に纏った三枚の布だけを裂いて風に飛ばせた。

一番上のガウンは、ミッシェルが裾を踏んで倒れ苦しまぎれに脱ぎ棄てたので背中が二箇所切りさかれただけで泥水に浸っていた。二番目の衣服は両の手首と、首から肩の辺りを除いては、もはや身についていなかった。そして最後の肌着は背中と、左腕と、そして腰の辺の布を大きく失っていた。太子が少しも表情を変えずに一步步ミッシェルを追いつめ、そして泥水をはね上げ、またその中に転って逃げ廻るミッシェルを正確に剝いで行

梨花悠紀子逆吊り写真特集

大中判印画紙焼付
各集五枚一組 一〇〇〇円

第一集 略号(さか)

両足首括り逆吊り

足首を揃えて括られた縄を滑車に連結されて、足を上に逆さに吊り下げられた美女梨花悠紀子は、両手を背中後手に縛られ胸には乳房がつぶれんばかりの縄目が肌に喰い入っている。全体重を両足首の縄で支えて痛さを耐えている梨花悠紀子。

第二集 略号(させ)

逆吊りの女体折檻

逆さ吊りにあえぐ梨花悠紀子に対して、更にあくなき暴虐の手は、情容赦なく竹の棒にて女体のあらゆるところを叩き、こじ入れ、踏みつけ激しい折檻を加える。美しい眉をひそめて必死に耐える美貌の彼女の凄絶にして、しかも美しい吊責めフォト。

第三集 略号(さと)

手足逆宙吊り

両足首と両後手首を括った縄を滑車に連結して、じりじりと宙に吊り上げてゆく。顔胸、腹を下にして、足首と背中を上にして宙に浮いてゆく梨花悠紀子。柔肌には恐ろしい程縄がうずまって、吊責めの真価が鮮明な印画紙焼付によって発揮される。

くので、神父には見てもらえないシーンが続いた。

ぴゅっ、「ああっ」ミッシェルの左の胸の隆起の辺りから紅色がしみ出した。

「太子さま、おやめになって！」

姫が云った。

「あとは私が自ら致します。」

その冷い声は、ほっとした神父の脳天をぐわんと打ったし、ミッシェルをへたへたと崩れさせた。

「さあ、手をお出し。」

雨はすっかり上っていた。姫は長いロープを手にし、その一端でミッシェルの両手を揃えさせた上、しっかりと縛り合わせた。それから、乗って来た馬を引き出して、他の一端を鞍の前部を縛りつけた。土の上へ坐って恐ろしそうに見上げているミッシェルを、姫はいきなり踏台にしてさっと鞍に着いた。

「さあ、お立ち！」

馬が歩き出すと、ミッシェルは引かれて立上らざるを得なかった。馬の歩調は絶えずミッシェルに小走りを強いた。教会の前を百メートルも行った時、ピエール爺さんやレエモン爺さん達五、六人が急ぎ足に来るのが見えた。途端に彼女はぐっと引き倒された。馬が

急に向を変えたのである。ぴしり、鞭がはいった。後から数人の喚き声が追った。そこまではミッシェルにも判っていた。

長い時間のようでも引摺られて二十秒足らずで、ミッシェルは裏口の処の濡れた土に倒れていた。鞍からロープをほどくと姫はミッシェルの顔へ丸めて叩きつけた。そして拍車の靴をミッシェルの腰にのせた。

「ううっ」ミッシェルは身をよじって俯伏せになった。姫の鞭は腿に鳴り、靴はぎしぎしと背中一杯に荒れ廻った。薄黒く泥水で汚され、剣で切り裂かれた肌着から覗いているミッシェルの肌に、筋が歪んで苦痛を叫んでいた。腿も背も処々赤黒く染められて来た。姫は動かなくなったミッシェルの腹の下へ靴先を入れてミッシェルの体をぐるっと返した。

「姫、姫、もう許しておやりなさい。」

太子が姫の体を抱き上げた時、太子は姫の真白な双の頬に止めどない涙が流れているのを見た。ミッシェルの悲鳴に驚いて駆けつけた村人達は、太子への挨拶も忘れ、この惨虐なシーンに完全に胆をつぶした。

姫は涙を拭おうともせず鞭でミッシェルを指して言った。

「この女は私に侮辱を加えたのです。私は領

主として此の女を私の奴隷にします。」
村人たちが何か云おうとする前に太子が云った。

「姫の懇望で、僕の父は此の村の一切の権限を姫に譲ったのだ。姫のお蔭でこの村の税金は特に安いし、村は繁栄の一途を辿ったではないか。お前達は姫に感謝すべきだぞ。」

「太子さま、このお方さまはどなたさまで」

レエモン爺さんが訊ねた。

「エリーヌ・ドブレー姫だ。」

善政の女領主という報告以上に姫の惨酷な仕打は村中にひろまった。だから姫からの迎えの馬車が教会に来た時は、村の人々はかつて彼らの鞭の対象であった魔女マドレーヌのために、挙ってその不幸を哭いた。

当日のミッシェルは神父が買ってくれた純白のビロウドで粧った。それは額に垂れた僅かの前髪を除く総ての髪を覆い耳を覆って顎までかくす頭巾と、素肌に着けるのでなければ着られないように裁断し縫上げられた全身を覆うタイツだった。靴も真白だった。僅かに露われている顔には言葉を奪っている金具が光り、両の手首は揃えて背中中に在って首に繋がれていた。まるで一匹の大きな白兎を見

大手札判印画紙 (9×13 匁) 焼付

各組一枚一組（送料共）

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

Z1 ゴム猿轡	(梨花悠紀子)
Z2 囚女六三号	(柳初子)
Z3 猪手足吊り	(梨花悠紀子)
Z4 逆エビ縛り	(大塚啓子)

[illegible]

ローソク責（東浦ひかる）
 豊賢責め（絹川文代）
 淫らな縛り（愛川悦子）
 ザリガニ（梨花悠紀子）
 引き回し（東浦ひかる）
 全裸後手縛（加茂良子）
 豊満被虐（大井小夜子）
 黒髪いじめ（大塚啓子）
 足吊り嬌態（絹川文代）
 黒縄高手小手（四方清美）
 強烈荒縄責（梨花悠紀子）
 喰込む白縄（東浦ひかる）
 くの子の足指（桜井葉子）
 裸身の受縄（前本妙子）
 無茶な猿轡（竹野ひろ子）
 ハリツケ（梨花悠紀子）
 臍なぶり（大塚啓子）
 逆手足吊り（東浦ひかる）

Z
464544434241403938373635343332313029282726252423

美肌いじめ
鼻ゼメ仰向
恐怖の瞬間
火箸責め
全裸海老責め
ベッドの痴態
足の裏擦り
閨の女体飾
首絞めゼメ
鼻孔責め
悦虐放心
手枷足ぐさり
寝室のプレイ
猿轡の妙味
首繩柱しぱり
巻煙草責め
尻立てポーズ
エビ責
彼女の好物
ワンピース
荒縄竹棒責
浣腸責ポーズ
苦悶に喘ぐ

(絹川文代)
(加茂良子)
(若原明子)
(梨花悠紀子)
(熱海容子)
(絹川文代)
(大塚啓子)
(竹野ひろ子)
(大塚啓子)
(若原明子)
(梨花悠紀子)
(四方清美)
(花本京子)
(梨花悠紀子)
(絹川文代)
(大塚啓子)
(桜井葉子)
(東浦ひかる)
(竹野ひろ子)
(花本京子)
(梨花悠紀子)
(大塚啓子)
(山路ミヨ子)
(大塚啓子)

Z
70696867666564636261605958 5756555453525150494847

醉後の緊縛 (絹川文代)
 逆十字エビ (東浦ひかる)
 全裸猿轡 (大塚啓子)
 欄間宙吊り (梨花悠紀子)
 全裸逆エビ縛 (絹川文代)
 荒縄仕置室 (梨花悠紀子)
 庭園の惨虐 (館典子)
 被虐の果て (大塚啓子)
 痛めた全裸像 (大塚啓子)
 鏡の中の全裸 (愛川悦子)
 セーラー服 (梨花悠紀子)
 檻の緊縛裸体 (愛川悦子)
 全裸股間縛り (絹川文代)
 オムツ逆エビ (田中芳代)
 胴縄の重量感 (桜井葉子)
 ゴム人形 (竹野ひろ子)
 縄トゲ責め (梨花悠紀子)
 女大生恥態 (田中芳代)
 白肌全裸縛り (絹川文代)
 強制的開股縛り (絹川文代)
 強烈な全裸晒 (愛川悦子)
 亀甲乳房責 (梨花悠紀子)
 ベッドの悶え (愛川悦子)
 恥しさに耐えて (館典子)

(おわり)

自伝的中篇小説

妄執

(もうしゅう)

(あるクリスター・マニヤの懺悔)

堀

夏彦

妄

執

私は現在平凡な中堅サラリーマンとして電
 化された家庭と健康な妻子と、中古自動車
 と、——一応人の羨む環境の中で平穩にひっ
 そりと暮している。十数年前の私を知ってい
 る人がいたら、或いは驚くかも知れない。

「昔のドンファンよ。どうしたんだ。莫迦に
 悟りすました顔をしやがって。シッカリしろ
 よ」

背中をどやしつけて私を嘲笑するかも知れ
 ない。私はこれから宿命的な自分の性癖と、
 若い日に犯した過ちを告白し、自分の苦しみ

を自から救い、私を愛してくれた人々に心か
 らのお詫びとしたい。

○

私は自分では、本当のドンファンはないと
 今でも思っている。何故なら彼等は一時期に
 しろ、女を心から好きになり、愛し、むさば
 り合うものだが、当時の私は心の底で彼女達
 を軽蔑し、憎悪し、嗜虐の対象としか感じて
 いなかったからだ。

大げさに言えばすべての人間への不信が当
 時の私を多少ニヒリスティックにし自棄的な

行動をとらせていたのだ。

一、ある学生生活

二十そこそこの坊ちゃん育ちの私にとって
 そのショックは余りに大きすぎた。

入隊——苛酷な軍隊生活——東京の空襲——
 母と妹二人の戦災死——終戦——復員。両
 国橋に近い我が家の廃墟に立って泣くことも
 できず、呆然と灰燼と化した街をさまよい歩
 いた私、——それから父の疎開している茨城
 県のS町にたどりついた時、生き残った父の

老いた顔を見て、始めて涙がとめどなく流れた。

東京まで二時間半もかかる道程を、毎日命がけの思いで私は通学することになった。気が荒れグレン隊と血だらけの喧嘩を度々やるような私には純粋な向学心もなければ学問に対する信頼もなかった。ただ生れ育った東京に一日中の大半をすごせるといふだけの魅力だった。殺人的な列車や闇市の雑踏の中にいる方が田舎にいるより私の心に安らぎを与えるのだ。

朝、私が学校につくのは大体十時を回っていた。それでも生活苦に疲れた青白い教授の顔をボンヤリと眺め、現実とは程遠い経済思想史や経済政策などの講義を聞く。

顔の造作の気に入らぬ教授や、声に魅力のない教授の講義は十分と居たたまれず、よく途中でぬけだした。そんな仲間が数人いるのに気付くと同時に、私はいつしか彼等とグループをなし、リーダーシップを握っていた。私は一見「まじめな秀才」として彼等に写ったらしいが、その実、私が一番怠惰で悪知恵をもっていた。

休講になれば喫茶店でウォーターだけで何時間もねばったり、デパートの化粧品売場で

意地悪く女店員をじらしたりした。また、浅草のストリップ劇場の裏木戸から入るコネを作ったり、映画館の案内嬢を手なづけてロハで入りびたったりもした。

今考えれば一番私が青春を楽しんでいた時期とも言えるが、そんな生活をしながら、私の心はいつも大きな空洞を作り、足下の地面が急に大きく割れて底知れぬ闇の中に吸い込まれていくような不安や空虚さがあった。そして私は通っている大学を軽蔑し、仲間の学力の低さも心の中で嘲っているような不遜な学生であった。当時の学生が世相を反映して多分にニヒリステックであったことは誰でも認めるであろうが、私は特にその傾向が強かった。

更にサルトルへの信仰と、織田作や、坂口太宰の文学に心を魅かれていたこと。少年時代から芥川や谷崎の妖しい作品に心をうばわれていたことを記せば私という学生のアウト・ラインは把えて頂けると思う。

二、小悪魔の計算

前置きが長くなったが、これから私の告白の本題に入らねばならぬ。

学部をもう一年で終るといふ暮の押つまっ

た雪の日に、父は世を去っていった。

「長い人生御苦労さんでした」

と医者が言っただけで去っていった時、始めて私は泣いた。生きの残った最後の肉身を失ってこれから本当に独りきりだという感慨だったろうか。しかし、数日をすごすと、私は本当にこれからは俺の好きなように生きられるという、無限の自由さを感じて悲しみより、その可能性に、無性のよろこびを知り始めていた。

父が疎開者扱いをされるのをきらって建てた二十坪ばかりのいんきよ所を売りはらい、すぐに東京に帰って下宿でもしようと思ったが、私は冷静に判断し、卒業して就職の決るまで田舎から通うことにした。

理由の一つは経済的にアルバイトで充分学費と、生活費と、小使いが入るといふこと。などを計算したのだ。更に、父の生存中は田舎では余り羽根をのばせなかったが、この一年間、群がり寄る田舎娘を、私なりに充分堪能し、整理したいという欲望。——小悪魔の無気味な計画と計算が、私をとりこにしたのだ。

私はSEXには人一倍関心をもっていた。然し、冒頭にも言ったように、私は決し

て本当のドン・ファンではなかった。育ち盛りの青年の誰もが持つ、妄想は描いていたしどんな女でも、女でさえあればいいと思ったことも度々あった。

当時の私のSEX願望は、幼年時代からのアヌスへの憧憬と、クリスティールの実施へ焦点がしぼられていたのだ。しかし、いかにあがいても、この欲望を満たすには大学生という仮面と、自己嫌悪が、私を自縛し、悶々とさせた。本当にどうにもならぬ現実と諦めていた。

然し、意識すると否とに拘わらず私は目に見えぬ糸に引られるように、チャンスを得たい私の頭の中に緻密な計画が立てられていた。

父は生前一応東京の成功者として、町に折にふれて寄附等をしており、隠居生活の父のところへは、町長とか有力者とかが、始終出入し、終日将棋に興じていたりしたので、私も彼等に顔は知られていた。

一年程前から毎日曜日県立N高校へ通う有力者の娘たち五人の親から英語の勉強を見られるようなたのまれ、表面不生不精に引受けたものだ。

彼女達の相手をしている内、私は素知らぬ

顔をしながら、五人の娘たちの心理の糸をたぐっていた。勉強は名目で、私と親しく話したいことが、彼女達のねらいであり、お互に索制し合っている女心の綾が、手にとるように私には解った。

山林の大地主の娘で芙佐子という娘が、余り簡単な英作文ができないので、どなりつけたことがあった。彼女は皆の手前、首をうつむけて赤くなっている。

「芙佐子さん、君は今日、少し居残りだ。できるまで教えてやるから」

私が浴せかけるように言うと、

「はい、すみません」

と素直に返事したが、その時他の四人の娘達が、チラッと彼女に嫉ましい視線を送ったのを、私は見逃さなかった。またいつも、彼女達がくると私は

「オイ月謝が安いんだか、先ず弟子は掃除をするんだぞ」

と冗談めかしていうと、彼女達は先を争ってはたきやぞうきんをもつのだ。由美子という娘は一度大分離れた家に帰ってから

「哲夫さん、御飯の仕度に来たわ」

といってやってくる。私は心の中で皮肉に

笑い乍ら、

「それなら、あのまま残ってやっていってくれればいいのに」

と言うと

「だって、うるさいんだもん。勉強の時、哲夫さんに質問したのが多かったとか、終ってから話していたとか、学校で皆に言うのよ」「へえ、そんなもんかね、正直いってあの中

で誰が一番うるさいの?」「それは、芳子さんよ。あの人、勝気で、ものすごいやきもちやき!」

「ふーん。で、由美さんはやきもちやきじゃないの?」

私がからかうと

「知らない、意地悪!」

となぐりかかるまねをする。

(この娘たちは、スッカリ俺にいかれている。そして、俺の思うように、すっかりペー

スに乗っている)

私はこの三人の娘に、特に関心をもっていた。芙佐子という娘は大柄で、肉感の豊かな柔和な顔立ちで心も素直であるが、人に引きずられる頼りなさをもっていたし、頭脳も回転が早い方ではなかった。

その点では、由美子と芳子は数段まさっていた。二人は遠い新戚に当り、小学校からず

と一緒に、たえずライバル意識をもやしていた。勝気なところもよくにていたが、成績も同じ位、ただ芳子は目鼻ちが余りとのいすぎて、少し、冷酷な感じさえ与えていた。父親が町長であるため、人を見下すような気位の高いところがあつたが、感受性は素晴らしく鋭かった。それに対して由美子は細面で受け口の身体つきも芳子よりは細かったが、胸や腰は充分発達し、りんかくの確りした、野生の兎を連想させるような娘であつた。

三、美佐子への征服

父が死んでからも私はこの娘たちの勉強を見ていたが、三月卒業と共に一応私のもとを放れていった。

美佐子は家庭にあつて生け花などを習いに通っていたし、芳子は東京のB服飾学院に通いだした。由美子は町の郵便局に勤めをもった。

この頃程、私にとって女たちが莫迦に見えた時代はない。田舎娘の生一本さは——いやこれは長い人間の歴史が教えてくれることだが、女の十八、九の時代ほど好きな男の為に何事も恐れぬ、ひたむきなものを見せる時代はない。彼女達は頭でっかちではあるが、

現実については何事も未知であり、前後の見境いは全くつかないのだ。ここにつけいった私は、単なるドン・ファンより罪深い男であつたかも知れないのだが——

芳子と由美子は、ライバル意識を持ち、嫉妬の応酬をしている限り、私には全く自由自在に二人を燃え上らせ、操ることは至って容易なことだ。そういう計算の上に立って、私は冷静に二人をからみ合わせて置き、先ず美佐子に少しずつ働きかけた。

美佐子は芳子や由美子には、能力的にも、性格的にも一步を譲っていた。芳子と由美子の間に散る、すさまじい火花に、次第に懼れをいだき、徐々に諦めから競争の圏外に去ろうとしていることが、私には手に取るように解るのだ。

そういう美佐子を、再び私にむけさせるには、ほんの些細な誘惑さえあれば、充分であつた。六月下旬の夕暮、東京から帰って駅を降りると、美佐子が自転車でこちらにやってくるのを認めた。

側にくるまで気がつかなかったらしいが「おす！ 美佐子さん、ぼんやりしているとぶつかるぞ」と故意に大声で言うと、一瞬じっとして顔

にちがのぼつた。

「あー驚いた。哲夫さんたら、急におどかすんだもの」

と自転車をおりる。

「その後元気？ すっかり綺麗になったな」

「今お帰り？」

「ああ、この頃ちつとも顔を見せないじゃないか。たまにはでかけてこいよ」

「ええ、でも」

「でもって何か来にくいことあるの？」

「——」

「ああそうだ。明時日大学のダンスパーティーがあるんだ。たまには東京にでて見ない？」

「でも——いいのかしら」

「いいのかしらって何だい」

「芳子さんや、由美子さんに、後で叱られるわ」

「冗談じゃない。パーティには僕が招待するんだ。黙っていればいいじゃないか」

「そうね、でも駅から一緒にゆくと、うるさいからどこかで待合すわ」

「そうか、じやお茶の水の改札口で一時に待つよ。知ってるね、お茶の水って？」

「莫迦にしないで。私だって東京にはちよくちよくだるんですよ！ ひどいわ」



「ハッハッハッ、怒ったの。君の怒った顔可愛いよ。いつもそんな顔してなよ。男性にもてるぜ」

「嫌い！ 哲夫さんたら、いつも悪口ばかり言うんだもの」

「嫌いでもいいから、約束は忘れるなよ。俺

はまだ女にすっぱかされたことないんだからな——」

こんな調子で彼女を誘い、充分反応のあることを確かめておいた。彼女の内心の喜びようが手にとるようにわかった。大学の講堂は人いきれでむっとし、学生の下手くそなスイングバンドの演奏にのって、それでも若い人々は、つかれたように踊っていた。

初め二、三回美佐子と踊ったが、てれているのか身体をかたくしていて踊りにくい。

次に、私は二、三の女友達と踊り乍ら美佐子の様子を観察していた。

独り、席で淋しげに踊りの渦をみつめている。時々、学生が誘っても、彼女はうつむいてことわっている。このパーティの雰囲気完全に田舎娘である美佐子は、圧倒されているのだ。

「あー疲れた。どう面白い。それとも美佐子さんは、こんなところ嫌い？」

席に帰るなり、私は美佐子に話しかけ

た。

「哲夫さん、お友達多いのね！ 今踊っている人、とても綺麗——あの人も哲夫さんのこ

と好きなんじゃないかしら」

「冗談じゃない。何でもないよ。あいつ、しつこいんだ。男なら誰でも、誘惑するのが趣味なんだってさ」

「もう少し踊ったら帰ろう。ね！ 家の人にはいつて来たの？ 心配するからな」

「言うとうるさいから、東京の親せきに行くことにしてあるの。とまるかも知れないと云って来たわ」

（ほう、このおとなしい娘が、俺の気を引いているぞ）

「親せきって、どこ？」

「大久保」

「じゃ近いね、君は泊っていけよ。僕は帰るよ」

「哲夫さんが帰るなら、私も帰るわ」

「そう、それじゃ一緒に帰ろう」

自分の考えたコース通りになるので心で苦笑しながら、私はつづけて五六曲踊った。芙佐子もだんだん雰囲気になれてきたのか、身のこなしが柔かくなってきた。

スローテンポのブルースの時、ピッタリとチークしても芙佐子は、さけようとはしなかった。

故意に、ターンの時など、太腿を割り込ま

して、身体に乗せるような私の下品な踊りにも、腰を引こうとはしなかった。

上気した顔と、熱した体温は、充分に芙佐子が陶醉していることを示していた。

帰りの汽車は混んでいた。入口のところに押しつけられるように立った私に、芙佐子は甘えるように、殊更魅をもたせてくる。

私は、パーティで踊っている時から、すでにこれからの今日の行動について、プランを練っていた。そして、それが余りに容易に私の思うままに進行していることに、心の中で苦笑していた。今日ならば芙佐子が私のどんな要求にも、身をなげ出してくるにちがいないのだ。

今考えると、私のこの時代は、自信過剰からくる図々しさと、不逞さを、人は感じたであろうと思うのだが、反対に私の強烈な自意識と、不羁奔放さが、私自身を一種の睡眠術にかけて、女性を引きずっていたにちがいない。

駅から降りると、私はすかさず

「ちよっと寄っていかない？」

と誘った。

「ええ、でも……」

「また芳子や由美子たちのこと、気にしてい

るの？」

「……」

「じゃ帰りなさい。バイバイ」

と私は芙美子が後を追ってくることを、充分に計算に入れて歩きだした。

「哲夫さん、まって！ いくわ」

私は故意に、暗い裏道を近道するように歩き乍ら、芙美子を自分のペースに乗せていくことを忘れなかった。

家の前までくると、入口でまた一瞬とまどった様子だったが、鍵をはずして私は一人で入って灯りをつけると、芙佐子はおずおずと入ってきた。雨戸は締め切られ、私の居間は食べちらしたどんぶりや缶詰が散乱し、ふんは延べられたままになっていた。

「まあ！ ひどいわ」

芙佐子はハンドバッグを置くと、いそいそと片付けにかかった。

「いいよ、いいんだよ。お嬢さんにそんなことさせては申し訳ないからな。それより、紅茶でも御馳走しよう」

私はすばやく電熱器に湯沸しをのせると棚からコーヒー茶碗と、安ウイスキーを用意した。

「僕は水わりでこの方がいい。君も紅茶に少

し入れてやろう。うまいんだぞ。やったことある？」

芙佐子は首を横にふったが、それでも恐る恐る口に運んだ。

「どう？ うまいだろ」

「ええ、お砂糖がきいていて甘い」

私は微笑をうかべつつ言った。

「今日面白かった？」

「とっても！ 今まであんなに楽しかったことないわ」

「そう、それは良かった。じゃまた、招待するか」

「ほんとう？」

「ああ、ほんとだとも」

「でも恐いわ」

「何が？」

「芳子さんや由美子さんたち」

「どうして？」

「だって今日みたいなこと判ったら、どんなにいじめられるかわからないわ」

「そんなに恐いわ？」

「ええ」と、大きく、うなづく。

「大丈夫、僕がついてる」

言い乍ら私は芙佐子の手を強く引いて抱いた。お定まりのかすかな抵抗を軽くいなして

度重なる経験からのキス。芙佐子は実に素直だった。外国映画もどきに、私はあらゆるキスのテクニクを駆使した。

「恐いの？ 何もしやしない。唯君がとても可愛いんだ。嫌ならやめる。悪かったね」

芙佐子は顔を両手で蔽って、あえぐように大きな呼吸をしている。そのままの姿勢で、決心したようにつぶやく。

「哲夫さん、私のこと好き？」

「ああ好きだよ」

「どんなところ？」

「そうだな。どんなとこって、君の女の子らしい柔かな線かな。君の心も、身体の線もね。正直言って、特に君の牀の線に一層魅かれるね」

「いや——」

くると俯伏せになった芙佐子のポーズは全く何もかも許していて、私の次の行動をすでに許容していた。

私はそっと芙佐子から放れると、机の引出しから二〇CC入りの浣腸器をとりだして、水とウイスキーを半々に混合し吸引した。

「芙佐子さん。君がお嫁さんに行くとき困るようなことはしないよ」

芙佐子の横顔に、一層血の上るのを眺めな

がら浣腸器を近づけた。芙佐子は、何をされるかまだ判らず、両手で深く顔をかくした。

顔には、にきびなどふき出ている芙佐子だが、臀部は全くしみ一つなく、細く引き緊った腰から急に大きく盛り上った小山は見事という外なかった。

横を向いて坐った芙佐子は、うつむいて酔ったような目をしていた。

「君が余り美しく見えたからだだよ。君が悪いんだ。しかし、僕はほんとうの美を発見したよ。女性のほんとうの美しさを、今日始めて知ったんだ。嬉しかった。例え芙佐子さんが怒って僕をなぐろうと満足だよ。僕は——」

しかし芙佐子は、そんなに怒っていないことは明らかであった。いやむしろ、そんな私の一方的で、暗示的な言葉にすっかり酔っていた。

事実、紅茶に混ぜたウイスキーと、先刻の浣腸とで彼女はかなり酔い、いくらかでも彼女を大胆にし、救ってもいたのであろうが。

翌日、雨戸をくり明るい光に照らされてみると、私はどうしても自分のしたことが気恥かしく軽い自己嫌悪を覚えた。そして、いくらかの自責を感じた。だが芙佐子に対しては余り済まないことをしたという実感は湧かな

いのだ。

そして、驚くことには美佐子に対するもやもやした気分がすっかりぬぐいさられ、二度と彼女を誘う気持は湧いてこなかったし、彼女の全部を手に入ってしまったような、味気なささえ感じるのだ。そうになると、彼女の頭脳の回転のローさや、おずおずした引込み思案の態度まで、泥くさく、やっぱり田舎娘だという、蔑視だけが強く気持を支配してくるのだ。

「美佐子はもう終りだ。卒業！」

私は不逞にも心につぶやき、次の計画をそつと練るのだ。

私にとって女にクリスティールを施すという一つの手段は今考えれば、いささか幼稚であつたとも思えるが、女心を把え心理の糸をたぐり、自在に操り、充分に効果を確かめて男への思慕で、血みどろになった女の感情と、肉体へ、止めを刺すという目的のために必要であつたのだ。

止めを刺され、心も身も、完全に参つてしまった女には、すでに興味を失ってしまうことは、所謂、世のドン・ファンのそれとよく似ていた。

貞操という狭い古い道德の網を、巧みにく

ぐり、妊娠というわずらわしい、陰気で世帯じみた事実を、回避することにもなるという計算も、勿論あつたが、私のそれは幼少の頃からいつか育くまれてきた、性癖であつたと言えよう。

四、からみあい

案の定、それからの美佐子は私に特別な態度で接して来た。私は町の中で会ったとき、美佐子のそんな態度を嫌悪しながら、殊更それについてやり、親しげな素振りで応じてやつた。この狭い町で、若い男女のそんな態度が、口うるさい人々の噂になり、いつか芳子や由美子の耳に入るであろうことを、充分計算に入れての上のことだ。

駅で私の帰りをまったり、家にも夜そつと忍んで来ることが、度重なつたが、私は決して同じことを繰返す愚は演じなかつた。

怠惰な学生である私は一日置き位に登校した。往きは余り一緒にならなかつたが、帰りの汽車では芳子とよく顔を合せた。

勝気な芳子は、同じ方向から通う学生仲間が無理に接近し、特に男の学生の中で人気を得ようと焦っていた。私はその仲間から五年も通学している先輩として、学部の上級生

として、畏敬されていた。私がのりこむと男の学生も、女の学生も、会しやくし競って席を空けてくれた。

私は二つの先の駅から通うS大文科の女子学生と服装学院に通う娘とが、特別の好意を持っているのを知っていた。

敏感な芳子はすぐそれをかぎつけ、私と特別に親しい関係を誇示するように、故意に私の名を呼びつけにしたり、まといついたりした。そんな一種のデモンストレーションは私を苦笑させたが、彼女を「弟子扱い」し「子供扱い」をすることによって黙殺した。女同士の間、烈しい敵意が交換されるのを私は冷静に見守っていた。

芳子の派手で勝気な態度は、女子学生の間で反感をかっていた。すると彼女は他の男の学生に努めて親しげな態度をとり、タバコをくばったり、火をつけてやつたり、自分でも無理に煙を吐いたりした。

みな私を意識してやっている子供っぽい行為なのだが、私は素知らぬ顔でいた。

そんな或る日、私は駅に降りると、芳子が無視してサッサと先に改札口を出た。売店でタバコを買っていると

「哲夫さん！お一人、芳子さんは？」

と美佐子が声をかけて来た。今日も私の帰りを待ち伏せていたらしい。

「ああ一人だよ。帰ろうか。」

美佐子をかかえるようにして歩きだした。

芳子の痛いような視線を背後に感じ乍ら、私はこれで、計画通りになったとほくそ笑んだ。美美子の手を引くようにして、駅前の喫茶店に入った。色ガラスから、それとなく外を観察するとやはり芳子が立っていた。平気な顔をして入ってくるかなと思ったが、くるときびすを返すと芳子は足早に立去って行った。芳子のカッカッとしている気持が解りすぎて面白かった。

これからの展開は、私自身にも解らなかった。ただ冷静な傍観者として私は彼女達の葛藤を見つめていれば良いのだ。

この日を境にして芳子は通学の汽車の中ではつきりと態度を変えた。朝もきつと二汽車も三汽車もおくらせるのだろう。必ず私を待っていた。帰りにも、不快になるほど、私につきまとい献身的にサーブしてきた。他の女子学生が私に好意を示すと、露骨に敵意をむきだしにし、私の恋人であることを、自他共に、無理強いしていることが明らかであった。

私はそんな彼女をもてあまし、煙たがっているように、他の学生達に思わせることに成功した。

男の学生はそんな私を面白がり、車中の無聊さに観察していたし、女子学生は眉をひそめ芳子に軽蔑の気持を見せたが、私には同情的な視線を送っていた。そんな空気の中でも、芳子は平気であった。きれ長の少し上った眼を輝かせて、そんな視線をはね返していた。

私は少し薬がききすぎたのに多少驚き、そして苦笑した。一方、その頃から由美子が足繁く、私を訪ねてくるようになった。夕方、私が帰る頃を見計ってやってきては

「今、局からまっすぐ来たの。肉をかってきたわ。哲夫さんお好きでしょ」

などと言いながら、自分も一緒に食事していくのだ。

ある晩、例の如く、食事を終ると由美子は真剣なまなざしで坐りなおして言った。

「哲夫さん。一体私達三人のうち、誰が本当に好きなの？」

「……………」

「この間、美佐子をダンスパーティに連れていったんですってね」

「ああ、誰から聞いた？」

「誰だっていいわよ、美佐子が好きなの？」

「いいや別に」

「じゃあ、どうして美佐子なんかつれていくのよ」

「町で会って、急に思いついてさそったら、行くと云ったからさ」

「美佐子なんかつれて行くのを止めて、芳子ならまだしも。美佐子なんかと歩くと哲夫さんの貫録が下がるわよ。」

「そうかなあ。絶対好きな女の子やないとパーティにも誘っちゃいけないの？ ずいぶん窮屈な考え方だな。」

「そうよ。哲夫さん、女の人にもてすぎるから、いい気になっているのよ。好きな女の子と、そうじゃないのと、はっきりしてちょうだい。」

「ずいぶん余裕のない深刻な話だな。」

「兎に角、美佐子とはもう親しくしないで」

「ハイハイ」

「哲夫さん、私のこときらい？」

「いいや」

「好き？」

「ああ好きだよ」

「本当？」

「ああ」

「美佐子とどっちが？」

「由美子さんだよ。勿論」

「ほんとね？」

「ほんとだったら、しつこいよ。」

「じゃ、芳子とは？」

「……………」

「どっちなのよ。」

「芳子さんも嫌いじゃない。」

「はっきりしてよ」

「……………」

「卑怯よ、男のくせに。どっちか一人選んでよ」

「……………」

「ほんとうのことと言って、二人とも好きなんだ。自分でも判らないんだ。」

由美子はその時、急に顔をゆがめると手で顔を掩ってすすり泣きを始めた。

「由美子さん、悪かった？ 気に障ったら許してくれよ。でも俺って美しいということに人一倍とらわれ、美の観念が人と少しちがうんだよ。由美子さんも芳子さんも、失礼な言い方だが田舎の女性としては教養もあるし、洗練されている。そして由美子さん自身知っているように、所謂美人なんだよ。君は——」

「ちがう、私、美人なんかじゃない」

泣きじやくり乍ら由美子はうめいた。

「照れなくてもいいんだ。君は自分の美しさに相当の自信をもっている筈だ。それはちつとも悪いことじゃない。その自信がますます君を美しくしていくんだから——。でも僕は女性の美しさというのは、それだけじゃないと思うんだ。」

「何だっというのよ、性格？」

「そう勿論それもある。しかし由美子さんと芳子さんとは、二人共一本気で正直で情熱的で頭もいい。だけど——」

「だけど何よ？」

「おこらない？ 僕が何を言っても——。古い道徳観や常識的な人間には叱られるかも知れないが、生涯一人の女性と長い生活を共にするとすれば、肉体的にも秀れた人を選ぶ権利があると思うんだ。これは女性の側からとも言えると思うんだが。君はいやらしいと思うかも知れない。しかし、僕の考え方、まちがっていないと思うんだ。昔の人はそういうことを恥かしいこととし、危険な賭をしてきたんだ。」

「そんな事位、私にだって解るわ。でも自信あるの。見て！」

由美子は私に裸身をさらそうと言うのだ。

ここで私の所謂「征服」をするのは容易であるが、私は敢てそれをさせなかった。

「止めなよ。今、由美子さんにそう言われても僕は困る。別の機会に芳子さんをまじえて、堂々と見せてもらおう。その方が公平で正しい判断ができるからね。」

「ひどい人、哲夫さんて！」

「そうかな。ひどいと思ったら、君は引下る？」

「いや！ 絶対！」

その内、私はある変化を見出した。

美佐子が私を避けていることである。

駅にまっっていることもなくなったし、町で出会うことがあっても視線を外らして逃げるようにしている。私はすでに美佐子には余り執着はないのだが、これは何かあったなと感じられたのである。ずっと後になって判ったことだが、美佐子は芳子と由美子に、さんざんおどかさされ、恐怖におののいていたのである。

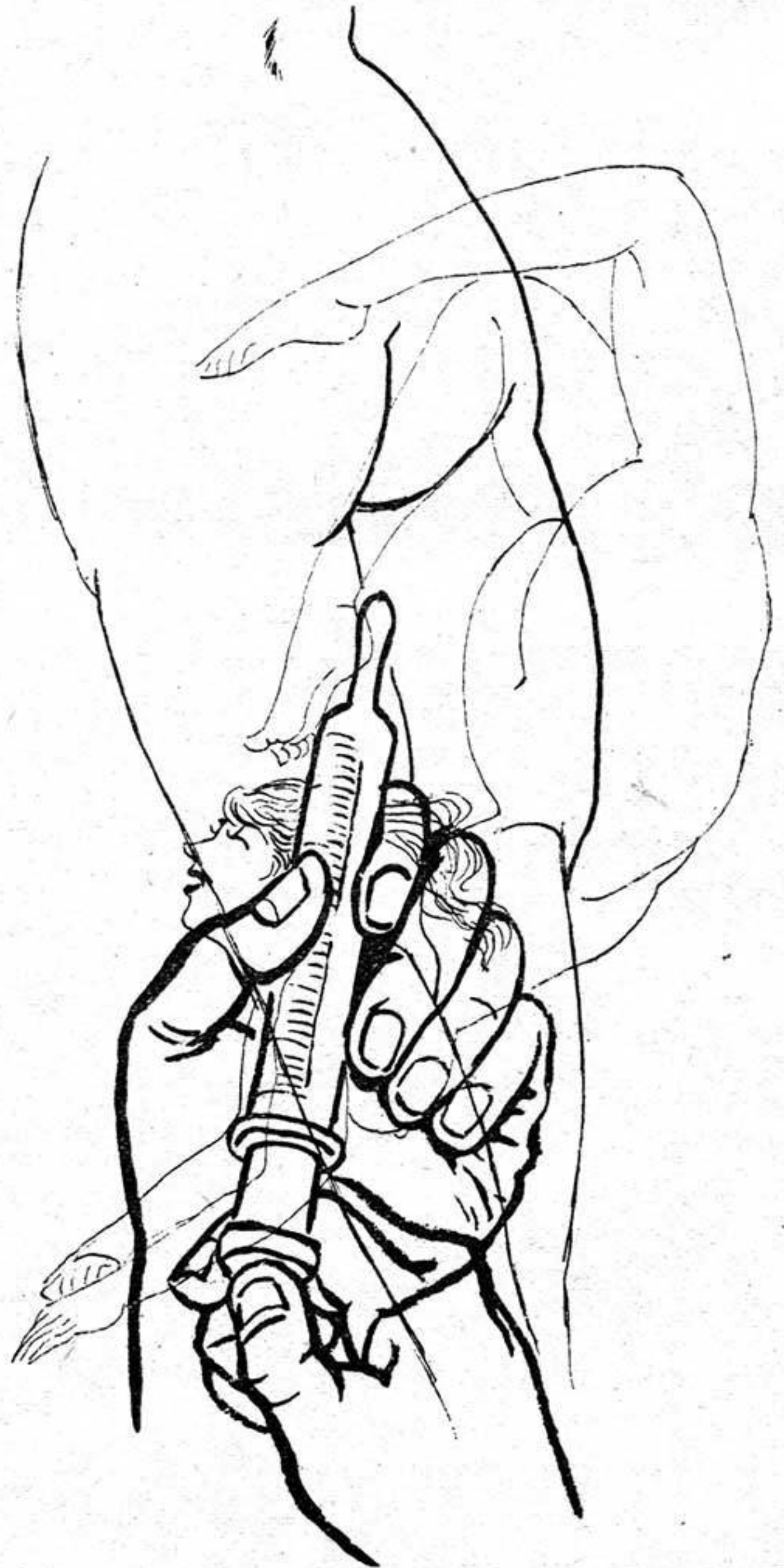
芳子と由美子は、内に烈しいライバル意識を燃やしつつ、一つの自衛本能か、共通の敵が現われれば、確実にチームワークをつくり相手をはふるのだ。

私にはそれがよく解る。芳子が私の美佐子

への接近を気付き、この間の駅前での私の演出によって、カーッとして由美子に通じる。

すると、急に竹馬の友情をとりもどして、二人は結び付いた。事実美佐子は二人に町はずれの神社の境内に呼びつけられ、さんざんに痛めつけられた上、髪をつかまれてひき据えられたり、こずき回され、私から一際手を引くことを誓わせられたのである。これも私の予定された経過なのだ

が、二人の女がこれほど気狂いじみた烈しさを現わすとは考えられなかったことだ。然し知らん顔をしていればいいのだ。いつか二人は対決する。めす同士の醜い争い。いや、美の極致かも知れない。私とて人間である以上結婚を考えないではない。しかし、二人の中から一人を選ばなくてはならないなんて、御免だった。結婚の相手には、地味で平凡な女



性を選び平和な家庭を作ればよかったのだ。

現在は、ただ孤独な、そして若いエネルギーの狂的な欲望の対象として、彼女達とつき合っていれば、幾許かの満足が得られるというだけで充分なのだ。

すでに長い夏休みに入っていたが、私は経済上の理由で二日おき位に上京していた。

この地方は旧盆であったが連夜、盆踊りの

太鼓がおそくまでひびいて、田舎の青年たちは彼等なりに、青春を楽しんでいた。私は別に興味が湧かず、ラジオでジャズを聞いたり寝そべって本を読んだり、妄想に耽ったりしていた。

ある夕方、芳子が自転車でやってきた。

「しばらく会わないけど何してるの？ 今日父が何もないけど哲夫さんに来て下さいって」

「うんそうだな、そうだな」

私は芳子の家に行くと、窮屈さを考えていた。律気な町長の彼女の父と、型にはまった世間話と、田舎くさい鄭重すぎるもてなしの退屈さ！

「忙しいの？」

「別に忙しいなんてことはない。下等遊民だからね。だが卒論もそろそろ手をつけなければいけないんだが――」

「じゃ、来なさいよ、うんというお酒あるよ。それに由美子もいる。」

私は少し心を動かした。

「じゃいくか」

「現金ね。由美子がいるといったら来るの。」
「ひがむな、ひがむな。たまには君のおやじさんと天下国家を論じるのも、気晴らしになるからな」

私は今日を充分有効に使ってやろうと思っ
て出かけた。芳子は末っ子のわがまま娘で、
兄達は二人いたのだが戦死していて一人娘な
のだ。

由美子も芳子の家ではわが家のように振舞
い、二人は表面、実に気の合った親友同士な
のだ。

私は芳子の父とそれこそ、退屈きわまる話

しをして専ら杯を傾けていた。

今後の日本の経済の見通しとか、農業政
策の問題点とかを町長としての識見を見せつ
つ、私の意見をたずたりした。こんな古い頭
の老人に何が解るかと思ふにうけ答えしてい
た。その言葉少なな話しぶりをこの老人は私
の誠実さと誤解し、私を気に入ったらしく、
酔った口調で、

「いや、君は若い仲間が仲々しっかりしとる。卒
業後はどうする。何、ふん、やはり東京へ出
るか。そうか。それは残念だ。この町にも君
のような人材が必要なんだがな。僕は君を他
人とは思つたらん。君のお父さんは偉い人だ
った。僕も色々教えられるところが多かった
よ。そのお父さんの子だから、押して知るべ
し。兎に角、一人で大学をでることは容易な
ことではない。」

私は面倒になって、なげすてるように
「そうでもないですよ。アルバイトしてます
からね」

と口早に言った。

「えらい。そこが偉いんだ。苦を苦とせず、
日夜努力を惜しまぬ態度！ 人間至る所、青
山あり。東京へ出るもいいが、いっその土
地に落付く気はないか。町役場が気に入らな

ければ、高校か中学の教師でもせんか。東京
より気楽じゃよ。」

「今はそんな気が全然ありませんが、考えて
みます」

それでも私は三時間位芳子の家で飲んでい
ただろうか。いつのまにか町長は、手枕で眠
りこけている。私もそろそろ引上げようとし
て

「僕は帰るよ。芳子さん、トイレどっち？」
多少ふらつく足で私は立上ると、芳子は先
に立って暗くて長い廊下を案内しながら、
「哲夫さん、大丈夫？ 酔ったの、私の肩に
つかまりなさいよ」

と肘を寄せてくる。和服に着換え、香水の
ただよう芳子に何か新鮮な魅力を感じ、酔い
も手伝ったが、私はいきなり抱き寄せると素
早くキスを盗んだ。芳子は何も抵抗するど
ころか、私に殆んどかじりつくようにしてく
る、

「由美子にないしよ。好き」

私は大きくうなづき乍ら、また悪魔のひら
めきを意識した。

（今夜、由美子にも同じことをしてやろう）
私は何食わぬ顔で芳子の家の人達に挨拶す
ると由美子が、

「私も一緒に帰るわ。哲夫さんに送ってもらうから」

という。

「じゃあ、私も一緒に送るわ。」

と芳子、

「いいの、ほんとに大丈夫。芳子も帰りがまた淋しいから。」

「大丈夫よ。」

「芳子さん、外は全くの闇夜だし、また送ってくるの面倒だから、ほんとにいいよ。ね」と私はウィンクしてみせた。女二人の心理のからみ合いを冷笑しつつ、私は私なりの計算で、由美子に口添えした。

外はほんとに真暗だった。田舎の町外れには街灯もなく二人はゆっくりと注意しながら歩いていった。

由美子は余り口をきかなかった。

私は由美子が、私に何かを期待しているのを充分承知しながら、故意に手も握らなかった。由美子の家の門のところまできたとき、始めて私はそっと肩に手をまわした。

由美子が小刻みにふるえているのを感じ乍ら、ゆっくりと逃げられない力強さで、口を合せていった。芙美子はあえいでいたが、長い間私を放そうとはしなかった。

何か甘い味覚だけが、妙に鮮明に、口の感覚の中に残った。

「哲夫さん。皆、あげる。私、どうなってもいい、すてないで！」

私は余り筋書き通り運ぶので、多少味気なさを感じ乍ら（冗談じやない。キッスをした位でいちいちすてる、すてないなんて関係になつてたまるか。子供だね、芙美は）と心の中でつぶやいた。

五、狂乱の夜

田舎の町にも夏祭りがきて、夜ふけて青年たちの唯一の楽しみである盆踊りの太鼓が、遠く私の家に響いてくる。蛙の音が騒しい一軒家の中で遠く聞える太鼓、それは二十五才の私の感傷を揺さぶった。早く卒業して就職し東京へ帰りたい。そして芳子でも由美でも芙佐子でもない——この土地とは関係のない女性と見合い結婚してやろう。彼女達の失意の様を想像して私は心から愉快になった。

あの一夜以来、芳子も由美子も私を把えたのは自分だと思ひ込み、一層燃えている。期せずして二人から手紙を貰った。

芳子の手紙は、あの晩のスリルを、『由美子が何も知らないと思うと申し訳ないとは思

つつおかしくなってしまう』と優越感に溢れて書かれていた。由美子も『二人だけの秘密——それを芳子が無知で知らないで、騒いでいるのが可哀そうな気もする』と書いている。

私は私でそんな彼女達を皮肉な微笑で蔑んでいた。二人とも、自分だけが愛されていると思ひ込み、空転しているだけなのに。この後、二人はどういう葛藤を展開していくか。だが、この解答は案外早く出た。

夏祭りの最後の日、太鼓の音に私は何にか落つかない気持で、日の暮れるのをまって雨戸を閉めてしまい、ふとんの上に腹ばって、ウィスキーを独り楽しんでいた。

「今晚は」

「おー。由美さんか、上がれよ」

「何してるの、飲んでたのね。いいものもってきて上げたわよ。当ててごらんさい」

「解らないな。何だい」

「哲夫さんの嫌いなもの。ほら」

ウィスキーの角瓶を、後にかくしていた。

「ほう、これは有難い。早速御馳走になるか。今日で祭も終りなんだから、由美子さんもつき合えよ」

「少し位なら」

由美子を相手に飲みだして三十分もたたな

い時だ。

玄関をあける音がする。

「誰か来たのかな。行って見てきてくれよ」

「誰かしら」

由美子がでていく。芳子だった。華かな声で何か話し合っている。(面白い!とうとう鉢合せだ)表面親しげに話し合っているが、心の中では火花を散らしているに違いないのだ。

「いいとこに来たね。由美子さんがこれもって来てくれたんで、一緒に飲んでたところだ」

「あたしも持って来たのよ」

「へえ!それは豪気だ。日本酒?それは有難い」

「一級酒よ。お父さんがもらったの沢山あるから、一本失敬してきちゃった」

「それは罪だね」

「親爺さん、のんびりしているんだから、解りやしないわ。それより由美子ものんでいたのね。私も今日は飲むわ。三人で思い切り飲んでみましょうよ」

「よし!よかろう。痛飲といくか」

それから、湯飲み茶碗で日本酒を飲み交したが、二人は飲んだこともない酒を無理に飲む故か、全くのガブ飲みであった。三十分も

たたない内に日本酒をからにし、今度はウィスキーを飲み始めた。

由美子は朱を染めたような色になったのと対照的に芳子は青くなっていった。ひとしきり、大学の応援歌など歌ってはしゃぎ廻ると二人とも目だけ鋭く光り、険悪な視線を、時折見せ始めた。勿論、私は予期するものがあるので素知らぬ顔でいた。

芳子がすぐ味を帯びた目を、私に向けて、

「哲夫さん。男って、若し二人で同時に一人の女の人好きになったとしたらどうする?」

と少し、からむような調子で言った

「それは飽くまで自分のものにするよ」

「相手も絶対退かなかったら」

「戦うね」

「暴力?」

「勿論、時と場合によってはね。それが一番自然だろ。人間の欲望の、最も原始的で正直な充足の仕方は、そこから始まっているんだよ」

芳子は大きくうなづいてから、由美子に射るような視線を向けた。二人の無言の争いが素早く交換された。芳子も由美子も、視線をそらすことは敗北を意味するかのように、凝視し合っていた。

憎悪、嫉妬、——そして女の本能が烈しくぶつかり合っていた。

やがて芳子の方が口を切った

「由美子、どうせ一度は二人で話し合わなければならぬことだから、いっそ、哲夫さんの前ではっきりさせようか」

「私こそ、そう思ってたところよ。芳子は子供の時から、独占慾が強いんだよ。人のもっている物は何でも欲しくて、取り上げたじゃない。私は我慢してきたわ。今までは。でも、今度はだめ。私、命がけだもの」

「言っはね、由美子。あんただって、私がうまくいっていると、陰で引張るようなことばかりするんじゃない。私知ってるのよ。学校時代、あんたが私と哲夫さんのことで、何て友達に言ってたか」

「何て言った。言ってちょうだいよ」

「……」

「言いなさいよ!」

「じゃあ言うわ」

「あんた皆に、哲夫さんの後ばかり追いまわして、色気狂みたいって言ったでしょう」

「ええ、言ったわ、ほんとですもの」

「じゃ、あんたはどうなの。皆帰ってからまでもどって来て、御飯たいり何かしてさ。」

フェアじゃないわよ。皆知ってるんだから——」

「よけいな御世話よ。いちいちそんなこと、あんたにことわる必要ないわよ」

私は得意であった。意志の力がとうとうここまで彼女達を動かして来たことに——。

然し黙っている訳にもいかなないので

「もう止めなよ。そんな水かけ論みたいなのと」と

と割って入った。

「哲夫さんは黙ってて！今日は思い切り言うんだから」

由美子も青白くなり乍ら引きさがらない。

「わかったわ。話しても無駄ね。あんたも命がけだと言ったわね。私もそうよ。哲夫さん！今日こそはつきりして！」

「哲夫さん！」

二人は私につめよって来た。これも予期したことから、驚かない。

「遠慮なく言って！」

私は深刻そうに、頭をかかえて見せた。

「さあ言って！どっちなのよ」

二人とも目が血走り、必死の願いを込めて私を凝視している。

「わからない。本当なんだ。正直に言って二

人とも好きだ。どうにもならないんだ」

「そんなの卑怯よ！」

芳子が怒ったように叫んだ。

「私は解るような気がするわ。このままではいつまでも解決がつかないし、苦しくてしょうがないわ。芳子勝負する？」

「いいわよ。勿論、決斗ね！」

「命がけというのは、口だけかどうか。解るわ。決斗すれば」

酔いが二人をここまでもって来たのである。うが、私は心の中で快哉を叫んでいた。

「止しなよ。そんなこと」

「止めないで一度はこんなことになると思って、覚悟してたんだから」

由美子が氣負いたって言った。

「よし！じゃ何でやる」と芳子

「何でもいいわよ、ナイフある？」と由美子
「冗談じゃない。刃物もってそんなことするなんて、与太者のすることだよ。どうしてもやるの？」

二人とも大きくうなづく

「よし、仕方がない。それなら、僕がルール作ってやるから、それで正々堂々とやり給え」

「どんな？」

「大体柔道とレスリングでいいだろう」

「そんなんじゃ、勝負つかないわ」

「大丈夫。声をあげたり、泣いたり、参ったの合図をした方がまけ。敗けた方は、相手にどんなことされても仕方がないとする。」

「それでは負けた方を、哲夫さんが選ぶこともできる訳ね」

「いや心配無用。芥川の小説の中にでてくる平忠の話読んだ？彼が当時都一といわれる美人に、猛烈な恋をして、どうしても思いきれず、その人の一番汚ないものを見たら思い切れるだろうとそれを盗む話なんだ。敗けたら、僕の前でお腹の中のもの出されるんだ。そうすれば僕の氣持も決る」

私は酔いにまかせて一気に喋った。

「浣腸するのね、いい由美子？」

「ええいいわ」

とうとうここまでもって来てしまったが、酔っているとは言え、長い間の夢の実現に、私は早くも動悸の早くなるのを感じた。

私は八畳の座敷に、ありったけのふとんを敷きつめた。一軒家で人のくる氣使いはなかったが内鍵をしめ、グリセリンとビニール、浣腸器を用意した。そして更にレフリーとして二人に注意した。

一、爪を使わないこと。

二、絶対に声を出さないこと。

三、場所がせいまから、立上らないで膝までしか使わないこと。

四、私が止めたらすぐ中止すること。

芳子は自信があるのか先にワンピースを脱いでシュミーズをとってしまった。

由美子は一瞬ためらっていたが、芳子と同じブラジャーとパンティだけになった。

二人の裸身を見るのは始めてであったが、由美子は顔の割には肉づきが豊かであり、色がぬけるように白かった。芳子は由美子より身長は僅かに高かったが肉づきは劣り、何か筋肉質を思わせる男性的タイプ。由美子が黒いパンティに対して芳子はクリーム色。二人の目は烈しい憎悪と、一抹の恐怖を現わしていたが、酒のせいかなど羞恥の色は見せていなかった。

私の合図によって、二人は膝立の状態から組み合った。上ぜいのある芳子は、一気に由美子を圧倒するかのようになかった。だが、軀の柔らかい由美子も負けてはいなかった。馬のりになった芳子の首へ、腰を折り曲げて足をかけると、思いきりたたきつけるように倒した。ふとんが引いてあるとは言え、

後頭部を強く打って芳子は「ムッ」と小さく叫んだ。由美子はすかさず逆に馬のりになると芳子の首を力一杯締め始めた。芳子は苦しうに足をバタバタさせてあばれた。気の強い二人は、本当に音をあげないだろう。どちらかが負けたときは失神したときだ。芳子が苦しまぎれに、由美子のブラジャーに手をかけ引きちぎった。一瞬、処女のはじらいからいッとなって由美子が片手を放して、胸を圧えた。その一瞬のすきに、芳子は全身に力を入れて由美子をはね返した。

ブラジャーをひろってにげようとする由美子を、後からだきついて横にたおれこむと、今度は、芳子は両脚で由美子の細い胴をはさみ、右腕を深く首に入れて締めた。由美子の顔に見る見る血がのぼった下唇を噛んで苦痛の表情を表わしている。手で芳子の内股をつねったが、芳子は執ように、腕も足もとかない。

由美子の小さい胸の蕾が可憐にふるえている。芳子は一層足に力を入れる。「ムッ」と苦しげにうめくが、参ったとも、許してとも言わない。由美子の細い胴が締めつけられて、一層くびれ痛々しい。

今度は芳子が右腕に左もそえて、力一ぱい

締め上げた。由美子の顔が充血し、閉じた瞼がヒクヒクとけいれんを起している。

参ったと言わないし、合図もしないが、これ以上は危険だと思った。けい動脈が青く大きくふくれ上っている。

「よしっ！ それまで。芳子さんの勝だ」と私が引き放しにかかったが、仲々腕をとかない。止むなく腕力ではどき引放した。

女の争いの恐ろしさをまざまざと見せつけられた気がした。由美子が呼吸困難におち入っているの、急いで人工呼吸をする。芳子は大きくあえいで、ひっくり返っていたが、由美子がいきをふき返すと、

「約束だからね。由美子悪く思わないでね」と言い乍ら、手ぬぐいで両手を背中にくくってしまい、俯伏せにさせた。由美子は気がつくとしつと両眼をとじたまま大きく涙をためている。

芳子は由美子の腹の下にビニールを乱暴に引くと、便器を側におき、グリセリンをストレートのまま二〇ccの浣腸器に一杯すい上げ由美子の背中に逆にまたがった。

「哲夫さん。いい、よく見ててね。ああ暴れるといけないから、足をおさえていて」

私はしぶしぶのように由美子の両足を圧え

た。

「パンティをおろして、脱っちった方がいいわ、下まで」

勝利者の優越感からか私に命令するように言う。それまで観念したようにおとなしかった由美子が、さすがに恥かしいのか抵抗を始めた。

「かんにして——哲夫さんは、あんたにあげるから」

「何言ってるのよ。それはもっと前に言う台詞よ。負けたんだから、何されたって仕方ないでしょ」

私は美佐子に施した浣腸のことを思い出して由美子と比較していた。

肉づきは美佐子の方が豊かだったが、色の白さと引きしまった弾力では由美子の方がすぐれていた。全く日本人放れした、透明なほどの白さだった。

「いいわね。由美子、入れるわよ」

芳子は冷い表情で、浣腸器を深く差し込んだ。

「ムッノ 許して——」

その声におかまいなく、芳子はグリセリンを静かに送り込んだ。そして一気に嘴管を引きぬいた。

「アッノ ツーウ」

由美子が苦痛に声を出す

「哲夫さん、薬とってノもう一回するわ」

芳子も何かにつかれているようにうながした。

「もう、かんにんして、ほんとに。苦しいッ」

「駄目よ。もう一回しなくては」

「いやノ ほんとに許して」

「今度は哲夫さんしてやって。私、足をおさえているから」

「うん」

私は仕方なさそうに芳子と位置を変った。

私はふるえる手で、シリンドーのポンプを押した。浣腸し終って一分もたたない内に由美子は

「もう我慢できない。許して！」

芳子は又も乱暴にだき起すと、便器にまたがせたが、手首の手ぬぐいはとらなかつた。

烈しい排せつの音、そして臭気。

「哲夫さんの言ったこと。解るわ、全くきかないわね！」

吐きすてるように、追い打ちをかける。流石に由美子は、全身を朱に染めてうづくまっている。

私はつと近寄り、後手にされた手ぬぐいをといてやった。やはり美しい情景ではなかった。私にはコプロ趣味はなかったから。

由美子は自分で後仕末をすると、部屋の隅に力ついたようにうづくまった。敗者の屈辱の姿態だった。

「由美、どう文句ないわね。まだやる？」

由美子はゆっくりとかぶりを振った。

「何よ、命がけだなんて。苦しくなると、哲夫さんをあげると言ったじゃないの。許してかんにんしてなんて。私なら若し負けても、絶対そんなこと言いやしないわ」

勝ち誇った芳子は威だけ高くなって今度は言葉の鞭で更に止めを刺そうとする。

由美子は、次第に慟哭の声を高くしていった。私はこの気位の高い、気性の烈しい、芳子の勝ち誇った冷たい表情に、次第に憎悪を感じていた。むしろ徹底的に敗れ、止めを刺されて泣き伏している由美子に、いじらしささえ覚える。

あの冷たい高慢な顔を、苦痛と羞恥で滅茶苦茶にさせたい欲望が、湧然として来た。

私は不意に芳子におそいかかった。私に柔道は有段者であったし、いくら気の強い芳子でも簡単であった。

「あつ、何をするの！」

「余り威張るな！」

私は本当に怒りを感じ、思い切り払い腰で芳子を投げとばした。

「うっーひどい！」

腰をしたたかに打って芳子はうめいたが、おさえこもうとする私に猛烈に抵抗した。

爪を立てる、足でけとばす、全く狂ったような烈しさに、私は一瞬たじろいだだが、蹴ってくる足を把えると高々ともち上げてしまった。首だけで軀を支える逆立ちのような姿勢にされて、芳子の顔には血が上っていくのがはっきり判る。つぎに、私はそのまま、足を芳子の顔の近くまで折りまげた。完全にえびのような姿態にすると、

「由美子さん、ひも、ひも！」と叫んだ。

それまでこの争いを呆然とみていた由美子は、急に勢いよく立上ると、私の命じるままに芳子の足首と手を、それぞれひしひしと縛り上げていった。

「哲夫さん何のまね！ 由美、負けたくせに何するの、アッアッ、卑怯よ！ 由美、覚えておいで！」

今は逆の立場に立った二人は、すさまじいにらみ合いを演じている。

私は更に足首と首とを固定し、身動きできぬ苦しい姿勢にしてしまった。

「由美さん、さっきは苦しかったろう。さっきのお返しを充分してやりなさい」

芳子はこの時犬粒の涙をほろりと落した。勝気な彼女の心からしぼりだす、くやし涙であつたろう。

由美子は浣腸の用意に立ったが

「もう薬、殆んどないわ、どうする？」

「よしそれじゃ、そこにあるウィスキーを、茶碗にたっぷり入れてこいよ。充分、飲んでもらおうじゃないか」

芳子は半分観念して目を閉じていたが、この声を聞いてぱっと由美子と私をにらみつけた。

私は頭の方にまわって芳子の顔の上にある足首をおさえた。芳子の苦痛にゆがむ顔を、充分観察したかったのだ。

「芳子、さっきは私がブラジャーとられなかったら、勝っていたのよ。それなのにいい気になって、さんざんひどいことしたわね、充分お返しして上げる。いい？」

芳子は唇をかみしめて、一切口を開かなかった。ただ物すごい目で由美子をにらみ返した。確かに二人とも強気にはちがいないが、

芳子の方が一段と上であるようだ。ここまでくると悪あがきをしない。ただ由美子によってグリセリンとウィスキーのストレート混合液を注入されたとき

「ウーッ、アーッ」とかすかにうめいただけであつた。

由美子によってつつげて二回目浣腸されると、苦痛にあえぎ乍ら

「やっぱり由美だったの？ 哲夫さん、ほんとに好きだったのは——」

と小さなささやくような声で、うらめしうに言った。私の心理を何とって説明していいか、私自身解らない。

今、全く軀の自由をうばわれて由美子に思いのまま責められて、哀願の表情を見せて訴える芳子がふと堪らなく可愛く思えて来た。

私は遂に二人の女に完全に浣腸を施したところになった。永い間、夢みてきたクルステイルへの願いを、思い切り満たして私自身疲れていた。次第に冷静さがもどって来て、軽い後悔の気持も生じてきていた。

芳子も由美も、そのままあおむけになって目を閉じていた。私はどちらへともなく

「ここまで来たのだから、はっきり言おう。僕は今日二人の争いを見て、全く醜悪なもの

の極限を見たような気がする。そして僕自身も醜悪なもの最たるものと再認識したんだ。然し人間のブエールの下にはそれが厳として存在するということも事実なんだ。その事実の中からも何かの美を発見できると思っただが駄目だった。今の僕にはそれを超越して美を認め、君たちの愛情なるものを受け入れる自信が全くないことを知ったんだ。由美さんにも芳子さんにも申し訳ないが、僕は当分一人でいたい。人間の醜悪さの中に女性の美しさ、愛情の美しさが発見できるまで。今日のことは夢だと思って忘れてくれ。そして昨日までの君達のように、表面だけでも仲の良

い友達であってくれ。僕は近い内に東京に引き上げる」

自分の言っていることに酔ったように、私は話しつづけていた。心の底では、仲々うまい演出だわいと自嘲し乍ら。

遠くでまだ太鼓の音が響き、蛙がうるさく鳴いていた。

終り

△後記△

冒頭に書いたように私は今、全く平凡な小市民的生活の中でひっそりと暮している。

現在の妻はこの私の秘密を全く知っていない。私は、この自分のいまわしい性癖と体験を家中の寝しづまっている内で大急ぎで書い

た。美佐子は東京下町の商家に、芳子は東京の医者、由美だけが田舎の中学教師のところにそれぞれ嫁して、すでに子供も何人かづつ得て、やはり幸福に暮していると仄聞している。

私の過去の過ちは消えるものではないであろうが、これを一気に書いてしまつて今何かほっとした気持でいる。若しこれを読んで一人でも私の妄執について理解してくれる人がいたら私は心からお礼を言いたい。また奇くを拝見し、私だけがアブではないかと苦しんでいるのが莫迦々々しく、ここに筆を執った次第である。

ガン作・マニアのノート

(私のバーでの会話)

芳野眉美

A 妙薬

柳葉魚を焼いていた、梨香が指をやけどした。

「早くオシオンをひっかけろ」と

A。

「きたないなあ」

「自分のだからいいじゃないか」

「いやよ」

「やけどとか、蜂にさされた時なんか、オシオンが最良の妙薬なんだぞ」

「それしか知らないんでしょう」「オバアチャンが、そう教えてくれたんだ」

「さされるといえばね」と私。

「釣りに行って釣った魚にさされた人がいましたよ」

「それはまた、御丁寧なことだ」

「魚の名前、忘れちゃったな。釣り人はAさん」

「そんな高級な趣味があるものですか」と梨香。

「すいません」

「オコゼとかゴンズイとか、いろいろありますよ」と客の一人。

「指先にさされますとね、腕のつけ根まで痛みますよ」

「すごいね」

「その時も、オシオンですか」とA。

「ええ、そうです。ききますよ」

「それみろ」

「出なかったら、どうするのよ」
「それなんですよ、困ってしまっ
て、漁村のオカミサンにかけても
らった奴がいるんです」

「あら、いやだ」

「直接ですか」

「ええ、勿論」

「若いオカミサン？」

「いや、中年。若い人はとてもと
ても」

「そのオカミサンの御主人は？」
とA。

「さあ、そこに居たのか、どうだ
か」

「気になる？」と私。

「そりゃ気になるよ」

「そこまで気がつきませんでした
ね」と、その客。

「うらやましいでしょう」と梨香

「梨香、釣りに行こう」とA。

「すぐ、これだ」

「さされたら、俺にかけてくれる
か」

「いやらしい」

「直接だぞ」

「馬鹿」

B 代 用

「面白そうなお話ですね」と、老

年の客が云った。

「最低の話で、申しわけありませ
ん」と私。

「政治の話より高級ですよ」とA

「江戸小話にね」とその老人。

「前金をもらって妾にあがった女
が、寝小便をして、おはらいばこ
になる話がありますよ」

「オメミエ泥よりひでえな」とA

「あら、Aさんなら、かえって喜
んで愛しちゃうくせに」と梨香。

「ちがいないえ」

「はっきりしているな」

「お寝小の癖があつて、お嫁に行
けない人をさがすことね」

「三行広告でか」

「まさか」

C モード履き

「また変なサンダルを履いている
んだな」とA。

「童話にでてる悪魔が履いてい
るくつみたいだ」

「失礼ね、古代エジプト・スタイ
ルのサンダルよ」と梨香。

「夏になると、モード履きが多く
なりますね」と私

「うれしくなるね、素足の魅力と
いうところだな」

「今日は珍らしく低いけど、梨香
はヒールが高いほうが好きらしい
ね」

「カッコがいいもの」

「それなんだ」とA。

「梨香はアパートの廊下までハイ
ヒールのサンダルなんだから」

「スリッパ、きらいなのよ」

「この間、梨香を送っていった、
御婦人がトイレから出たところに
ぶつかったんだ。驚いたねえ。真
赤なネグリジェにハイヒールのサ
ンダルをつっかけて廊下を歩いて
いるんだ。」

「前の部屋の人よ」

「もう一度見たいな」

「どうぞ」

「梨香の、見たことあったよ」と
私。

「去年の夏」

「そうかしら」

「金色のハイヒールのモード履き
をはいてさ廊下でチンと遊んでい
たじゃない」

「ああ、お隣の二号さんのチン
とね」

「パンティが丸出し。短いネグリ
ジェでさ」

「俺にも見せろ」とA。

「だめよ」

「つれないなあ」

「あいかわらず、全ストを追って
いるんですか」

「なかなかひまがなくてね」

「全裸にハイヒールのサンダルだ
けというのでもいいものでしょう」

「全裸より、透明なパンティなり
ネグリジェを着ていたほうがいい
な」

「全裸だと白々すぎる」

「そうね羽根を持ったり毛皮のシ
ールを持ったりすれば別だけど」

「一座のスターは、サンダルにも
注意しているでしょう」

「よく見ているのね」と梨香。

「梨香の古くなったサンダル、く
れないか」とA。

「どうするの？」

「顔に乗せて寝る」

「いやだ」

「新しいのと交換しよう」

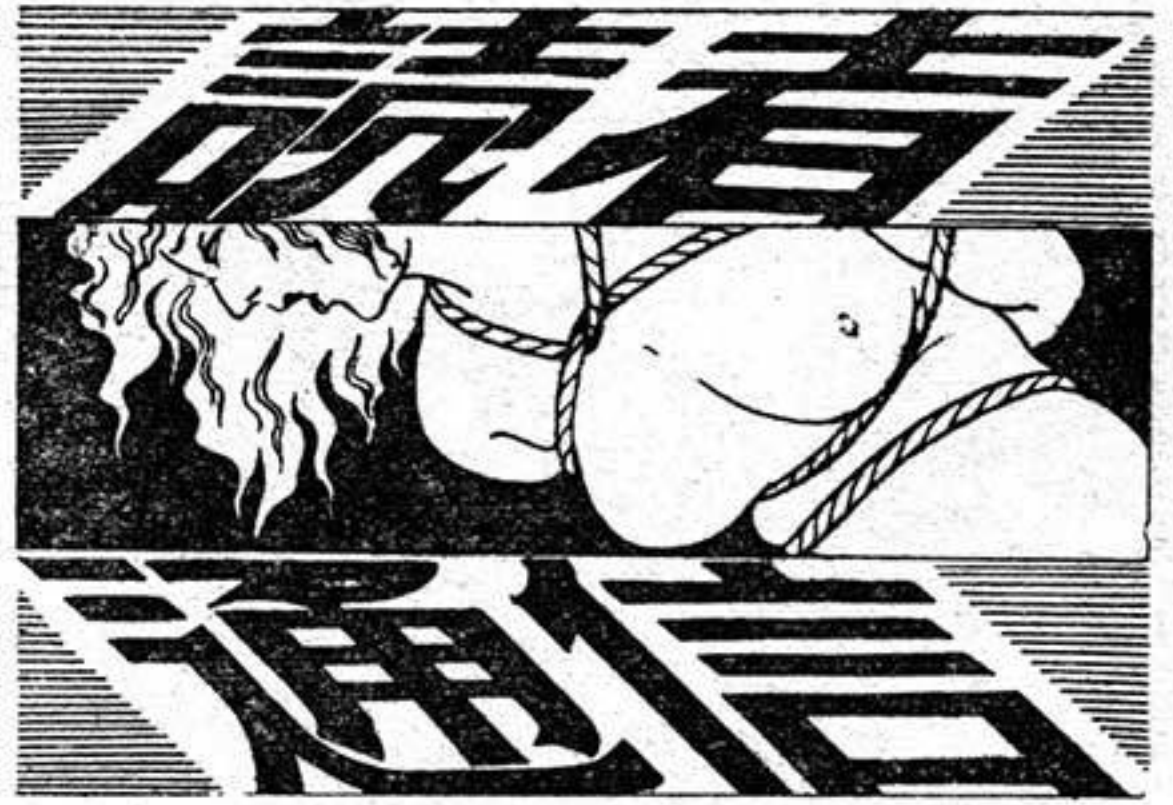
「そうね、三対一ならいいわ」

「新しいのが三足かい」

「そうよ」

「かなわねえな」

女性の足は美しい。



最近のKK誌はなんという素晴らしさであろう。我々鼻責ファンの為に、梨花嬢、絹川嫁、大塚嫁と貴重な記録を掲載して下さい。誠に感激に堪えません。此の上は過ぐる年の名作「玩具」を主材として一連の鼻責め連続写真を展開しては下さらないだろうか。又、鼻責め撮影の記録を流麗なタッチで報告して下さいだろうか。ファンの方よ、どしどし通信に其の体験談を御投稿下さい。写真の交換なども望ましいものだが……。

○ 先日はKK鼻責特集号を手にして思わず歓声を挙げた夢を見ました。夢の実現企画でもあれば小生は凡ゆる努力を捧げたいと思う。(墨田堤△K・T生▽)

○ 皆様今日は、お元気ですか。僕も皆様のお仲間入りをさせて下さい。まだほんの一年生です。ので、皆様のような大先輩のお仲間入りをさせて頂くのは早いと思いますが、どうぞよろしく。僕は二十一才になる或る電機器具卸店の住込店員です。読者欄を見ていると、とても僕のような青二才の出る幕ではないような気がしますが、それでも勇をふるってお手紙を書きました。僕自身、サデリストとかマゾヒストとか、フェチシストなのかむづかしいことはわかりませんが夜、緊縛の絵や写真を眺めると身体中がはてってしかたがないのです。自分でも、これはどういうわけかわかりません。先輩の方々に一つお教えいただきたいと思っています。東浦ひかるさん。僕は貴女が大好きです。貴女と文通していろいろお聞かせ下さい。近くだとあってみたいと思います。(福井県遠敷郡△野川武▽)

○ 私は当年三十八才の男性です。物心ついた遠い昔より女装愛好者として誰一人友達もなく、ひとり淋しく、わずかに週に一度程度のプレイによって自らを慰めております。未だに拙い装いしか出来ななくて、とても他人の鑑賞にあらう姿は出来ませんが、それでもおつきあい頂ける男性の方がありません。たら、せめて文通なりともして頂き、この孤独な人生をなくさめたいと思います。女装愛好のお友達か私を女として愛して下さいのお友達がありましたら編集部を通じて御連絡下さい。(住友京子こと沖一)

○ 四馬孝先生侍史。毎号目のさめるような素晴らしい絵を鑑賞させて頂きださいます。まことに有難うございます。先生の流麗無比の筆致は、美に憧れる多数の読者の魂に憩いと歓びとを与えつつけていくことと思います。さて、近い将来のどの号にでも結構ですからいつかいちど和服盛装の美少女のものも描いていただけませんかでしょうか。私が憧れてやまない情景は、華やかな振り袖姿の上流のお嬢さんが高手小手に括られて歩か

される場面でございます。絵のへたくそな私は、先生に私の描いた即製の拙い素描を原型とした美しい挿し絵を描いてくださるようお願いすること、思いつきました。幼稚で素人臭くてお恥ずかしいスケッチですが、私のイメージに現れた少女の姿態三つをここに同封させて頂きました。不遜な手紙をさしあげました失礼のほどは、なにとぞお赦しくださいますようにお願い申し上げます。(大阪市北区△一ファンから▽)

○ 佐川奈津子様、久しぶりに御投書を拝見致し、筆を取らせて戴きます。貴女様が如何なお姿の方かどうか、もともと知る由もありませんが、数回にわたる御投書より察して、恐らくは極く初歩のサジストでいらっしゃるのではないかと愚考致します。或は、サジズム、マゾヒズムの何たるかを、ほとんど御存じないのではないのでしょうか。私平伏人の如く物心がついてから三十数年の間、唯一途にマゾの追究に生きて来た者にとって、甚だ失礼ない方と存じますが、貴女様の様に、御自分の秘めたるサガを満す為と言うよりは、むし

る御自分の生活を便宜化する為にのみマゾ男を飼育する事は非常な反発を覚えるので御座居ます。あくまでも、我々マゾヒストにとつては、SM行為は文字通りプレイであり、決して生活の総てではありません。かりに貴女様のおっしゃる様な三匹のマゾ男が、貴女様の下で飼ひ殺しの境遇にあるとすれば、それらの男はすでに人生の敗残者と言うべきではないでしょうか。健全な生活の中にひそむ一刻のプレイ、此のしゅん間に我々マゾヒストは全欲望の充足にばっとうするのです。三百六十五

日昼夜の別なくマゾの欲望のとりこになつて居ては、どうしてまともな社会人としての生活が保たれるでしょうか……長々と勝手な事ばかり申し上げましたが、慈悲深い貴女様はきっとお許し下さると存じます。若し貴女様が真にサドマゾを御理解の上の御行為でしたら伏人は文字通り地に平伏して御詫び申し上げます。何はともあれ機会を得て御話し合うなり、誌上御叱りを受けるなりして貴女様の真のお姿を伏人なりに知りたく存ずる次第でございます。御健康を御祈り致します。(東京都八平伏

人)

○ 七月号の四馬孝氏の口絵「落城の姫君」楽しく読みました。同種の切腹画としては、四月号の「女城主最期」の方が迫力があつたように思いますが、たくましい敵方の兵に槍で刺されて今はこれまでに自害するうら若い姫君の悲哀がよく描かれていました。滝れい子氏の切腹画の中では介錯人に腰元が太刀をふり上げている図がよかったと思ひますが、マニアとしてはその腰元の太刀の一閃が女の生首をすばりと斬り落したところが

望むべきものでした。東映の「武士道残酷物語」での娘の生首が血汐と共にころがり落ちるシーンは近来にない興奮を与えてくれました。つややかに結い上げられた髪の毛なまめかしい娘の首が血汐のたまりの中にころりところがついてるところ首のない美しい娘の胴体が血汐の中に崩折れているところも無惨絵マニアにとってはこの上ない贈り物でした。残酷ムードがこのごろの流行らしいですから「奇ク」も少し大胆に血みどろな無惨ムードを出してもよいのではないでしょうか。文献誌として品格

第一弾

緊縛フォト・アラベスク

略号「あらべ」 定価五〇〇円

本誌の黄金時代のモデル嬢の素晴らしい緊縛姿態ばかりを集めた匂うばかりにあでやかにも美しいフォト集です。全巻二十六項目、七十七葉に亘り、文字通り表紙から裏表紙のハシに至るまで、すべて緊縛女体のむせかえるような、むんむんするムードで埋めました。まだお求めにならないマニヤの方は、是非コレクションの一端にお加えになって、その妖美のエキセントリックをお楽しみ下さい。

第三弾

緊縛写真グラフ集

略号「グラフ」 定価五〇〇円

絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、桜井葉子、等の本誌で育てたベテラン・モデル嬢の活躍による最も優秀にして鮮明、且つ魅力的な緊縛艶姿ばかり百十五態を集録した「グラフ」です。誌面いっぱいには所狭しと盛り上げる大型グラビアの迫力は、きつと皆さまを、この妖しい異常美の縛りムードの中へと誘い込むことでしょう。女体緊縛マニヤの皆さまに自信を以ておすすり出来るグラビア・フォト集です。

第四弾

緊縛フォトと緊縛画帳

略号「別特」 定価五〇〇円

三十六葉に及ぶ四馬孝描く粒選りの傑作貴画集のケンランたる陳列に加えて、本誌の発掘した新人モデルである、四方清美、花本京子、柳初子、山路ミヨ子、館典子、熱海容子、前本妙子、浜千代子、大井小夜子、加茂良子等の新鮮な悦虐姿態と加賀利江子、藤田節子、萩千恵子、桜井葉子、絹川文代、大塚啓子、須川令子などの代表的ポーズによって味をつけました。どうぞ御一見下さるようおすすりします。

ある「奇ク」のことですし、言論表現の自由の国であるわが国ではこんなことまでとやかく言う筋合ではありません。節度ある「奇ク」のこと故、節度を外すことのない表現ならば、何らおそれることはないでしょう。泰西の画にも無惨絵じみたものが名画として許されているのに、吾々マニアのよりどころとする「奇ク」のそれが圧迫を受けるとは所詮、文化水準の低い輩の軽薄な頭脳の所産に外ありません。少し理くつすぎましたが裸女血斗マニアの方々も同じ思いをしておられると思います。特に室井様の裸女血斗のあこがれぶりは同じマニアの私として、いつもその傾倒ぶりを話題としております。五月号の告白は全く吾々の気持を代弁して下さっているように今に至るも、くり返しよんでいます。私は同じ裸女血斗でも、日本の女性と外国、特に西洋の女性との血斗模様にあこがれています。脂切ったボリュームのあるグラマ―な西洋の金髪の女性が、みどりの黒髪のひきしまった身体つきのおふんどし一本もりのしい姿の日本の女性にくみしかれ、豊かにもり上がった乳房の扶ぐり廻して止めを刺した上、首級をあげると言う

図にあこがれを抱いています。前の通信にありましたようなクレオパトラと千姫の決斗と言うようなものもその一つです。美しいブロードの西洋娘の生首を差上げて勝鬨をあげるふんどし一本の日本娘の姿は、又一風変わった趣があると思います。外人女性に対するコンプレックスもこれで解消です。それから現在の沖繩に對する私の感情から出た裸女血斗図として琉球風の髪形のせいかな引きしまった身体つきの沖繩娘。もちろんふんどし一本のりりしい姿です。この沖繩娘とグラマ―な金髪の脂切ったボリュームのはちきれんばかりの身体に細目のふんどし、又は細いビキニパンティ一つの金髪娘との決斗場面です。体力に勝る西洋娘は力まかせにこの沖繩娘を討ち取らんとしますが、身軽な沖繩娘は仲々掴まえられません。ようやく掴まえてくみしかんとします。が沖繩娘の唐手は西洋娘のジャックナイフを、手からたたき落します。小しやくなとばかり今度はむんずと組みつきますが、又しても彼女の手練のやわらに大きな身体は宙に舞います。このようなことが二三度あって疲れのみえた金髪娘に今度は唐手の痛打です。急所

東浦ひかる「黒フンドシの女」分譲中

第一組

尻に喰い込む黒フン

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

略号「とし」

第二組

股に喰い込む黒フン

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

略号「とひ」

にうけた一撃に遂に金髪娘は地上に崩折れて呻きます。得たりとばかり沖繩娘は脂肪のかたまりのよな金髪娘の身体を自分の足下にしっかと組みしきります。そして彼女はふんどしにたばさんでいた小刀を抜きとり、えいっとばかり豊かな金髪娘の乳房を扶ぐり回すと噴水のような血汐を噴き出し、上になった彼女の柔肌を花を咲かせけもののような悲鳴を残してこと切れてしまします。そして勝ち誇った沖繩娘は金髪娘の首をかき落とし、その金髪を掴んで生首をさし上げ、勝名乗りをあげます。返り血をあびた玉の肌、みだれた髪と琉球風の長い紫の鉢巻を風になびかせ、赤ふんどし一つのりりしい禪姿で血汐したたる金髪娘の生首を目より高くかけ、血汐の海の中に横たわる白い脂肪の塊のような首のないふんどし一つの西洋娘

七月号の芹沢伊保様の「私の無惨絵」大変面白く拝見しました。世の中には、同じ様な趣味の方がいられるものだと思を強くしました。私の趣味は日本髪（特に高島田）に結上げた若い女性（腰元とか花嫁）が殿様のお手討になるといった場面です。御殿の庭先に引据えられ、両掌を合せ観念の眼を閉じ青白い細首を差伸した覚悟の態、後れ毛をかき上げ、着物の襟をぐっと抜襟にして襟足から肩先

まで露わにして、抜ける様に白い細い襟首が、かすかにふるえ乍ら殿様の刃を静かに待っている。こういう情景を思った丈で胸がしめつけられる位です。やがて殿様の気合諸共、冴えた腕前に業物の一刀が振下されバサッという音とギャーという絶叫をのこして、腰元の島田髷の首が血煙あげて水もたまらず打落される光景は、もう無惨の極致です。そして切口を見せ、血の中に転がった高島田の生首と、両手を拡げてガバッと前にのめった首のない胴体のグロテスクにも妖しい美しさ。最後に、きれいに首化粧を施されて三宝の上に据えられた高島田の女の生首。それはそれ丈で一ヶの芸術品と言えましょう。私は絵を上手く描くことが出来ませんので奇クを始め、絵草紙などの無惨絵を集めて秘かに楽しんでます。打首マニア、生首マニアの私も奇クが段々とこの傾向の読物や絵をのせて来たことを喜ぶと共に今後益々芸術味豊かな無惨絵をふやすことを望みます。(畔亭数久氏の「鉄路に散る二輪の花」や四馬孝氏の「介錯に落ちる女の首」など結構でした)又毎月号の読者通信やコントで活躍される所謂小数派の同好の方々

と趣味の文通を望みます。殊に岐阜県の水野弘様御夫婦のプレイの話には私も殆ど同じ趣好のプレイを楽しんでいますの我意を得た感じでした。お近くでしたら是非「バッサリプレー」に加えて頂きたい所ですが甚だ残念です。(尼崎市村山進)

編集部の皆様、私は浣腸にとりつかれた女です。毎月「奇ク」を買って最初に読むのが浣腸についてのページです。最近毎号のうちに一、二編出ておりますがそこだけは前後の区別もなく読み切ってしまう次第であります。しかし少々残念に思いますことはグラビアについてであります。グラビアの殆どが緊縛のみに終わっている様に思われます。そこで、御願ひします。緊縛による浣腸責めなどをのせて下さることを、大型浣腸器(50cc 100ccなど)により数回もの注入を受け耐え忍ぶ有様、又その上オムツまであてられて恥辱と苦しみにゆがんだ顔など。次は、無花果、硝子などの浣腸器から特殊な浣腸器に至るまでの特集などをのせていただくとを切に御願ひしてやみません。ここで私達のプレイについてお話ししてみたいと思

います。私共(女性許り21↓23才)は普通は二人一組のチームを二組つくり、先ず一方の組が他方の組の人へ浣腸をしてあげるのです。(注入の量は初めに決めておきます)そして耐えもうどうにもこらえ切れなく排泄するまでの時間を計り二人の時間の合計を出すのです。次に先程施された方の人が今度のはしてあげるのです。そして同じ様に時間の合計を出し、時間の永かった方の組が勝となり、その日は勝った組の人は負けた組の人に対して色々な浣腸責めをする権利が与えられるのです。読者の皆様も一度おやりになってみては如何がですか。爽快な気分になっていいものですよ。又私達と一緒にプレイしたい方、見えましたら誌上にてお知らせ下さい。男性の方ともプレイをしたいと思っております。皆様御元気で。(栗田宮登世子)

寺島美代子様、四月号にて貴女の読者通信にての呼びかけを拝見致し、あまりにも私の求めて居るものを与えて下さる貴女に、取あえず筆を採りました。この二、三年の間にも数度K誌に投稿し、読者通信で皆様とお話し致しました

が、貴女とは是非お話がしてみた。私は心からそう願って居ります。貴女の経験を、そして私の経験と空想を……。それが実現出来るならば、もっと素晴らしいことでしょう。貴女は大抵、食塩水、石鹼液等、大量の浣腸をなさって居られるとの事です。グリセリン等の少量のものと適当に組合せればもっと楽しめる浣腸プレイが出来るとは思いません。出来ればおむつと一緒に使用する事は私も大賛成です。こう書いて居るうちにも私の頭の中は目まぐるしく、浣腸のポーズが浮かび上って

東浦ひかる強烈縛特集

第一集 略号(うら)

後手吊り足挙げ縛り

大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

第二集 略号(うり)

二つ折りエビ責め

大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

第三集 略号(うる)

足挙げ椅子責め

大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

三条春彦画

極彩色印刷

時代物責絵巻

画帖

詳細解説付 八枚 一組 三〇〇円 略号「時代」

参ります。一人でプレイすると途 届けして置きます。(大阪八木吉
 中で妥協してしまおうと言う貴女の 生)

言葉—これは当然の事でしよう。

そこには羞恥の感情が無いからで
 す。誰か一人、傍に人が居れば……
 ……その一人を貴女が男性に求めら
 れた事を私は立派だと思えます。

同性の人よりも異性に対する羞恥
 は大きいものだからです。そして
 その羞恥によってその極限まで排
 泄を我慢し、そこに本当の浣腸の
 楽しみが味わえるのではないでし
 ょうか。私は貴女を縛ります。そ
 して浣腸をします。何度も何度も
 あらゆるポーズと方法で私に浣腸
 をさせて下さい。私は大阪に住む
 二十八才の男性です。大阪と貴女
 のお住いになる名古屋。それは決
 して遠い距離ではありません。わ
 ずか三時間足らずではありません
 か、私はもし貴女が求められるな
 ら喜んで名古屋へ参ります。もし
 て貴女に必ず満足していただける
 事を確信して居ります。住所、連
 絡所、電話番号を編集部の方へお

○

号を重ねる毎に益々内容が充実
 する奇くはすばらしいの一言に尽
 きると存じます。私達夫婦もKK
 誌を読み出して約三年程になりま
 す。奇くから得る新しい刺激とア
 イデアで私たちの愛情生活も本当
 に楽しいとさえ思うこともござい
 ます。しかし私共はS・Mの追求
 はあく迄S・Mにより生くること
 の楽しさを見出し得る処に意味が
 あり得るものと信じて居ります。
 毎号読者通信を拝見致しますと、
 傾向こそ違え求める人々の如何に
 多きか、而し乍らそれは単なるつ
 ぶやきや叫びに終っている様な気
 がします。若しここに良心的方法
 により良心的な人々が何らかの方
 法で連絡し合うことが出来たらど
 んなに嬉しく、又、多くの人々を
 満足させることが出来る事でしょ
 う。如何でしょうか。御意見をお
 寄せ下さいませ。二年程前、ある

機会からK夫婦と御友人になり、
 たまたまよく似た傾向でもござい
 ましたので親しく御文通を求めら
 れるままに致し、且つ、いろいろ
 と御指導も頂いた次第でした。所
 蔵のフोट交換なども……。御交
 際しているうちに大変善良な方で
 したし、わざわざ近郊まで御夫婦
 でいらっしやう、ぜひお互い夫婦
 のプレーをオープンで行いたい
 のたつての御申出で、半ば迷
 乍ら私共も席を同じく致しまし
 た。プレーの内容を詳しく御話し
 することは遠慮させて頂きますが
 全く刺激と興奮の数時間であった
 と申し上げる以外にありません。
 只、世間に言う夫婦交換の様な行
 動は一切なかったこともついでに
 申し上げて置きます。幸い私共は
 元来カメラも長年趣味をもって恥
 かしい乍ら自己のプレーなども作
 品化してありますのでこの様な面
 もその後K氏とはお互いに返却す
 ることを条件にお見せ合いも致し
 て居ります。極く最近ですがK氏
 の御話によるとK氏の友人で事業
 家であるY氏が某喫茶店のウェイ
 トレスで二十三才の「ゆかり」と
 言う方を飼育中とかで研究的立場
 からその最初のことから刻明に
 日記、及びフोट撮影を行ってい

るとかでその資料を御紹介して頂
 いて見せて頂きました。これは性
 心理学的立場からでも大変貴重な
 資料とも言えるでしょう。KK誌
 でもこの様な方面もぜひ採り上げ
 て欲しいものです。私たちも之を
 機会にたとえ友は多くなくとも真
 実にSMを探究し、愛し語れる方
 々とぜひ御交際したいと存じて居
 ります。どうか積極的な御意見や
 お便りをお待ち致して居ります。
 尚、最後に私達は三十九才と三十
 二才の夫婦でございます(大阪府
 布施八門田謙三、門田ひろみ)

○

小生、大の妊婦ファンで以前か
 ら妊婦フोटの発売を待ちかねて
 いたところ、この程待望の写真が
 発売され、非常に喜んでゐる次第
 です。昨年も本誌から妊婦の緊縛
 フोटが発売された際、飛びつく
 思いで購入したのですが、まだ妊
 娠月が早い大してお腹も膨
 らんでおらず、イササカがっかり
 していた矢先、正真正銘の臨月間
 近いモデルの写真が発売されたこ
 とは我々妊婦ファンにとってはこ
 の上もない、朗報といえるでしょ
 う。そこで今一つ編集部の皆様に
 お願ひする訳ですが、四月号で瀬
 沼四郎氏も言われている様に、こ

の際ぜひ妊婦の腹切りフォトを発表して欲しいのです。妊婦のモデルはそうザラには見つからないと思いますし、本誌の通信欄にも妊婦の切腹物を望む声がしばしば見られます。極端な言い方かも知れませんが、殆どの妊婦ファン及び女性切腹ファンがこの実現を望んでいる事と思います。臨月間近いパンパンに張り切った太鼓腹を鋭利な刃物で鳩尾から臍下までズバリと切り開きたいのは我々ファンの共通した願望だと思えます。切腹フォトも単に腹に刃を当てたポーズでなく、本誌の分譲品目にある「無念腹」の様に模擬ので結構ですから、血紅を豊富に用い、腸腹を露出したものであれば全くすばらしいという一語に尽きると思えます。小生の夢としては、この他妊婦が全裸で柱に縛りつけられ大刀で腹を割られる図、腰元姿の妊婦が腰巻一つになり、その腰巻をグッと下げ、下腹を思い切り露出し、膨んだ下腹部を幼い小姓に切らせている図、など夢見ている次第です。以前、何かの本に載っていました。が実際にあった事だそうですが、東京のある所に住んでいた妊婦が入浴した際、智能の遅れた使用人である少年に見られ、

その少年に「そのお腹には何が入っているの」と聞かれ、冗談に「おいしいお菓子が入っているが、前ももっと働いたらこの中に入っているお菓子を上げよう」と答えたところ、件の少年はそれを真に受け、一生懸命働いたが一向に例のお菓子をくれる様子がないのに腹を立て、ある日とうとう出刃庖丁を持ち出し、その妊婦の腹を割いてしまった事件があったそうですが、この様に自分の意志からの切腹ではなく「無理に腹を割かれる」と言う事にも魅力を感じています。本誌のモデルの方も間もなく臨月になると思いますが前にも述べた通りこの様なチャンスはそう度々あるとは思われませんのでこの機会に妊婦の腹割きを是非、実現して欲しいと思えます。本誌の妊婦物の開拓者ともいうべき、羽村京子さんが最近投稿されませんが如何御過ごでしょうか。是非、羽村さんに又筆をとって戴きたいものです。最後に、編集部の皆様は若干不平を申し上げますが妊婦、及び切腹ファンが本誌の読者の中に占めるパーセンテージは決して少なくないにもかかわらず、本誌発刊以来一度も妊婦、及び切腹物の特集号が発刊されていませ

大好評！ 妊婦緊縛秘蔵写真分譲

ここに分譲いたします妊婦写真は、読者有志の提供になる二十二年才の美貌の若妻をモデルとしたものであります。本誌上に広告以来圧倒的なお申込が未だにあとを断ちません。膨満した便々たる腹部は正に妊婦マニア垂涎のものであります。緊縛マニアにとっても、決して見逃すことの出来ない逸品といつて過言ではありません。是非一見をおすすめいたします。

○妊婦の股間縛（九カ月）

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号（にふ）

○妊婦の股間縛（六カ月）

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号（にと）

○妊娠八カ月の股間縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号（には）

○妊娠八カ月の縛り

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号（にあ）

○妊娠五カ月の緊縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

○妊娠前のスード縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号（まさ）

○妊娠初期の緊縛とヌード

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号（ぬろ）

○分娩後縛り

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号（につ）

○分娩後股間縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号（にて）

んが、この辺で一つ特集号を出されては如何でしょうか。創刊号からの妊婦物、及び切腹物のピックアップ集でも結構です。是非実現を希望します。色々勝手な事ばかり書きましたが、今回、妊婦フォトを発売された本誌の英断には心から感謝して筆を置きます。

(鹿島隆二)

○

本誌を通じて同好の士が多いことを知り心強く思います。又S女性の方が大いに活躍されていることも頼もしい限りです。特に川田幸子様、中川フミ子様、青木洋子様、岡美代子様、それに最近の三原康子様などの積極的な呼びかけにはM男性の一人として胸のときめきを押えることはできませんでした。すぐに馳せ参じて足下に奉仕したい気持です。私は以前谷崎潤一郎の小説に熱中し、又これと同種の本や雑誌をあさりましたがその後ようやく二、三年前本誌を発見したのです。しかし、読物や絵画だけではなく、S女性の方と実際に趣好を打ちあけ話し合い、さらには奉仕又はプレイができたならば、どんなに楽しいことでしょう。S女性の皆様、どなたか是非小生を貴女の相手に選んで下さ

い。小生は四十一才、M趣味は多方面に渡っています。なおMSプレイに関する絵画、写真も少々集めていますので御利用下さい。連絡の方法として、本誌発売日後の月、火、木、金の午後六時から六時半まで神田駅(省線)の地下鉄入口付近でお待しています。目印として、右手に週刊誌左手の小指に繃帯し、マスクと眼鏡をかけております。(東京八山口三郎)

○

沢原洋子様、六月号の通信欄にてあなたのお便りを拝見し、失礼とは存じましたが、ペンをとります。私もかねてから貴女のような方とお会いして、できればプレイを……いや、たとえ文通だけでもと願っておりまして。今迄の通信欄に出されている方々は皆、遠くの方ばかりのようで、もっと近くに居られないものかと心淋しく思っています。幸いあなたとは隣県です。貴女のご都合さえよければ、いつでもお逢いしお互いの立場を傷つけることなく心ゆくまでプレイを楽しむことが出来ると思います。私も同じ表現で申しますと「S」七〇%「M」三〇%だと思っています。貴女からの良いご返事と一日も早くお互に喜び合える

日る来ることを夢みつつペンを置きます。(浜田市八志間弘)

○

編集部の皆様日々のたゆまぬ努力を厚く感謝致します。今月も早速貴誌を購入致しました。それと言うのも先月号でMフォトの申込が非常に少なく場合によっては分譲を中止するとの発表がありましたので、その結果如何にと気にかかり飛付く思いで買求めました。相変らず申込は少なかつた様ですが、編集部の御好意により我々少数のM派のため何んとか従来通り分譲を続けていただける様子、やれやれと安心致しました。編集部で指摘されている通り今月号の読者通信欄を見ましても、M派の投書が多く又原稿等も多いとの事ながら依然低調な需要との事残念であります。原因を色々と私自身の配慮や気持ちに置換えて考えますと、内気で弱いためのM派故世間に対する気使いは想像以上に例えば申込をして送ってもらっても若し万一他人に見られ、自分の性向が公けになったらどうしよう。絶対安全な受信場所が出来るまで自重しようと言った様な他色々の引込思案が強く支配し積極性を欠いて居る事も事実の一つと思いま

す。又、東京の第二フーテン老人氏が主張して居られます意見もM派大多數の気持を端的に代弁している様に思われ、深く共鳴致しました。結局、先に述べました様に一大決心をして申込み送っていたものが生反可で期待外れだった場合、つい続いての申込が消極的となってしまう。私も過去に此の様な経験を何度か味わって参りました。決してM派はフォトや読物を必要としないのではなくむしろ稀少価値のある貴誌の企画には絶大の期待を寄せS派以上に必要としている筈です。以上の観点から今度送っていただきました略号「まそ」は今迄の中で最高の出来であったと思います。欲を言えばもう一、二枚のポーズを追加鼻口は完全に股の下でふさがれ目から上の部分が辛うじて見える様な写真とそれに充分、征服感を表情に表わした女性の全ポーズ、又ヒップの豊かな、大塚嬢がモデルです。一枚一枚位は後ろからとったポーズも欲しいと思います。今回の写真を見、モデルの男性がうらやましく、私も実地に此の様な体験をして見たい欲望にかられて居ります。女性が真のS女性であれば物凄い迫力だろうと想像したり

しています。此の様な傑作が出ますと連鎖波及的に次のものを期待する気持ちが昂じ分譲発表になれば直ぐ申込みたくなります。ポリュームを誇る、大塚啓子さんに、真のS女性的センスで、男性を責めるフォトの継続企画を切望致します。又、諸分譲フォトの企画に關連し購入者の感慨を一層強めるための細かい解説書等を作っていただき同時分譲願えれば幸いです。

此の点で豊橋の大越修様の発言に大賛成です。満足のゆく傑作であれば次から次に欲しくなるのが人情、余程、高額のものであれば別ですがM派は経済的に余裕がない？の推測は的外れではないかと思ひます。私も是非S女性の方と直接文通ぐらいしたいと思つて居りますが紹介していただく事が出来ずか御報らせ下さい。出来る様でしたら、改らためて当方の連絡先を一報致します。(東京都台東区八・S・A生V)

風薫る五月となりました。編集長並に編集部の皆様如何お過しでしょうかお伺い致します。小生、数年前福岡のある店頭で貴誌を拝見して以来、すっかりそのファンとなつてしまつた者です。他の読

者の方と同じ様に、以前は自分だけが變つてゐるのではないかと随分悩んでおりました。而し貴誌のおかげで自分以外に何万と言う仲間が居ることを知り本当に心強く思つてゐます。自分の趣味はMBクリスチールなどで最近の貴誌の内容を見ますと、これ等の記事が少い様です。成可く多数のせて戴けます様、是非お願い致します。

特に羽村氏の文章には、他の方の文章にないハイセンスな文学的な表現が多いので好きです。記録的な体験なども興味はありますが、余り幼稚な表現だと内容の割にはがっかりして終います。ずっと以前でしたか羽村さんが発表されてゐたA感覚とV感覚の論評はとても面白く、下手な純文学より余程印象的でした。小生も自分で時々自分でプレイを行つてみますが、使用するものはグリセリン、ウイスキー、食塩、ミルクなど、矢張り一人で行う場合にはどうしても限度があります。又、読者諸氏の各人の好みにより一度に注入する場合や、大量一〇〇〇CC内外？をゆっくり注入するのを好まれる場合が色々あるでしょう。自分は大量を徐々に注入される方が好い様です。それでかねてから同好

の方と一度知識の交換、親睦を計りたいと思つておりました。処六月号で広島「沢原洋子」様の読者通信を拝見、是非お手紙を差上げたいと思ひ、お便りした様な訳です。貴誌の論説で普断言われて居る様に、プレイをすると言ってもお互いの理性と智性を信頼し合ひ合意の下で行われるプレイは、社会の安寧秩序を破壊しない限り許

される可きで、此の様な態度で望む限り聊も心配はないのではないかと存じます。その意味で同じ趣味の者同志が意見を交換し、精神的満足を得る事が出来たら、決して非難す可き事ではないのでは無いでしょうか。(浣腸マニヤ生)

女角力ファン、マニアが数多く通信を發表されて居り、愛好者を

全裸の縄目

略号

(みい)

大名刺

三枚一組

二〇〇円

モデル

平野 笑子

全裸の羞恥

略号

(みろ)

大名刺

五枚一組

三〇〇円

モデル

田原美佐子

全裸股間縛

略号

(みは)

大名刺

五枚一組

三〇〇円

モデル

岩井 知子

全裸後手縛

略号

(みに)

大名刺

三枚一組

二〇〇円

モデル

平野 笑子

寝台の全裸

略号

(みほ)

大名刺

三枚一組

二〇〇円

モデル

平野 笑子

全裸股間縛

略号

(みへ)

大名刺

五枚一組

三〇〇円

モデル

絹川 文代

股間しばり

略号

(みと)

大名刺

五枚一組

三〇〇円

モデル

絹川 文代

椅子開股縛

略号

(みち)

大名刺

三枚一組

二〇〇円

モデル

絹川 文代

して大いに吾が意を得て満足の至り。此等の意向をまとめてみると現実のプレイを望む人々、分譲フォトによって満足しようとする人々、単なる角力に止まらず残酷性を加味した人々、等各人の趣向はかなりの相違があるようです。どの趣向の人々も現在のKK誌の編集には物足りなく多くの刺戟、アイデアを求められて居る様子、しかし諺にもある通り「腹八分」何事も極度の追求は身の破滅、一定の節度を以て臨む事が自他共に楽しくするルールありとする。KK誌の点の考慮がなされ、私も満足しているが、女角力ファンの立場からすれば他との趣向の兼合からみて一抹の淋しさを抱く。継続的に女角力の記事のあるはKK誌のみで類似誌にはみられない特色が伺われ読者の層も固定されている。過日、私が秘かに写真スタジオでモデルを使って女角力の写真を撮りました。本来女角力ファンにとって理想的ポーズは正式の土俵上において力の限り取り組み汗まみれになった柔肌が勝負と同時に砂まみれになった特有の雰囲気醍醐味である。が、何分スタジオの事として此の様な施設は無理であった

が、モデルには長髪の者を選び、それを無造作に取的風の角力髷にゆいあげた。最もポイントとなるまわしは、しんを入れた紺の物、女性にはやや太過ぎると思われる幅の物を作り、さがりも本物に近いものを作成した。四股を踏む場面、仕切り場面から初めて四つに組む、四十八手の主な型を時間を気にしながら撮影、一時間半の早撮りで終り、約束の時間までには三十分程、余裕が出たので自由に取組んで貰って再び撮影しました。焼付けしてみるとポーズを作った物より自由に取組んだ物の方が見た目は美しくなかったが味のある物が出来ました。KK誌の場合には素人とは違い、専門誌であるから実際の土俵、その上で正式の角力まげ、まわしは紺に限る、さがりは絶対に必要、これらの小道具を揃えた上自由な取組をさせ全力をあげて争う姿をえがけば素晴らしいフォトが出来でしょう。分譲フォトの要望が多い様ですが時機は遅くとも慎重に企画される方が喜ばれると思います。(東京△田上健朗▽)

金沢の愛読者です。エネマ・マニヤです。マニヤも今では随分と

●本誌最近号在庫案内

本誌の最近号は左記の通り在庫しておりますから、お申込次第急送申し上げます。ここに記載した以前の号は、全部売り切れです。送料は当方にて負担いたします。

昭和35年6月号	(特価一五〇円)	昭和36年9月号	(定価一五〇円)
昭和35年7月号	(特価一五〇円)	昭和36年10月号	(定価二〇〇円)
昭和35年8月号	(特価一五〇円)	昭和36年11月号	(定価二〇〇円)
昭和35年9月号	(特価一五〇円)	昭和36年12月号	(定価二〇〇円)
昭和35年10月号	(特価一五〇円)	昭和37年1月号	(定価二〇〇円)
昭和35年11月号	(特価一五〇円)	昭和37年2月号	(定価二〇〇円)
昭和35年12月号	(特価一五〇円)	昭和37年3月号	(定価二〇〇円)
昭和36年1月号	(特価一五〇円)	昭和37年4月号	(定価二〇〇円)
昭和36年2月号	(特価一五〇円)	昭和37年5月号	(定価二〇〇円)
昭和36年3月号	(特価一五〇円)	昭和37年6月号	(定価二〇〇円)
昭和36年4月号	(特価一五〇円)	昭和37年7月号	(定価二〇〇円)
昭和36年5月号	(特価一五〇円)	昭和37年8月号	(定価二〇〇円)
昭和36年6月号	(特価一五〇円)	昭和37年9月号	(定価二〇〇円)
昭和36年7月号	(特価一五〇円)	昭和37年10月号	(定価二〇〇円)
昭和36年8月号	(特価一五〇円)	昭和37年11月号	(定価二〇〇円)
		昭和37年12月号	(定価二〇〇円)
		昭和38年1月号	(定価二〇〇円)
		昭和38年2月号	(定価二〇〇円)
		昭和38年3月号	(定価二〇〇円)
		昭和38年4月号	(定価二〇〇円)
		昭和38年5月号	(定価二〇〇円)
		昭和38年6月号	(定価二〇〇円)
		昭和38年7月号	(定価二〇〇円)

多いと思われませんが、僕は貴誌は昭和二十八年頃から愛読しています。その頃、羽村京子さんの文章を読んで感激したものですから、もう十一年選手です。元々その傾向があったのですが羽村女史の文章によって開眼されたのです。さて、読者通信欄は読者のなまなましい体験希望の文章や表現で最もひかれるのですが、僕の通信もぜひ載せて頂きたいと思っています。僕は三十一才の男性、建築設計技術者で、熱烈なエネマ・マニヤです。最近の重大ニュースは武智鉄二が演出した松竹「女女物語」が小説新潮で取り上げられ、その中で武智氏が「浣腸遊びが願い」と囁くという大文字を山中温泉行のバスの中で読んで思わず、どきどきさせられ、同僚に気づかれな

かったかと思われる位顔が赤かったことです。僕にくらべて公刊紙に堂々と発表される武智氏は、我々マニヤの意志を代表しているように感じて特有の孤独さをもて余し、鏡で自身を映しながらイチジクやエネマを楽しんでいます。エネマを使用するときは石鹼液とグリセリンとを混合し、空気も入れて用い、排泄をがまんするのにシリンドーを用います。最近パートナーがほしくてなりません。女性の同好の方ぜひお手紙下さい。

(金沢市八科野勇)

○ 小生「奇ク」を愛読する二十五才の鼻マニヤですが、皆様如何プレイに精を出して居られますか、六月号には鼻マニヤの同志の方を見てうれしく思っています。小生はMの方が強いのですが、鼻を上に向けて穴が伸び切ったところが一番好きな場面です。鼻マニヤの方で、私見したいな者でなければ一度お会い致しませんか男の方でも、女の方でも結構です。是非お便り下さい。(埼玉県蕨局八中尾晃)

○ 奇ク七月号の「奇譚三十九夜」

物語第二十六夜を読んで私は胸が高鳴りました。野生的な水本さんを全裸で股間縛りをした上、股を開かせて逆さに吊るす。なんと素晴らしいことでしょうか。私も相当以前からの御誌のファンで、時々機会があれば緊縛プレイをやったメラに納めています。仲々そういう理解のあるマゾ性の女性にめぐりあわないので、今のところ十分満足するようなものはありませんが、それでもパートナーが見つかり次第撮影したものがありますので、その中お送りしたいと思っています。しかし、どれも、御誌のようにグラビアにするような目的ではないので、私一人が楽しむようなポーズばかりです。同封の絵は、「三十九夜」物語を読んで私が想像して書いたものです。少しでも本物に似ていれば幸いです。

(福井県鯖江市八福田真一郎)

○ 初めてお便りいたします。私は三十三才のサラリーマンで、まだ独身です。日頃から美しい女性に

苛められたい念願は、マゾには違いないでしょうが、馬や犬のようになって奉仕したい気持は全然なく人間便器など以っての外です。対等の人間として、私より体力のある、たくましい女性に屈服させられたいのです。私の必死の抵抗もむなしく、美しい女性の膝下に組敷かれたら、どんなに素晴らしきことでしょうか。五尺四寸、十四貫の私の体力は男性として自信なく現代の発刺とした体格のいい女性よりはるかに劣っております。特に腕、手首、指など細く、街で見かけるたくましい女性に劣等感を持つことがたびたびあり、またそれと同時に、こんな女性に苛められたいという衝動にかられて仕方がないのです。でも、こんな私の気持を誰にも打明けることが出来ず今日に至りました。勿論、将来夫婦生活に於いても、こんなプレイが続けられたら、と考えるだけでも楽しみが湧いて来ます。お転婆女性大いに歓迎、でも「気は優しく、力持ち」的存在が好まれますが、五尺三寸、十五貫程度の体格の女性なら充分だと存じます。腕に自信があれば小柄な方でも結構、またお互い気が合えば、

蚤の夫婦になるような大柄な女性でも問題ではありません。要するに私より、強くたくましい女性を望んでおります。勇敢な女性のお便り、お待ちしております。(京都八M・K生)

○ 岐阜県恵那八水野弘様、今月号の読者通信を拝見いた早速筆を走らせます。奇クの「生首シリズ」もその後は私達生首マニアの心をときめかせてくれるような作品を出して呉れず大いに失望しております。私も貴方同様、大の生首ファンで同志のいないまま妻を相手に斬首、梟首等のプレイを楽しんでいます。時にはセルフタイマーを使用して写真をとったりしていますが、なにぶんとも田舎町のことでDPに困り、過日は奇クの編集部へ無理をお願いしたりしました。先月発売号に「夫婦のSMプレイ写真について」と題して通信文を発表させて戴きましたが、お読み下さったでしょうか。あの通信に書きましたように一昨夜プレイを行い写真をとりましたが、夜間でもあり設備ありませんので、どのような出来栄かわかりませんが掲載可能なものは奇クに願ってグラビアにでも出して戴

次号(九月号)は七月二十五日に発売いたします。

妊婦新作フォト

関谷夫人の勇敢な登場に感激して児玉昌子さんが、妊娠中の裸身を晒して満天下のファンを唸らせました。今回、更に京都市在住の一読者の方の御厚意により、妊婦のヌードと妊婦の全裸緊縛写真の提供を得ましたので、ここに分譲写真として発表いたしました。マニヤの方々の御意に召せば幸いです。尚、臨月の撮影も予定されているそうですので、次号誌上にて発表できると思います。

妊婦ヌード (九カ月)

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(やま)

モデル 安原さゆり

く心算でいます。貴方の通信によりますと自宅でDPをやっておられるとのこと羨しい限りです。私も自分の暗室をと永年考えていながら経費等の関係で思うように参りません。貴方の住所が近ければ協同プロダクションを作って、私が貴方の奥さんの首をバツサリ、

妊娠九カ月の便々たる大きな腹をつき出して、全裸の腹部をさらけ出した若妻の大胆なポーズ。一見してその腹部の巨大さにマニヤの血を躍らすこと必至の貴重なる文献、妊婦ヌード。

妊婦しぼり (九カ月)

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(やむ)

モデル 安原さゆり

全裸で立った妊婦を側面からキャッチしたので、その妊娠九カ月の丸い腹部が、ぶっくりとつき出て、いささか垂れ気味となり産み月に近いことを示している。後手の簡単な縛りは、ヌードにアクセントをなして、この妊婦写真を美しいものにして

貴方が私の妻の首をバツサリと言ったプレイを構成して組写真にすることも可能ですのに残念です。刑場に引き出され全裸にされ高小手に縛られた美女の差出す細首を、首穴の底へ打落す瞬間の何とも言えぬ気持、打落した生首をさらし首にして眺める気持、何とも

言えません。貴方の場合は斬首の前に切腹が入るようですが、私の場合は処刑です。ギロチンで落される首、鋸で挽き落される首、日本刀で打落される首、短刀でかき落される首、梟されて両眼を無念そうに見開いて虚空をにらんでいる首、静かに両眼をつぶり眠っているような首、半ば口を開き驚いてみるような首等、いろいろ組合せると思えます。どうして奇巧では生首マニアの希望を満足させて呉れないのでしょうか。多くのモデル嬢が居るのですから、きっと素晴らしい作品が出来ると思います。「水野弘」様何卒今後お便り下さい。そして御指導願います。(和歌山県八新宮明夫)

今年も梅雨に入りましたが、御誌ますます御発展の様子、非常にうれしく心強く思っております。最近のフォト、グラビヤ、鼻責め等多くなり、興味ある事と思いますが、私はもう少し下って、口責めを主張いたします。アイデアの一つとして、女子高校生を全裸体に五寸柱に後手に縛り上げ、豊かな乳房の上にも横縄でしめ上げ、足も縛り上げる。彼女の足許に揮

発油を浸したセーラー服が置いてある。彼女のあどけない唇に茶色の太いハマキがぐいとさし込まれ赤々とその先に火がついている。赤い唇のすき間、可愛い鼻の穴より白い煙がもくもくと吐き出されて、苦もんしている美少女の姿ハマキを落せば身をまとうセーラー服はもえ上り、足もとよりふくよかな肉体は焼けただれるのである。アイデアの二つとして、若い女をベッドに大の字に縛り上げ、可愛い鼻の穴に二本、巻タバコをさし込んで火をつける。彼女の口にキセルのガン首をこじ入れて吸い口で煙草を吸う。タバコは彼女の口の中を通って入って来るので非常に美味である。美女はタバコをすいたくないのに、すわされて身もちぎれるほどに、のたうっているのである。アイデアの三として、女学生を後手に縛り上げ、乳の上は特にガンジガラメに縛り上げる。彼女の細い首を荒縄で縛り、太い柱につなぐ、彼女の口に火のついた太い葉巻をくわえさせる。一夜引きすえておくと、彼女はハマキの火で首の荒縄を焼き切ろうと盛んにタバコをすって荒縄に押しつける。ハマキをすい終るまでに切れるだろうか。アイデア

の四、マドロス座禅、若い女を数人、全裸として高手小手に荒縄で縛り上げ、座禅を組ます。各々彼女らの口には太いマドロスパイプが火をつけてさし込まれている。むせたり、パイプが動いたりすれば忽ちムチが飛ぶ。裸女ライター料理室の一室。グラマーな美女が全裸で縛り上げられ（逆海老又は鉄砲責め）可愛い口二本のマドロスパイプがくわえさせられている。客が火をつけようとパイプの中にシガレットをさし込む。彼女はマドロスパイプをぐうとすってタバコに火をつけるのだ。彼女のすった煙は齒のすき間から洩れってくる。アイデアの六、全裸体の美女を後手に縛り上げ、足も揃えて縛る。首かせをはめて鼻を洗濯バサミではさむ。彼女の唇に太いハマキをさし込んだり、抜いたりして煙をふき出させる。彼女はよだれで一ぱいになりながら許しを乞う。アイデア七、両手を頭上に高く縛り上げられた女学生は両足を一ぱに開けられ、縄の結び目に巻タバコが一本、火がついたままさし込んである。女学生はすったことの無いタバコを結び目が焼けるまで、すわされている。以上のようなアイデアを是非口絵（四馬

先生、滝先生）グラビヤ・フォト（梨花嬢）で取り上げて下さるようお願い申し上げます。（タバコ先輩）

○
ゴム雨具を愛好する貴誌ファン
の一人です。連日のジメジメした
梅雨もようにもかかわらず、昨今
とんとレインコートの登場しない
のは誠にさびしいかぎりです。時
々何とか理由をつけてはゴム雨具
をつけさせて、まだ若い妻を責め
上げる喜びの中から、是非グラビ
ヤにとり上げてほしいものを二、
三上げたいと思います。女の雨具
による責めは全身にそれをつけさ
せねば気分が生まれません。レイン
コートとしては、数年前の確か一
号でレインコートと題して大塚啓
子がつけていたものが最もよろし
い。勿論フット・ベルトをつけま
すが、時には男物の黒ゴム合羽を
きせてみるのも一興です。（ひき
ずるような大きいのが新鮮な感じ
の責めムードを作ることがよくあ
ります）足には必ずレインシュー
ズをはかせます。色は必ず白のこ
と、ブーツ型のものでもよろしい
が、これも時には黒のゴム長をは
かせます。四つんばいをさせたり
するときなど両手にもはかせま

Mフォト・

シリーズ

分版分譲品

Mフォトの決定版ともいうべきシリーズ十種類の分譲を只今
行っております。御注文が途絶
え次第打切る予定ですので、未
だお求めになっておられない方
は至急、御注文下さるようお待
ちいたします。

足の味覚

大手札 三枚一組 三〇〇円
絹川文代、杉 早夫

犬の生態

大手札 三枚一組 三〇〇円
絹川文代、杉 早夫

長靴は悶ゆ

大手札 四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一

灰皿の男

略号
(そほ)

股責の地獄

大手札 四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一

足舐の構図

大手札 四枚一組 四〇〇円
絹川文代、小沼正三

縛りの過程

大手札 四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一

使役の凌辱

大手札 四枚一組 四〇〇円
絹川文代、高田 一

なぶり者

大手札 五枚一組 五〇〇円
絹川文代、高田 一

おいしい足

大手札 四枚一組 四〇〇円
絹川文代、小沼正三

雪崎京人提供

女相撲力闘図

B5判 感光紙焼付

(二五種×一八種の大判)

四枚一組 一〇〇〇円

略号 「す4」

女相撲ファンの愛読者の方々のために、雪崎京人氏が特に提供されました豊満な美女二人による女相撲の力闘図であります。誌上公開が許されませんので、御希望の方に焼増いたします。いずれも筋肉の躍動する迫力に満ちた傑作ばかりであります。

組んだ時、投げを打った時、倒れた時など、すべて極めて大胆なポーズばかりを選んであります。B5判の大型複製による迫力のある女相撲をお楽しみ下さい。

す。猿ぐつわにもレインシューズ(これも白色にかざる)をかませます。時にはそのレインコートのフード・ケースなどで口鼻をおおい、フードでおおうようにして、コートのベルトでしめ上げたりします。雨装束は大体これでいいとして、締め具は何でもよろしいがあまりくさりなどは好みません。

ロープ、ひも類、色々です。一、四つん這いにされる図(実際には尻を叩いたり馬にしたり出来ませんが)二、雨の屋外で立木につながれている。三、水だまりか砂利の上に乗らされている。(このときは手にもシューズをはかせます)四、風呂場の中の責め図(手だけ自由にして背中を流させたりする又、もう一枚上から透明ビニール・レインコートを着せたりする。雨具をつけたまま湯舟へついたりシャワーの下でムチうちしたりする)五、裸にして足に長グツだけはかせ、手にもレインシューズをはかせて両手吊りや変形しぼりをした図。六、テレビの真横へ雨装束でしぼり上げて正坐させた図。(こちらからテレビを見ながら責め姿をたんのうする)七、レインコートとして今流行のササールコートをきせた責の図。などです。是非とりあげてほしいと思います。(大阪八雨奇男)

○ 小生、医学を勉強している大学の学生ですが、法医学に興味を持ち、その点からMSに関心を抱いており、特に貴誌をひそかに愛読しております。自分自身については、まだ未熟でMなのか、Sなのか、はっきりしませんが、自分ではM優性のノーマルな人格と診断しています。小生は縛ったり縛られたりということには興味は少ないのですが、昔から女武者のことに興味を持っており、この点、昨年の十二月号に載った築地一郎氏の「女武者の討死と生首」の原稿には非常に興味が持てました。小生はM性の傾向からか、男が女に組み敷かれて討ち取られるという方に興味があり、この点から女武者の組打勝負(現代婦人の柔道レスリングで男を参らせてもよい)を求めます。しかし、どちらかといえ、小生は、女武者愛好癖が強く、この渴望を現代に満ちてくられると思われる女性との柔道、又はレスリングを実際にやってみたいという望みを夢として持っています。どなたか、小生の望みをかなえて下さる御婦人(奥様でも娘さんでもよい)が愛読者の中におられないでしょうか。小生は中学時代に一寸柔道をやっただけで段位も何にもなく、且つ一六五センチ、五八キロのやせぎすので、少し強い女性なら、かなわないと思います。(北海道札幌市八星野正一)

○ 奇クファンの皆様今日は。小生二十五才の大の浣腸のマニアであり、ゴムマニアです。寺島美千代様、山岡久子様の投稿胸はずませて拝見しました。浣腸とかゴムの言葉を聞くと体がしびれる思いです。「奇ク」を愛読していると皆様方色々趣向を考えて行っておられる様子ですが、小生もその一人です。小生の方法もマニアの方にすこしお話ししましょう。イチヂク五〇CCガラス製、石鹼液、食塩水を基にして、只今は人工便の楽しさを味わっています。「とうふ」の白い便、「こんにやく」の弾力ある便、「うどん」の便、特に、「うどん」便など蛔虫を思わせる様な長いのが出てくる時の感激は素晴らしいものです。そこへオムツカバーなどあてるとゴムのタッチがプラスして幸福感あふれる天国にいるようです。又、最近ではゴム製品だけで浣腸とゴムとタッチを味わえることを思いつきました。特長として二人同時に楽しむことが出来るものです。小生は体を守るといふ事を第一にしますので固形物を挿入したり無謀なことは今迄行なった事ありません。(名古屋八古田文夫)

今月の新版案内

全裸股間縛

略号

(せら)

大手札

四枚一組 四〇〇円
モデル 関谷富佐子

豊かな白い肌、典型的なマゾヒスティンであると自称するだけあつて、責められる時の表情はマニヤの琴線をゆするものがある。これは関谷夫人の緊縛フォトとしては、とっておきの傑作で、皆さまの尽きせぬSの泉をこんこんと溢れさせる魅力を持つております。縄とムチに喘ぐ夫人の姿態にSムードの感激を新たにして下さい。

強烈エビ責

略号

(えり)

大手札

三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子

最近一層の柔軟さを増してグラマーぶりを発揮する彼女を、二つ折りに折り曲げて、強烈なエビ縛りにして放置すれば、膝小僧を顎につけて悶えながら、この苦痛から逃れようと全身をうねらす、その動きをキャッチして皆さまのSムードにマッチしようとする狙ったものです。

浣腸器と女

略号

(ほの)

大手札

三枚一組 三〇〇円
モデル 絹川 文代

ベッドの真白いシーツの上に後手にきびしく縛り上げられ、口には汚れた豆しぼりの手拭がびったりと掩れている。下げられたパンティ、浣腸器がこの捕われの美女のヒップに向って、徐々に執拗な触手で迫ってくる。

裸身の晒し

略号

(わあ)

大手札

三枚一組 三〇〇円
モデル 関谷富佐子

バタフライも剥ぎとられて、全裸の姿態をさらして後手に吊られ、全裸の魅力的な臀部を、ぶりぶりと固肥りに引き締ったヒップを皮のムチで思いきり引っぱたくと、肌を真赤に染めて、全身をくねくねとくねらせて身悶えぬく均整のとれた美しさが、ぐっとしびれるように胸にくる。

白フンドシ

略号

(ふん)

大手札

四枚一組 四〇〇円
モデル 大塚 啓子

きりりと尻の割れ目に喰い込んだ晒、二つの丘がぐっと盛り上った見事さは、褌マニヤの胸を高鳴らせることでしょう。女性褌マニヤの方々からの要望を十分にとり入れて作成した新しいセンスの褌

フォトですから、必ずや今までとは違った迫力があることと信じます。

黒フンドシ

略号

(くふ)

大手札

四枚一組 四〇〇円
モデル 大塚 啓子

清潔な白の晒褌に対して、前袋の端が股のつけ根に喰い込むばかり、ぴたりと締め上げた黒フンドシの魅力、背後は紐のように細くねじ上げられた黒布が、ぐいと双丘の割目に喰い込んで、一段と豊かさを誇張している。いずれも姿態に研究をこらした新作です。

鼻の穴責め

略号

(なく)

大手札

三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子

ぐいと上向いた顔の中央に、ぽっかりと開いた二つの穴、この可憐な鼻の穴に対して、器具を挿し込み、むくり上げて、鼻の穴をいたぶりつくす穴責めフォト。今度、マニヤのアイデアによって新しく撮影したものです。

鼻なぶり

略号

(ない)

大手札

三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子

そら豆のような鼻の穴を上向か

せて、鼻の穴をいたぶると、鼻はあぐらをかいて、奇妙な形に変形してくる。顔の中心を占める貴重な鼻であるだけに、この大切なものをなぶられるのには、M的な刺激を感じるのだろうか。

鼻責の陶醉

略号

(なは)

大手札

三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子

さあ、私の鼻はどうでもして頂戴と観念のホゾを固めた若い女性の鼻に対して、恍惚境の表情を求めて鼻を弄ぶ触手、鼻を男の手にゆだねて、うっとりとの被虐の味をかみしめる女の顔。

腹を切り裂く

略号

(やい)

大手札

三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子

下腹に刺す刃

略号

(やお)

大手札

三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子

柔肌を切る

略号

(やえ)

大手札

三枚一組 三〇〇円
モデル 大塚 啓子

代理部分讓品案内

股間縛法悦境裸身

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(ぬこ)

モデル 絹川 文代

禪女血斗場面写真

大手札 五枚一組 五〇〇円

略号(らは)

モデル 絹川 文代、大塚啓子

吊り打ち責め

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(やり)

モデル 関谷富佐子

相撲 輝の女

大手札 五枚一組 五〇〇円

略号(そい)

モデル 東浦ひかる

浣腸 実施中

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(かみ)

モデル 東浦ひかる

強制空気浣腸

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(かく)

モデル 東浦ひかる

百C Cの浣腸

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(かな)

モデル 東浦ひかる

浣腸 責の極

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(かむ)

モデル 東浦ひかる

大の字逆さ吊り

大中判 三枚一組 四〇〇円

略号(つり)

モデル 梨花悠紀子

立木 宙縛り

大中判 三枚一組 四〇〇円

略号(くた)

モデル 梨花悠紀子

凄惨、乳房責

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(とい)

モデル 梨花悠紀子

妊婦の緊縛

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(にむ)

モデル 永田 節子

全裸の仕置

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(すお)

モデル 東浦ひかる

血紅女体自害

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号(ひち)

モデル 大塚 啓子

女体切腹マントラ

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号(あま)

悲愴女体自決

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号(ひい)

モデル 大塚 啓子

哀艶女体割腹

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号(かつ)

モデル 梨花悠紀子

凄惨血紅女体立腹

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号(ひさ)

モデル 大塚 啓子

バンド着用フオート

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号(めい)

モデル 梨花悠紀子

バンド着用の縛り

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号(めい)

モデル 梨花悠紀子

バンド着用の縛り

大手札 四枚一組 三〇〇円

略号(めは)

モデル 梨花悠紀子

女性の六尺褌

大手札 五枚一組 四〇〇円

略号(ろく)

モデル 大塚 啓子

ゴム・マニヤ

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(こむ)

モデル 梨花悠紀子

メンス・バンド

大手札 四枚一組 四〇〇円

略号(めす)

モデル 梨花悠紀子

ゴムカバー着縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円

略号(かは)

モデル 大塚 啓子

脱がされたバンド

大手札 二枚一組 二五〇円

略号(めに)

モデル 梨花悠紀子

アテゴムの猿ぐつわ

大手札 二枚一組 二五〇円

略号(めほ)

モデル 梨花悠紀子

変態強盗侵入

大手札 十二枚一組 一〇〇〇円

略号(こと)

モデル 絹川 文代

和洋争斗場面

大手札 六枚一組 五〇〇円

略号(らり)

モデル 田中芳代

裸女争斗場面

大手札 十二枚一組 一〇〇〇円

略号(らし)

モデル 田中芳代

新版分譲品案内

夫人の表情

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

バンド開股

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

バンド責め

略号

大手札 五枚一組 五〇〇円

モデル 東浦ひかる

バンド足挙

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

目下着用中

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

相撲揮着用

略号

大手札 11枚一組 一〇〇〇円

モデル 大塚 啓子

乳房いじめ

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

強烈エビ責

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 水本 茂美

ゴム衣緊縛

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 水本 茂美

六尺 褌

略号

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 東浦ひかる

蒲団に悶ゆ

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

悦虐の果て

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

椅子エビ責

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

六尺褌縛

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

浦東の切腹

略号

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 東浦ひかる

浣腸シリーズ

略号

大手札 12枚一組 一〇〇〇円

モデル 梨花悠紀子

弓吊り責め

略号

大手札 二枚一組 二五〇円

モデル 梨花悠紀子

手足宙吊り

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

強烈エビ縛

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

乳房責の苦悶

略号

大手札 二枚一組 二〇〇円

モデル 関谷富佐子

全裸ムチ打

略号

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

六尺褌の女

略号

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

強打に泣く

略号

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 関谷富佐子

レインコートの拘束

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 大塚 啓子

ゴム布に包まれて

略号

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 梨花悠紀子

狙われた和装の娘

略号

大手札 12枚一組 一〇〇〇円

モデル 愛川 悦子

裸女縋帯覆面

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいってものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるものたえ、どうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語▽

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さい。

さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポート・マニヤ通信▽

新聞記事、週刊誌記事等でお持ちの事項、或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

△読者通信▽

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、文通、或いは読者相互間の交歓、面談の許す限り、つとめて掲載いたします。

書下し原稿募集

新しい風俗雑誌として新発足する本誌のため、新鮮にして読者の大歓迎するよう、新鋭の作家をどしどしとお寄せ下さるよう、左記の要項にて募集いたします。どうか奮って御応募下さい。

募集要項

一、原稿の内容は風俗雑誌の尖端をゆく本誌にふさわしいもの。例えば、小説、創作、研究、資料、連珠、告白、紹介、論説、といったもの。始めとして、浣腸、女装、美腹、フェチ、女相撲、女闘美、連珠したもの等を含めます。

一、表紙、口絵、挿絵、或は写真なども努めて掲載したいと考えます。一、原稿の枚数は別に定めません。一、原稿の短くは自由です。尚、御都合により構いません。鉛筆がきく作品でも構いません。一、未発表のものに限ります。一、掲載可能な作品は最近号から漸次発表いたします。一、採用篇は特別に優待をいたします。一、採用篇は特別に優待をいたします。一、採用篇は特別に優待をいたします。

☆本誌御愛読の榮

予約料

一月分	(1冊)	二百円	△送共▽
三月分	(3冊)	六百円	△送共▽
半年分	(6冊)	千二百円	△送共▽

本誌は各地書店にて毎月二十五日一斉に発売致しますが、若し入手困難でしたら、直接発行所へ代金御送りの上お申込み下さい。予約お申込みの場合は発行と同時に、厳重包装の上、急送申し上げます。尚既刊号の内、在庫分は別項に一覧表を掲げてあります故、御注文頂き次第に急送いたします。

☆代理部分譲品についての案内

○本誌代理部分の譲品は、最近分譲品案内並に読者通信欄の記事中に広告してあります。他に「代理部分譲品録」を準備しております。一冊十円、それ以上お申込み下されば急送申し上げます。○本誌は厳重包装の上第三種郵便にて、密封の第一種郵便にて、その他は第五種郵便にてお送りいたします。○代理部に対する御送金は、なるべく現金書留、振替、定額小為替、小為替、等にてお願います。切手代用は四十円、三十円、十円のもの、紙にはらないでお送り願います。○本誌に発表された口絵、写真の複写或は無断転載等は固くお断りいたします。

奇譚クラブ 定価二百円

八月号

(第十七卷第八号)
(通刊第七十九号)

昭和三十一年七月二十日印刷
昭和三十一年八月一日発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)

(昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌 第一二二号)